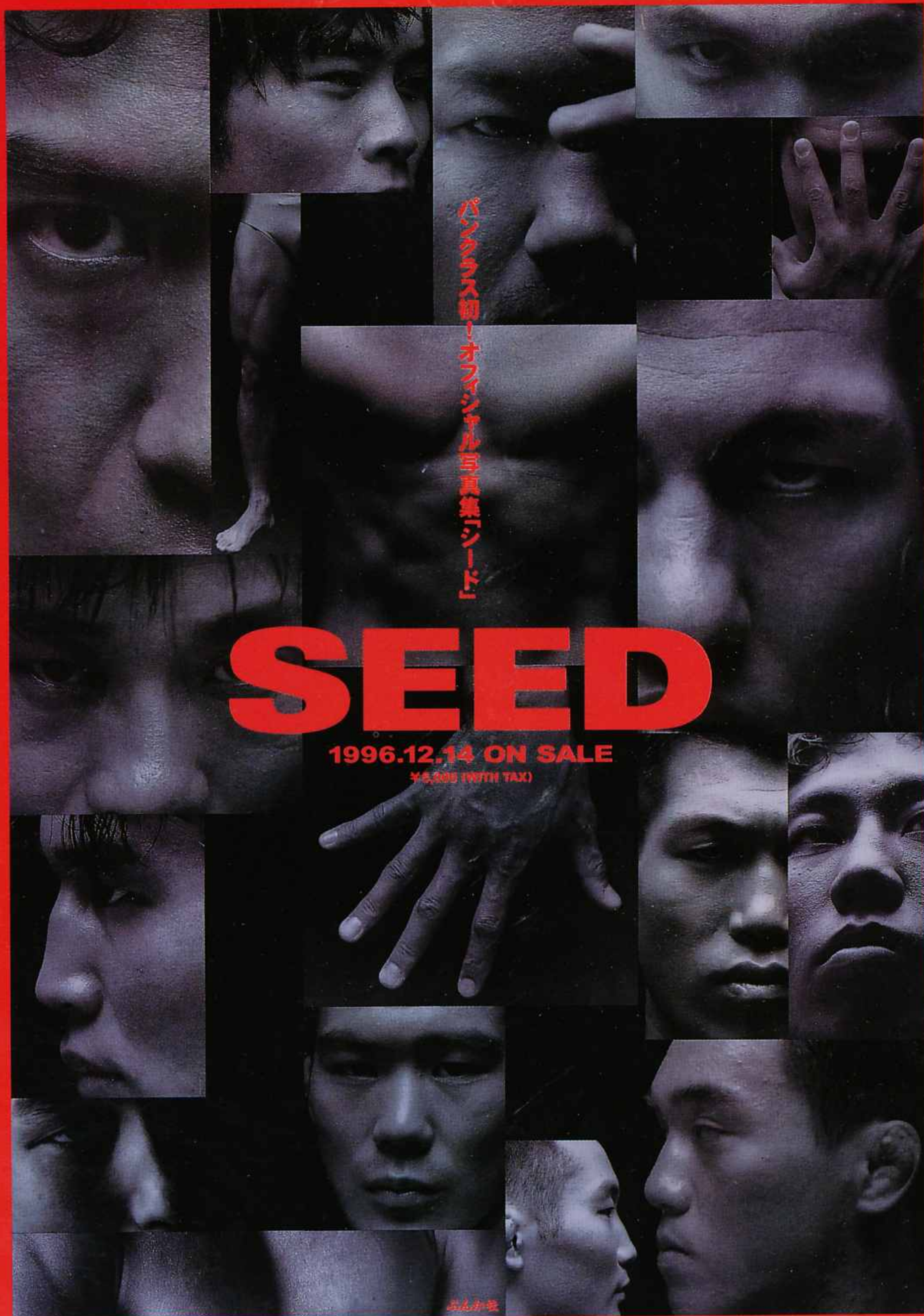
PANCRASE 1993－1996

魅入られし、者ども〜——。

1993年9月21日、東京ベイNKホール。衝撃の旗揚げ戦から3年の月日が過ぎ去った。
放棄せず、流されず、ただただ前に進み続けた、瞬間に生きる男たち。
彼らが証明した21世紀のプロレスという種子（SEED）を、3年間の全記録と合わせて集大成！
船木誠勝、鈴木みのる他、パンクラス参戦全選手の写真並びに全試合記録を掲載。
闘うために研ぎ澄まされた、偽りなき肉体が躍動するパンクラス初のオフィシャル写真集。
未発表・撮り下ろしを含む全327点を収録して12月14日（土）、ON SALE！

パンクラス初！オフィシャル写真集「シード」

SEED

1996.12.14 ON SALE

¥5,000 (WITH TAX)

ぶんか社

パンクラス初! オフィシャル写真集「シード」

SEED

■12月14日発売／定価5,000円(税込み)

●店頭にない場合は、書店にてお申し込みください。

ぶんか社 BUNKASHA

〒102 東京都千代田区一番町29-6 TEL.03-3222-5115(出版営業部)

サヨナラだけが人生だ!!
第1回ターザン山本追悼興行
往生際。
~狂気の沙汰も鐘しだい~
12/26
開催決定!!

生か死か！聖か邪か！

クラブチッタに
狂気の遺伝子が
降り注ぐ！

以下の意見を持って開催主旨にかえさせていただきます。

「まぁ、長州の意見はあれでいいと思うね。ただプロレスというものは、すべてを取り込む大きさを持っているというかね。山本氏がやめたから勝った負けたどうこうの問題じゃない。ああいうトラブルを、逆におもしろくしてしまえる人が出てくると非常にいいというか！」

——アントニオ猪木談

「プロレスの中で凄いことをやることが世間に届くんですよ。逆に世間が注目することなんてどうでもいいわけです！　世間がわからないことをやってる方が、ある日、パァーンと弾けて世間に届くんですよ。そしたら『ザマアミロ！』なんです。いまの世の中で、すぐに世間に届くようなものは、すぐに風化しちゃいますよ。世間に色目を使ったって、何も起こらない。ボクはプロレスのまわりに高い城壁を築いて、世間から何も見えないようにした方が、よっぽど効果があると思うんです。その城壁の中で、世間の人がわからない楽しい遊びをするんです。それにつられて、城壁を越えてくる奴がいたら、そいつだけ仲間にしていくわけですよ！」

——ターザン山本談

ギラつけ、プロレス!全5試合決定! 当日の入場テーマ曲が鳴ってのカード発表に胸をワクワクさせて待て!

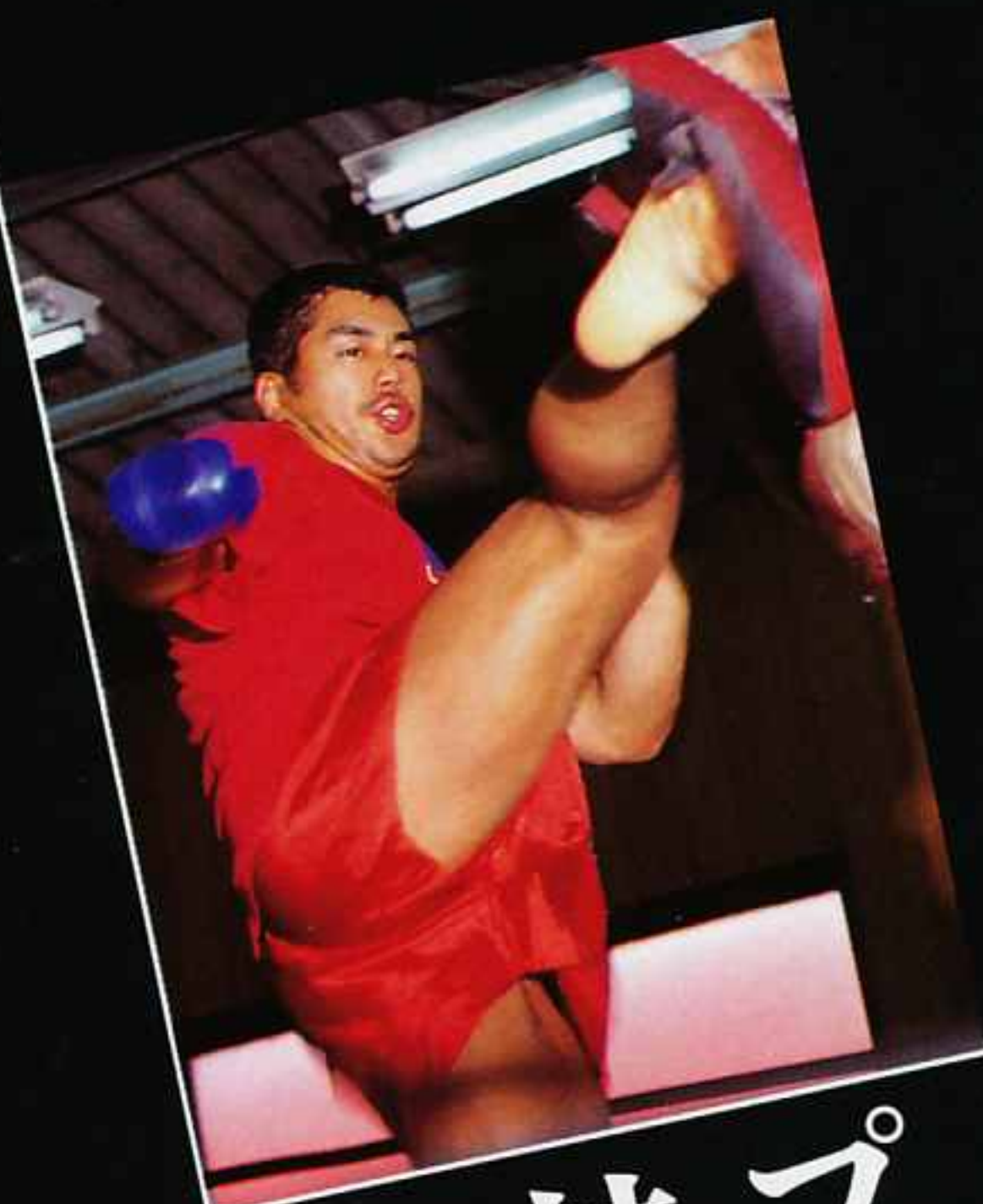
[出場決定参加選手&団体] 格闘探偵団バトラーツ/初代タイガーマスク/高野拳磁/みちのくプロレス/U.W.F.インターナショナル(あいうえお順)他、ターザン山本とゆかりのある、謎の大物選手が来襲!

第1回ターザン山本追悼興行
往生際。~狂気の沙汰も鐘しだい!~
96・12・26　クラブチッタ川崎
17:30開場　18:30開始
全席5000円　立見3500円

主催:ターザン山本と失礼な仲間たち
協賛:ぶんか社　他

※世紀末的迫力の試合の他、ターザン山本にゆかりのある選手からのビデオ・メッセージ、豪華ゲストによるトークショー他スーパーアトラクションも続々決定中!

チケットは、
[チケットぴあ]
03・5237・9977(12月14日より)
[紙プロRADICAL特電]
03・5992・3240(12月13日より)で緊急発売!

高田延彦、
Nobuhiko Takada

プロレスラーとは何か？
What's Pro-wrestler?

プロレスにプライドを持つっていうのを捨てて自分にプライドを持つ！

聞き手／山口昇 interview by Noboru Yamaguchi
撮影／斉藤ユーリ photographs by Yuri Saitou

―道場はいいですね。なんかこう、シャキッとしますね。匂いとか音とか。

高田　空気とね。

―いや、今日は道場での高田延彦を見れて非常に幸せです。

高田　飲んでる姿よりいい？　あれもまたいいでしょ？

―あんなものは、もう2度と見たくありません。あの時、何杯飲まされたか覚えてます？　63杯ですよ！

高田　どうやって数えたの？

―テープに全部入ってますよ！

高田　入ってた？

―ぜ～んぶ入ってます(笑)。全国1千万人の『紙プロRADICAL』の読者のみなさん。私はある雑誌で高田さんと赤井英和さんの対談の司会をやった時に、高田延彦さんにビールをイッキで63杯飲まされました！

高田　ホント？

―ホント？　じゃないですよ。1セット7杯か8杯のイッキを9セットくらいやってますよ。63杯！　ホントに死ぬかと思いましたよ。高田延彦は鬼です！

高田　あの場にいた全員で63杯？

―違いますよ、僕一人で63杯飲まされたんです！　拒んだら対談の雰囲気が悪くなると思って大人の選択をしたあげくがヒドイ目に遭わされたんですよ。

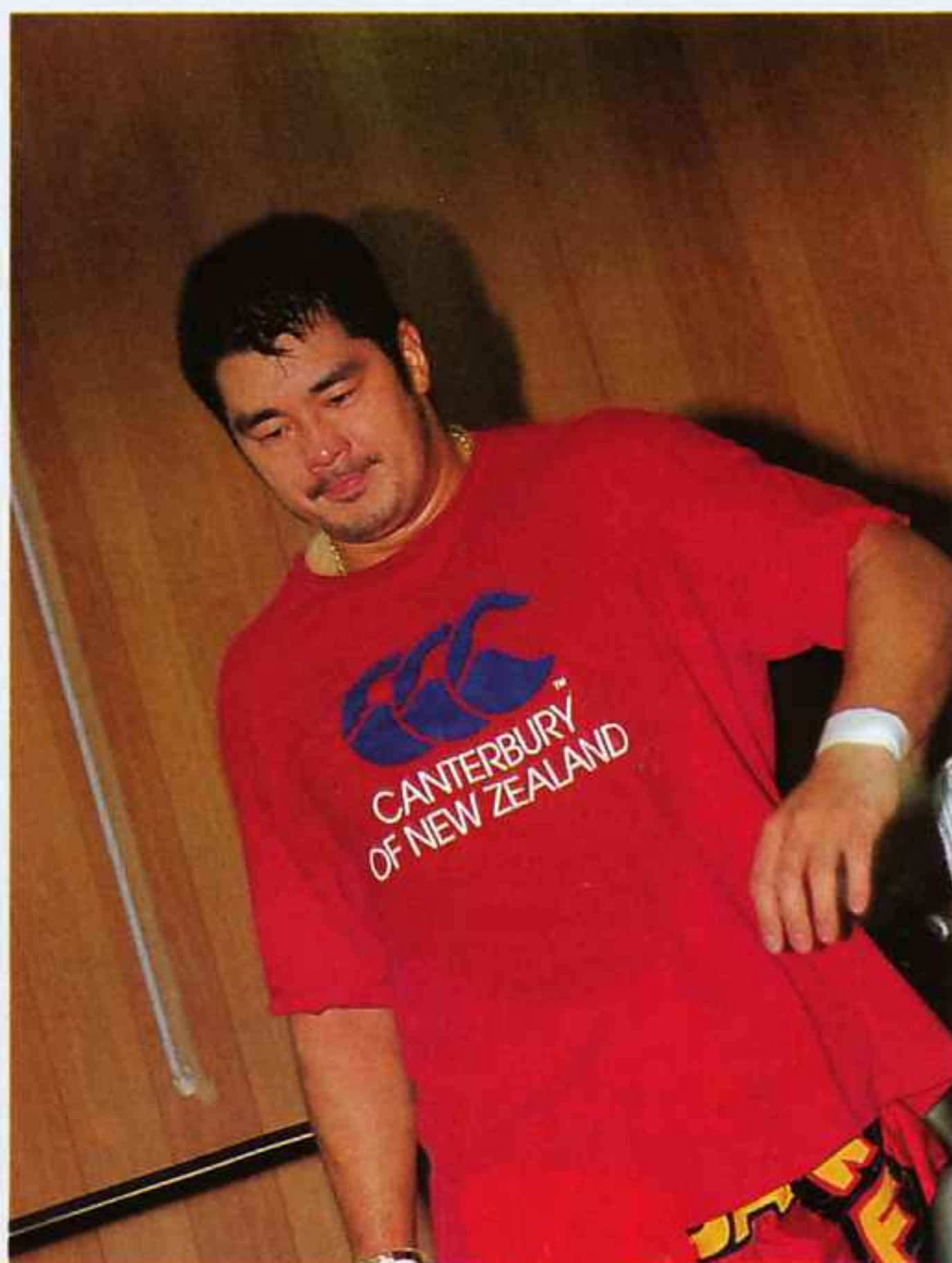
高田　(爽やかに)あ、そう。大したことないね。100はいってると思った。

―どこが大したことないんですか。レスラーじゃないんですよ、こっちは。

高田　(爽やかに) 関係ないよ、内臓は。

―レスラーの内臓と、ド素人の内臓じゃ、とてつもなく違いますよ。

高田　いやいや、もともと基礎的な内臓は同じじゃないですか。60キロの時の俺と較べてみても、100キロになったからといって内臓はそんなに成長してないですから。

―その理屈は納得できません(笑)。でも飲む度にあんなにガンガンいくわけですか？

高田　いや、あんなもんじゃないですよ。

―は？

高田　本来飲まないんだけど、飲んでしまうとあれで終わるってことはない。

―歯止めが効かないんですか？

高田　歯止めが効かないっていうかね、やっぱり、めったに飲まないから飲む時はもったいないじゃない。だからグワーッと飲んじゃうっていう。普段味わえないから最後までいっちゃえっていう。

Nobuhiko Takada

プロレスラーとは何か？
What's Pro-wrestler?

―グワーッと浴びるように飲むっていうのは新日本の伝統なんですか？

高田　いや、伝統ではないと思うけど。その中の一部の系統じゃないの？　新日本出身の人がみんなあんな飲み方をするわけじゃない。たまたま僕がそういう飲み方が好きだったから。先輩と飲む時も、後輩と飲む時もあんな感じ。

―要するに、キ○ガイの系統。

高田　キ○ガイって放送禁止用語でしょう。俺がキ○ガイって意味？(睨む)。

―スイマセン。

高田　とことん楽しむと。なんでもハンパにはやらないということです。

―ところで高田さんは、最近ストレスとかないんですか？

高田　ストレス？　ストレスをストレスと思うと何倍にもなっちゃうからね。だからストレスをストレスじゃない方へ転換していく。非常に難しいけど、それをエネルギーにしていくって考えて、転換していかないと。やっぱ僕は顔に出るし、練習にも出るし、そうすると肉体にも出るし、試合にも出てくるからね。だからそういうものを極力、小さなものであっても大きなものであっても、潰して飲み込むっていうか。それをパワーにしてしまう。

―マイナスをプラスに転換するってことですね。でもビールのイッキは、別にストレス発散じゃないと(笑)。

高田　その一環ではあるんだけど。ヨッシャー、飲んで全部この男にぶつけてやれって(笑)。でも、俺は酔いどれレスラーじゃないよ！　いつも一升ビンぶら下げて道場行ってるわけじゃないしね。

―ガハハ。高田さんはすごくプレッシャーに強いタイプだと思うんですよ。

高田　うーん、そうだと思いますよ

―それと、高田さんて勝ち気ですよね。僕は高田さんが入門した時からズーッと見てるんですけど、ファンの立場から見るとすごい勝ち気な人だなと思ってたんですが。

高田　勝ち気なところがなければ、どんなスポーツにしても、例えサラリーマンでも闘争心がなければ駄目でしょ。生きてく上ですべては競争じゃないですか！　肩組みながらも競争してるわけだから。そのへんのものは持ってなけりゃいけないと思うんですよ。

―はい。

高田　それで、はたして自分が頭一つ二つ抜きん出てるかどうかだと。いつも人を意識してやらないと。他人がやってることはマイペースでやってたら抜けないから。僕がよく試合のコメントで「自分はマイペースで行きます。とにかく一個一個やって行きます」って言うのはマイペースでやって行くのが苦手だから。

―高田延彦のマイペース発言の裏側って感じですね。

高田　本来どっちかというと、自分のペースを乱したりするんで、人の頑張り、人のスタンスを見ながらやると。勝ち気というのは裏を返せば気性が激しいということでしょ？　本来はブレのある性格だからね。だからそこをどうコントロールするかがインターが始まるちょっと前、30歳になるくらいから自然と身に付いてきたと。やっぱり周りをまとめないといけない。自分のペースでやっていけばいいというんじゃなくて、周りや状況

俺は酔いどれレスラーじゃないよ！ 高田延彦

を見ておのずとコントロールしてたね。そういう潜在的なものを全面には出さずに大切な場面だけ出すという生き方というかね。

—それはやっぱり社長業とか、団体運営とかリング外のことの影響を受けてってことですよね。

高田 だと思いますね。そうじゃなきゃもっと違った34歳の自分がいると思いますね。

—今「違った」って言いましたけど、それが潜在的な性格を全面に出した高田延彦ってことだとしたら、僕はゼヒその違った高田延彦を見てみたいですね。

高田 別に変わってしまったとか、死んでしまったとかじゃないから。人間の性格ってそんなに変わるもんじゃないですから。それは自然の中で封印というか、うまくしまい込めるような、そういう作業ができるようになっただけだと思うんですよ。それは絶対自分の中に眠っているというか、あるわけですから。

—すぐにでも取り出せると。

高田 そう、性格だから。それをバーンと開けてバーンと取り出せば、いつでも出てくると思うんですよね。そのへんは自分自身が意識してやるんじゃなくて、自然の中から出てこないといけないと。

—バービック戦とか北尾戦以降の高田延彦を見てると、やっぱり潜在的なものが、かなりの割合で封印されてるような気がするんですが。

高田 そうかな？

—まあ、それは僕個人の感想ですけど、その潜在的な部分が出てこないというのは、どっかしらでプロレスに対して「つまんない」と思ってたところがあったんじゃないですか。

高田 そーねえ。

—つまんないというと語弊あるかもしれませんけど、何かの雑誌で高田さんが「僕はプロレスにプライドを持ってる。ただプロレスに対して好きな部分もあるし、嫌いな部分もある」っていう言い方をしてたんですよ。

高田 言ってたね。

—プロレス界ってバクテリアがいっぱいいる世界だと思うんですよ。ある時期の高田延彦はバクテリアだらけの世界から、周りが必死になって隔離しようとしてた感じがするんです。

高田 そのある時期とは？

—北尾戦以降ですよね。去年以降はまた新日本との対抗戦とか、局面が変わってきてますから、一概には言えないと思うんですけど。そのへんはどうですか？

高田 ……それはやっぱりキッパリとした言葉で言わないと誤解を生むからね。

—キッパリ言っちゃってください。

高田 プロレスにプライドを持つっていうのを捨て始めたんだよね。

—エ？

高田 いつからかはわからないけど、自分のやってることにプライドを持とうという方に発想が変わってきたんですよ！

プロレスにプライドを持ってもしゃーないなと。俺のやってることにプライドを持って、高田延彦のために生きていこうと。そういう方向に発想がスーッと鋭角的に変わったのか、なだらかに変わってきたのかはいまはまだ言えないけどね。

――高田さんがプライドを持つほどのプロレスではないというわけですか。

高田　いや、確かに俺はプロレスにプライドを持ってる。どっかにはあるんだよね。でももう占める割り合いっていうのが、そういう言葉の表現じゃなくてさっき言ったように変わりつつある。もうほぼ変わってるということだよ。

――ということは、高田延彦は高田延彦自身を好きで、その好きな自分のために動こうということですか?

高田　うん。嫌いなところもあるけどね。

――僕もイッキを強要させる高田延彦は嫌いです(笑)。

高田　でも自分の嫌いなところが見えるのは自分なわけですから。もう深層心理の一番深い部分、人には絶対見せたくない部分、すべてわかってるわけじゃないですか。だから必然的にプロレスに対する印象じゃないけど「なんて高田延彦っていうのは難しい、扱いにくい奴なんだ」というところが自分でも出てくる。だから、嫌いなところもあれば「頑張れよ」とか、「もう少しだ」と言いたくなるところもあるし。

――ある劇画作家が言ってたんですよ、ダーティーヒーローというキャラクターはピュアな部分がなければ光らない。その逆もあって、真のヒーローというのはダーティーな部分があってこそピュアな部分が光ると。けっこううまい言い方するなと思ったんですけど(笑)。

高田　うん。

――プロレスの場合、興行という部分でスキャンダルという言い方がおかしければ、まあ、渦を起こしていかないといけないし、さっき言ったようにバクテリアがたくさんいる世界でもある。高田さんの中で選手としてのピュアな部分と、そういった世界がせめぎ合いを起こすことはないですか。

高田　俺はだから、ピュアだとかピュアじゃないとかじゃなくて、自分にプライドを持てるかどうかであって、それを持つことができることであれば、いまスキャンダルとか何かとかありましたけど、一個一個真面目に取り組んで前向きにやっていこうかなと。ただそれが、外から見たピュアさと自分から見たピュアさとの認識の違いは出てくると思うんだけど。

――はいはい。

高田　自分の中ではズーッとプロレスラーとして生きているわけですから、プロレス界の中でどんだけ躍動するかっていうのがポイントになってくる。その他の外敵との闘いも含めてですけどね。まずプロレスラーを夢見てきた以上、この世界で頂点に立つ。その上で頂点で止まってるんじゃなくて脈打ってるというか、ドキドキワクワクするような、ものを得てリングに上がって行こうっていうのは絶対条件だと思ってますから。

――ファンもそのドキドキワクワクを高田さんに与えて貰いたいわけですよね。

Nobuhiko Takada

高田　この前「高田延彦って何なんですか？」と。ブッチャーとやった時に「インターのファンがガックリするんじゃないですか？」っていうのも聞かれたんですよ。記者の人に。僕の考えとして、自分のレスラーとしての感性が合うならば、あらゆるレスラーとも試合ができる、あるいは自分の線引きを越えない範囲内でどんな相手とも試合ができるということなんですよ。

―その線引きって何ですか。

高田　自分が絶対やりたくなけばやらないし。ギリギリのところであっても、許容量の大きい中での闘いを一つ一つしっかり完成してというか、いい形でクリアしていったものが自分の完成品なんですよ。他流試合も入れて、あらゆる選手とプライドを持って「これだったらいける」というものがあればいいと。ただそこにファンや記者の人たちとズレがあってもしゃーないかなと。

―高田VSブッチャー戦を喜んでたのは多分僕ぐらいですよ（笑）。

高田　他にも2～3人いたんだよ。2～3人っていうのがいいでしょ（笑）。

―でも、そのブッチャー戦の後でもそうですけど、高田さんはコメント出さないで帰っちゃった。一時期高田さんはプロレスマスコミに全然出てこなかった時期がありましたよね。あれは高田さん自身がマスコミを嫌ってたからですか？

高田　今も嫌だよ！

―スイマセン（笑）。

高田　うーん、これはもう運動選手に限らずに芸能人もそうだけど、マスコミが好きで好きでたまらないって人はいないわけでしょ。やっぱり嫌いなところも、

高田延彦 本来はマイペースが苦手だからね

目障りなところもある。でも活かしてもらってる部分もあるわけだから。だから共に生きてるなと思う時もあるよね。

―共に生きてないって思う時もある？

高田　うん。プロレスを食い物にしている人もいる。マスコミがプロレスを食い物にするってことは、それ以外のとこには食いカスしか残らないってことだからね。

―高田延彦というレスラーに対しては、ファンもマスコミも含めて過剰な期待をしてると思うんですよ。ただその中で高田延彦はノーコメントの美学を持ってて（笑）、一体何を考えてんだろう？という声も非常に多いわけですよ。

高田　ええ。

―それが高田延彦一流の作戦なのか。ノーコメントというコメントをすることによって、ファンの想像力を膨らませようとしてるのかともとれるし。ブッチャー戦の時もノーコメントで帰ったら「ああ、やっぱり高田はやりたくなかったんだな」と思うファンもいるだろうしね。で、もしかしたら「Uインターは危ないんじゃないか？」と勘ぐるマスコミもいるだろうし。

高田　いるだろうね。

―だから想像力って部分ではノーコメ

高田延彦って何?って聞かれたよ

ントというのは有効だと思うんですよ。ただ昔から高田さんを見てきた者からすると、もうそろそろ心の裡をしゃべってもいいだろうというのもあるわけです。

高田　だからいましゃべってるじゃないですか。ま、それが作戦かどうかはさておいて、僕も話したい時もあるし、話したくない時もあるし。みんなの前で仏頂面するのもなんだし。「今日は何も言いたくないんだよっ!」って怒って盛り上げて言うことができないタイプですから。そうすると絵にならない。だから何も言わない。そのことをプラスに取るかマイナスに取るか、それをどう想像するかは自由ですから。だからこれからも多々、じゃなくて少々か。ま、稀にノーコメントはあるかもしれないです(笑)。

―でもトップレスラーとしては異様に発言が少ないですよね。

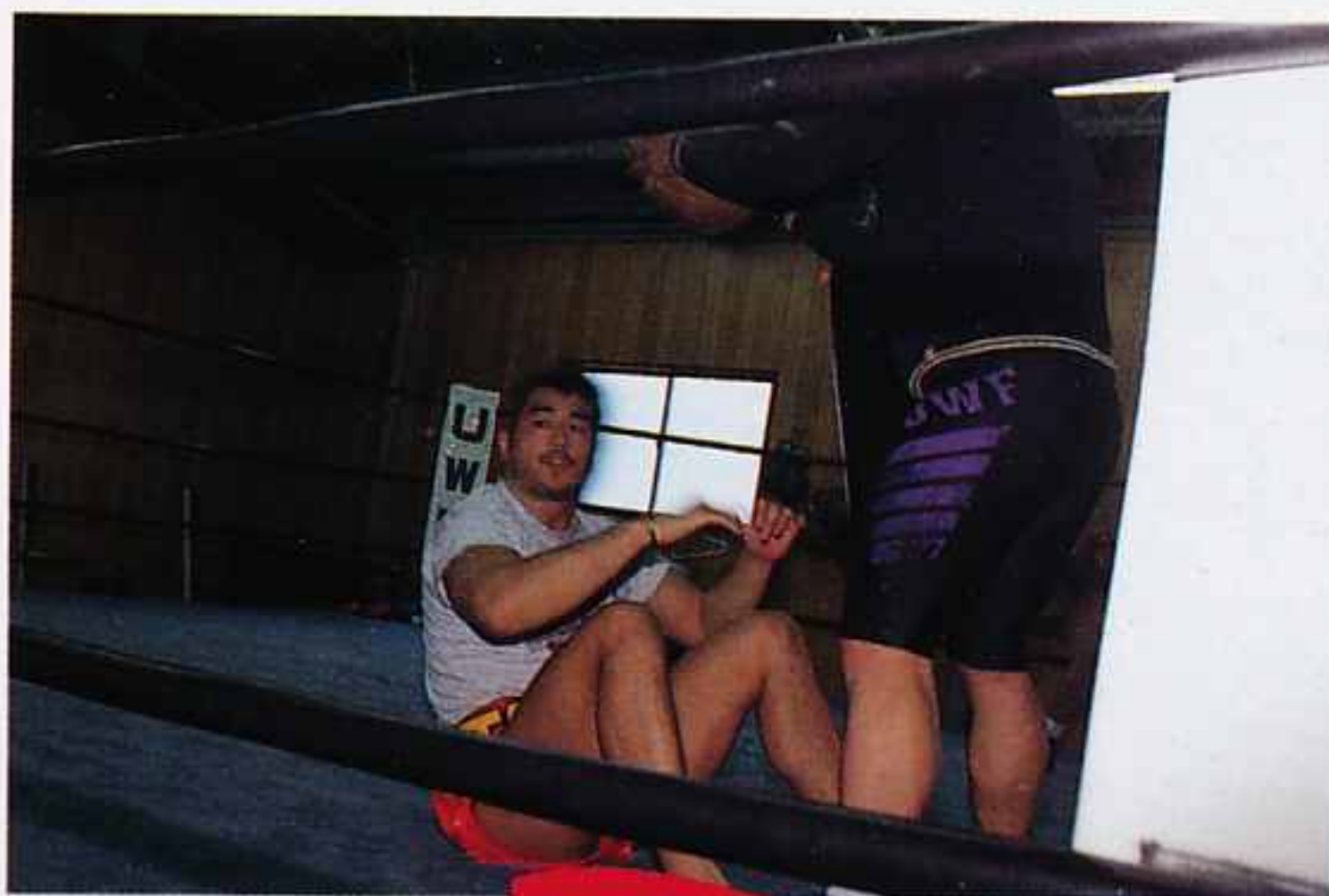
高田　あのね、僕の周りは理論武装してる人が多かったんですよ。

―ああ。

高田　昨日覚えた言葉かどうかわかんないけど、難しい言葉を引用して、要するに理論で固めていくと。理屈だらけで、文章になる言葉を言うというか。そういう意味での反面教師的なものと、ひょっとしたらコンプレックスもあるかもしれないね。

―コンプレックス?

高田　自分ではわからないんだけどね。それでそういう人たちを見てきてるから自然体で行こうと。ただそれだけのことだと思うんだよね。

―新日本と全日本の違いはリング上のスタイルとか抜きにして、いま高田さんが言ったように文章になる発言というか

言葉でもプロレスするというか、そういう差はあると思うんですね。

高田　うん。

―新日本系は猪木さんを筆頭に、前田日明しかり、やっぱり活字になるようなことを言ってくれる。全日本の方は押し黙る。そういった差はありますよね。

高田　うん。

―高田さんが言う反面教師っていう意味は何となくわかるんですよ。でも高田延彦なりの言葉っていうのがきっと高田さんの中にはあると思うんですよね。

高田　あのね、言ってることが半年で変わる人が多いんだよね。責任持って言ってないじゃないですか。その時の感情でかっこいいことを言ってるっていうのが多くてね。でも、僕も実はそうなんです。

―はっはー。

高田　自分のペースをガチッて守るタイプじゃないですから。今日思ったことと明日思うことが違うんですよね。だからこそインタビューに関しても、自分の安定してる時とか、状態のいい話せる時に選んでやるようにしているわけです。

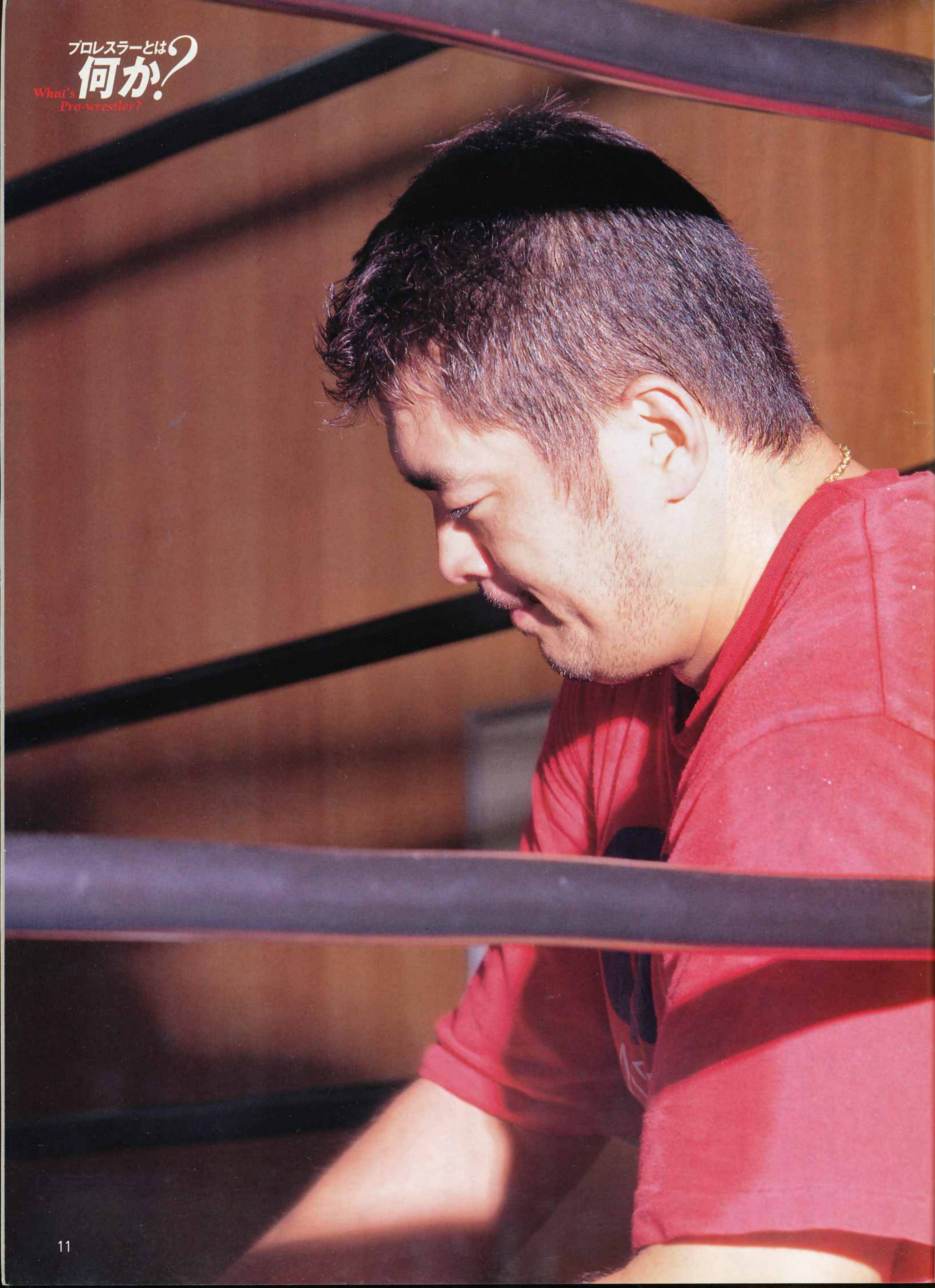
―この間、高田さんの昔の試合を収録したビデオが出て、それを見た人が「高田延彦っていうのは試合中の喜怒哀楽が激しい人だね」って言ってたんです。僕もその通りだなと思って。最近、高田さんがリング上では機械性を貫いて冷たさを出していくというのを言ってましたけど、あれだけ感情表現が豊かな人がなぜそっちの方を選ぶっていうのは、ホントに単純な疑問なんですよ。

高田　昔のあの時はあれが自然なんです。多分試合をそういう気持ちでしてた。今はないんだから出しようがない。コメントにしたってサービスできないじゃないですか。自分に高ぶりがあればやりますよ。でもあの時の気持ちを封じ込めてるとかいうんじゃなくて、いまはそういったものが出るような状態じゃない。出さなくてもベストに持っていけるというかね。

―以前、前田さんが、インターと新日本の対抗戦やった後に、いろいろ言ってたじゃないですか。それに対して高田さんは「前田さんは自らプロレスではないと言っておきながらなぜ首を突っ込んでくるのか」と言ってましたね。最近も「高田は時間がない。Uインターを辞めてリングスに来い」と言ってましたけど。

高田　人のことをいちいち言うのが好きなんですよ、あの人は。批評家なんでしょうね。根っからの。まず自分を見た方がいい、今、怪我して大変じゃないですか。人のことはいいから、僕のこともいいから。まず自分のことを考えてくださいというのが率直な意見です! 僕はにわか分析って嫌なんです。批評するような感覚っていうんですか? そういうものは人一倍持ってるね、ただ人がやってることは、当事者にしかわからないことだから、あたかも自分が中心にいるような言い方をするのは嫌だと。だから俺としては言わない方が自分らしいかなというのはありますね。

―普通、批評や批判をされた時はカーッときたりするわけじゃないですか。高田さんの場合はワンクッションあるわけですよね。

高田　それは、その人に対する先入観というのもありますよ。例えば前田さんとは付き合いが長いから、「エエッ?」っていうんじゃなくて、また始まったよって感じだし、それにあの人ですから(笑)。だから批評した人間に対する知識とか、付き合いの深さとか考えて行動するから。例えばプロレス以外の人間から前田さんみたいなこと言われたら許さないで

Nobuhiko Takada

高田延彦

対立概念？ありますよ、当然！

Nobuhiko Takada

すよ！　その時は烈火のごとく怒りますよ！　だけど一緒の世界で、同じ経験した人であって、近しい間柄を持っていた人間だったら、それならばその一言を取ってっていうんじゃなくて、ワンクッション入れて考えるでしょ。

――まだまだ聞きたいことはあるんですけど。

※ここでUインター広報の志野氏（下戸）からタイムアップを告げられる。

高田　アングルがおもしろいね。今回のインタビューは。ナナメあたりからスーッと入ってくるような。

――ナナメなんてとんでもない。直球ですよ。

高田　だって最初は酒の話だもん（笑）。

――ガハハハ。つまるところ、このインタビューで僕が言いたいのは、これから面白い高田延彦を見たいということなんですよ。

高田　はい。面白い高田延彦は絶対見れます！　保証します。自分のプロレス人生はもうそんなに長くないですから。だからそんなに遠い先じゃないですよ。いまも面白いんだけどね、ホントは！

――いや、見えにくい部分があったんじゃないかなと思っただけです。

高田　でも、いまのレスラーは「素っ裸」になりすぎる。素を見せる、本音を語るっていいながら、単に素っ裸になり過ぎる奴が多いから、そうじゃない人間がいてもいいんじゃないかなと。別に意識してるわけじゃないけどね。

――そこには高田延彦の美学が貫かれてますよね。

高田　美学という言葉は好きじゃないけどね。気持ち悪いよ（笑）。

――僕が一番見たいのは、リング上で無意識の内に剥き出しになる高田延彦なんですよ。それには相手が必要ですよね。でも高田さんの心の中に対立概念としての相手が誰もいないという気もするし。

高田　………対立概念…………ありますよ、当然！（キッパリと）。

――それは同じ団体内じゃなく？

高田　はい！　もうちょっと待ってください。

――また、はぐらかされた（笑）。やっぱりビール飲めばよかったなあ。そう言えば、『アサヒ芸能』！　巨人の斉藤投手に掌底未遂事件というのがありましたね。

高田　あったねー。でも、一切、事実無根です！（キッパリと）。

――巨人の斉藤選手とは、会ったことはあるんですか？

高田　一度ありますよ、2年ぐらい前に。それっきりですね。あんな店行ったこともないし。

――では、あの噂はどっから出たんでしょう？　まさか鈴木健氏がジョークでFAX流したわけじゃないですよね（笑）。

高田　それはこっちが聞きたいですね。ただ書かれるのはしゃーないなと。名前が出て書かれてナンボというのはあるから。だけど事実じゃない部分には事実じゃないとはっきりファンの人に断言しておきたいなと思ってます！

――でもあの記事を読んで高田さんの幻想が広がったという声もあるんです。こういう噂が出ること自体プロレスラーらしいと言う人もいるんです。そういった意見についてはどう思いますか？

高田　噂が出ることに関しては悪いことじゃないと思いますよ。ただ今の世の中そういうタイプの人間は受け入れられないというね。豪傑は生きて行けない。スポーツ選手でもタレントさんでも社会に受け入れられやすい人が好まれる時代になってきているから。だから豪傑とかどんどん消えてきてるという。

――確かに豪傑は生きにくくなってますよね。僕らの頃のプロレスラーのイメージって豪傑だったじゃないですか。

高田　そうだね。プロレスに限らずどんなスポーツの世界にも侍がいたでしょ。今もいると思うんですけど、表面には出にくくなってるっていう。それは非常に寂しいことでね。

――高田さんも本来の姿は豪傑だと思うんだけど、そういった部分でのジレンマはないのかなと思ったんですが。

高田　ストレスになってじわじわきてるのかもしれない、という部分に結びつくのかもね。

――つまり、プロレスを面白くするには、時代を面白くしなきゃいけないということですね。

高田　そうだね。なんでもそうだけど、時代の背景がスターを作るとか、ブームを作るじゃないですか。あらゆる個性をもったものや型破りなものを作るのに難儀な時代背景ではありますよね。でも普通、世間はそういうものを求めているわけですよね。

――ズバリ言ってそうですね！

高田　非日常的なものを。

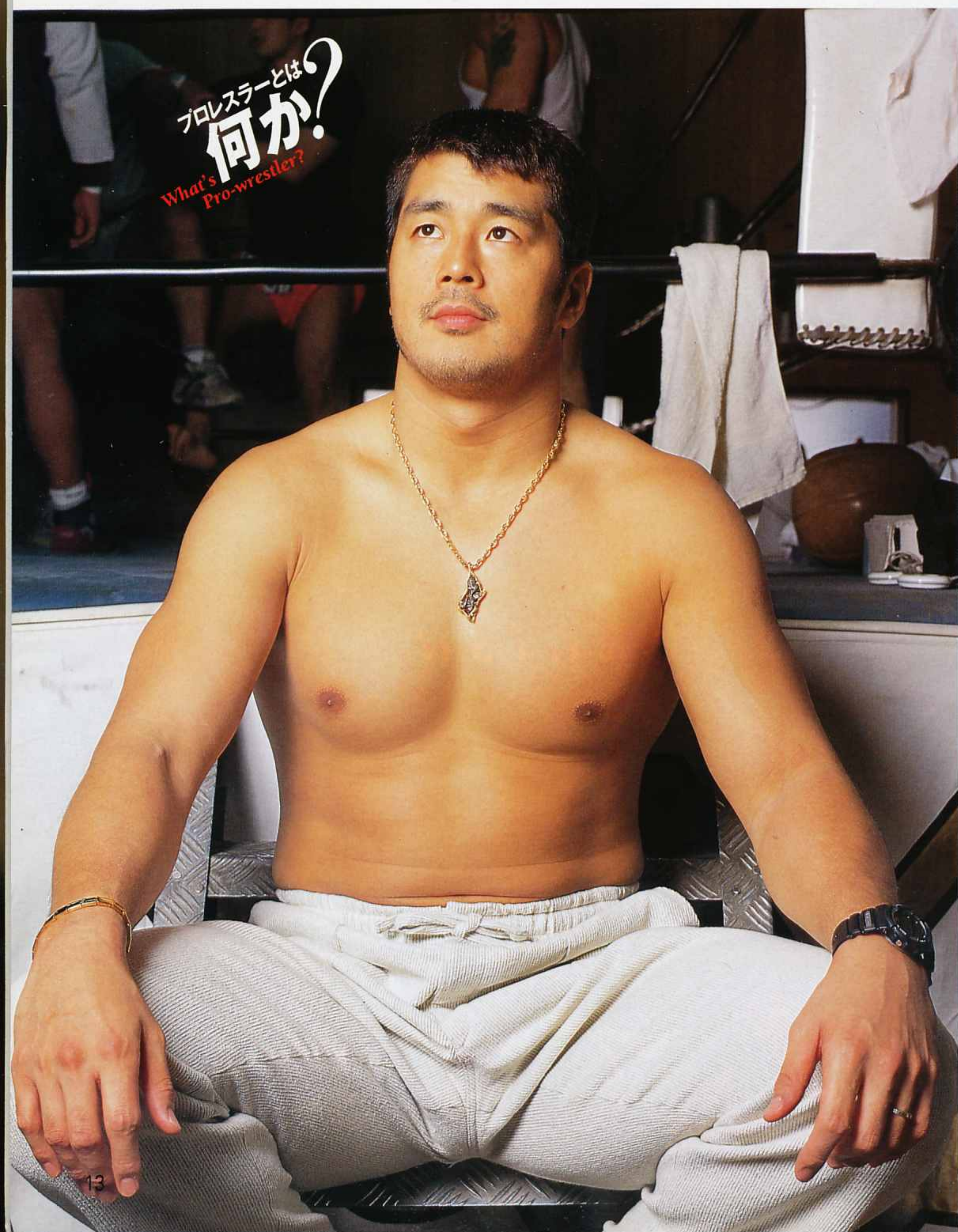
――高田さんはそのへんわかってるわけじゃないですか。非常にもったいないですよね。

高田　もったいないって、そう言うと、いまの俺は何なんだって感じでしょ！

――スイマセン（笑）。でも、高田延彦には、ついつい過剰な期待をかけてしまうんですよ。

高田　（爽やかに）ま、見てて下さい！

〈96年11月14日、東京都世田谷区・Uインター道場付近にて収録〉

誠勝

nterview

Masakatsu Funaki

F

イズムですよ!!

船木

Long In t

聞き手／山口昇
interview by Noboru Yamaguchi
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saitou

それがやっぱり僕の

馬場

船木誠勝
UWFはパンクラスだと思った

Masakatsu Funaki

——実は、今日は「プロレスラーとは何か?」という非常に間口が広すぎるといってもいいテーマで話してもらいたいんですが、プロレスラーという言葉を使うと、内心船木さんは嫌なのかなぁとか、いろいろ想像しつつ来てみました(笑)。

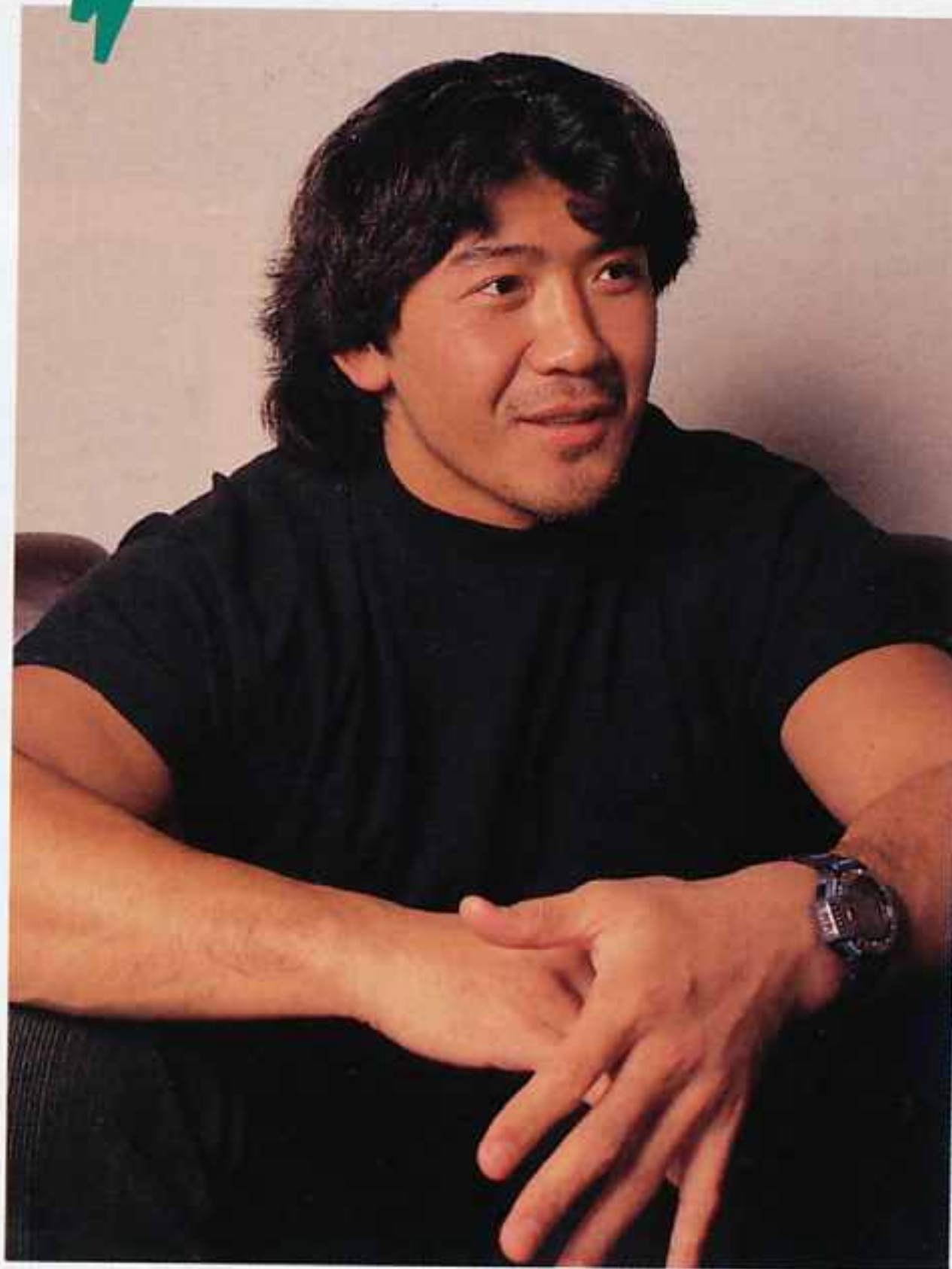
船木　プロレス、ですよね。さっきラジオつけたら藤波さんがゲストで出てたんですよ。

——ほぉ。

船木　それで、藤波さんから見たプロレスはやっぱり新日本なんですよ。アナウンサーの人にこれから年末、来年にかけて何か面白いことありますか?って聞かれた時に、1・4の東京ドームと12月15日の『無我』がいいですよって答えてるんです。だから藤波さんの頭の中では新日本プロレスと自分なんでしょうね。

——じゃ、船木さんの中には当然違うものがあるということですね。

船木　俺は逆に全部をひっくるめてプロレスだと思うんですよ。それこそ、バラ線マッチとか何かから、新日本、全日本、いろいろありますが、全部ひっくるめてプロレスだと思うんですよね。

——これは聞いておきたかったんですけど、船木さんはタイガーマスクやマスカラスに憧れてプロレス入りしましたよね。で、もともと船木さんはプロレスに入って強くなれるっていう感覚はあったんですか?

船木　ありましたね。あの、僕はプロレスは八百長だと思ってたんですよ。

——エ?　まさかインタビューまで秒殺を狙ってるんじゃないでしょうね(笑)。

船木　それで八百長やってるけど……。

——イザとなったら強い!

船木　そう。ケンカしたらこの人たちが一番強いと思ったんですよ。まあ子供の考えですけど、ガタイがよくて、鍛えてるし、各国の選手と揉みあってるということは強いんだろうと思ってましたね。

——でも、八百長だと思ってても強いだろうというのは、それはすごいプロレス的感覚ですよね。結果的に船木さんは、藤原教室で強さを追求するのはどういうことか、ということに目覚めて新日本からUWFに移るわけですけど、その時に猪木さんと前田さんの板挟みにあいましたよね。

船木　そうですね。猪木さんのしゃべってることより前田さんのしゃべってることの方が今を掴んでるな、これからのものだなって感じましたね。猪木さんのしゃべることはやっぱり古いんですよ。現に俺がそこで聞いてて絶対違うなって思いましたから。真実味がないんですね。イッちゃってるんですよ(笑)。

——船木さんって人はハッタリを言うのも聞くのも嫌いな人ですよね。

船木　絶対イヤですね。こうなったらこうなるんだっていう保証がなければ動かないですね。

——子供の頃からそうでしたか?

船木　でも、保証があったとしても逆に見えちゃうものには手を出さないですね。つまんないですから。だから猪木さんが一から十まで説明してくれて、こうなったら、こうなるんだって言われた時点で冷めましたね。見えちゃうんですよ、頭の中で。でもその時のUWFに俺が行ったらどうなるのかっていうのは、見えなかったんですよ。逆に作っていけるって発想があったんでそっちの方を選びました。

——船木さんにとって、その頃の従来のプロレスを雑菌がウヨウヨいる世界だとすれば、その頃のUWFは雑菌がまったくない世界に見えたと思うんですけど。

船木　見えましたね。

——で、イザUWFに入ってみて、やっぱりUWFも雑菌がたくさんいる世界なんだなと感じたことはありますか?

船木　今思えば、プロレスの悪い部分を引き継いでた部分はありますね。それはやっぱり、最初わかんないですけど、そこの住人になってみると見つかってくるんですよ。「あれ?」って。形は違いますけど、ちょっと冷静になって考えてみると、これって新日本と一緒なんじゃないかって。俺はだから、最初にUWFに求めてた自分なりの幻想がパンクラスだと思うんです。最初UWFはパンクラスだと思って入ってきたわけですよ。それは鈴木も一緒だけど、違ったんですよね。

——つまり船木さんのUWF幻想は崩れてしまったと。

船木　ええ。そこで割り切りながらも前に進みたいって気持ちがあったもんですから。それだったらプロレス技の中でも使える技だったら使ってもいいんじゃないかっていう発想が出てきたんですね。

——ドロップキックとかやってましたよね(笑)。

船木　そういうことです。だけどそれは当時のUWFの上の人たちから受け入れられなかった。それは違うと。でも、どこがどう違うかわかんないんですよ、俺からしてみれば。

——でも、そこでドロップキックを出すというところがまた、船木さんの面白さだと思うんですよね。

船木　実際リングの中は誰も立ち入れないですからね。でも、後で言われるのは、俺ですから。

M・GIGIE

――ドロップキックを出したっていうのは船木さんのイタズラ心だったんですか？

船木　イタズラっていうか、その時のUWFを自分なりに客に提示したかったと思いますよ。UWFってこうなんだよって。でも、それは手品で言えば種明かしになっちゃうんじゃないですかね、それを出しちゃうと。だから、よくないことだったんじゃないですか。

――その頃のUWFの現状を船木さんなりに見せようとしたのがドロップキックだったわけですね。しかし意固地というか、頑固な人ですね船木さんは（笑）。

船木　そこまで当時はみんな気付いていないと思うんですよ。今も言われなきゃわかんないだろうし。

――リング上のシステムは新日本もUWFも変わらないと船木さんが感じたのはわかりましたけど、ズバリ言って、強さという部分ではどうだったんですか？

船木　強さは当時の自分が知ってるプロレス団体の中から指折りの人間が集まったのは確実ですね。だから、俺、最初にUWFに誘われた時にね、新日本から自分だけ出るんじゃなくて、あと2人、鈴木と藤原さんを抜いてくださいって言ったんですよ。とにかくその時のUWFを一番強い人間の集まりにしたかった。やることは別にして。そうしたら本当にその2人を抜いてくれましたから。新日本に鈴木と藤原さんを残すのがイヤだったんですよ。そこで藤原さんたちがもっと強いヤツ作ったらイヤでしたから、新日本で。それを避けさせたくて。

――でもね、UWFにいた頃に船木さんは、どちらかというと求道的に強さを求めるというよりも、リング上でものすごく華やかに映ってたんですよ。

船木　そうですよ、だって割り切ってましたもん(笑)。とりあえず、責任を果たせばいいということですよね。

――割り切ってた！　じゃあ、つまんないじゃないですか！

船木　つまんないですよ。だからやっぱり酒飲んで、こういう団体作りたいとか話したりね。それが唯一の救いだったかもしれませんね。今はこれやってるけれども、いずれはこうなりたいっていう未来の構図を語ってたことが、すごい記憶に残ってますね。

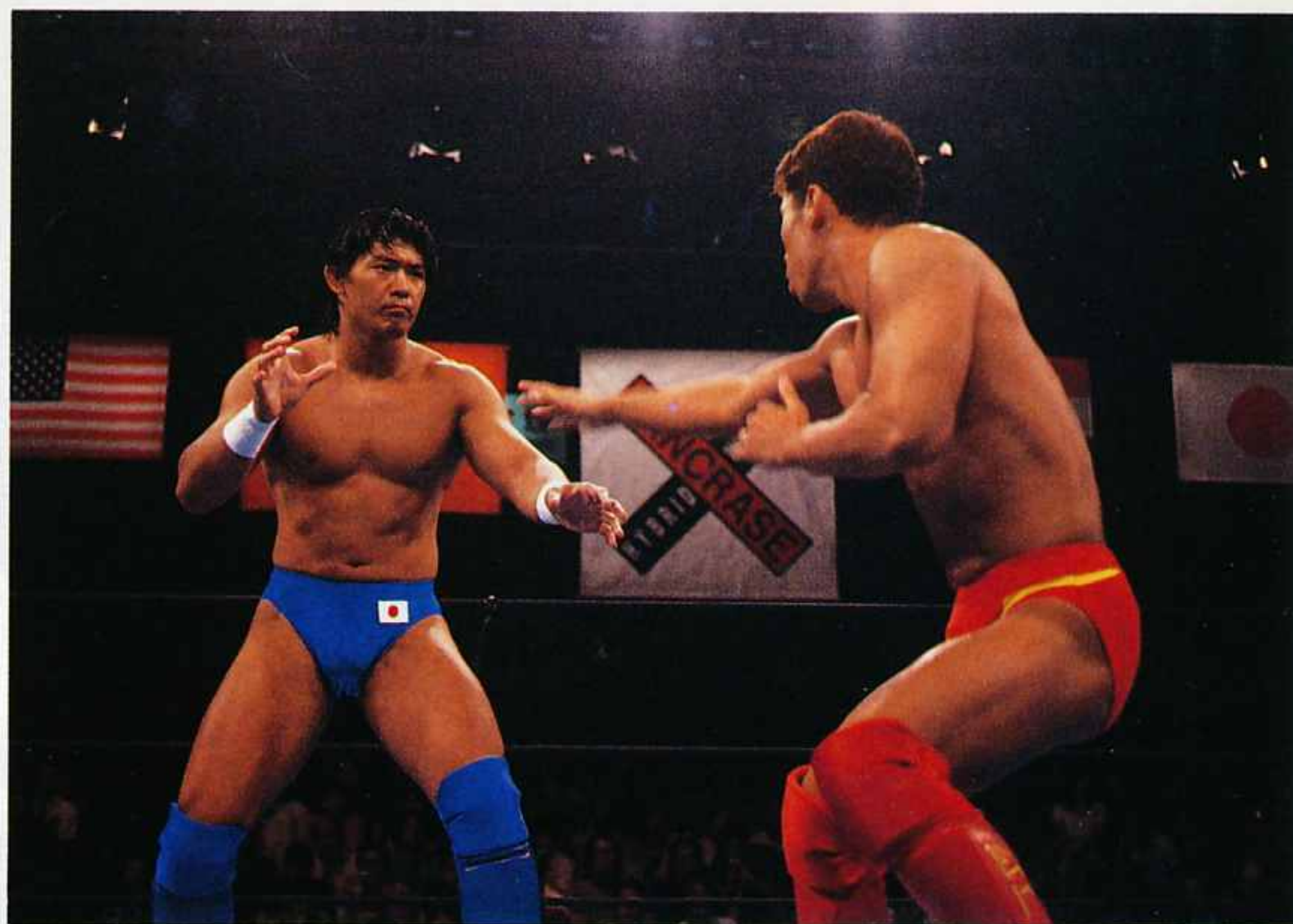
――ただ、リング上でものすごく華やかに見えるということは、船木さん自身がどう思ってるかはともかく、もともと船木さん自身が華やかな存在だと思うんですよ。スター性があるっていうか。だからそっちを思いきり伸ばす道もあったわけですよね。

船木　そうですね。でも最初は自分のこと大嫌いでしたよ。17歳の頃までは。17歳で割り切った時から、自分の試合も見れるようになりましたね。それまでは迷ってるんですよ。迷ってる時の姿は一番嫌いでしたね。

――迷ってる時の姿っていうのはどういうこと？

船木　だから、セメントとプロレスと何で二つあるんだろうって。で、プロレスは誰も教えてくれない、どうやって俺はプロレスをやったらいいだろうって、そういう迷いですよね。

――そういう迷いはリング上で出ちゃったことありますか？

船木　出てましたよ。17歳までは出てた

と思います。だから、いつも怒られてましたよね。でも、それはどこが悪いとか言えないですよね、見えないですから。やる気がないように、嫌々試合してるように見えたんじゃないですか。実際そうでしたから。

—迷いって部分で言うと、従来のプロレスっていうのはその迷いなりなんなりを全部リング上で吐き出せる世界だと思うんですよ。そこで強さを追求してるかどうかは別にして、リング上にすべてを吐き出さないとお客さんに届かない世界だと思うんですよ。

船木　ええ。

プロレスラーとは何か？
What's Pro-wrestler?

—そこで間違った方に行っちゃうと、勝負云々は度外視、強さも度外視ってことになっちゃうと思うんだけど、船木さんはリング上で、自分を表現しようと思ったことあります？

船木　それは今だと思います。それこそ裸になって闘って、ありのままを見てもらうってのが、そうじゃないですかね。逆に今まで華やかだと言われてたのが、仮面被ってたってことでしょう。

—例えばね、船木さんっていうのはスター性があると、将来お前は大スターなんだぞって言われることに対して、いや俺はスターになんてなりたくない、スターになるんだったら、もっと強くなりたいと思ってたんですか？

船木　いや、その言い方がみんなヘタなんですよ。最初っからそう言えばいいのに、最初はボロクソなんですよ。特に新日本の時は、ひどくて。全然そんな素振り見せてなかったくせに、俺がUWF行くって言った途端にもう、将来の新日本のスターがどうのこうのって言うじゃないですか。つい1年前まで全然そんなこと言われてない人間が、突然そんなこと言われたら頭来ますよ。逆に人間の嫌な部分っていうのが見えちゃって。俺がスターになる存在云々を抜きにして、その人がコロっと変わっちゃうのが許せなかったですね。俺はそれで相当悩んでそれこそこの世界にむいてないんじゃないかって悩んだ時期もあったんですよ。

—やっぱり、雑菌がたくさんいる世界がイヤなんですね、船木さんは。

船木　あとは派閥。派閥の中の駒にされるのも嫌でしたね。それは新日本の時もあったし、UWFの時もあったし。

—いやあ、頑固ですよ、船木さんは(笑)。

船木　どうなんですかね。これをもうちょっと軟らかくすると普通になるんですかね。

—そうなると、もう自分で何かをやる以外残された道はないですね。

船木　そう、もうできなくなったらおしまいですよ。

—できなくなったら、おしまいってスパッと言えるところが頑固なんでしょうね(笑)。

船木　そうでしょうね。人生どこまでできるかなって、そういうもんでしょう。

—で、実際に雑菌だらけの世界から逃げ出して、言ってみれば無菌状態の世界を作り出したのがパンクラスですよね。

船木　だから、その無菌状態が当たり前になってほしいですね。おそらく頑固じゃないヤツはその雑菌状態が好きなんですよね。雑菌状態の方が逆に楽なんだと思うんですよ。そういうヤツが多いってことは、何かしらの形で雑菌は永久的に存在するんじゃないですかね。

—でも、まったくの雑菌がない世界。格闘技もプロレスも合わせて考えて、全部が無菌状態になったら、なんの刺激もなくなっちゃいますよね。

船木　うん、ないですね。

—だから船木さんが一番最初に言った全部を含めてプロレスっていうことで言えば、これは確かに船木さんの言う通りですよね。光りがあれば陰があるじゃないですけど、雑菌だらけの世界があるから無菌状態のパンクラスがある、ということは言えると思うんですよ。

船木　その通りですよね。ホントにだから助かりますよね(笑)。そう言った意味で、いろんなスタイルがあって。

—で、船木さん自身がその無菌状態の世界に飽きるってことはないんですか？

船木　おそらく、何人かに一人の割合でそういう雑菌を背負い込んで入門してくるヤツがいると思うんですよ。そういう類の人間が。そういうのと対決するのが楽しみですよ。そういうのをいかにキレイにしてやるかっていうのが結構楽しいんで。その代わり場合によっては本当に荒い方法も取る時ありますよね。

—人間クリーナー！(笑)。それは面白い対決の構図ですね。船木さんの生き方って常に整合性があるんですよ。必ず言ったことを実現させてるし、考えたことを全部実現させているんですよね。で、ボクの欲望としてはね、ま、船木さんは欲望って言葉は好きじゃないでしょうけども、船木さんの整合性が崩れる瞬間が見たいんです。

船木　俺、死んじゃうんじゃないですか。崩れたら。

—崩れる瞬間というよりも、崩そうとする相手が出てくるのが楽しみなんです。

船木　そん時は俺は逆にメチャクチャいたわられるような人間になってるかもしれないですよね。「あいつ齢だから、もっと応援してあげなきゃ」って若い奴らが思うような。今のアントニオ猪木状態になってるかもしれません(笑)。

—これは仮定の話ですけど、船木さんは雑菌世界から無菌世界へ来たけども、パンクラスに入ってきたある若者は、船木さんと逆で、無菌世界から雑菌世界へ行きたくてウズウズしてると。で、「将来的にパンクラスで電流爆破マッチをやりたい！」とか言い出すわけですよ。電流

セメントでも電流爆破はできますよね
船木誠勝

Masakatsu Funaki

爆破だってセメントはできるんだと胸を張って言うわけです（笑）。

船木　できますね！　それ、面白いじゃないですか！（笑）。それをもしやったとしたら、すごい怖い試合ですよね。関節技とか蹴り以前にそこについたらビリっとする怖さを知ったら、ホントに四角いものに入って、相手プラス周囲にも気を配って試合しなきゃいけないわけですよね。その発想は大歓迎ですよ。

――ムチャクチャ緊張感ありますよね（笑）。で、そういうものをやりたい奴が出てきた時に、ボクはその時の船木さんの反応を見てみたいわけですよ。

船木　やらせますよ！　俺はやらないですけど。「お前やりたかったらやってみな」って言いますよ。その代わりパンクラスでやるんであれば、本当に電流流すよ。それもハンパじゃない電流流すよ。もうビリッと光る瞬間に2、3秒動けなくなるようなそのぐらいの電流流すんであればいいよ。間違っても嘘はつくな、と。そのぐらいの覚悟があるんだったら、やってもいいよって言いますよ。やる奴いないですよ（笑）。

――いや、アントニオ猪木を否定した前田日明がいて、前田日明を否定した船木誠勝がいて、その船木誠勝を否定する人が出てきたらやるかもしれませんよ。

船木　ああ、やるでしょうね。

――やらなきゃ船木誠勝の人生に勝てないんですから。

船木　そうなんですよ。そのかわり、そいつは寿命が短いですよ（笑）。

――どんどんどん寿命は短くなっていくでしょうね。嘘をつかなくなったら。こんな話をしたら、じゃあ嘘ってなあに？　って話になりますけど。

船木　ホントそう思いますよ。だからそういう意味じゃ、ヘタすりゃ俺、前田さんと一緒に引退しちゃうかもしれないですよ。今の話じゃないけど嘘をつかなくなると寿命が短くなるじゃないですか。だから猪木さんが取りあえず一番長生きして、その次は高田さんが長生きするんじゃないかと思いますけどね。高田さんは本当に傷がないと思いますよ。前田さんは結構傷がありますからね、いろんな箇所に。高田さんはまだまだ。

――まあ、現状のパンクラスはできてから3年ですから、「脅威の電流爆破新人」が出てきても、受け入れられない部分があると思うんですよ。ただ、船木さんがそういう考え方であればパンクラスはどんどん面白くなっていくと思うんですよ。残念ながらボクが見てきたパンクラスの中ではその可能性っていうのはまだ見えないんですけど。

船木　見えないですよ。そういう変態がいないですから（笑）。変態じゃないとモノを作れないと思うんですよね。新しいものを。俺、自分のこと変態だと思ってますから。

――船木さんは大変態ですよ！（笑）。船木さんは世間一般から見たら、プロレスラーという人種の中では普通だと思うんですよ。

船木　だけど、プロレスの中じゃ変態なんですよ（笑）。

――ですよね。そこまでわかってるわけですね。

船木　そうですね、でも変えたくないんですよ。

――いや、変わった人だな船木さんって人は。

船木　いや、変わってないですよ。これが当たり前だと思ってますから。

――変態っていうのは、自分が当たり前だと思ってるもんです。

船木　そうなんですよね。最近それに気づきました（笑）。

――パンクラスは勝負論を徹底させてる世界じゃないですか。

船木　ええ。

――で、勝負論を徹底するなら電流爆破をやってもいいという許容量があるのも、今日話してわかりました（笑）。そういった方向性だから、当然、根っことして強くなきゃいけないですよね。

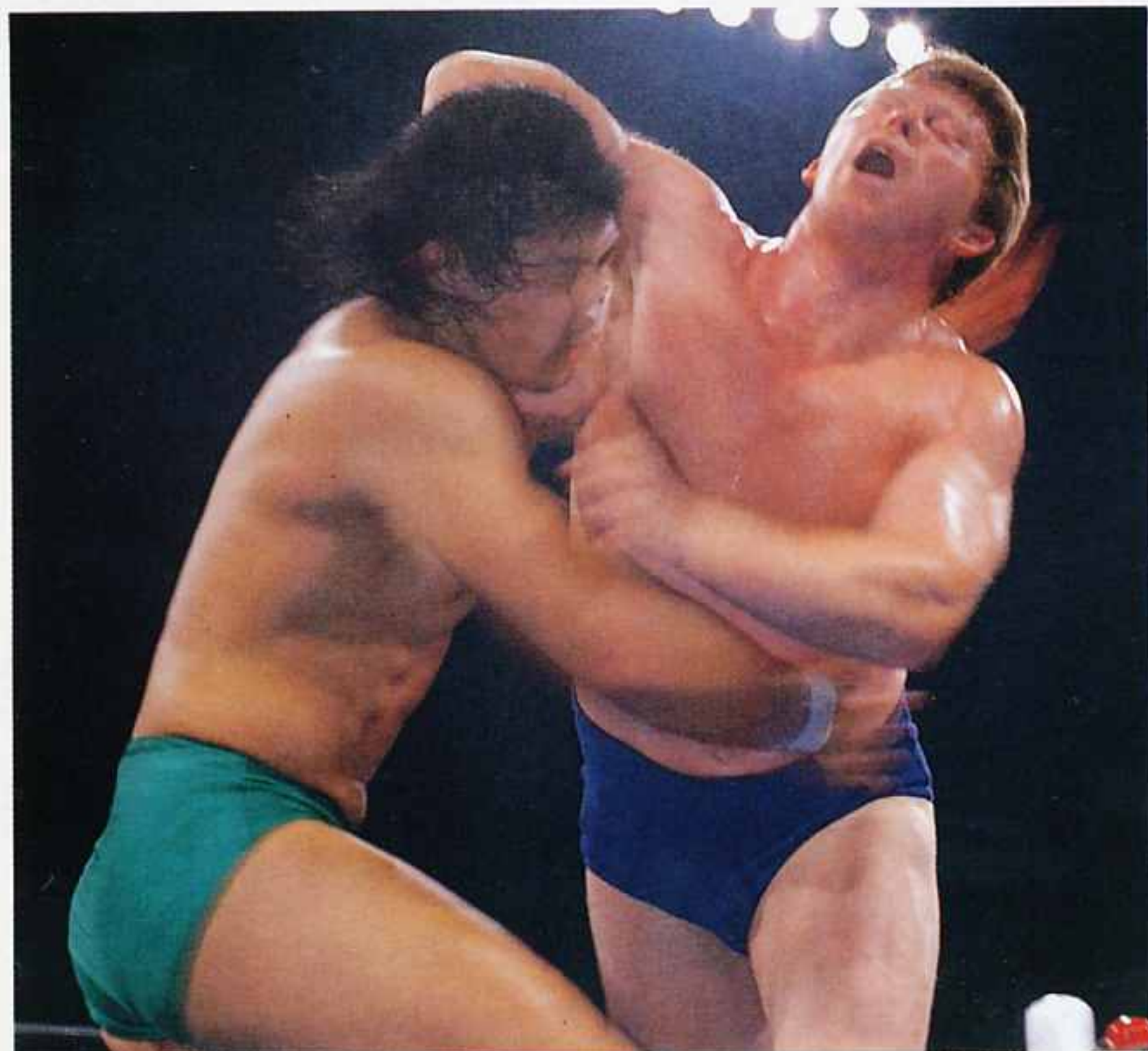
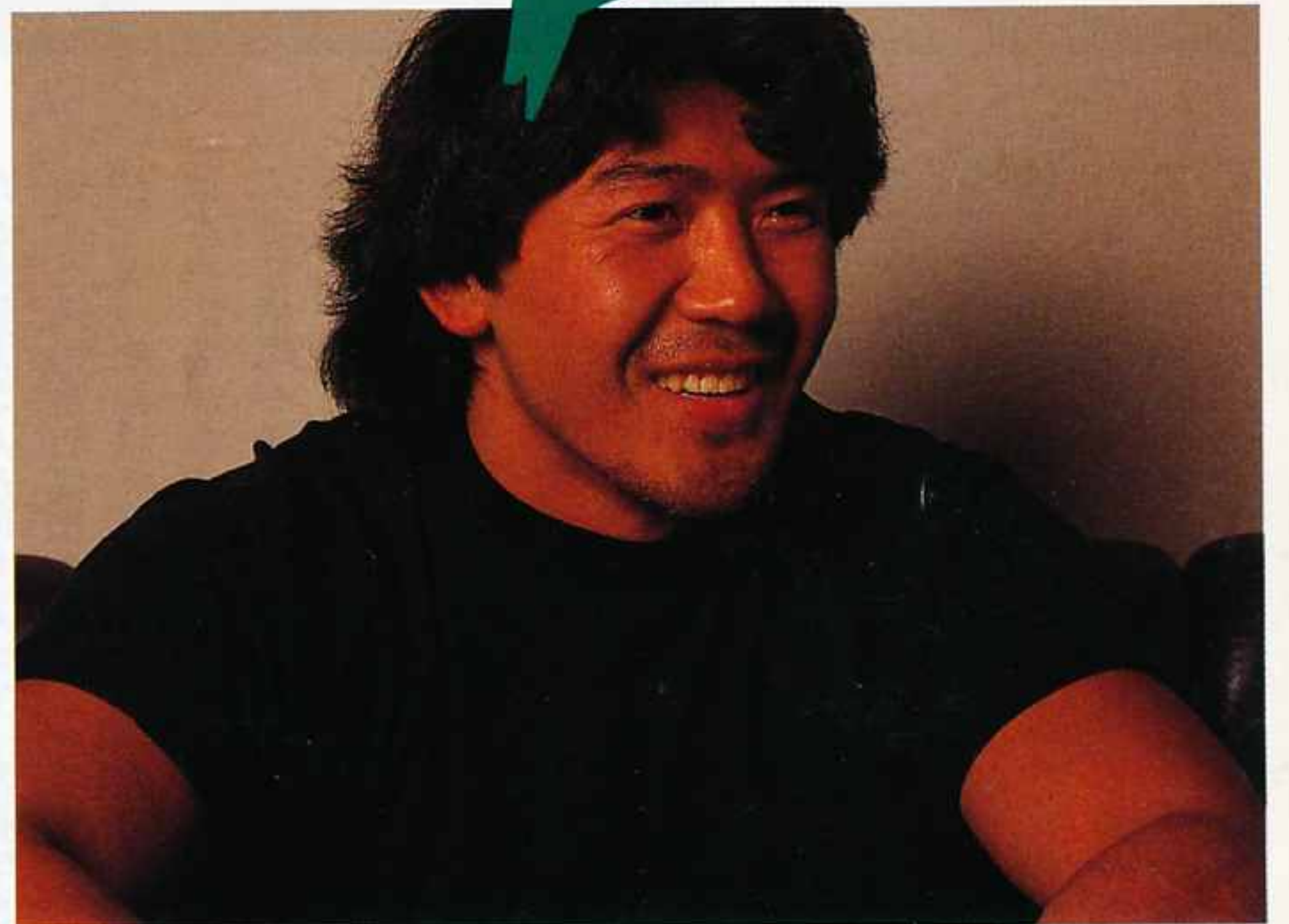
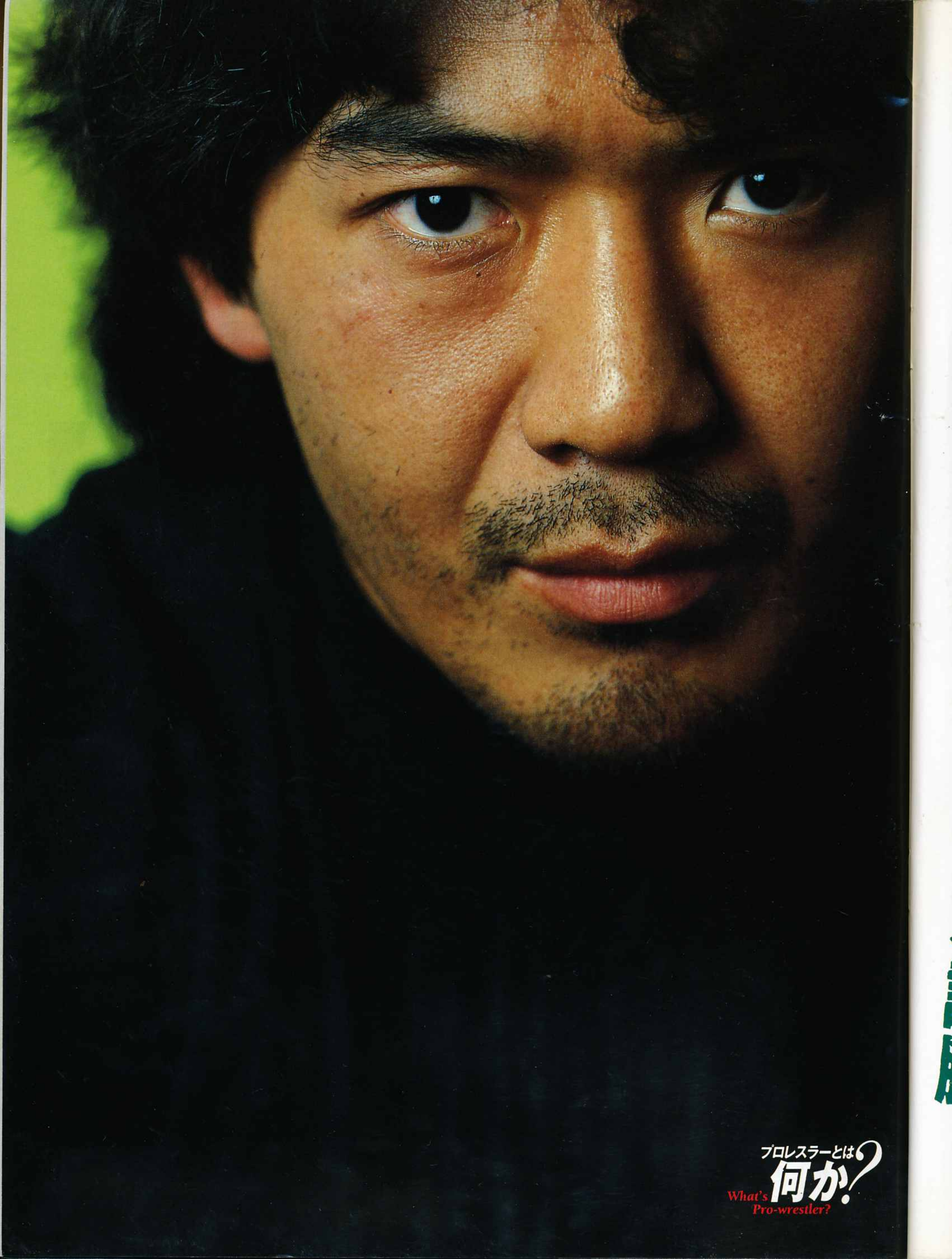
船木　そうですね。

――世界一強くなければ成就しにくい世界だと思うんですよ。だから、最終的には船木さんでも鈴木さんでもいいんですけど、さっきの「嘘」ということで言えば、「誰の挑戦でも受ける！」という形にならないと、ボクは嘘だと思うんですよね。

船木　そうでしょうね。それは俺も思います。

――ターザン山本は、「パンクラスは空気清浄機だ」という言い方をするんですけ

スミスル戦は長州へのメッセージ
船木誠勝

Masakatsu Funaki

ど、将来外に向かって出ていく、あるいは外から受け入れるということになった時に、いみじくもアントニオ猪木が昔から言ってる「いつ、何時、誰の挑戦でも受ける！」という世界にいき着きますね。
船木　いや、「いつ何時」っていうのは絶対ムリですね。やっぱりちゃんと決めてトレーニングする時間は必要ですよ（笑）。
——あら。まあそれはそうですけど（笑）。だから、グルッと一周してアントニオ猪木のリアル版というか、そういうものを実現させようとしてるんなら船木誠勝という人は、本当にすごい人だなという気がするんですよ。
船木　たぶん、そうなると思いますよ。もうその方向しかないですからね。だから今こうやっていろいろ研究して、その時期に備えてるんですよね。
——ちょっと話は変わりますけど、船木さんはマスコミについてはどう思ってるんですか？　例えば、パンクラスが外部に向けて対抗戦を提唱しようとしてて、プロレスマスコミがそれを聞きつけたと。
船木　ウワーッと乗ってきますよね。
——ですよね。そうなったら、マスコミは当然業界を盛り上げるためにも、読者を引きつけるためにも執拗に煽らなければならないわけですよね。その煽るというのは船木さんの中では「嘘」という範ちゅうに入るんですか？
船木　いや嘘ではないと思います。ただマスコミは方向を間違えると、逆に業界を潰しちゃいますから、そのへんの角度をちゃんと自分たちで計らないと、自分たちで自分たちの業界を下げていくことになりかねないなという危機感はありますね。だから『週プロ』と『ゴング』がまさしくその典型的な例だと思うんですよ。『週プロ』でプラスに書いたことを『ゴング』がマイナスに書いて。その逆のパターンもありますし。でも、一時期に比べたら雑誌がつまんないですよね。本当にバーッとめくって素通りしちゃいますから。
——そういう意味では雑誌も同じなんですけど、ある部分観客を刺激する毒の部分を与えていかないと、生活に特に必要のないものを売るというのは成り立たないと思うんですよ。船木さんがこれからどんどん純化させていく方向性っていうのは、リング上では絶対やらなくちゃいけないことだと思うんですけど、興行面では別の側面があると思うんですよ。その点はどう考えてるんですか？
船木　わざとそれをやるってことですか？
——わざとって言うか、これは一つの考え方なんですけど、例えばリップサービスとして「来年はヒクソン・グレイシーとやりたい」という人もいますよね。そういうことも船木さんの中では嘘になっちゃうのかなと思って。
船木　実現できそうなものであれば言います。だけど、絶対無理だなっていうのや、やる気がしねーなっていうのは言わないですね。それがやっぱり僕の馬場イズム！（笑）。
——ガハハハ。それ見出しに使おう（笑）。
船木　俺、ホント、新日本の若手の頃から馬場さんのインタビュー読んで、尊敬してましたよ。
——ホントにおもしろいですよね、馬場さんは。
船木　だけど全日本に行きたいとかそういうんじゃなくて、人間としていいなぁって思いますよね。でも弟子にはなりたくないですけど（笑）。
——おとなしい口調で結構過激なこと言いますよね（笑）。
船木　ま、見てるくらいだけで。関わり合いたくはないと。
——馬場さんの話のついでですけど、馬場さんがズーッと黙ってられたのは、猪木さんがしゃべり続けたからだと思うんですよ。だから船木さんが黙っているためには、絶対にしゃべり続ける人が必要なんですよね。
船木　誰かいるんじゃないですかねぇ。
——そういうマスコミ論というか興行論というか、その辺も船木さんは全部わかってると思うんですよ。
船木　おそらく言葉にはできないけど頭のどっかにはあるんじゃないですかね。
——船木さんの場合、言語化する作業が面倒臭いだけで（笑）。
船木　面倒臭いですよ（笑）。
——そういうタイプですよね（笑）。だからそういうタイプだからこそ、しゃべり続ける人を外に持っておかないと、船木さんのやることもファンに届かないと思うんですよ。
船木　通じないですよね。不気味って感じがすると思うんですよ。考えてないのか考えてるのかわかんないという。
——だから、パンクラスのことをあーだこーだ言う人が出てきたら、パンクラスはもっと面白くなりますよ。
船木　面白いでしょうね。
——船木さんはちょっかい出されるのは

プロレスラーとは何か?
What's Pro-wrestler?

嫌いでしょうけど。

船木　嫌ですね。「ほっといてくれ男」ですから（笑）。

―でも、今までパンクラスって1回も悪く言われてないですよね？

船木　長州力に言われましたよ。

―え！　何て言われたんですか？

船木　体型に関して。ああいう体じゃなくて、もっと脂肪を含めて体重があって、動けるヤツがいいって。

―それに関して船木さんはどう思ったんですか？

船木　俺はそれは間違いだと思ったんですよね。とにかく俺がレベルの高いヤツをやっつければ、パンクラスの強さを何とか証明できるんじゃないかってことで、今年の5月にスミスルっていう2メートル近く身長があって130キロくらいあるヤツと闘ったじゃないですか。あれは長州さんに対してのアピールだったんですよ。

―長州力に向けて。

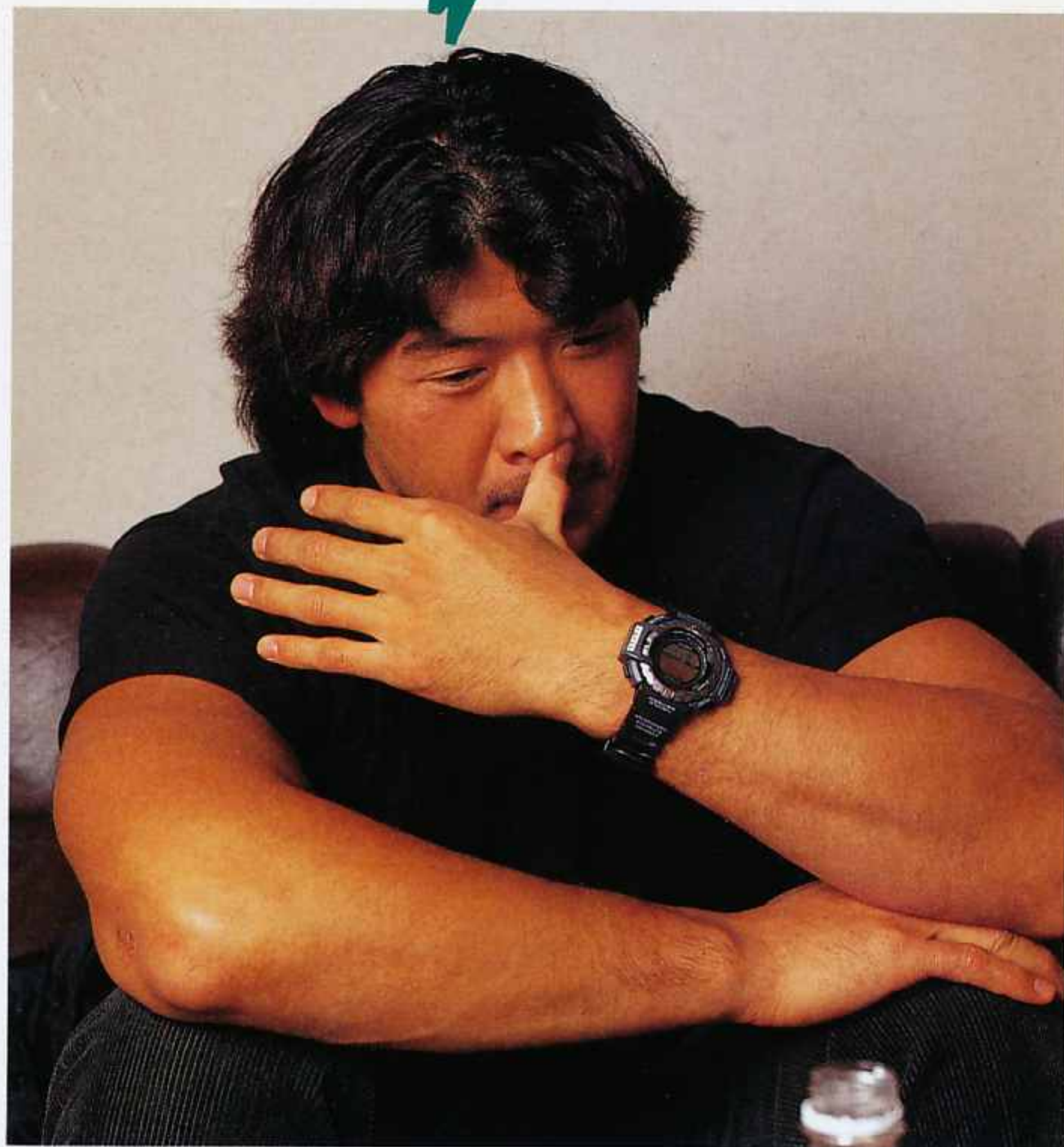
船木　無言のメッセージ（笑）。

―無言だと伝わらないですよ（笑）。

船木　でも俺はそれで満足してるんですよ。客とかあんまり考えてないから、一人対一人だから。それで俺が満足できてたら客がどう思おうと関係ないって感じですから。それでももし何か言われたら、「いや、でも俺はあいつを倒したでしょ」って言えば「あ、そうですね」ってなるじゃないですか。

―船木さんが「あいつ倒したでしょ」って言って、ファンが「プロレスラーとはやってないじゃない」って言い方をしたらどうします？

船木　あいつプロレスラーですよ(笑)。

Masakatsu Funaki

オーストリアで現役のプロレスのチャンピオンですから。

―あ、そうですか。スイマセン(笑)。じゃあ例えばね、「新日本や全日本の選手と直接やってないじゃない」って言うファンがいたらどう答えるんですか？

船木　連れてきてくださいって答える（笑）。

―簡単だ(笑)。これまた仮想の話なんですが、パンクラスからプロレスに打って出ようってことはないんですか？

船木　今は向こうのリングに上がるっていうのは嫌ですね。あるとしたら、仲介人がいて、五分五分のところだったらいいと思うんですけど、まるっきり向こうのリングっていうのは絶対イヤですね。

―第三者の主催者がいてってこと？

船木　だったらまだ考えられますけど、向こうの主催っていうのは絶対イヤですね。ルールも話し合いですね。一番いいのはアルティメットかなと思うんですけど、そういう時は。そういう時こそ何でもありが一番かなと。そのための何でもありですよ（不適な笑み）。

―例えばアルティメットルールでやったとしても、向こうはプロレスの次元なわけだから……。

船木　だからアルティメットルールで負けるのは当たり前だって、また言うかもしれないですよね。

―それもそうだし、この前、松永がダン・スバーンとやった時に有刺鉄線バット持ってきたように、何でもありなら凶器使ってもいいだろうっていう論理を持ち出す選手もいるかもしれないですよ。

船木　そうなったらもう、殺し合いですよね。じゃあこっちもやってやるってなっちゃうと、家でも潰せ！　とかそういうことになっちゃうんですよ。でも俺ホントそういうこと考えたことありますよ。もしも某選手とそういうことになったら……。アルティメットでやることになって、じゃあ自分の息子とかも監禁されるかなとか、そこまで考えましたよ。でもそうなったらそうなったで、徹底的に戦争やるしかないなって思いましたよ！　極端ですけどね。

―素敵だ(笑)。でも、船木さんの場合、そういう部分を持ってるというのがあまり伝わってないですよね。

船木　そこまでさせる人間がいないってことですよ。いざ実行に移すっていう人間はいないですよ。

―今、船木さんの自分の中の強さのレベル、目指すレベルが10だとしたら、どの程度までいってるんですか？

船木　どうなんですかね。自分では全然わかんないですよね。だけど、小学校5年生の時よりは強くなったんじゃないですかね。

―当たり前ですよ。

船木　それは実感しましたよ。

―俺だって実感できますよ。

船木　確かに小学校5～6年生の時はもっと弱かったですもん。

―だから当たり前ですって（笑）。

船木　それはこの間のルッテン戦で実感しました（笑）。

―まだ続けますか？（笑）。

船木　でも俺には、小学校5～6年のケンカのレベルっていうのは、いいもの差しになってるんですよ。あの試合終わって、控室帰ってきてその時のこと思い出

プロレスは人生を表現するデカイ場所
船木誠勝

しましたから。小学校5～6年のときにケンカしてボコボコにされて何もできなかった自分がいて、その時のことが甦りましたね。もう本能ですよね。男の本能。「あ、俺、あの時よりも今日は強かったな」って。それくらい自分はイケてるんですよね。常に自分中心ですから(笑)。

―よくわからない人だ(笑)。

船木 その時はもうファンも周りのヤツも全部飛んでますよ。自分の人生の思い出を振り返ってるんですから。今は、船木誠勝という男の道を、何歳まで生きるかはわかんないですけど、その道を極めていく中の、単にひとつの通過点なんじゃないですかね。

―じゃあパンクラス以上のものができる可能性もあるわけですね。

船木 そうですね。

―決して船木誠勝はパンクラスで満足ということではないと。

船木 そうですね。体が使えなくなったら、パンクラスのリングではできないですよね。そうしたらおそらく頭を使う道を走っていくと思うんですよね。あとは選手育てたりとか。それがどこまで続くかですよね。

―個人的な意見なんですけど、僕が考えるプロレスっていうのはそういったことを含めてすべてプロレスなんですよ。

船木 うん。プロレスっていうのは、その人一人一人の個別の人生ですね。人生を表現する、ものすごくデカイ場所だと思います。

プロレスラーとは何か?
What's Pro-wrestler?

―そういった意味でいうと船木さんもプロレスラーであるということになりますよね。

船木 そうですよ。だから俺はそういう意味で「パンクラスはプロレスです」って言ってるんですけど、みんなわかんないですよね(笑)。

―わかんないでしょうね(笑)。リングだけ見ててもそれはわかんないですよ。

船木 見ようによっては一番ハッキリしてるんですよ。負けたら悔しい、勝ったら嬉しい、勝っても納得いかない時がある、負けても嬉しい時があるっていう、いかにもその辺にありがちな風景じゃないですか。それを格闘というもので表現してるだけであって。だからそれが今のパンクラスファンに受けてるんじゃないかと思うんですよ。ファンは自分とプロレスしてると思うんですよ。鈴木みのるのファンだとしたら、「鈴木はスランプだな、俺も仕事の能率悪いけども、鈴木はまだやめないって言ってるから俺も頑張るぞ」とか。そういった感じで、ユンケルみたいに感じてんじゃないスかね(笑)。1ヶ月に1回パンクラスで、ユンケルみたいな黄帝液を注入して帰っていくんじゃないですかね。

―それ、今考えました?(笑)。

船木 今考えました(笑)。

―いや、船木さんは実に頭のいい人です。アントニオ猪木が北朝鮮で初めてプロレスをやりましたよね。初めて見る人にも感動を与えるというのは、すごく意味のあるものだと思うんですよね。

船木 はい。

―でも、プロレスは、「人を感動させるのが仕事だ」という言葉の尻馬に乗っかって、勝負論や道場論をどんどん排除していってしまった部分もあると思うんですよ。

船木 ええ。

―でも逆にパンクラスは根底があるわけだから、初めて見た人に感動を与えるという作業をこれからやってかなきゃならないわけじゃないですか。例えばソ連や南極、火星でパンクラスを見せた時に、そのユンケルを飲んだ感覚に人々がならないとつまんないですよね?

船木 つまんないですよね。つまんないし、今の発想を考えた時に、逆にもっと苦しい環境にあればあるほど、刺激が出るんじゃないかと思いますけどね。

―でも、こうやって話してわかりましたけど、前は船木さんとパンクラスが今一つ一体化してなかった印象を受けてたんですよ。今はもう完全に一体化してますね。

船木 してますね。やっと。

―新日本プロレスにいた頃は当然、仕事は仕事、遊びは遊びという割り切り方をしてたと思うんですよね。今はリングに上がるまでの過程も含めて、すべて船木さんの遊びということもできますね。

船木 そうですね。だから遊びは必要ないですね、もう。趣味がないんですよ。何か凝ると趣味じゃないですか。仕事に凝ってるんでしょうね、今は。

―今日は船木誠勝の謎が……えーっと、全然解けませんでした(笑)。でも僕は今まで誤解してましたよ。船木さんは完全なスポーツ志向で、強さっていう部分に関してもリング上だけで競え合えばいいという考えの人なのかなと思ってたけど、話を聞いてたら違いますね。

船木 そうですね、リング上だけだと、あまりに狭すぎますね。すべては闘いですよ(笑)。

―やはり船木誠勝という人間も欲望が深いんですね。

船木 俺の欲望って何なんだろうって考えたときに、「人から制圧されたくない」っていう欲が、俺の欲望だと思ったんですよ。自分がまっすぐ歩いているのをどっかから邪魔されたくないと。最後の1歩まで、自分で歩みたいと。

―でも、邪魔する奴に声を大にして「邪魔するな」とも言いたくないんでしょう。

船木 言いたくないですね。面倒ですから(笑)。

―だからわかりにくいんだな(笑)。

〈96年11月23日・世田谷・パンクラス事務所にて収録〉

つじつまの合わない人生の天才
初代タイガーマスクの
爆弾発言!!
プロレスラーとは何か?
What's Pro-wrestler?

「来年はつじつまを必ず合わせます!!」

Tiger Mask

聞き手／山口昇
interview by Noboru Yamaguchi
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saitou

――さぁ佐山さん、敢えて今日は佐山さんと呼ばさせてもらいますが、今回は「すいませ～ん」と「よろしくお願いしま～す」を封印したインタビューにしたいと思ってるんで、よろしくお願いします。

佐山 あ、はい、すいませ～ん。よろしくお願いしま～す！

――いきなりだ(笑)。まあいいや。で、今、佐山さんは毎試合毎試合、自分なりのテーマを掲げて試合してるんですか？

佐山 そうですね、ええ。プロレスというものを見直して、それから自分独特のスタイルを作っていかなきゃならないんで。自分の定義の中でプロレスとは何かっていうものをキッチリとして、それから自分のスタイルを作るという、これが課題ですよね。

綺麗な肌の女の子は内臓も綺麗でしょ

――自分の中ではもうプロレスとは何か、という定義はできてるんですね？

佐山 できてますよぉ～。

――それを聞かせていただきましょう。

佐山 えーと、定義というのはやはり、プロである以上ね、いい試合をしなきゃならない。で、プロである以上お客さんを十分納得させたい。しかし、芯の中ではガッチリしたものを持ってないといけない。それが命だと思うんですよね。心臓部だと思うんですよね！

――それはよくわかります。

佐山 心臓部にガッチリしたものがあって、例えば肝臓という機能があって、肝臓がおかしくなってくれば皮膚に変なモノが現れてくるじゃないですか。肝臓がシッカリしてれば、皮膚にはシッカリ綺麗な女の子のような張りが出ると(笑)。写真撮影でも綺麗な女の子は肝臓もシッカリしてて内臓も綺麗だからちゃんと写ると。

――単に皮膚だけを磨いていてもダメだということですね。

佐山 そうですね。単に皮膚だけドーランを塗ってもダメだよ、すぐにボロが出ちゃうよということですね。いやぁ、今のは後世に残しておきたい言葉ですよ。アハハハァ。

――責任もって後世に残します。じゃあ、その心臓部っていうのは、やっぱり道場での練習と、そこで組み立てた技術ということになりますか？

佐山 そうですねぇ。プロレスラー足るプロレスラーの技術っていうものは、芯で持ってなきゃいけないと思います。

――で、皮膚の綺麗さであるとかは、それは〝見せる技術〟であると。

佐山 そうですね。

――じゃあ道場での、道場と限定しなくてもいいんですけど〝格闘技者としての技術〟と、〝見せる技術〟とがリンクした形のタイガーマスクをこれから見せていくということですか。

佐山 はい、そうですね。それが本当のプロレスラーであって、いい試合が出来る一つの要素というか、要因なんですね。ただ単にタイガーマスクがポンポンって飛ぶっていうだけじゃなくて、やっぱり技術的に格闘技の凄みみたいなものがあって出来てると思いますから。ストロング・スタイルの所以っていうんでしょうかね。ストロング・スタイルを普通の人にやりなさいっていっても出来ませんから。練習しないでリングに上がっても表せませんから。ストロング・スタイルが表れて尚かつビシッと飛べるようなものを作っていきたいなぁと。

──それはもう、最近のインタビューで佐山さんというかタイガー選手が言い続けてることだけど、逆に言うと、ストロング・スタイル以外の、例えばルチャリブレであるとか、そういったスタイルというのはアマタのレスラーでも出来ちゃうってことですか？

佐山　いや、出来ないでしょうね。それはそれなりの練習を積んだ人がやることであって、それはそれでまたプロレスでしょうね。自分の思うプロレスとはまたスタイルが違うということでしょうね。

──最近のプロレスというのは「幅」だけで語られてますよね。例えば有刺鉄線に突っ込んだりとか、サソリやピラニアが出てきたりとか。こんな幅の広いとこまで許容するのがプロレスなんだよっていう形で、プロレスの幅が異常に広がってきてる時代だと思うんです。

佐山　ええ、ええ。

──ただ、その分、その幅に対する「深さ」の部分、つまり横軸が「幅」だとすると、縦軸の部分が置き去りにされてる時代ともいえると思うんですよ。で、その深さを持っている源流としては、やっぱり新日本プロレスというのに行き当たるわけですが、佐山さんが新日本プロレスの中で培ってきたものとは一体どういうものだったんですか？

佐山　うーん、やはり、それはストロング・スタイルでしょうね。で、そういう幅の広さというのは他の団体が何やってもいいと思うんですよ。ただ、シッカリしてるところが二、三カ所はちゃんとないと崩れちゃうんじゃないでしょうかね、プロレス界全体が。例えばそれが雪の表面であってね、エ～と……。

──今、なんかカッコイイこと言おうと思ってますね？

佐山　いや～、デッハ～。

──雪がどうしたんですか？（笑）。

佐山　あの、雪の積もりが浅いと、そのまま雪崩現象で落ちるとこまで落っこちゃうと思うんですよ。表面はすごいキレイですけれども、季節が来ると暖かくなって、これが雪崩現象で全部落っこちゃう。ところが、シッカリしたものがあれば、ちゃんと凍らせるような寒さというものがあれば、つまり何団体かはプロレスラーとはこういうもんだよ、というものがあれば大丈夫だと思うんですよ。また、それがあれば、その他の人たちも信用されると思うんですよね。

──じゃ、佐山さんの中ではプロレスのリング上で行われているものであれば、一応は全部プロレスでいいんだよという認識はあるわけですね。

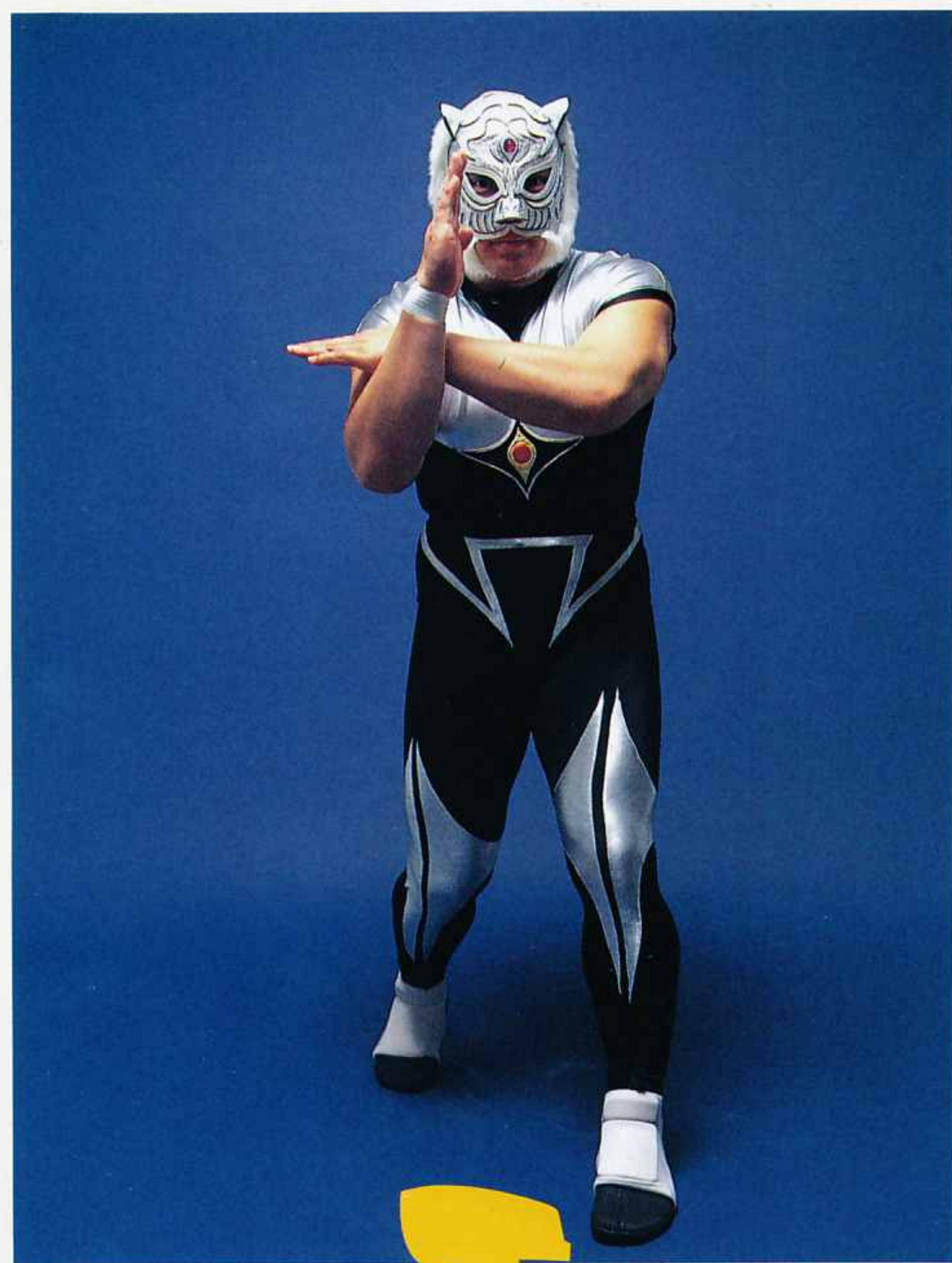
佐山　あります、あります、あります。はい、はい、はい。ありまーす。

──こうじゃなきゃいけないというものでもないわけですね？

佐山　こうでなきゃいけないというものではないでしょうね。その、サソリ使おうと、サメが出てこようと。

──サメ！（笑）。それぞれの役割をシッカリやってくれればいいと。

佐山　そうですね。ただ、僕の枠の中ではちゃんとしたものでありたいですね、ええ。シッカリしたものでありたいです。

──あの、佐山さんは新日本出身なわけですけど、タイガーマスク全盛の頃って

Tiger Mask

いうのは他団体についてはどういう風に感じてました？

佐山　それはもう新日本プロレスがベストと思ってました！　プライド持ってました！　プロレス界のこともそんなにわかりませんでしたし、「なんだあー？」って思ってましたね。

──全日本、何するものゾと。

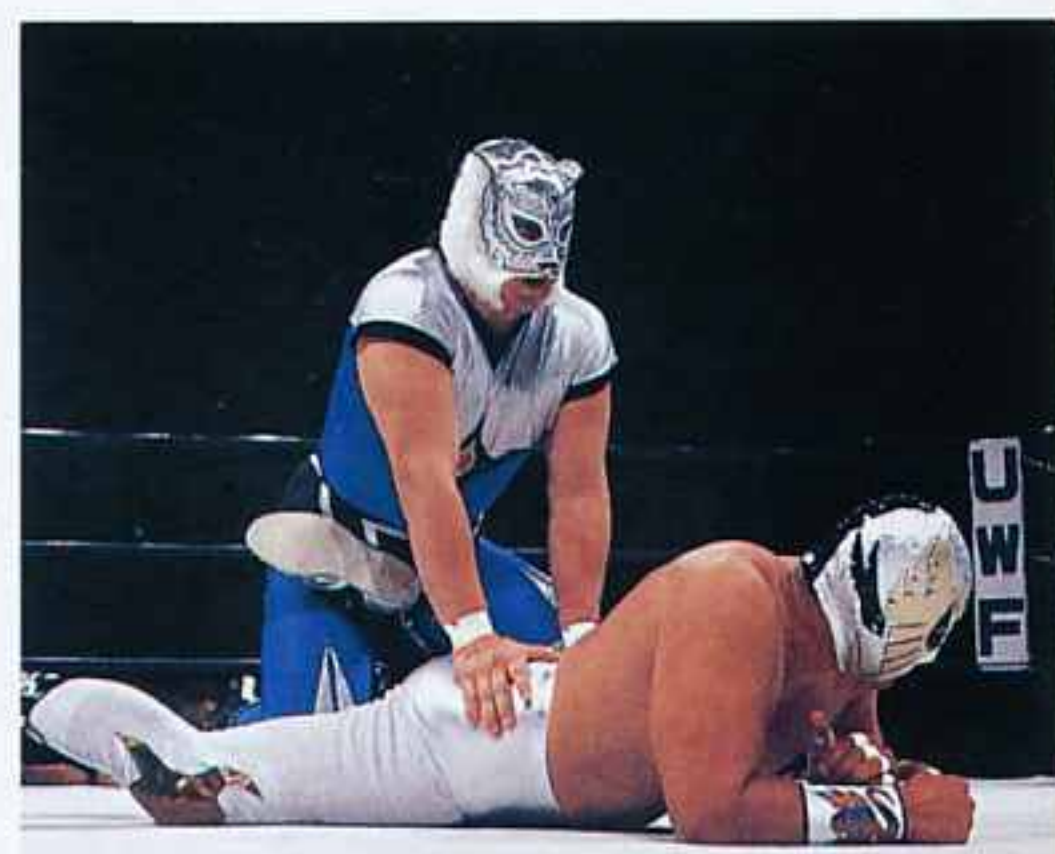
佐山　まあ、今はないですけど、当時はね。でも、例えばサソリでも熊でも、それはそれでいいんじゃないんですか、ええ。お客さんを喜ばせることに徹底しているわけですからね。ただ、ドーンッといっちゃったら怖いですから、雪崩が起きないように雪ではなくて、アイガーの北壁の氷にしておかないと。

──は？　何ですか？（笑）。

佐山　アイガー北壁！　エベレスト！　あれだけのところですから、狭くても高ければ何にも問題ないでしょうね。あ、かっこいいなぁ、今の。アハハハァ。

──それも後世に残します（笑）。やっぱり佐山さんが新日本の道場にいた頃は、各々の選手はそういった芯を追ってたわけですか？

佐山　ああ、ありました、ありました。

タイガーマスク ウインドウズ98くらいを考えてるんです

その時のプロレスしか知らないですから、他のがどうもわからなくて。なんか、海外のものって感じがするんですね。海外のプロレス、あまり僕好きじゃないですから。僕が海外で成功したのは芯があったからですよね。で、海外の変なところがちょっと日本にあるんじゃないかなって思いましたよね。

——最近の新日本はちょっとじゃなくて、たくさんありますよね。

佐山　最近のはちょっと見てないんでわかりませ～ん。

——逃げましたね、スルリと(笑)。まあ、僕らが子供の頃は、ストロング・スタイルとアメリカン・スタイルいわゆるショーマン・スタイルの二つがあったわけです。で、今はそういう対立概念ってあまりないですよね。

佐山　うん、ないですね。

——時代が移ると、格闘技的なプロレスと、そうじゃないプロレスの対立になっていって、結局、今はプロレスにとってなんにも対立概念がないんです。

佐山　それでいいと思うんですよ。対立概念なんかいらないと思うんですよ。とりあえず、自分が持ってるものは、それはそのいろんな人たちにとってみれば、みちのくがあってUWFスタイルがあって、爆発するヤツ？

——ああ、爆破デスマッチってやつ。

佐山　そのデスマッチがあって、その中の一つのスタイルが自分にあるんですよ。それでいいんですよ。それで雪崩現象を食い止める一つのものはなんとかなるんですね、ええ。

——でも、今までのプロレスの歴史を考えると、その対立概念がないとプロレスって、もうとっくに雪崩現象を起こしていたような気もするんですよ。

佐山　ああ、そうですよ。そういうことですよ。ですから、対立概念ってのがあるからこそ、ん～と、そういうことです。ただ、僕はその……。

——あぁ、佐山さん自身は対立概念を作りたくないということですね。

佐山　そうですね。でも、例えば、昔はちゃんとした新日本ってものがあったからこそ、昔の全日本があった。もし全日本だけだったら……これ書かないでね。

——それぐらい書きましょうよ(笑)。

佐山　いやいや(笑)。雪崩現象で、「あっなんだ、プロレスラーは全部ショーマンなんだ」って思われちゃって。それがアメリカのプロレスラーですよね。ところが日本には新日本ってものがあるから全日本も光ってきた。だから、自分の中にそういったものがあるから、みんなも光ってくるというもの。雪崩現象を止めるようなもの。それがあれば、わざわざ「あんなものはプロレスじゃない」と言う必要はないと思いますね。

——なるほど。でも、今までのプロレスの歴史は、やっぱり全日本に対するアンチテーゼとしての新日本があって、その新日本に対するアンチテーゼとして今度UWFが出てきて、そのUWFに対するアンチテーゼとして逆方面から大仁田厚が、「あんなもんはつまんない」と言い出して。で、大仁田厚が終わった時点で、もうプロレスは「何があってもいいじゃねえか」という状況だと思うんですよ。

佐山　あー、そうですね。

——だから、今、プロレスに対立概念を持ってくるとしたら、『格闘技』しかないと思うんですよね。

佐山　あぁ、なるほどね。

——今は格闘技というものが、プロレスより上位概念になってるわけですよ。昔はプロレスの方が全然上だったものが、バリュー的にも、それがひっくり返っちゃってるんです。

佐山　多分、それを作り上げたのは僕だと思うんですよ。アハハ。

——アハハって張本人が笑ってていいんですか！(笑)。

佐山　その作り上げたものを変えていきますから、これまた面白い世界になりますよ。

——だから、ヘタにあおるわけじゃないですけども、本当にプロレスラーとしてプライドを持ってもらって、格闘技に負けないようなプロレスをやってもらいたいわけです。

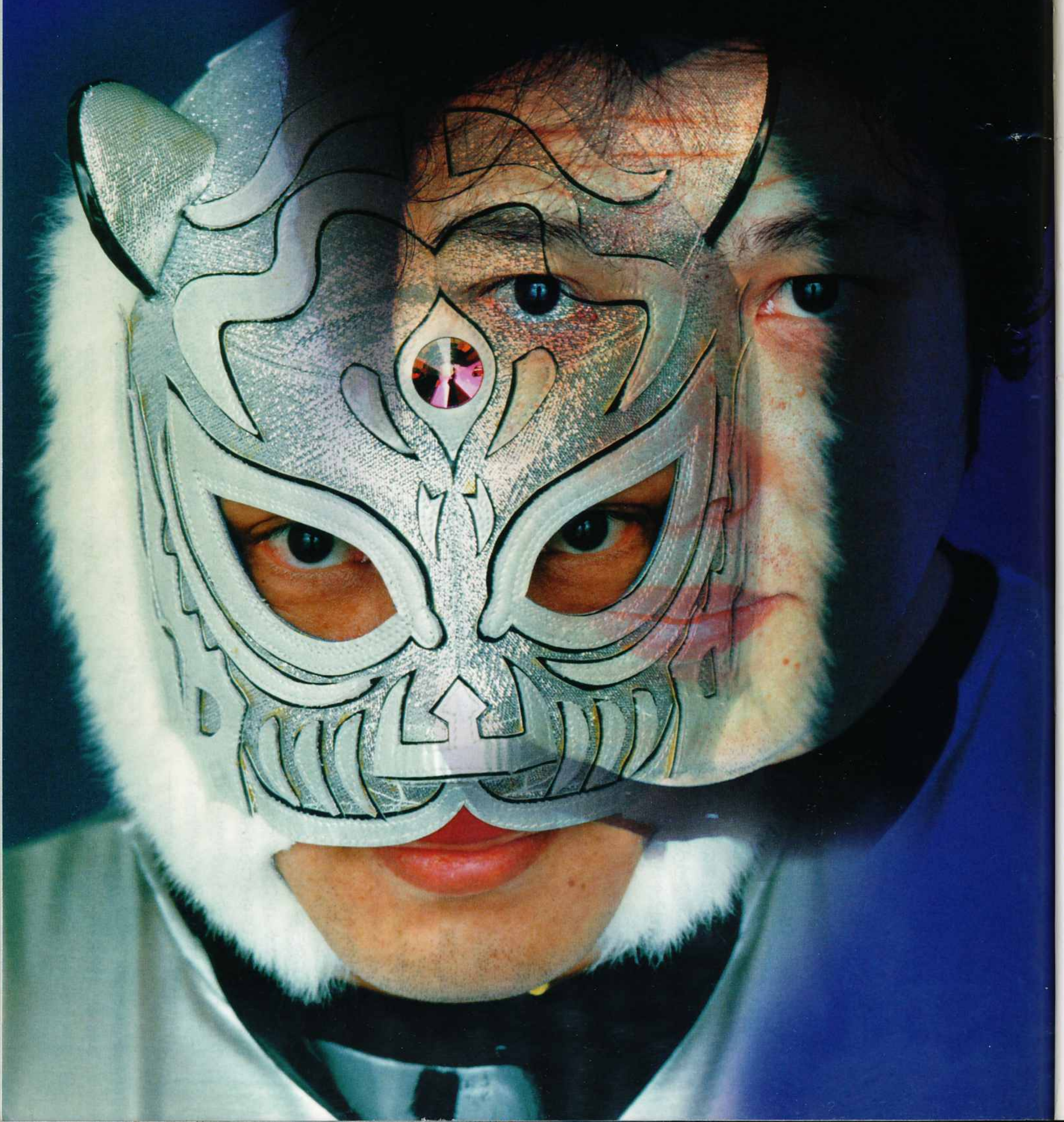
佐山　そうです、そうです。それでいいと思いますよ。

——直接リング上で対決するとか、そればかりじゃなくて、今だから概念としての『打倒、格闘技！』というものが必要だと思うんですよ。

佐山　うん、そうですね。例えば、打撃オンリーの人とプロレスラーの試合になったらプロレスの方が全然強いわけですよ。バーリ・トゥードだとちょっとやばいでしょ。僕が標的にしてるのはバーリ・トゥードなんですけど、打撃オンリーの選手ならいくらでも勝てるんですよね。パーンッとひっくり返せばいいわけですから。打撃に対する対処はすごく簡単なわけです。ロープブレイクとかあったら別ですよ。パーンッと倒して押さえつければいいわけですから、簡単ですけれども、そういうのをお客さん見てないでしょ。じゃ、何かっていうとプロレスのショーマン的スタイルとガチンコスタイルとどちらが魅力があるかといったら、今はショーマン・スタイルに魅力があるわけですね。ショーマン・スタイルがガチンコに勝ってるわけですよ。これはなぜかっていうと、芯がないから。

——技術的なものは時代が違うからアレでしょうけど、猪木さんがやってきたのは、その芯の部分だったわけですよね。

佐山　だと思いますよ。自分の場合はシューティングという格闘技の世界をやっ

Tiger Mask

てきましたけど、あそこまで自分で盛り上げるつもりはありませんでしたから。

――は、そうなんですか？

佐山　僕、ホントはマスク脱いでそのままどっか去っていこうと思ってたんで。町道場でもやりながら、生徒集めてと思っていたら、格闘技雑誌が扱い出してバーッとなっちゃって。格闘技雑誌止めたかったぐらいですから（笑）。

――いや、まあ、そういう佐山さんの性格というか、生き方の不思議なところは、のめり込む時はグーッとのめり込んで、飽きるのも異様に早いところというところですよね（笑）。

佐山　だから、突き詰めちゃうと、ある程度「わかった」と思ったところで他に行かないと人間は成長がないですから。そのまんまそのものをずっと追い込んでいくと、ただの『長老』になってしまうと思うんですよぉ。

――存在感のみで存在している『長老』にはなりたくないというわけですか。

佐山　やっぱり次のものを突き詰めたいですからね。

――好奇心旺盛ですよね。さっきもゴルフゲームに熱中してみたりとか（笑）。僕は佐山さんはホントに面白いと思うんだけど、その佐山さんの面白い性格というのは以前のタイガーマスク時代には見えなかったんですよ、リング上からは。

佐山　あー、はい、はい。もう僕がどうのこうのと言うよりも、お客さんがもうそういう目で見てましたから。タイガーマスクっていうのは面白おかしくあっちゃいけないとか、伊達直人でなくちゃいけないとかですねぇ。これ、ホント、今でも言われるんですよぉ、もうズーッと言われ続けているんですよぉ……。

――何をですか？

佐山　「こんな人とは思わなかった」って!!　アハハハァ。

――ガハハハハ。「こんな人とは思わなかった」ときましたか。

佐山　もう、それば～っかりですから。タイガーマスクというイメージが皆さんの側から作られているんじゃないかな～と思いますけどね。

――佐山さんはタイガーマスク時代、スーパータイガー時代、シューティング時代とそれぞれのイメージが、ファンから見るとそれぞれがみんな違うわけですよ。だから、非常に掴みどころがないというか、非常につじつまの合わない人生を送っている人なんですよね。プロレスにいきなり戻ってきちゃうし（笑）。その、非常につじつまの合わない部分が佐山さんの面白い部分であって、逆に反発される部分でもあると思うんですよね。

佐山　僕は大好きなんですよー、そのつじつまが合わないのが。というのは自分のことをパッと見て「何だコイツ冗談か本気なのかわかんないや」って。そう思われるのが一番好きなんですねぇ（笑）。

――ダハハハ。人を驚かすというか、人をスカすことが結構好きなんですね。

佐山　おちょくるというかね（笑）。け～っこう好きですよぉ。僕のそういう性格がわかってくれると、すごく楽しくつきあえる、その人とは。わかんない人は一生懸命噛みついてくるんですよ。

――佐山さんはそういうのも逆手にとって、茶目っ気で生きていこうとするわけですよね。だから、そういった人格が今度ニュー・タイガーマスクになって、リング上からもっと漂ってきたら、これは結構面白いことになるんじゃないかなって気がするんですよ。

佐山　今回のイメージはどうやって作っていこうかなと思いますけどね。だから、自分の性格みたいな、人間性というのをリングで出す、出さないは、わかんないですね。お客さんが何を望んでいるのか。今、お客さんが僕を見た時「あ、ビデオの人だ、何年か前にすごく人気があった人だ」みたいな感覚だと思うんですよ。そんな人たちに敢えて人格をリングで見せる必要があるかどうか。僕はちょっとわかんないですけど。

Tiger Mask

――でも、スーパータイガー時代にせよ、シューティング時代にせよ、自分のやりたいことをやってたんですけども、どこか抑えてたんじゃないですか。

佐山　そうですねぇ。やっぱり、スーパータイガーにせよ、佐山聡にせよ、やっぱり弟子とかがいましたからね。弟子がこうやって、先生がこうしちゃマズイみたいなところがありますので。で、よく僕の気心を知ってくれる弟子は僕のことをよく知ってるんですよ。冗談ばっかりやるとかですね（笑）、面白いとか、厳しいところは練習の時だけとか、よく知ってるんですよ。他のごくごく近い選手でも知らないでしょうね、このことは。そのぐらいやっぱり覆いを被せていかないと出来ない仕事ですよ、ええ。でも今はもうフリーというか、全然立場違いますから、その意味では個人的なものも出してますよね、僕。

――だから、今のリング上が一番佐山さんらしいっていう気がするなあ（笑）。

佐山　アハハ。そう、一番僕らしいでしょうね。でも、これはね、さっきのつじ

もっと面白い底のあるプロレスを見せる タイガーマスク

つまが合わないっていうのはね、来年つじつまを必ず合わせてみせますから!!

――おわっ、爆弾発言ですね！

佐山　これは面白いと思いますよ！　ヒントは僕の格闘スタイルにあると思うんですけども、自分のスタイルが、あるお客さんから見たら往年の華麗な動き、また別の人から見たら「えっ、こんな高い技術があるのか」っていうような技術、それがどういう風に映るかで僕を読めてるか、読めてないかってことですよ。来年はだから全部つじつまが合うかもしれませんよ。例えばマウントポジションから関節技とか、総合技術的なものを僕はすべて持ってるわけですから。技術的にはたぶん世界で一番持ってるかもしませんね、総合格闘技という面ではね。

――世界で一番！

佐山　ええ、技術的なものを展開できて、しゃべることができるのはたぶん僕だけかもしれませんね。あのぉ、今度、あのぉ、技術書出ますから、シューティングの。あとバーリ・トゥードの技術書出ますからぁ、1万円ちょっとなんで、よろしくお願いしま～す。

――警告！「よろしくお願いしま～す」は禁止です！（笑）。

佐山　あ、すいませ～ん。

――今までの佐山聡の39年間の集大成を見せると。

佐山　ええ、プロレスで見せると。

――それは今までは、佐山さんはプロレスのリングで見せなくてもいいと考えてたと思うんですよ。それが、見せようと思ったきっかけはなんだったんですか？

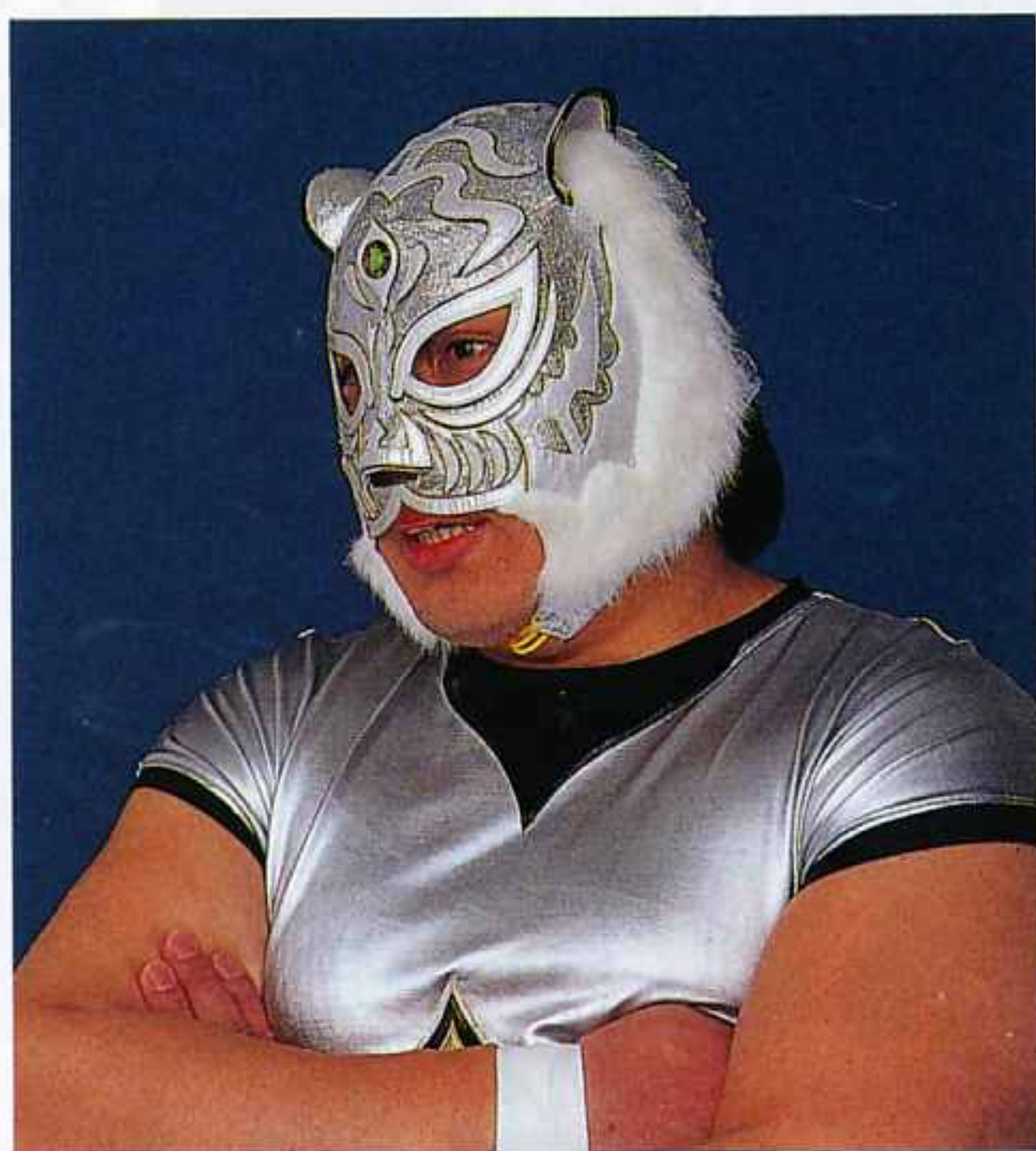
佐山　やっぱり小林邦昭さんでしょうね。小林さんとの試合で、プロレスにはこういう表現方法があるんだってのがわかりましたから。で、プロレスに敵対したじゃないですか、シューティングって。一時ね。それはお互いに言い合いしてた部分があって。で、自分はどうでもいいんですけれども、選手たちが付き合いづらいとかいろいろありましたしね。もうそういう時代じゃなくて、シューティングもだいたい突き詰めて、あれはもう完成品ですよ。すごくいいスポーツだと思うんですよ。でも、小林さんとやった去年の暮れの大阪城ホールは凄くデカかった。もの凄いインパクトありました。ファンも凄い温かかったですよね。「あっ、これはイケるな」と。で、動けるうちにやっておかないと、タイガーマスクもったいないよ、と。だから、僕、プロレスで理想をピシッと作っちゃったら、またパッといなくなるかもしれないですね。

――また、飽きちゃうわけですね（笑）。そこが佐山さんの凄いところですよ。ポッと脱ぎ捨てられちゃうんですから。プロレス辞めた時も、UWF辞めた時も、今回のシューティングの時も、いきなり辞めましたからね。

佐山　シューティングはまだ辞めたわけじゃないですからぁ（笑）。

プロレスラーとは何か?
What's Pro-wrestler?

――ああ、そうか。

佐山　例えば、ウィンドウズ96というものがありますよね。それを作り上げたとしたら、97、98とバージョンアップしていかないと、これは人生にならないんですよ。今そのぉ、つじつまはちょうど今、合わないかもしれませんけども、僕はウインドウズ96を作って、それからマクドナルドの仕事をやろうとしてるわけじゃないんですよ。

――マクドナルド！

佐山　マッキントッシュをやろうとしてるわけでもないんですよ。ウインドウズ96からウインドウズ98ぐらいを今考えてるわけですよ。

――なるほど。

佐山　これが僕の今の姿なんですよ。つじつま合わないっていうのは。人生ビシビシッと合ってくるのがわかり出すっていうのが来年じゃないですか。ええ。だって僕が格闘技やろうとしたのは18歳の時なんですから。ですから、例えば来年、格闘技も作りますから。で、それをアマチュアとしますから。全国に広めていきますから。で、それがプロになってやる分にはプロに技術導入してもいいですよね。それがさっき言った芯になるし、ストロング・スタイルの「芯」の姿になっていくんですよ。

――つまり一流の格闘技者が超一流のプロレスをやれば理想ということですね。

佐山　そういうスタイルを来年、もうスタートする準備してますんで、ええ。これが僕の言うつじつまということでしょうか。全然僕はつじつま合ってないことはやっていないんですけどねぇ（笑）。

――いろんなことやりたがるんですね。佐山さんって根本的に争いごとが好きじゃないんですかね？　もしかしたら。

佐山　好きじゃないかもしれないですね。闘いが好きじゃないっていうのは、よく揉め事があったりすると、僕はあまり行きたくないんですよ、そこに。というのは僕、切れちゃいますから。もう殺す世界になっちゃうでしょ。例えばなんかの揉め事があって、「佐山、ちょっと来てくれよ」って言われても僕はそこに行きたくないんですよ。「うわぁ～、コワーイ」って。「なんだ佐山、臆病だな」って言われても「そうなんですよ」って。で

も、その人は僕を知らない人。僕が切れるってことを知らない人。僕が切れたら半端じゃないですから。ウフフ。

──いや、佐山さんが切れたら危ないっていうのは、これは佐山さんをズーッと見てきた人はわかりますよね。その切れた場面を目撃したかどうかは別として、それは絶対に僕の中にもあるんですよ。

佐山 フハハハハ。でも、ほとんど切れませんよ～、はい。でも、「なんだ、この野郎！」って言われた時に、僕、もうその場面わかってるんです。そしたら僕もツッコミますから。抑えられないですね。バチーンといくか、どんどん興奮して抑えられなくなるかが、今までの例ですから。そういうことは僕、もう絶対やりたくないですね。

──でも、今までプロレスのリング上ではそういうことないですよね？

佐山 ありますよぉ。イギリスやメキシコにいた頃は僕、切れたこと何回もあります。でっかいヤツがちゃんと試合しなかったから、そのまま控室まで怒鳴り込んでガーッと、エイヤーッとやったことありますけど。アハハ。日本ではレス・ソントンでしょ。あれは（ミスター）高橋さんが焚付けたんですよ。何も試合らしいことしないから頭来ちゃって。じゃあって思ってあのハイキック一発お見舞いしちゃって。

──あー、ありましたよね。あれは強烈に印象残ってますよ。試合終わった後ですよね。

佐山 はい（笑）。ただ、プロレスの中では絶対やっちゃいけないことですよね、ええ。

──瞬間的に切れるんですか？

佐山 瞬間、瞬間です。僕の場合は。ええ。プッツン来るのは瞬間的ですよ。もう言えないこと一杯ありますよ。ウフフ。

──じゃ、普段私生活の中での人間関係の恨みつらみであるとか、鬱憤であるとかが溜まりに溜まってリング上で爆発するってことはないんですね？

佐山 ないです、ないです。瞬間で～す。

──アントニオ猪木という人は私生活での鬱憤をリング上で吐き出すことの名人だったと思うんですよ。それを単なる鬱憤晴らしじゃなくて、最終的には見ている人をも感動させちゃうから凄いんですけど。だから、さっき計らずも小林邦昭戦で「ああ、こういう表現があるのか」と感じたと佐山さんは言いましたけど、その表現ってことで言えば、どんな芸術作品も、自分の生きてきた道程であるとか、生きる中で鬱積したものをその作品にぶつけるということで言えば、リング上でそういったことが起きても僕はおかしくないと思うんですけどね。

佐山 う～ん、猪木さんの場合も、例えばいろんな試合を今までやってきて、後から今言ったようなことがわかってきたと思うんですよ。み～んな後からわかってくる。僕の場合も後からわかってくるんじゃないんですかね。まあ、今、僕はそういうドラマを進行中なわけですよね。そのドラマっていうのもこれはみ～んな後からわかってくるようなことじゃないですか。

──だから、そのドラマをみんながわかる前に佐山さん、アッチコッチに行っちゃうからわかんなくなっちゃうと思うんですよ。来年本格復帰したら、その佐山さん自身の生き方というか、ドラマを見たいなという気がするんですよ。今までのつじつまを合わせるなんていうのは、プロレスにしかできない大河ドラマですよ！ つじつまが合うかどうかは見てみなければわかりませんけど（笑）。

佐山 それでまたフッとどっかいなくなっちゃうかもしれないですけどね（笑）。でも、プロレスとは何なのかっていう課題があって、いまだにわかんない人が多いわけですけども、僕も最近になってやっとわかってきたんですけども、それが。いろんな世界、シューティングとかガチンコの世界とか回って全部わかってきたわけです。だから、僕は選手には、これはエンターテインメントの世界で、だけど芯にはガチンコがあって、その世界でも通じて、そこにプライドを持って、エンターテインメントをやっていこうという形。で、そのプライドを無くすと全てを失うと。それを徹底させますから。そこには客のニーズが入って来ようと何が入って来ようと左右されないですよね。

──ただ、選手たちにエンターテインメントの世界なんだよ、ってことを教えると、簡単にそういう風に割り切っちゃう選手って絶対出てくると思うんですよね。だから、そうさせないようにする手腕ですよね。

佐山 はいはい、編集長の言う通りです。

──今のプロレスはエンターテインメントの世界ですよ、と割り切った選手の方が多いと思うんですよ。だから、爆発力に欠けると思うんです。

佐山 と思いますよ。もうまさにその通りだと思います。それですよ！ 要するに、今のヒートアップし過ぎちゃって、吹き出す寸前の状態を冷やしてあげる。そして、もっと正直なエンジンの状態にしましょうと。だから、まず新しい水を送りましょうと。今のプロレスがわかんないんで、自分の全盛時代はそれなりの時代だったんで、まあ、僕はそこを見つめてるんですけども。まあ、いい時代に戻していきましょうよ。それでこれから作り上げた世界はもっと面白い、底のあるプロレスを見せてあげたいなぁ。

──ぜひ見せてもらいましょう！ ところで、最後に聞いときたいんですが、これからプロレス業界に両足を突っ込むわけですから、人間関係はじめ、佐山さんの嫌いな面倒くさいこととかいろいろ出てくると思うんですよ。それに対する覚悟というのはあるんですか？

佐山 あ、ないで～す（笑）。

──お見事です！（笑）。

〈96年11月9日、六本木アートセンターにて収録〉

プロレスラーとは何か?
What's Pro-wrestler?

Tiger Mask

←特集「プロレスラーとは何か?」はP97へ続く

1997 No.1

聖夜なんか忘れてしまえ!
正月なんて来なくていい!
デジタルなんてどうってことねえよ!
面白いか面白くないか
読んでみたらどうだい!

紙のプロレス・ラディカル

CONTENTS

Art Director
出田さん ●San Ideta

Design two-three
ヒサくん ●Kun Hisa
村松さん ●San Muramatsu
マツ ●Ma-tsu

表紙モデル/ターザン山本
撮影/斉藤ユーリ
スタイリング/中村カタブツ君
ヘア&メイク/山本隆司

本文試合写真提供/平工幸雄

※「RADICAL」は「根源的」という意味でとらえてくれると非常に嬉しいというかね。

ャンダル対談

× 鈴木健

共同体に亀裂!!

、

った人ですよ!」

ザ・スキャ
ターザン山本
ド素人運命
「山本さん、
あなたは
終わっ

取材拒否した後に携帯の番号の変更教えてきたよ

——山本

プロレス界 指名手配 No.001
大道芸人（落武者）
ターザン山本

山本　鈴木健氏という人物は『週刊プロレス』からターザン山本をなきものにした、突発的な原因を作った人ですよ！　要するに10・9があったから。だからもう悪魔の使者と言われてるんですよ〜！

鈴木　俺、天使だよ。

山本　彼を見てくれよ、あの新日本プロレスをその気にさせてしまった男ですよ。新日本プロレスは自民党ですよ。Uインターは要するにさ、村山首相だったわけですよ。自民党と結び付いて。

鈴木　俺、眉毛が長くなってる？

山本　要するにさ、平成のプロレスの歴史を変えた人です。いや、もう平成というか最近のプロレス界の中で一番大きな仕掛けをやってしまったというか。新日本の一人勝ちを許してしまった張本人ですよ！　つまり、許してるどころか、もう後ろから押しまくってる。この人は、昔の社会党的に野党であるべきなのに結びついちゃってる。連立内閣を作ったんだよ。新日本プロレスとUインターとWARですよ。

——あー。その連立政権から追い出された人が山本さん（笑）。

山本　連立政権からなきものにされたのが、『週刊プレロス』だったというね。

鈴木　こういう風に言われちゃうとねえ。こうくるとは思わなかったな。

山本　この屈託のないところが、彼のいいとこなんだよね。自分のやったことの意味を分かってないという（笑）。

——それは脳天気ってことですか（笑）。

山本　だから、普通ね、「脳天気」って言ったら、いい意味はないわけですよ。でも鈴木健氏の脳天気というのは、これはプラスに取ってます。ポジティブに取ってるから。

鈴木　気持ち悪いね、なんかね。

山本　だから鈴木健さんがおもしろいところは、僕が言ったことを全部プラスに取っちゃうんだよなあ。僕がどんなに、キツイことを言ったとしても、鈴木健さんはいい方に取ってしまうという。実に立派な人ですよ。普通ちょっとした言葉で怒るじゃない。この人はないんだよねえ。だからもう今や、腐れ縁のツーカーというやつですよ。

鈴木　そうかなあ（笑）。話が合うんだよ。

山本　それで鈴木健さんの不思議なところはね、新日本プロレスが取材拒否したでしょ。追い打ちして来たんだよね。まさか俺は、信頼してたUインターさんからくるとは思わなかったよ〜。あのダメージは大きかったねえ。

鈴木　ダッハッハッハッハッハ。

——裏切りですね、つまり。

山本　新日本プロレスとWARが取材拒否をやるんだったらわかるよ。恨みもってるから、僕に。この人は恨みもってないんですよ。全然僕に対して恨みもって

Uインター スキャンダル史

U inter

UWFインターナショナル。Uを名乗りながらもえげつないこの団体は、常に爆弾を投下し続けてきた。ファンと業界を裏切り、逆撫でしながらも、一方でファンの夢を次々に実現させてきたのだ。

❶ 高田延彦VSトレバー・バービック実現！

1991.12.22

以前、A猪木が行っていた「格闘技世界一決定戦」という名称をUインターは復活させ、12月22日両国で高田とプロボクシング元WBC世界ヘビー級王者・バービックの一騎打ちが実現。高田のローキックを、バービックは異様に嫌がり、1Rを終わらずして場外へ逃走。プロレスファンの溜飲を下げると同時に、その意外な結末はUインターのスキャンダラスな歴史の幕開けともなった。

ターザン山本×鈴木健

スキャンダルは作るもんじゃなく起こるもんだよ
——鈴木

プロレス界 指名手配 No.002
UWFインター代表
鈴木 健

ないんだから。週プロにだって何もないんだよ。

山本　週プロにだって恨みもってないんだから。

——普通はジェラシーや怒りが行動の原動力になるんですけどね。

山本　いや普通、このパラドックスは理解できないよ。だから、部下に説得するときに、俺困っちゃったんだよ。部下は怒ったわけよね。それなのに、鈴木健さんは何をやったと思う。

——いったい何をやったんですか、この人は。

山本　取材拒否を通告して来た日に、彼はね、「携帯の電話番号が変わりました、よろしく」って言ってきたんですよ～。

——ガハハハハハハハハハハハハハ。

山本　これにはね、週プロの全編集者が馬鹿負けしたというか、もう頭が破裂したというか、もうボロクソというか、わけわからないというか、大笑いしたというか。取材拒否した後に、自分の携帯電話変わりましたって忠告してくる？　ファックスで。

鈴木　ナハハハハ。

——素晴らしい。鈴木健は素晴らしいですね。

山本　要するに、この人はいったい何なんだという形でみんな言ってたんだけど、俺はそういうのが好きなんですよ。でも普通の人は理解できないよな(笑)。こっちが追い詰められてるときに、なんで携帯の番号を知らせてくるわけ。これで鈴木健さんは勝ったようなもんだよ、週プロに！　ところが彼はそれを計算してないとこが凄いんですよ！　ナチュラルほど強いものはないわけですよ。自然体なんですよ。それでもう僕は、完全にこの取材拒否の件は負けたと思ったわけですよ。新日本は得したよねえ。どう思います？

鈴木　そうだなあ、プロレス界じゃね、ターザンは大先輩で、俺はホントに何も言うことできないね。

山本　それをあんた、取材拒否したら駄目でしょう！

鈴木　ただ、一部の行動を見ててね、これはプロレス界のためにはマイナス部分もあるんではないかと判断して、僕はやったんだけど。ただそれによって、山本さんは負けないだろうなと思ってたしね。辞めたけど多分負けてないと思う。

山本　彼は、言ってることが非常に重層的でおもしろいわけですよ。単に取材拒否したとかされたとか、被害者とか加害者とか、やったやられたとか、もつれたとか殴ったとか、喧嘩したとか抗争したとかいうんじゃないんだよね。

——単純な二元論じゃないわけですね。

山本　単純な対立概念における二元論じ

---

② 高田延彦、ハイキックで北尾光司をKO！

1992.10.23

〝鉄人〟ルー・テーズ氏いわく「真の世界王座」を賭け、難敵ゲーリー・オブライトと闘った高田は、見事にこれを退け、当時はプロレスの天敵と言われた元横綱の北尾光司と武道館で激突。試合直前までルールで揉めた世紀の一戦は、高田がハイキック一発でKO勝利という劇的な幕切れとなり、「最強」の名に恥じないその闘いぶりは、ファンを狂喜乱舞させた。

③ 〝鉄人〟ルー・テーズが対戦要望書を新日本に持参。高田が蝶野の発言を受け挑戦状!!

1992.10.26

Uインターの勢いは止まることを知らず、次の標的は新日本へと移項。雑誌誌上での蝶野正洋の「高田さんと闘いたい」発言を受け、北尾戦の3日後にテーズ氏が新日本事務所を訪問。が、対決実現には至らず。後日、Uインター側から公開された「心外な」新日本の条件は①大晦日に厳流島で挑戦者決定バトルロイヤル②リスク料として3千万円を支払う、だった。

やないんですよ、許せちゃうというかね。うまく丸め込まれちゃうんだよ。わけのわからん人ですよ。

——プロレスという世界は基本的に、受け取るほうの芯にスキャンダルというものがある、と村松友視さんは言ったんですよ。猪木さんは自分がスキャンダルの渦中にいながらも、「スキャンダルを経営に結び付けられない経営者は失格だ！」と言ったわけですよ。つまり簡単に言うと「プロレスはスキャンダルだ」と、この二人は言ってるわけですよね。

山本　だから鈴木健氏が取材拒否したということをまともに考えたら、新日本と連帯でやったから腹立つよね。でもそれを一つの事件というか、スキャンダルとしたならば、「まあしょうがねえか。これを一つのバネにしてプラスに転化していこう」というのが、スキャンダルの原理じゃないといけない。それは僕にもあるし、鈴木健さんもある。

鈴木　スキャンダルっていうのは作ろうと思って作るものじゃなくて、自分の周りもそうだけど、起き続けるものだろうね。スキャンダルはこれからも。

山本　いや見てくださいよ、Uインターの歴史を。バービックですよ！　北尾ですよ！　一億円事件だよ～!!　もうぜ～んぶスキャンダルですよ。

鈴木　あったよね。

山本　ハッキリ言って、スキャンダルというものは結局何かというと、『綱渡り』ということなんですよ！　一歩間違えばもう危ないと。ギリギリの綱渡りをしながら、それを結局最後は大きなプラスに変えていくということですね。つまりもの凄い綱渡りをするわけですよ。ビルとビルの間に綱を張って、棒を持って歩いてくようなもんなんだよ。

——それは凄い定義だな。スキャンダルは綱渡りですか！

山本　そう。スキャンダルはとてつもない綱渡りなんですよ。敢えて猪木さんはそれをいつも本能的にやってる。こちらの方は意識的にやってるわけ。つまり綱渡りをして、つじつまを最後に合わせようとするのが猪木さんであり、Uインターだったんですよ。最後につじつまが合えば、例えスキャンダルであろうとセンセーションですよ。必ずつじつまを合わせればいいんですよ。だから猪木さんの「どーってことねえよ」というのは、つじつまを合わせられるから「どーってことねえよ」と言ってる。でも綱渡りなんだよね、つじつまを合わせるまでは。

スキャンダルとは綱渡りということなんですよ！　——山本

——じゃあ鈴木健の脳天気さは、猪木さんの「どーってことねえよ」という部分に通じるわけですか。

山本　『脳天気』と『どーってことねえよ』はイコールですよ！

鈴木　そうかなあ。猪木さんと俺が？

山本　だってもう、すべて見切り発車じゃない。

鈴木　でも、脳天気って言われるかもしれないけど、一億円事件の二つは実現してるよね。あと三つだよね。橋本戦、天龍戦と。

山本　だからさ、つじつまの五分の二はもう合ってるわけですよ。

鈴木　残すところ、三沢光晴と前田日明

---

④ ベイダー参戦、7月にはハシミコフも来襲

1993.2

93年2月、日本武道館で、新日本のトップ外国人だったベイダーから「近日中に参戦したい」旨が発表された。これに対し、新日本が契約違反を主張し揉めたが、5月6日の日本武道館で中野龍雄を相手にTKO勝利と勇躍登場。続く7月18日の日本武道館では、高田の初防衛戦の相手として、こちらも元新日本の外国人選手、サルマン・ハシミコフが挑戦したが、高田がこれを退けた。

⑤ 現ナマ1億円を並べ、トーナメント開催を発表

1994.2.15

高田は、93年12月5日の神宮球場でベイダーの挑戦を退け、年を越した。94年に入ると、記者会見の席上で、鈴木健氏が現金1億円を机の上に積み上げ、トーナメントの開催を発表。新日本、全日本など他団体のトップ5人の選手にも招待状を発送したものの、結局、誰も他団体からの参加はないままトーナメントは開幕。8月18日の日本武道館でベイダーが高田を破り優勝。雪辱を果たした。

と船木誠勝。前々からいつも言ってるけど、ファンの延長線上の気持ちをいつも持ってるからね。見たいものを見せると。

山本 いま言ったことが鈴木健氏のアイデンティティーを一番よく表してる。自分が見たいものをやりたい、ファンが望むものをやりたいと。要するにプロじゃない。いわゆるアマなんですよ！

――なるほど。ド素人ってことですね。

山本 ド素人パワー！ ド素人エネルギーですよ!!

――やっぱり、いつの時代も世の中を変えるのはド素人ってことですね（笑）。

山本 ド素人が根にあって、それが原動力になっていこうとしてるんだよね。

鈴木 素人とプロとの違いっていうのはどこかっていったら、素人は別に稼がなくていい。だからお金はいらない。だから今、素人と言われて、「ああそうかもな」と思った。

山本 だけど業界の人は、鈴木健氏は策略家だとか、政略家とか、戦術家とか、策略家とか、新間（寿）さんの二代目とか、そういうフィルターで見てしまうんだよ。違うんですよ。根本はもう、単純なド素人なんだよ。

――馬場さんに噛み付いた当時の猪木さん、猪木さんに噛み付いた前田日明。プロレス界を変えてきたのは、プロレスがド下手のド素人だったわけですよ。

鈴木 俺は、山本さんの言う素人っていう意味なら、最後まで素人を守りたいな。

山本 だから週プロもド素人なんですよ。ド素人的な視点に立って雑誌を作ってるだけ。それとは反対に、実に業界的な知恵で生きてるのが『ゴング』です。そのド素人の感覚からすると、鈴木さんの考えている生き方が僕にはよくわかる。つまりド素人運命共同体ですよ！

――ド素人運命共同体！（笑）。

山本 相通じるものがあるわけですよ、根っこで。でもこの人はゴングにすぐ情報を流すんだよ、先に（笑）。

鈴木 アハハ。いやそんなことないですよ。ゴングが撮ったグラビアが、週プロの表紙になったことがあるじゃない。

一億円事件のうち、二は実現してるわけだよね ――鈴木

山本 ゴングでスタジオ撮影をやった写真をチョロッとうちに回して、これ使ってくださいと言うんですよ。ヒドイですよ、この人は。

鈴木 また山本さんはそれを受けちゃうという。

山本 やっちゃうんだよ、この人。普通、できないでしょう、それは。倫理感そのものがないわけよ。そこにあるものを利用してそのままやろうと。ゴングさんもよければ、週プロもいいじゃないかと。ド裏切りですよ、これは（笑）。

――スキャンダルっていうのは高田延彦にはないじゃないですか。鈴木健が全部、担ってるわけですよね、それはどういうことですか。

山本 レスラーはスターだからね。結局それが一番いい関係なんです。つまり猪木さんにとって新間さん、馬場さんにとって元子さん。このヒールとベビーフェイスが、絶妙な二人三脚をすることがコツなんですよ。

――ヒールとベビーフェイスの二人三脚の綱渡りなわけです

⑥ 打倒グレイシー柔術を宣言

1994.10.8

「94プロレスリング・ワールドトーナメント」を終えたUインターは新たなる敵を模索しはじめた。そんな中、10月8日に日本武道館のリング上で鈴木健取締役が「ケンカルール、金網デスマッチ、時間無制限によるヒクソン・グレイシーとの一騎打ち!!」をぶち上げたから、さあタイヘン！ 当時、世界最強だと騒がれ始めたグレイシー潰し宣言に場内は蜂の巣をつついたような騒ぎになった。

⑦ 安生洋二、道場破りを敢行も返り討ちに！

1994.12

「グレイシー潰し」を宣言したUインターは再三、ヒクソン側と連絡をとったがラチがあかず、12月7日、ついに先兵として、安生洋二が米国にあるヒクソンの道場に、抜き打ち的に殴り込みをかけた。しかし、結果は見事なまでに無惨な返り討ち！ この大事件にマスコミ、ファンは騒然となった。この後、安生自身は何度かヒクソンと接触をもったが、高田戦はいまだに実現する気配すらない。

ね。

山本　そう、綱渡り。だから彼は悪者になってもいい。なに言われてもいいんですよ。脳天気とか、アホとか、馬鹿とか、チョンとか、いろんなこと言われても。

鈴木　それ言ってんのは山本さんだけ。

山本　最近はフロントもエエカッコして、ベビーフェイスに成り下がるわけよ。永島（勝司）さんなんかそうじゃない。

鈴木　なんかさ、山本さんの講演会に来てるみたいだね（笑）。

――ガハハハ。この人はすぐ一人勝ちしようとしますから。

山本　でも鈴木さんも、うちはリスクを背負って勝負してるって自負はあるでしょう。バービックにしろ北尾にしろ。

鈴木　リスクはいつも背負ってる。ハイリスク・ローリターン。このハイリスクはすべてファンに帰りつくハイリターンをしてる。これはほんと自信をもって言えるわけ。

山本　だから一億円トーナメントを提唱したときに、みんなどういう反応したか。「何だこの世界をわかってない。できっこないだろう、わかってねえな」とみんな思ってたわけですよ。みんなが「わかってねえな」ということを、鈴木さんは真剣にやったわけですよ。

鈴木　でも100人のファンがいたら100人がUWFのやり方についてくるよ。

山本　やるにしても根回ししなさいとか言われますよ。

鈴木　なんでそういうこと言うのかわからない。ただ挑戦された選手のファンは反発してるところはある。ただ反発してた人達も、実現したら一番最初にお金払って見に来るよ。

俺は山本さんの言う素人なら、素人を守りたいな ――鈴木

山本　だから今までの業界の常識を崩したんだよね、あの一億円は。あるいは新しい所にチャレンジしたということなんだよ。そういう二面性があったわけ。今までのプロレス団体の中では異端ですよね。でも実現しなかったということはやっぱり「わかってねえな」という空気の方が強かったということですよ。でもね、この世界には「わかってねえな」っていう奴が出てこなきゃダメ。だから鈴木さんは「わかってねえな」という人達にクサビを打ったわけですよ。いろんなことを実現させてきたわけだから。

鈴木　やはりそれは積み重ねでさ。結果的にね。有言実行は大事なこと。実現できない奴は何も言う権利ないし、実現できた奴が大将だよね。今まで言った言葉、これからも言う言葉は、これは100パーセント実現させようと思うよね。

山本　苦しいと思うんだよね。レスラーは、自分の腕を売っていくわけでしょ。でもこの人は団体というのを経営しなきゃいけない経営者。フロントというのはいろんなことしなきゃいけない。その苦

---

⑧ 山崎一夫離脱、フリーとして新日本へ

1995.6

95年に入ると、安生の道場破り失敗に端を発し、それまでプロレス界を我が物顔で歩いていたUインターにも、翳りが見えはじめた。6月の両国大会では、その後選挙に出馬した高田が「ごくごく近い将来引退します」とリング上から発言し物議をかもした。また同時期に、旗揚げからUインターを盛り上げてきた〝山ちゃん〟こと山崎一夫が離脱しフリー宣言。内部に不協和音が鳴り響いた。

⑨ 〝仕掛人〟宮戸優光失脚

1995.秋

旗揚げからUインターのフィクサーとして、舞台裏で活躍し続けた宮戸優光が、いつのまにか姿を消してしまった。10月9日に東京ドームで急遽決定した、新日本との対抗戦でも一時は蝶野正洋との対戦が発表されながら、結局は行われず、消息は闇の中。ある意味で宮戸の仕掛けなくして、Uインターの面白さは考えられなかったのだが。ユーコー、カムバック！　中華鍋を捨てろ！

ターザン山本×鈴木健

労を考えたら、この人は神様ですよ。

鈴木 でもそれはねえ、俺は楽しいから。

山本 考えたら、Uインターっておもしろい会社なんだよねえ。山崎選手や田村選手がいなくなるとか、営業が抜けていったりとか物凄く先細りしてんだよな。そうしたら反比例してこの人がグーッと上がっていってるんだよ。この鈴木健さんってタフですよ。普通は絶望するよ。

鈴木 でも選手の離脱にしても、新しい対戦カードが他で生まれるわけだよね。タムちゃん（田村潔司）もUWFの代表としてリングスに上がって、みんなやっつけちゃったよね。ヴォルク・ハンには負けたけど、そういう実現できそうもなかったことがどんどん実現できてるわけだから。ゲーリー・オブライトもそう。これを俺はよしとしてね、全部。

山本 普通考えたら、選手が抜けたら腹立つのに、この人はプラスに考えちゃうんだよなあ。マット界全体を活性化すればいいじゃないかと思っちゃうんだよ。一つのダメージじゃないけども尾を引きますよ。この人は尾を引かないんだよ。この考えの結果、この人は何をしたかというと、Uインターという「団体の概念」を捨てたんだよね。ここが偉い。

鈴木 どこまでできるかわからないけど、本当の俺の理想っていうのは全部統一だね、全団体統一。

――ブチ上げましたね！

山本 この人もまた食いついて離さないんだよ。9月のUインターの神宮大会なんか、もう根負けしたんだよ、さすがの馬場さんが。

――馬場さんが根負け（笑）。

山本 もうひどいらしいよ、聞いた話によると。馬場さんも、ひねもすのたり、みたいな人なんです。だから結論をそんなに早く出す人じゃない。だけどこの人は、馬場さんの家にも電話して徹底的にやったらしいんですよ。馬場さんにそんなことした人は今までいないんだから。

――失礼ですねえ(笑)。ファンのためとかなんとか言いながら、鈴木さんの場合は自分のやりたいことをやってるだけなんですよね。

山本 うん、そう。真一文字に行くんだからこれは凄いと思った！ こういう人が歴史を切り開くと思った。それで神宮に川田選手が来て、物凄いインパクトがあったもんね。今年のマット界の一番の事件だね、あれは。1年に1回凄いことやるから。悲しいかな、それを正当に評価されないのがUインターの悲劇なんです(笑)。そういった意味では宮戸、安生、鈴木健というトリオは人徳がなかったんだよなあ。

――人徳がないのに、よくいろいろな人間関係ができますね。

彼は二代目新間じゃなく単純にド素人なんですよ ――山本

---

⑩ 高田延彦、新日本の武藤敬司に敗れる！

1995.10.9

高田と新日本の首領・長州の間で電撃的に決定した、両団体の対抗戦。ドームの観客動員記録を塗り替え、プロレスファン以外をも巻き込んで盛り上がった対抗戦のメインは、武藤のIWGP王座に高田が挑戦した一戦。1月のリマッチでは勝利したものの、高田はこの一戦に敗れたことによって最強神話、「U」の概念を失い、長州に文字通りクソをブッかけられた形となった。

⑪ 安生、ゴールデン・カップス結成

1996.2

10月9日のドームでは長州力に完敗した安生洋二だったが、ヒクソンへの道場破り敢行時からの「200％勝てる」発言が対長州戦前にも話題を呼び、"200％男"として人気が爆発していた。96年になるとかねてから念願だった「ゴールデン・カップス」を高山、山本と結成。UWFイズムをまったく忘れたようなファイトで、現在も団体間をスイスイと泳ぎ続けているところが安生らしい。

山本　偏見がないから。業界的な自己規制という概念がないから突っ込んでいけるわけですよ。

――馬鹿正直なわけだ。

山本　大バカショージキですよ。それだけもの凄い純粋なんですよ。業界では「これとこれは仲が悪いからできない」とかあるじゃない。この人思わないんだもん。逆に「やったらおもしろいんじゃないの」と思うもん。ね、鈴木さん？

鈴木　ああ、それはあるね。

山本　猪木さんだって人徳ないからね、一般的に。本当はあの人は、物凄く真面目な人なんだけどさ。それと同じで、イメージ的に人徳がないという感じがするUインターというのはおもしろい団体だよ。いい人じゃなかったところにUインターの良さがあるわけですよ。だから敢えて綱渡り的なものを、スキャンダル的なものをどんどんやってきたわけよ。

鈴木　俺は悪じゃないよ、天使だよ。

山本　だから、逆に人徳というのは悪なんですよぉぉぉ、この世界ではぁぁぁ。

――興奮しないでください（笑）。

山本　だから猪木さんがプロレス道と言ったら終わりなんですよ。人徳があると思われてしまったら、プロレスというものは堕落したということなんだよ。スキャンダルの逆なんだよ。人徳なんて一言も言わせないで、スキャンダルのダイナミズムをぶつけることが俺たちの仕事だよね。Uインターはそれをやってきたんだよ。

鈴木　俺たちの仕事、ということは、ターザン山本は「ING」だね。ノー・フィニッシュ。まだ終わってないということね。

山本　つまり綺麗ごとでは俺たちの仕事は駄目なんだよなあ。鈴木健さんはフロントでプロレスをしてるんだね。プロレスラーなんですよ、彼は。そんなフロントいます？　他の団体で。みんなレスラーの言いなりじゃないの。主体性ないじゃないの。彼のようにフロントやりながらプロレスラー的なムードだったのが新間さん。他にいる？　いないでしょ。

鈴木　参ったなあ、ここまで言われたら。俺、考えてることがないこともないんだよね。

――何ですか、何かまだ隠し球があるんですか？

鈴木　いえいえ、今日は伏せておこうっと（笑）。

――スキャンダラスな人だなあ（笑）。

真一文字に行くからさ、馬場さんも根負けですよ
――山本

山本　いや、この人が恐ろしいのは、何をしでかすかわからないというとこ。物凄くこちらから見たら幼稚なことが、物凄いパワーになったりするんだよ。

鈴木　ターザンは何をやろうとしてるの？

山本　僕？

鈴木　ターザンは今までねえ、鎖につながれてた。でも鎖につながれたまんまじゃ、一生涯駄目ターザンだよ。

山本　アチャ～。

――ガハハハハ。駄目ターザン！

鈴木　いままでは偽物のターザン。これからは、本ターザンが暴れる。どう猛なターザンの鎖を切っちゃったんだよ、俺のせいで。今まではどうしても押さえてる部分があったと思う。本質を出す、多分これからね。

山本　よくわかるね。

――今まで所属してた会社のビジネスを背負ってましたからね、この野獣のような人が（笑）。

鈴木　それじゃ駄目だよ。ビジネスを背負ってたら成功しないよ。うちのUWFの選手もビジネス以外のものを、全選手持ってる。新弟子からフロントから全部持ってるよ。フロントなんかみんな自分

---

⑫

1996.6

田村潔司離脱、その後、リングスへ移籍！

Uインターが新日本との対抗戦に突き進む中、ひとり対戦を拒否し続けた田村潔司は、6月になると前田日明率いるリングスに移籍を果たした。前年の7月にはリング上から高田に対して「真剣勝負してください」と謎の懇願をした田村だったが、それも実現しないままの離脱となった。また、田村の前には中野龍雄も離脱、フリー宣言し、Uインター内部にも再編成の波が押し寄せた。

⑬

1996.9.11

神宮大会に全日本の川田利明が参戦!!

マット界において、それまで頑なに鎖国政策を取り続けていた全日本プロレスにUインターは開国を迫り、9月11日、神宮球場に参戦させることに成功させた。川田利明VS高山善廣の一戦はUイズムと全日イズムの激突として96年最高の話題を呼んだ。また、同日、高田と天龍源一郎の初の一騎打ちも行われ、高田が見事に勝利。「最強神話」の復権に向けて、新たなスタートを切った。

の財産、全部突っ込んだっていいと思ってるよ。

山本 今、俺がガクッときたのは、俺ってやっぱりみんなから見ればね、非常にフライングしていてエンジン全開にしていて、ガーッとやってるように思われてるわけよ。でもホントは、俺はブレーキかけてるんだよな。よく見破ったな。全開してないんだよ。週プロやってた時にはさ。

鈴木 かけざるをえなかった状況でしょう。いまはかける必要いらないね、ノーブレーキ。

山本 そう、かける必要ないんだもん。

鈴木 ここから何をするか。

山本 よく見破ったなあ。鈴木健恐るべしですよ!

山本 でもね、結果的にさあ、周りの人がおもしろがればいいんだよ。スキャンダルは悪かもしれないよ。でも、ワイワイガヤガヤ楽しめばいいんだよな。もともと毒なんだから、それは。

鈴木 今までの週プロの中にいたターザン山本の毒は俺には甘かったな。だから、俺が山本さんに「これ違うんじゃないの?」って電話したときも、わかってるの、テーマはね。ただファンはこれじゃわかんないよって。

山本 団体の立場としてはそう言わなきゃいかんもんね。

鈴木 そう、言わなきゃいけないでしょ。だからファンに、もうちょっとわかりやすい言葉で言ってと。

山本 いいねえ。これこそ僕たちという存在と、レスラーという存在と、マスコミという存在の狭間に立った綱渡りですよ。痺れたねぇ。お互いの狭間に立って、よくお互いを見極めて、理解しあっているということはいいことだね。心臓を掴まれたね、今日は。俺よりも鈴木健さんの方が理解されてるような気がして。

鈴木 いや、そんなことない。

山本 僕の100倍ぐらい理解されてない?

鈴木 理解されない運命ですね。

山本 ガハハハ。いかがわしいだけだ。

鈴木 俺は理解されなくていいんだよ、ホントに。五人の人に心の中から理解されるだけで俺はいい。ただ山本さんはやっぱり……結構つらかったね。

山本 いや、僕はなんにも。

鈴木 強がり言ってるけど。

山本 いやいや、なんにもない。

鈴木 ただ一回きりの人生だからいろんなことがあった方が勝ちだよ。

山本 鈴木さん、いいこと言ったね。鈴木健、恐るべしだ。目に見えない怪物かもわからん。

鈴木 それは背がちっちゃいということですか?

——ガハハハ、自分で言ってる。

山本 ギャハハハ、凄いこと言ったね。

——さ、じゃあこの対談を締めていただきましょう。

山本 いや背の低い人というのは頑張るんだよな。ものすごく頑張って生きるんだよなあ。

——だから、締めてください(笑)。

山本 うん。スキャンダルっていうのは、のっぴきならない状況になった時とか、切羽詰まった時に起こるんだよ。馬場さんはのっぴきならない状況にないからスキャンダルがないんだよ(笑)。

——でも、いつものっぴきならない状況にないっていうのがスキャンダルですよね、馬場さんの場合は。

山本 そう、起こらないんですよ。馬場さんは。だから、インターものっぴきならない状況が起きたときにまた何かやるんですよ。

鈴木 安定してても、それはねえ、起こっちゃうと思う。それは自然と起こってくるよ。スキャンダルは自然と起こっちゃうと思うんだよね、これからも。でもさ、さっきの話じゃないけど、鎖に繋がれたままのターザンじゃ、「いやー、山本さん、あなたは終わった人ですよ」っていうしかないもんね。クサビがもうないんだからね。好きにやっていいと思う。

山本 アチャ〜。まいったね、今日は。一本取られたよ(笑)。

——あ、そうだ。これはオフレコにしますけどね、東京プロレスのオーナーの石沢さんとすごく気が合うそうなんですよ、鈴木さんは。その気が合う原因なんだかわかります? 山本さん。

山本 なんだろうねえ。

——二人とも元暴走族だったから。そんな理由があるか(笑)。

鈴木 これはオフレコにしなくていい。これは全国の暴走族ファンに贈る。

——贈らなくていいですよ、いません暴走族ファンなんて(笑)。

鈴木 いや、ホントに贈るよ。

山本 ここまで脳天気だと気持ちいいねえ(笑)。

〈96年11月5日・東京六本木中国飯店にて収録。司会進行=山口昇〉

鎖に繋がれたままじゃ『一生涯ダメターザン』だよね

——鈴木

どうなる、サムライ！　モ～、開局！？

街中がクリスマスに向かって浮かれている今日この頃、
みなさまいかがお過ごしでしょうか？
クリスマスを前にして、
コタツで寝っ転がってこんな雑誌を読んでる君、
そんなことじゃいつまでたっても女は寄りつきません。
あ、余計なお世話ですね。
余計なお世話と言えば、頼みもしないのに
『紙プロ』がサムライ！のためにページを割いてくれました。
ありがたくて涙が出ます。グッスン！
それでは、世界が平和でありますように、最強っ！

教えて、偉い人！サムライ！は何をすべきか山口編集長が激白！

取材・構成／井上きびだんご

――山口さん、はじめまして。『ファイティング・ティービー・サムライ！』の井上きびだんごと申します。今日はよろしくお願いします。

山口　きびだんご？　君は変わった名前をしているね。髪型も変わってるし。その髪型はなんて言うの？

――いや、僕もちょっとわからないんです。

山口　何でだよ（笑）。まあ、いいや。で、**サムライ！**のきびだんごが、いったい私に何の用かな？

――実はですね、今日はさしずめインテリの山口さんに「24時間プロレス・格闘技専門チャンネル・**サムライ！**とは何か？」を定義していただこうと思ってきたんですよ。

山口　ちょっと待て。**サムライ！**って、お前の会社だろ？　何で俺がそれを定義しなきゃいけないんだよ。

――そうですよね。でもまあ、そんな細かいことは置いといて、『紙プロ』的には、一応、**サムライ！**に興味はおありなんですよね？

山口　全然ないな。

――あっ、ない？　そうですか、困ったなぁ。**サムライ！**の持つ二面性とかについて熱く語って欲しいんだけどなー。意外としょっぱい試合をするな、この人。

山口　何をボソボソ言ってるんだよ。で、**サムライ！**では何をやるんだよ！

ヘンな髪型のサムライ！のパシリ相手に、マスクをかぶってごきげんにインタビューに応える偉大なる『紙プロ』編集長様。

サムライ！のイメージ・キャラクターに惜しくも落選した松林暴れ牛（デラックス仕様）

驚愕！『ジャズライフ』編集部内での**サムライ！**の認知度はゼロ！

あの人はいま？　原タコヤキ君

『ニュースの鬼』のキャスター・岳美（女子高生）に合コンを持ちかけて断られるタコヤキ君。見え透いたヨイショを駆使するニセ大阪人として、業界内での人気急上昇中も、サムライ！ではインチキ野郎として煙たがられている。

早くもサムライ！加入者に幸運が！

根釜隆光さん（25歳・サービス業）

某出版社に入社以来、バイクでタクシーのドアに激突するなど、ついてないことだらけでしたが、サムライ！に加入した途端、半年前に別れた可愛い彼女が僕の元に帰ってきました。デヘヘヘ。

―ズバリ言って、24時間、プロレスと格闘技に関することなら何でもやります。例えば、試合中継やニュース、アニメに映画、とにかく何でもです。

山口　全然見たくねえな。

―アニメ版『空手バカ一代』とかも完全放映するんですけど、いいでしょう？

山口　俺、ビデオで持ってるもん。

―そうですか。わかりました！　もう**サムライ！**の話はやめましょうか。何か他の話をしましょう。

山口　おいおい、いいのか、それで！（笑）。

―ええ、いいです。ところで山口さん、このあいだ渡米されたんですよね。どうでしたか、向こうは？

山口　お前、〝泥レス〟って知ってるか？

―えっ、泥レスって、泥んこになってレスリングをする、あの泥レス？

山口　そうそう。泥レスを見て来たんだよ。場所はロサ〜ンジェルス！　お前、あっちの泥レスはいいぞ。日本のストリッパーなんて比じゃねえんだよ。あのヘッド・シザースなんて喰らったらもう、お前！（ジュル）。

―ああ、それは非常に楽しそうで良かったっすね。あっ、**サムライ！**ではもちろん、その『泥レス中継』もやるんですよ。

山口　嘘つけ、この野郎！（笑）。

―いえ、やります。いま決めました。山口さんのためにやってあげます！

山口　え〜っ、それは見たいなあ。「ハリウッド・トロピカーナ」から中継したらな、**サムライ！**は絶対、爆発的に大人気チャンネルになると思うよ。

―わかりました。ちょっといま**サムライ！**について喋っちゃいましたね。やめときましょう。で、アメリカの全体的な印象はどうでした？

山口　アメリカっていうのはね、すべてをハードから作っていく世界なんだよ。要するに〝ハリボテ〟だな。

―おっ！　アメリカについての定義ですね。

山口　アメリカはな、ハリボテに命を懸けてる国なんだよ。

―ふむ、ふむ。

山口　そのハリボテに命を懸けてるうちに、だんだんソフトが育っていくっていうやり方なんだよ。だからまず、**サムライ！**にもハリボテが必要だな。何かこう、でっかい目玉がな。

―ほ〜う、例えば？

山口　UWF三派を東京ドームに結集させるとかな。やっぱり映像なんだからさ、活字じゃないんだから。ハリボテを作んなきゃいけない。

―ハハハ、なるほど……（笑）。

山口　でね、向こうでユニバーサル・スタジオに行ったんだよ。あのハリウッドのユニバーサル映画の、要はテーマ・パークみたいなもんだ。

―みたいじゃなくて、テーマ・パークです（笑）。

山口　その、何だ、『キング・コング』とかさ、『ジョーズ』とかさ、『バック・トゥ・ザ・フューチャー』なんかのブースがいっぱいあるんだよ。で、ブースに入るとキング・コングがブワァーッて騒いでたりしてさ、映画のセットと同じなわけだ。

―セットだからハリボテなんですよね（笑）。

山口　まあ、とにかくハリボテなんだよ。ハリボテって一発で分かるんだけど、そのスケールに圧倒されるわけだ。つまり、スケールとハリボテの関係というのはな、イコールなわけだ。

―イコール？

山口　イコールじゃねえや（笑）。密接な関係にあるんだよ。イコールじゃ困っちゃうよなあ、お前（笑）。密接な関係を保ちつつな、しかも観客を楽しませる。ハリボテと分かっていながら、楽しんでしまう観客の心理を研究しなきゃいけないね、**サムライ！**は。

―はっは〜ん、なるほど。山口さんは、その観客の心理というのは、研究済みなんですか？

山口　当たり前だよ！　俺はそれをさんざん『紙プロ』で試したんだから。

―さっすがあ（笑）。

山口　だから、前にいた「原タコヤキ君」なんてのは究極のハリボテだろ？　スケールはちっちゃいけどな（笑）。手足もちっちゃいけどな。スケールのでっかいハリボテを作ることが**サムライ！**の課題ってわけだ。以上！

―も〜う、なんだ、ちゃんと喋れるじゃないですかあ。

山口　お前、俺を誰だと思ってるんだよ！（怒）。

―あっ、す、す、すいません。

山口　だから、まずはUWF三派を東京ドームに結集させて、メインは高田VSタイソン。セミに前田VSヒクソン！　これだね。

―はあ……。なんとなく**サムライ！**の進むべき方向性が見えてきたような気がします。どうもありがとうございました。

ついに明かされた、ファイティング・ティービー・サムライ!FIGHTING TV SAMURAI!の全貌!!

FIGHTING TV SAMURAI!は、日本初のデジタル衛星多チャンネル放送・Perfec TV!(パーフェクティービー)でご覧になれます。

12月31日まで開局無料視聴キャンペーン中!

●FIGHTING TV SAMURAI!の視聴加入に関するお問い合わせは下記まで。
グローバル衛星放送株式会社 TEL. 03-3263-9750
FIGHTING TV SAMURAI!事務局 受付時間(月)~(金)10:00~18:00

時	月	火	水	木	金	土	日
4–5	00 プロレス中継	00 WCW PRO INTERNATIONAL 00 ビバ!ルチャ・リブレ!	00 女子プロレス中継	00 オーケンのトーキング・ブルース・リー 00 プロレス学術講座 30 アントニオ猪木アワー	00 サムライ アンコール中継	00 ワールドプロレスリング 00 プロレス・スーパースター列伝	00 格闘技中継
6	00 カリフラワー アレイ・フィルム	00 サムライ!インフォメーション 30 歌う選手名鑑					00 全日本プロレス セレクション
7	00 ニュースの鬼						
8–9	00 インフォメーション 30 歌う選手名鑑 00 古流武芸帖	おはようシネマ館 プロレス・格闘技をテーマにした映画					00 インフォメーション 30 歌う選手名鑑 00 BOXマニア
10–11	00 週間特集「サムライパンチ」						
0–1	00 プロレス中継	00 WCW PRO INTERNATIONAL 00 ビバ!ルチャ・リブレ!	00 女子プロレス中継	00 オーケンのトーキング・ブルース・リー 00 プロレス学術講座 30 アントニオ猪木アワー	00 サムライ アンコール中継	00 ワールドプロレスリング 00 プロレス・スーパースター列伝	00 格闘技中継
2	00 カリフラワー アレイ・フィルム	00 闘いのワンダーランド					00 全日本プロレス セレクション
3	00 ニュースの鬼						
4	00 インフォメーション 30 歌う選手名鑑						
5	**円谷格闘劇場** 12月はジョージ高野がアクションシーンを演じる『プロレスの星・アステカイザー』 **梶原一騎人生劇場** 梶原一騎原作のアニメ、ドラマを続々放映。12月は『空手バカ一代』					**BOXマニア** ボクシングの名勝負満載	**古流武芸帖** 様々な古武道を紹介
6–7	**サムライ!創成期の歴史の証人となれ!** **週間特集「サムライパンチ」** サムライ!では週替わりで一つのテーマについて深く掘り下げ、検証する。12月のテーマは「梶原一騎」「力道山」「第一次UWF」「大山倍達」を予定。毎日2時間、プロレス・格闘技を考えることが日課となる						
8–9	**WCW PRO INTERNATIONAL** **ビバ!ルチャリブレ**	**女子プロレス中継**	**大槻ケンヂのトーキング・ブルース・リー** ターザン山本の**プロレス学術講座** アントニオ猪木アワー**「ギブアップまで待ってろ!」**	**サムライアンコール中継**	**ワールド・プロレスリング** **プロレス・スーパースター列伝**	**格闘技中継**	**プロレス中継**
10	**闘いのワンダーランド** 昭和48年以降の新日本プロレスの試合中継を放映。一連の猪木の格闘技戦はもとより、坂口、藤波、長州……、平成の世に「過激なプロレス」が復活する					**全日本プロレスセレクション** 全日本プロレス レトロ映像	**カリフラワーアレイ・フィルム** 伝説の海外 レトロ映像
11	**ニュースの鬼** プロレス・格闘技ニュース・ワイド。毎日、刻々と変わるマット界のニュースや、あらゆる情報が盛りだくさん。その日に行われた試合結果もすべて速報で知ることができる生情報番組						
0	**サムライ・インフォメーション** 全団体の興行告知 **歌う選手名鑑**						
1–2	00 週間特集「サムライパンチ」						
3	00 円谷格闘劇場 30 梶原一騎人生劇場					00 BOXマニア	00 古流武芸帖

ただいま絶賛放映中!!

FIGHTING TV SAMURAI!

サムライ!を見るには?

電気店、量販店等で、パーフェクTV!専用デジタルチューナーとアンテナをお買い求めの上、設置してください。
設置後、パーフェクTV!カスタマーセンターに電話をすると仮登録になります。
以後の手続き、ならびにパーフェクTV!に関する詳しいお問い合わせは、パーフェクTV!カスタマーセンターへ。

TEL. 03-5802-5550(受付時間9:00~21:00)

プロレスについて考えることは喜びである

——山本隆司——

電撃復活「ザ・マイナーパワー」

私が『週刊プロレス』で連載していた「ザ・マイナーパワー」は毎週私自身が〝興行評論家〟になったつもりでズバズバと言いたいことを書いてきた。

それはイベント全般に関して「もっとどうにかならないのか？ 改革すべきところは改革しろ。そうでないとプロレスの興行は永久にK-1には勝てない」という論調だった。

興行では先輩であるはずのプロレス界が、ハードの面ではK-1に完全に遅れをとってしまったのが実情である。

だが、ずば抜けて凄いレスラーが出現し、凄い試合をやってくれたら、ハードなんか一度に吹っ飛んで「そんなものどうでもいいや！」となってしまうところがプロレスの面白いところでもあるのだ。

つまり、本当の意味で魅力的なスターレスラーがいなかったので、ハードとしての興行を論ずるしかなかった。「ザ・マイナーパワー」は今から思うと非常に不幸な連載記事だったといえるかもしれない。

さて、今のマット界をどうとらえるか？

その前にプロレスは次の三つによって成り立っていることを指摘しておきたい。

「やる人」（プロレスラー）
「伝える人」（マスコミ）
「見る人」（観客またはファン）

▲「見る人」天国になったら「やる人」にはたまらない！前田日明のデリケートで鋭い感性が村松批判に走らせたのだ

新章＝時代の中のプロレス〈第1回〉

日本のプロレスの歴史はすべてこの三つの力関係の変遷によって説明できる。例えば力道山は史上最高のワンマンレスラーだったことで、レスラーとマスコミとファンを理屈抜きにハッピーにさせた。それは、実に幸福な時代だったといえる。

問題は現代のプロレス界がどういう状況にあるかである。そこで私は次の五つの札をキーワードとしてあげてみたい。

①天国
②地獄
③ノー天気
④喜び
⑤憂うつ

果たして「やる人」「伝える人」「見る人」はどの札に属しているのか？「やる人」は今、天国なのか地獄なのか、それともノー天気なのか、喜びなのか、はたまた憂うつなのかということである。

一番ベストなケースは「やる人」と「伝える人」と「見る人」がいずれも天国であれば最高なのだが、現実はどうもそうではない。「やる人」が地獄だったり、憂うつな感じだったり、「伝える人」がノー天気で喜びを感じていたりといった状態にある。

どうやら現代は「やる人」が受難の時代というか、五つの札の中で最も悪い札をつかまされているような気がする。

思えば今から16年前の昭和55年の春、まだひとりのプロレスファンだった村松友視氏が『私、プロレスの味方です』という本を出し、一種のベストセラーになった。

あの本の真意はどこにあったかというとプロレスにおいては「見る人」が天国の状態にあることを高らかに宣言していたことにある。当時、前田日明が『私、プロレスの味方です』に鋭く噛みついたように「やる人」にとっては、あの本は〝敵〟であり、また〝禁断の書〟でもあった。

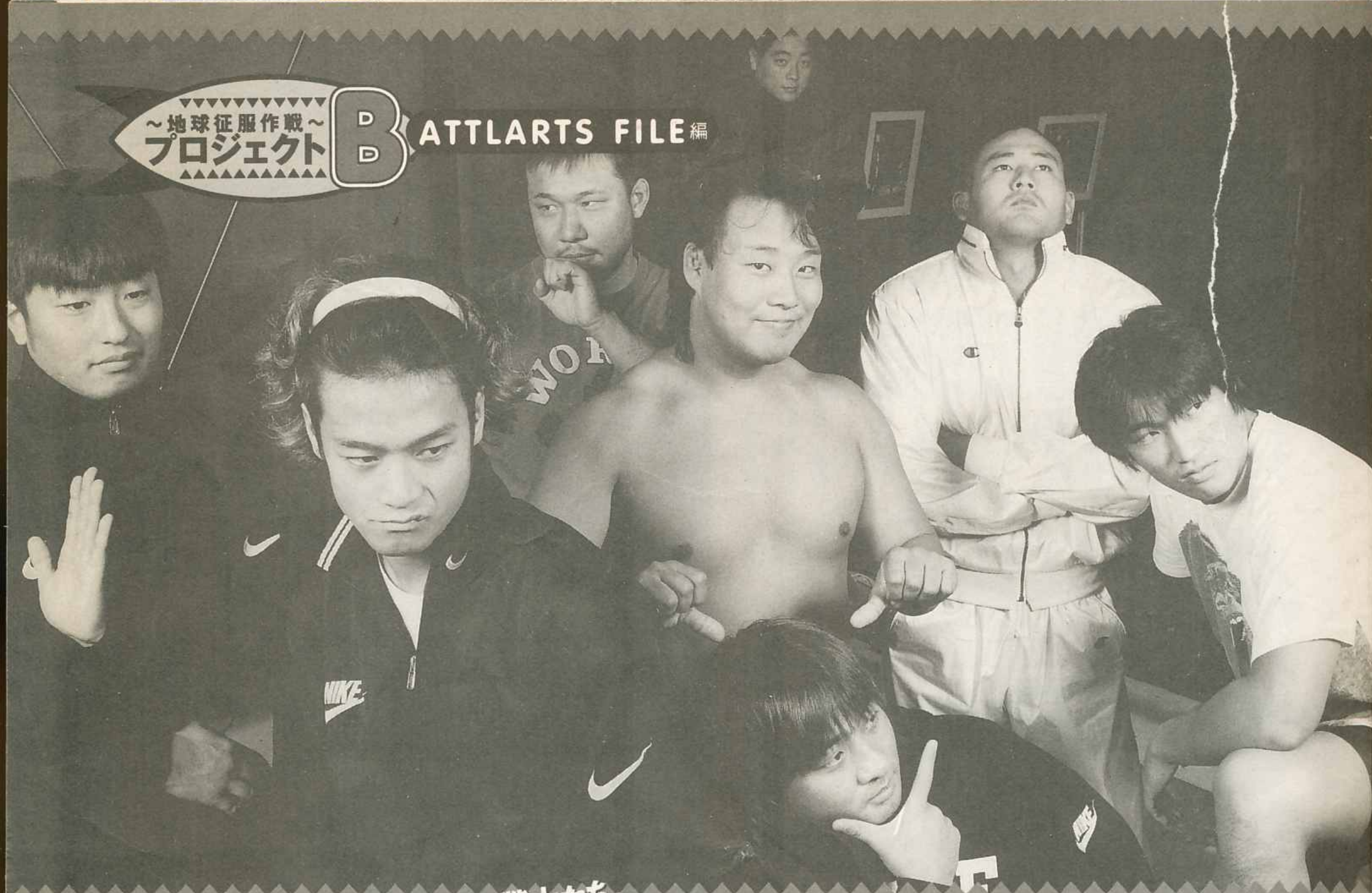
「見る人」に天国になられたら「やる人」はたまらないという前田一流の危機感があの時、村松批判に走らせたのだ。

その同じ頃、私の師である『週刊ファイト』の名物編集長だった井上義啓氏は大阪という辺境の地にあって黙々と書斎派プロレスにはまりこみ「伝える人」こそ天国であると腕を振るって記事を書きまくっていた。

村松氏が「見る人」天国の札を取り、井上氏も「伝える人」天国の札を取ろうとしていた。そうなると「やる人」に残った札は、地獄、ノー天気、憂うつしかない。

もっというなら村松氏と井上氏を師としていた私は、週プロの編集長として両手に花の天国の札を持ったため、取材報道からやがてマット最前線へ。「やる人」からは強烈な逆襲にあった。

だからといって「やる人」が天国と喜びの札を手に入れたとは聞いていない。（つづく）

~地球征服作戦~プロジェクトB ATTLARTS FILE編

バトラーツにいる8人の戦士たち。
とてもうるさい。みんな、まとめる、とても大変ね。
でも、強い。そしてがんばってるね。だから
応援したくなる。これ、当たり前ね。

~地球征服作戦~プロジェクトB

聞き手／のものも
interview by Nomonomo
撮影／斉藤ユーリン
photographer by Yurin Saitou

Daisuke 池田大輔 Ikeda

新日本プロレス学校を経て、平成5年に藤原組入門。その年12／5デビュー。平成7年バトラーツ参加。『木曜の怪談』でキンキキッズの堂本光一、M-Eと共演。何だかいろんなことをやらされてる大ちゃんが最近凝っているのは『柊又三郎』。毎回ビデオに録っているんだって。録るか、普通？ ちなみに『パペポTV』も大好きなんだそーだよ。

最近『ドラえもん』のモノマネがマイブームらしい。ということで大ちゃん、きのう見た夢はなぁに？

池田　きのう見た夢？ 何か見た？

船木　いや、俺に聞かれてもなぁ。

池田　最近強烈な夢を見たんだけど忘れた。

船木　じゃあ見てないんじゃん（笑）。

―アナタが人に一番自慢できることはなぁに？

池田　何？

船木　だから俺に聞いてもわかんないよ（笑）。

池田　船木勝一よりコーヒーがいっぱい飲める。

船木　俺嫌いだからじゃない（笑）。

―強靭な肉体とプロレスセンス、どちらか倍になるとしたらどっちがい～い？

池田　どっちもじゃダメなの？ じゃあ優しいハート。

―人を殺したいと思ったことがある？

池田　ある！

船木　あるの？

池田　あるよ。

船木　彼女をとられた時？ あ、ふられた時だ（笑）。

池田　ふられた時は自分が死にたくなるの（笑）。

―50万円あったら何に使う？

池田　ソニーのMDがほしい。もしくはGショック。

―パンツはビキニ、トランクス、ブリーフ？

池田　ビキニ、トランクスどっちも。ビキニは男の友達に誕生日プレゼントでもらった（笑）。

―好きな言葉はなぁに？

池田　アイラブユー。

―好きな花言葉はなぁに？

池田　好きな花言葉……、花言葉!?

―寝るときの格好は？

池田　Tシャツとパンツ。

―若さと強さ、どっちが大事？

池田　若さ！ 強さ！

―たい焼きはどこから食べる？

池田　丸ごと食べる。

船木　大ちゃん、タコ焼きじゃないよ。たい焼きだよ。

池田　丸ごと食うよ。俺は。あんこ好きだもん。その次チョコレート、その次ティラミス。みんな食べるよ、うち。パーキングとかでみんなソフトクリーム買ってるよ。

―前から超ベリグな女が歩いてきました。最初はどこを見る？

池田　顔。

―街でケンカを売られたらどうする？

池田　いくらですか？ って聞く。

船木　そんな余裕ないよ～（笑）。

池田　とりあえずボケはかます。

―豚カツと鰻、スタミナつくのはど～っち？

池田　それはなぞなぞ？ 豚カツでしよ、豚が勝つから。ね？

（ここで、のものもの携帯電話が鳴るが出ないで切ってしまう）

池田　何で切っちゃうの？

―取材中だし。急用じゃないと思う。……急用ですか？

船木　俺に聞かれてもわかんないよ（笑）。

―女性に求めるものはなぁに？

池田　乳。

―大ちゃんにとってプロレスとは？

池田　フューチャースター。

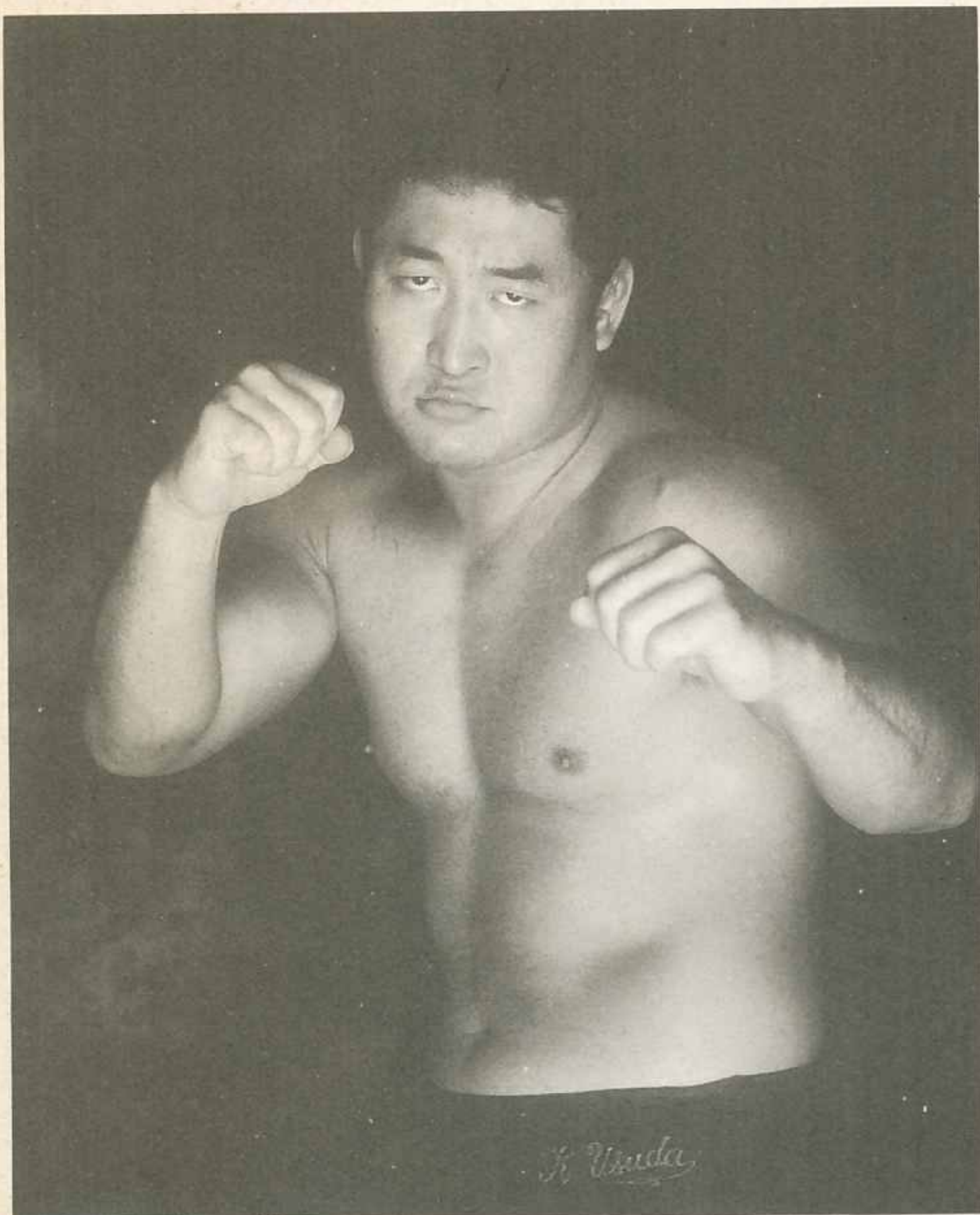
船木　それ島田さんが着てるTシャツそのまんまじゃない（笑）。

池田　俺にとってプロレスとは……、愛です！

船木　かっこいいね、やっぱ違うよ。

Katsumi 臼田勝美 Usuda

K Usuda

1991年藤原組入門。石川と同期だったが、1回やめ、正道会館へ矛先を移す。92年3／30総合格闘技戦でデビュー。第1回のK－1の直後にやめ藤原組に出戻り入門。93年10／25に藤原組でデビューを果たす。11／17・Uジャパンにて、ヴァリッジイズマイウに破れ鼻骨を骨折。今回は鼻に脱脂綿を入れての電話取材でちた。……痛かったのにごめんね。

鼻大丈夫ですか？（Uジャパンの試合で鼻を骨折し、その2日後に電話取材）

臼田　大丈夫じゃないですよ。

—『トゥナイト』見ましたよ。

臼田　僕も見ましたよ。

—鼻が痛いとこ何なんですが、今日はくだらない質問をさせて頂きま～す。

臼田　いつものことじゃないスか、『紙プロ』は（笑）。

—はいぃ。じゃあいきますよ。まず、きのう見た夢はなぁに？

臼田　せがわきり（『トゥナイト』のレポーター）とデートする夢。

—アナタが人に自慢できることはなぁに？

臼田　酒癖が悪いことですね。

—強靭な肉体とプロレスセンス、どちらか倍になるとしたらどっち？

臼田　プロレスセンスですね。

—人を殺したいと思ったことがある？

臼田　しょっちゅうです。

—それはどんな時？

臼田　新宿で歩いてて「きのう『トゥナイト』に出てた奴だ」って言われた時。

—50万円あったら何に使う？

臼田　中途半端な額ですねぇ。う～ん、みんなでドンチャン騒ぎしてパーッと使います。

—パンツはビキニ、トランクス、ブリーフ？

臼田　越中ふんどし。……や、トランクスです。

—好きな言葉はなぁに？

臼田　マジメに答えた方がいいかな、ふざけて答えようかな……。人生至る所に青山あり。

—好きな花言葉はなぁに？

臼田　花言葉？　花言葉なんか知らねーよ！（笑）

—寝るときの格好は？

臼田　シャネルの5番をつけて寝る。

—若さと強さ、どっちが大事？

臼田　若さ。

—たい焼きはどこから食べる？

臼田　真ん中から食べる。

—前から超ベリグな女が歩いてきました。最初にどこを見る？

臼田　足。

—街でケンカを売られたらどうする？

臼田　謝る。

—豚カツと鰻、スタミナつくのはどっち？

臼田　鰻。

—女性に求めるものは？

臼田　美しさ。優しさ。

—アナタにとってプロレスとは？

臼田　お仕事。

—そうですか。どうもありがとうございました。

臼田　のものもさんって僕、お会いしたことありましたっけ？

—ないです。道場行く時、いつも臼田さんいないです。

臼田　練習してないから（笑）。

—そうじゃなくて、海外行ってたじゃないですか。

臼田　あー、オーストラリアへ行ってました。

—修行しに？

臼田　遊びに（笑）。じゃなくて、クリストファー・ヘイズマンっていうリングスにあがってる選手にコーチを受けてきたんですよ。

—へぇ～、その人、強いんですか？

臼田　オーストラリアの柔術のチャンピオン。

—ふぅ～ん（あんまり興味ない）。じゃあそんなところで、どうもありがとうございました♥

聞き手／のものも
interview by Nomonomo

撮影／斉藤ユーリン
photographr by Yurin Saitou

アニマル浜口道場を経て、平成5年3月藤原組入門。その年12／5デビュー。平成7年バトラーツ参加。現在はバトラーツとみちのくプロレスを渡り歩くシャギー・ファイター。みちプロの楽しさ(試合ではない裏の部分)にすっかり感化されてしまったバトラーツ第1号の犠牲者。ちなみに第2、3号は、ヨネとアレク。

Shoichi 船木勝一 Funaki

みちプロの合間をぬって駆けつけてくれた船木さん。大変だね。ところで、きのう見た夢は?

船木 きのう見てないっス。

—アナタが人に一番自慢できることはなぁに?

船木 このシャギーの入ったきれいな髪ですかね。

—これ、自分でカットしてんですか?

船木 いや、ちゃんと美容院行ってやってますよ。

—強靱な肉体とプロレスセンス、今の倍になるとしたらどっちがいい?

船木 どっちもほしいな。

—人を殺したいと思ったことはある?

船木 ないです。

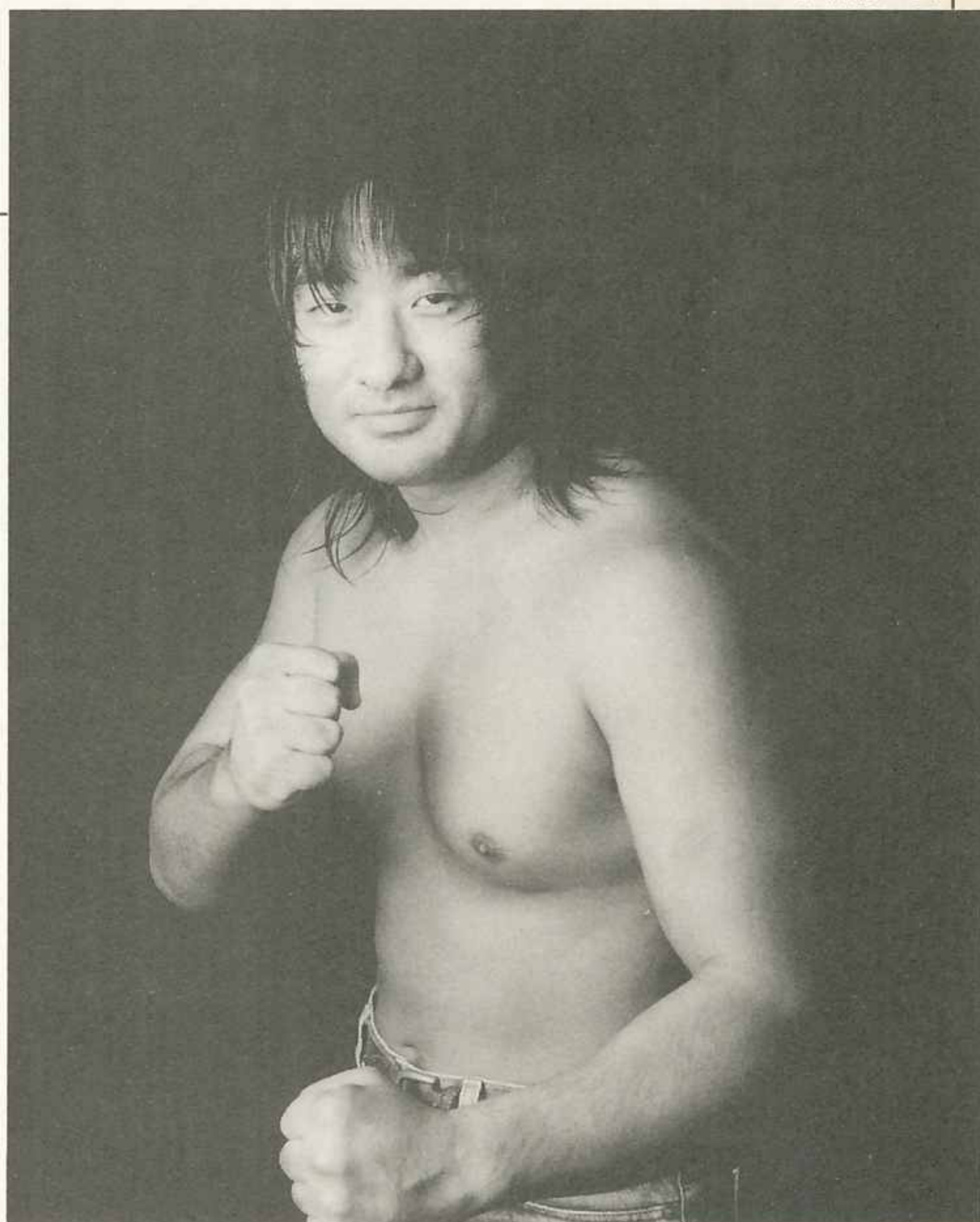
—えっ、ないんですか?

船木 ないよ。あるの?

—あるです。

船木 何で? 彼氏に裏切られた時とか?

—いや、そういうんじゃなくて、いろいろと。ま、いいじゃないですか。さて、50万円あったら何に使う?

船木 50万円あったらライガーさんのマスクを買う。50万円もしないか。でもライガーさんのマスクが欲しいです。

—パンツはビキニ、トランクス、ブリーフ?

船木 ブリーフ。

—好きな言葉は?

船木 考えたことないからわかんないなぁ。

—好きな花言葉はなぁに?

船木 えっ、花言葉ぁ? (すごく淋しそうにぼそっと) 知らなぁい……。

—寝るときの格好はなぁに?

船木 パジャマ。

—若さと強さ、どっちが大事?

船木 どっちも大事。

—たい焼きはどこから食べる?

船木 たい焼きねぇ、俺、背ビレから食うかもしれない。背ビレだね、背ビレ、背ビレ。

—前から超ベリグな女が歩いてきました。最初はどこを見る?

船木 最初に見るのは……。僕ね、まず、髪の毛見ちゃうんですよね。

—街でケンカを売られたらどうするですか?

船木 逃げる。逃げる、逃げる、絶対逃げる。

—女性に求めるものは?

船木 いっぱいあるけど、優しさとか明るさとか。

—豚カツと鰻、スタミナつくのはどっち?

船木 鰻の方がねぇ。

—キャバクラでボッタクリにあったらどうする?

船木 払う。怖いもん。恐がりなんですよ。

—船木勝一にとってプロレスとは?

船木 人生そのもの。

—はい、どうも。

船木 いえーい、ありがとうございました。

[字数があまったので、のものも評]
シャギーヘアが素敵な船木さん。現在みちプロにレギュラー出演中。ついこないだまで、TAKAみちのく選手と〝夢狩人〟というパッとしない(というよりすごいセンス。でも今は亡きと思うと、ちょっと淋しい)チーム名でタッグを組んでいた。が、今はなぜか海援隊DXの一員(みちプロ参戦当初から、なぜかデルフィン軍団に在籍)。ルックスも泥棒っぽいけど、やってることも泥棒。ベルトを盗む癖あり。要注意です!! っていうか何が!?

~地球征服作戦~ プロジェクトB ATTLARTS FILE編

Alexander アレクサンダー大塚 Otsuka

具合悪そうですね（今日のアレクは風邪ひきさん。そのため、普段より口数が少ないの。普段も口数少ないんだけど、今日はいつより増しておとなしいアレクさん。存在感、めちゃくちゃ薄かったよ。こんなにデカイのにね……。具合悪かったのにごめんね）。大丈夫ですか？

大塚　はい。

—じゃあとっとと質問して、とっとと終わらせるね。きのう見た夢は？

大塚　きのうはなかなか寝付けなくて、あんまり寝てないんですけど。え、これそのまま載るんですか？

—うん。

大塚　んー、なしです。

—アナタが人に一番自慢できることはなぁに？

大塚　んー、ないです。

—強靭な肉体とプロレスセンス、今の倍になるとしたらどっち？

大塚　強靭な肉体。

—人を殺したいと思ったことはある？

大塚　ありま……せん。

—50万円あったら何に使う？

大塚　50万か（具合悪いためか声が震えている）。う～ん。現実的じゃないからなかなか思いつかないです。う～ん、う～ん（しばらく唸り続けている）。オーディオが好きなんでオーディオを買います。

—パンツはビキニ、トランクス、ブリーフ？

大塚　ゴホゴホッ。あ、すいません。ブリーフ派ですけど、ジャージをはく時はノーパンです。出かける時はちゃんとはきます。

—好きな言葉はなぁに？

大塚　（1分くらいの沈黙の後）人生いつでもチャレンジ。

—寝るときの格好は？

大塚　（この辺から深く考えないようになったのか、即答）ノーパンジャージ。上はTシャツ。

1971年7月1日生まれ　平成7年に藤原組に入門し、平成7年8月にデビュー。そして平成7年にバトラーツ参加と、激動の1年を過ごしてきたアレク。あだ名は『ゴリさん』。無表情で物静かなため、何を考えてるのかわからないのが、ゴリさんの素敵なところ。ちなみに現在はヨネと同居しているの。2人はホモじゃないよ。たぶんね。

—若さと強さどっちが大事？

大塚　若さ。

—たい焼きはどこから食べる？

大塚　たい焼きは……、しっぽから。

—前から超ベリグな女が歩いてきました。最初はどこから見る？

大塚　足。

—街でケンカを売られたらどうする？

大塚　しない。

—豚カツと鰻、スタミナつくのはどっち？

大塚　鰻。

—女性に求めるものは？

大塚　優しさ。

—キャバクラでボッタクリにあったらどうする？

大塚　キャバクラ行かない。

—アレクサンダーにとってプロレスとは？

大塚　んー、見てくれてる人に対して、希望とか夢を与えるもの。

[字数が余ったので、のものも評] アレクさんはホモホモ系っていわれてるけど、本当はどうなのかな。バトラーツの誰に聞いても本当のことを言わないから真実はよくわかんないよ。でもJWPの矢樹ちゃんが好きなんだよね。いいかげんあきらめればいいのにね。でもアレクさんはすごく素敵な人だよ。アレクサンダーっていう名前からしてとっても素敵だよ。よく"アレキサンダー"と間違われるけどね。体もいいし、ハートもいいんで、うん、心配ない（グラン浜田風）。そういうことで～す♥

聞き手／のものも
interview by Nomonomo
撮影／斉藤ユーリン
photographer by Yurin Saitou

Satoshi 米山サトシ Yoneyama

平成7年藤原組入門。その年にデビューし、藤原組脱退、バトラーツに参加と、若いうちから修羅場（?）を通り抜けてきたヨネ。ちなみにヨネの作るカレーちゃんこはまずいと評判（本人は否定してるが）。『Rintama』で知り合った女子高生にポケベルを打ったことが、なぜかみんなに知れ渡ってしまう悲惨な男……。天罰?

ポケベル打ったことが話題になってるヨネさんですが、きのう見た夢は?

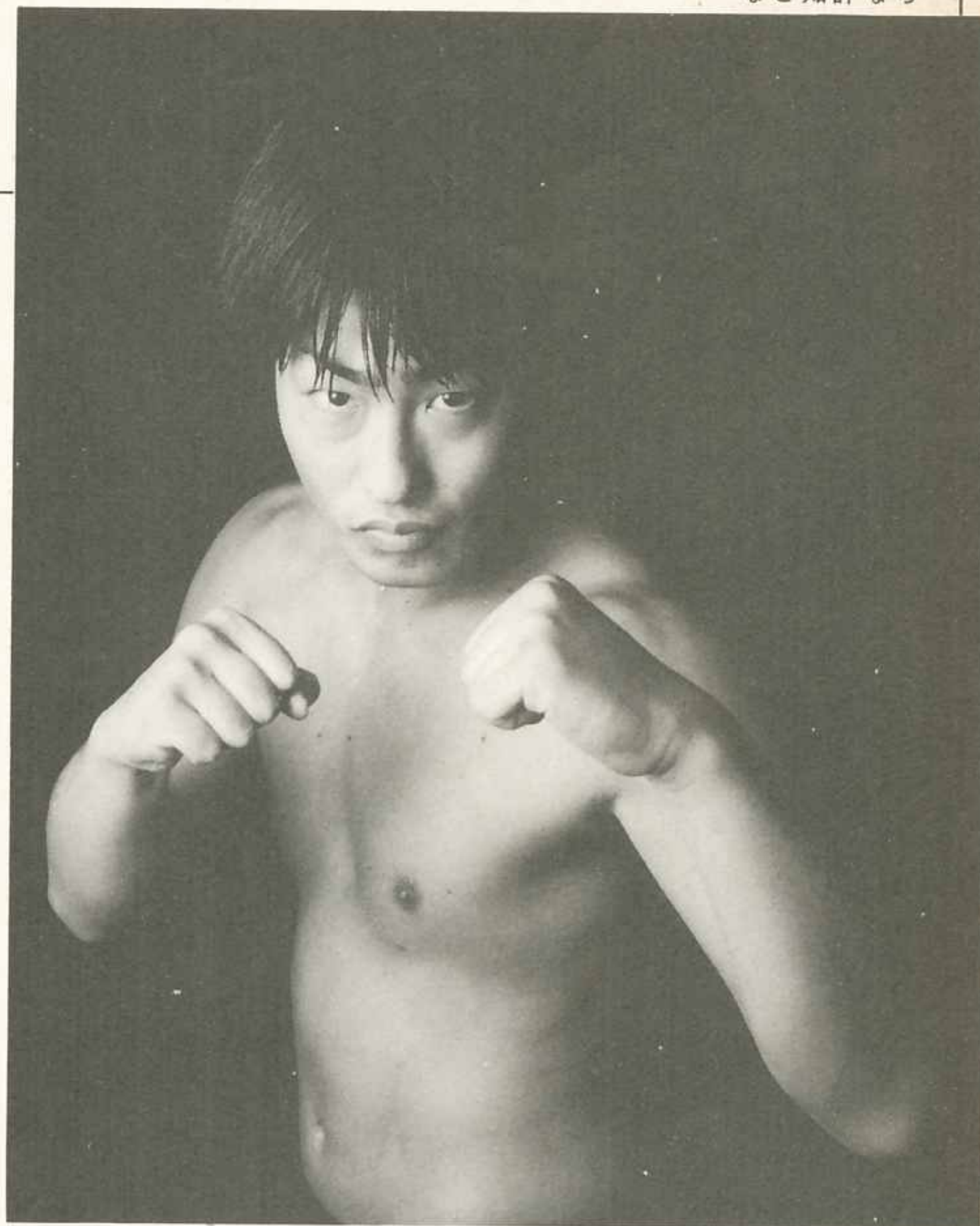
ヨネ　うわっはっは（手をパチパチ打ってひとり大喜び）。それがきのうたまたま組長の夢見たんですよ。俺とみのるさんで組長の付き人をやってたんですね。組長がスポーツドリンク3本空けて4本目に突入して、安岡力也さんと一緒にベロベロになってたんですよ。それもテレビの収録中に。俺らめちゃめちゃヒヤヒヤしてて、うなされて起きましたよ。いつもはハッピーな夢しか見ないんですけどね。だいたい朝起きて（股間を押さえて）「あっ、ヤベっ！今日もかよ～」っていうね（笑）。きのうはたまたまそんな夢で。……そんなこと聞きにわざわざ来たんですか?

―ううん。楽しいことといっぱいいろいろ聞きますよ。あなたが人に一番自慢できることは何や?

ヨネ　足の親指の毛ですかね。足の親指の毛が異常に濃いんですよ。これは負けない！

―強靱な肉体とプロレスセンス、どちらか今の自分の倍になるとしたらどっち?

小野　のものものものものものも。

ヨネ　んー、プロレスセンスですかね。

―人を殺したいと思ったことはありますか?

ヨネ　ありますね。

―それはどんな時?

ヨネ　それはまぁ、いろいろですね。すぐカッとなるもんで。

―パンツはビキニ、トランクス、ブリーフ?

ヨネ　いつもはいてるの?

小野　のものもは?

ヨネ　のものもはスケスケとかはいてるんですか?

―はいてないよ。普通の。

ヨネ　普通のってどんなの?

―ん?

ヨネ　ん?

小野　大きめとか小さめとか?

―大きめ。ヨネさんは?

ヨネ　ビキニかなぁ。

―好きな言葉は何や?

ヨネ　暴飲暴食。

―好きな花言葉は何や?

ヨネ　えへ～え?　好きな花言葉よね?　花言葉わかんないなぁ。まぁ、適当に。乙女の祈りとでも書いといて下さい。

―寝るときの格好は?

ヨネ　だいたい女性上位かな（笑）。そんなこと書かないで下さいね。

―書くよ。

ヨネ　普通です。横向き。

―若さと強さどっちが大事?

ヨネ　う～ん、どっちも捨てがたいなぁ。若さかな。

―たい焼きはどこから食べる?

ヨネ　身の入ってないところは誰かにあげる。

―前から超ベリグな女が歩いてきました。最初はどこを見る?

ヨネ　服装かな。服装もしくは髪型。

―街でケンカを売られたらどうするね?

ヨネ　もちろん買います。……わからないように（笑）。目立たないところで買います。

―女性に求めるものは?

ヨネ　何だろうな、精神的な強さかな。

―ヨネさんにとってプロレスとは?

ヨネ　そうですね。命を削ってもいいものかな。

―かっこいいこと言っちゃって。

ヨネ　そうでしょう（笑）。みんなまともに答えてるんですか?

~地球征服作戦~ プロジェクトB ATTLARTS FILE編

新弟子の日高君です。ちなみにちゃんこを作りながらのインタビューです。さて、今日のちゃんこは何ですか?

日高 今日はキムチちゃんこです(ぐつぐつぐつ=ちゃんこが煮える音)。

—きのう見た夢は?

日高 きのう見てないです。

—人に一番自慢できることは?

日高 う~ん、何かありますか?

—私に聞かれても……。

日高 あ、目が冷たいって言われます。あと、ノーリアクション。

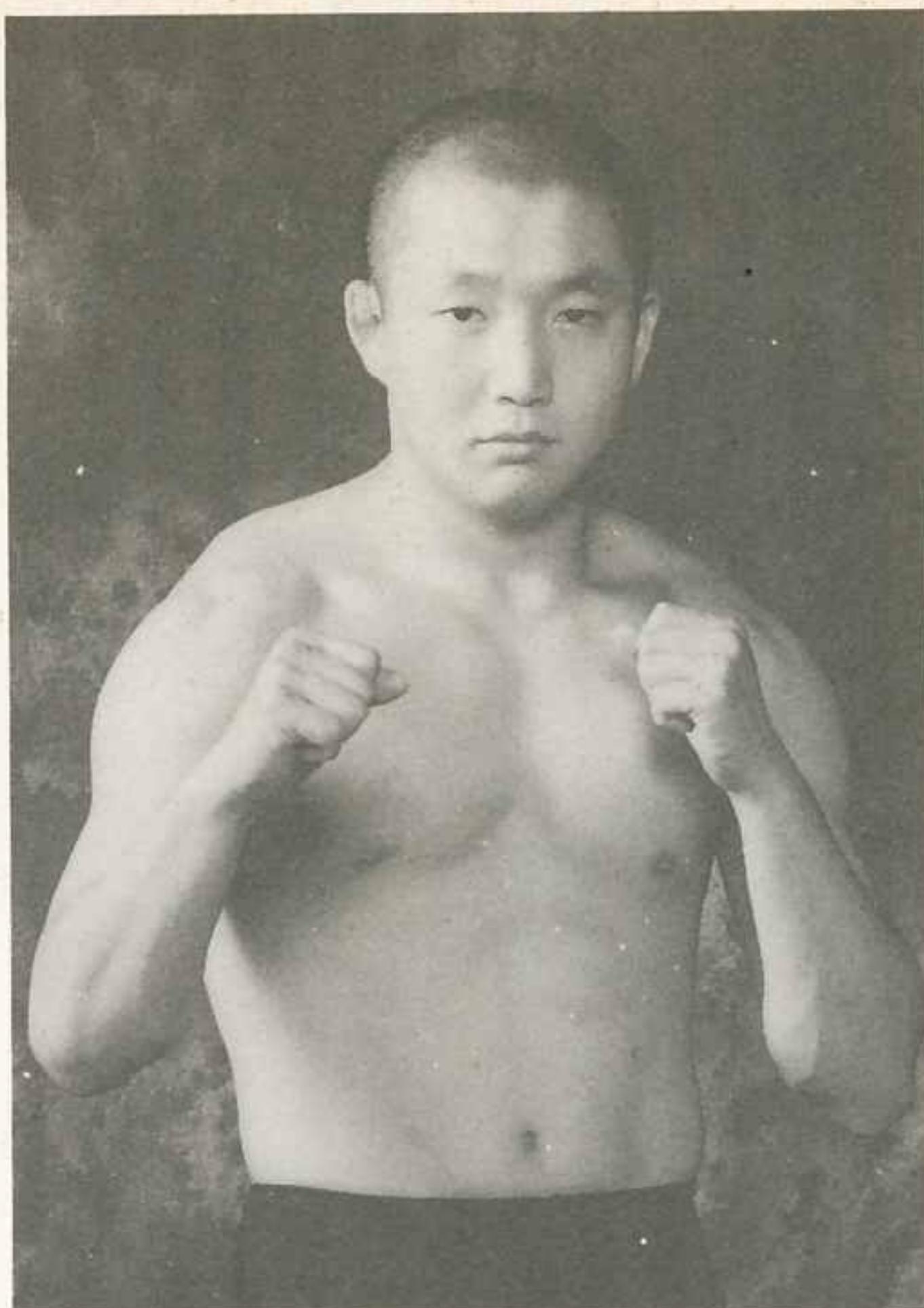
—強靭な肉体とプロレスセンス、どちらか倍になるとしたらどっち?

日高 プロレスセンス。

—人を殺したいと思ったことはある?

日高 ないです。

—え~?

日高 ないですよ(笑)。

—ここにいればあるんじゃないの?

日高 あ、そういわれてみればあるような気がします(笑)。

—パンツはビキニ、トランクス、ブリーフ?

ヨネ パンツはかないっスよ。ジャージの下はノーパン。

日高 トランクスです。

—若さと強さどっちが大事?

日高 あー、強さですね、はい。

—たい焼きはどこから食べる?

日高 頭からです。

—街でケンカを売られちゃったら、どうしましょ?

日高 あー、やるんじゃないですかね。

—女性に求めるものは?

日高 優しさと思いやり。

—アナタにとってプロレスとは?

日高 夢ですね。あ、夢? ……今までは夢だったけど、今は夢の続きです。

96年4月1日バトラーツ入門。あだ名は『クールアイ』。みんなの良きお母さんでもある。

[新弟子] 日高郁人

Ikuto Hidaka

いつも元気で明るい美穂ちゃんに、ごつくて怖い……でも礼儀正しい、紙プロ期待のホープ、(泳げ!!)ジュゴンがインタビューしちゃったよ。

—趣味は何スか?

美穂 趣味と特技をかねているんですが、乗馬とゴルフ。

—はぁ。何か高そうなスポーツばかりっスね。美穂さんはバトラーツ内では、どういう立場なんスか?

美穂 バトラーツのスタッフサイドでありながら、バトラーツの熱狂的なサポーターの一代表。しかも選手と間近で接することができるので、私はすごいラッキーなんだなって思います。

—個人的に応援してる選手は誰っスか? 「みんな好き」とか言ってても いるでしょ、やっぱり。

美穂 難しい質問ですねぇ(笑)。みんな、前に比べたら大きくなっているし、頑張っているし。アハハハ。……個人名出さなきゃダメですか?

—ええ。これでもめて解散とかになったらおもしろいっスからね(笑)。

美穂 えーっ(笑)。んー、やっぱり石川さんに頑張ってほしいですよね。

—ここだけの話、選手に変なことされません?

美穂 よく聞かれるんですけどね。女の扱い受けてないですよ。だから全くない。

—好きな男性のタイプは?

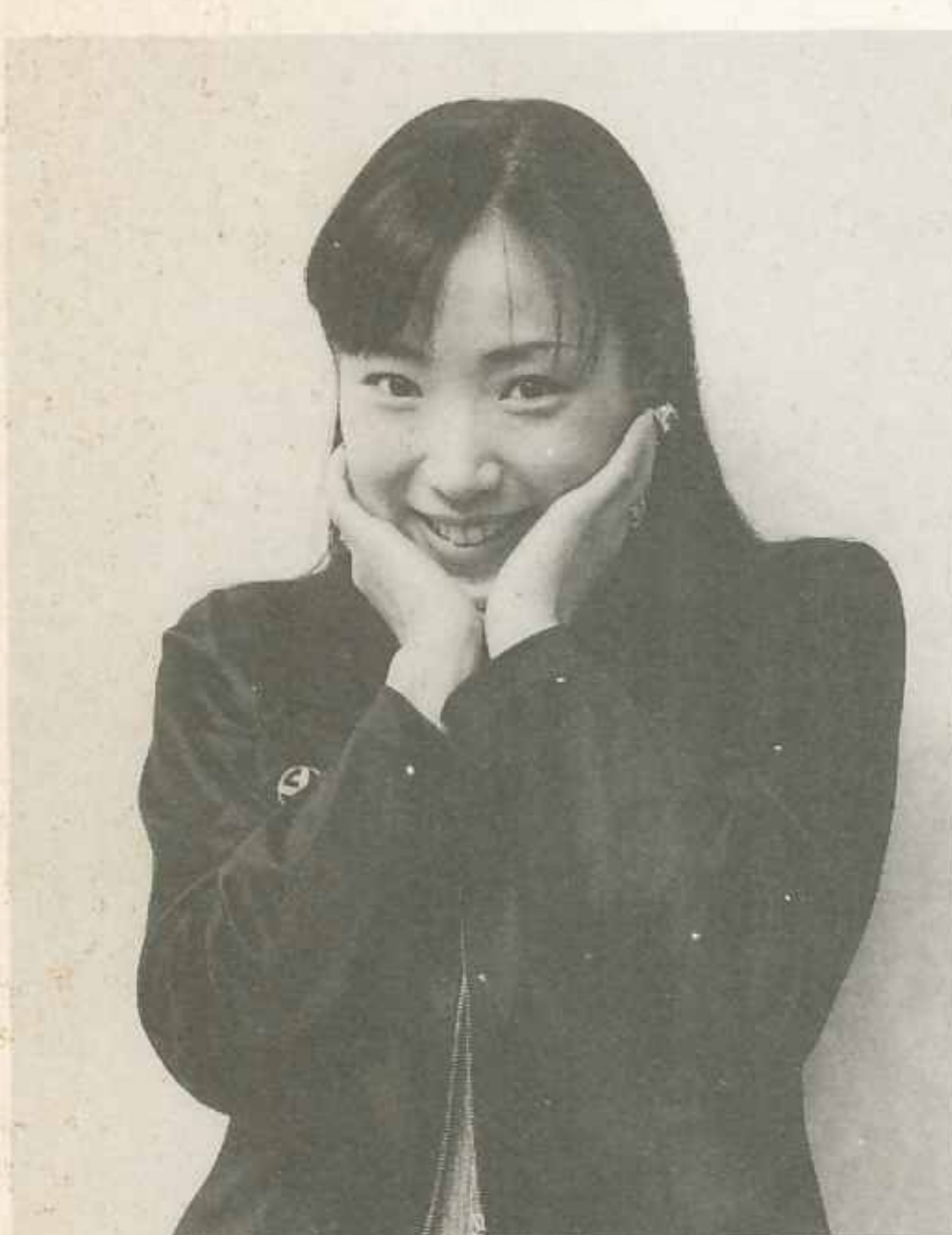
美穂 目が強い人。眼力のあるタイプっていうのかな。目がギラギラしている人がいいですね。

—萩原流行とか?

美穂 はぁぁぁ。あーゆのもそういうんですかね(苦笑)。

—じゃあ最後に、ファンの皆さんに一言どうぞ。

美穂 バトラーツ見たら絶対惚れちゃうと思うんで、機会があったらぜひ見に来て下さ~い。

1973年11月23日生まれ/O型/B83 W58 H84/好きな食べ物・納豆&さんまの開き

[リングガール] 宮内美穂

Miho Miyauchi

まだ²いる²探偵員たち

シャモ吉 シャモ平 シャモ太 ―軍鶏―

道場の周りを仕切る悪軍鶏軍団。見た目かなりブサイク。しかも性格も獰猛らしく、先日、猫のガッチリが顔面傷だらけになるといった被害にあったばかり（事実よりちょっと大袈裟）。ま、普段はコケコッコーとうるさいだけで、人間に被害を及ぼすことはないんですけど。でも、今度ガッチリをいじめるようなことしやがったら、羽むしって食べちゃうからな。軍鶏、覚悟!!（実際、バトバト選手は食べちゃってるらしーけどね）

やぎやぎ ―やぎ―

すてきな顔をしたやぎさん。名前は“やぎやぎ”。バトバトに「やぎの名前は何ですか?」という質問をしたら「みのる」って答えが返ってきたんだよね。でも“みのる”じゃ、田中稔選手と一緒になっちゃうからね（鈴木みのるともね、あと白木みのるともね）。だから今日から勝手に“やぎやぎ”って呼ぶことにしたよ。ねー、やぎやぎ?「めえええ」

ガッチリ ―猫―

バトラーツ道場で飼われているめちゃめちゃイケてる猫。何がイケてるって、ルックスがだよ。もうホント、めっちゃ美少年（実際ガッチリは雄で押忍）。もとは野良猫だが（高野拳磁は野良犬）、今ではクールアイ・日高っちょの次に道場で愛されているとのこと（日高っちょは愛されてるちゅーか、なんちゅーか、ルチャっちゅーか。〜東郷風）。ちなみに“ガッチリ”の名付け親は、田中稔＆ヨネだそーだ。もっと何かなかったのかねぇ。うっそ、けっこういいと思いま〜す。

テル ―馬―

テルさん、今日のごきげんはいかが? テル「……」ごきげん今イチ? 何か悩みでもあるのかな?
テル「ブヒヒィ〜ン（はぁ? そんなことないっスよ。ほっとうてくださいよ。大丈夫っスから）」あれあれ? テルさんって何かジュゴンみたいだね。今日からジュゴンって呼んでいい? ジュゴン「……」ちなみにクール・アイ日高っちょは、ちゃんこの材料を買いにジュゴンに乗って出かけて行くそーだよ。越谷の人気者なんだって。うそだっ!!

~地球征服作戦~
プロジェクトB
[Interview編]

石川雄規吠える!

バトラーツ社長

Yuki Ishikawa

「必ず地球を征服しますよ!」

聞き手/山口昇
interview by Noboru Yamaguchi
撮影/斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saitoh

──4月に旗揚げして、もう半年以上たちましたけどここまではどうでしたか。
石川　まあ、順調と言えば順調ですね。
──実に当たり前の質問しちゃいましたけど(笑)。
石川　らしくないじゃないですか。フハフハ(鼻息)。
──いや、何話そうかなと思ってたんですけどね。やっぱり石川さんとは猪木さんの話ですよ、つまるところは。ま、それは後で、まずいチャンコをごちそうになりながら話すとして(笑)、団体としてはここんとこ、かなり話題に昇ってきましたね。
石川　そうですね、はい。狙いどおり。経営面では苦しいことは苦しいんですけど、それは覚悟の上ですからね。覚悟というか2年くらいは苦しいでしょうね、おそらく。そっから先でバーンと弾けることを考えればね。
──そっから先はバーンと弾けると決まってるわけですね。
石川　そうです(笑)。だから、外から見ると苦しく見えても、僕らにとっては、実際それがどういった方向性でやってて苦しいのかというのがわかってる。計算の上での苦しさだから。それは全然問題ないです。だから世の中の人間に比べたら、みんな生活は苦しい。だけど世の中の人間に較べたら、こんな夢のあるところないですよね。ある意味でいうとね。それだけのことですよ。価値観の違いっていうかね。
──僕が一番面白いと思うのは、なんか苦しそうに見えないところですよね。
石川　そうですか(笑)。
──なんちゅーんだろう。漫画の『1・2の三四郎』の現実版というか、非常に漫画的で出たとこ勝負っていうかね。
石川　すべて緻密な計算なんだけど、それが、「どーってことねえよ」と、出たとこ勝負に見えてるだけなんですよね。実はどこよりも緻密に考えてるんですよね、戦略は。
──じゃ、緻密な戦略の部分はブラインドになってるわけだ。レフェリーの死角をついて。
(道場の応接間から、突然『ギャー』という叫び声)
──うるせーなあ、ここはいつも(笑)。
石川　フハフハ(鼻息)。誰だ?
──でも、石川さんは、仕事と遊びの区別がないですよね(笑)。
石川　そうなんですよ。別に不真面目な意味じゃなくて、遊びがなかったらいいこともできませんよ、いい仕事も。
──それがね、僕の一生涯の目標なんです。仕事と遊びを一体化させるのが(笑)。遊びでお金儲けできれば……。
二人同時に　一番いいですよね！
石川　です！
──プロレス界を見渡してみると、一番巨大な遊びをしてるのは、やっぱりアントニオ猪木だと思うんですよ。
──まあ、遊びっていうと世間一般の人には誤解を与えるかもしれないけど。
石川　世間一般の奴らはそれを理解できないんスよ、バカだから！
──ガハハハ、グーです(笑)。飛ばしますね。
石川　いや、ホントに。もう、バカだから！　そういうレベルの意味が理解できないというか。究極ですよ、猪木さんは。けれど、遊びもそのまんま失敗したというか、ただの遊びになってしまったらそれは負けなんですよ。

Yuki Ishikawa
情念っていうのは怒りと呪いなんです！

──はいはい。『紙プロ』なんか、単に遊んでるだけと思われてますからね。
石川　それを成功させたときに、「お前、この遊びわからなかったのか、バカ野郎」と世間に言えるわけですよ。グフフフ。
──ザマアミロ！　と(笑)。だから石川さんがやってる作業っていうのは、「どんなものにでも一流から五流がある」という村松友み流の言葉を借りれば、その仕事なり遊びを一流に近づける作業だと思うんですよ。今のバトラーツが何流かはともかく、限りなく一流に近づく可能性を含んでますよね。あ！　ホメちゃいけない。

石川　ホメちゃいけない、調子に乗るから(笑)。
──でも、僕はバトラーツの旗揚げ戦を見て、面白くて次の日の越谷も行ったんですよね。
石川　いましたよね、珍しく(笑)。
──プロレスを2日続けて自分から自発的に、しかも地方まで見に行くなんていうのは、俺の歴史の中にはない(笑)。
石川　まず、人の歴史を変えてしまったという。
──変えられてしまったマヌケがここにいるわけです(笑)。
石川　それが楽しいんです。こんな痛快なことないでしょ。
──ついでに『週プロ』みたいなこと聞くと、そういった手応えっていう部分はビンビン感じてるわけですか。
石川　そうですね。手応えというか、これは言葉で言い表せないですね。一個一個の試合の積み重ねなんですけど、終わってからのお客さんの反応っていうんですか。例え100人に満たない会場でも、みんながホンットに満足してくれたっていうかね。例えば僕なんかの試合を見て、「朝まで飲んじまった」「語り明かしちまったよ」って。そんな人が異常に多いですよ。
──酔いどれプロレス、ってやつですか。
石川　まさにそれなんですよね。それが結果としてつながって、やっと俺たちに時代が追いついたかな、と。
──大きく出ましたねぇ(笑)。時代よりも先に先に行ってるんですね。
石川　そうですよ。ずっと先に行ってますよ！
──この間の後楽園ホール(96年10月30日)のパンフレットの石川さんのページには「情念」と大書してあったんだけど、いまのところ「情念」がファンに伝わってるという感触は感じる?
石川　はい、ほんとに感じます。だんだん猪木的になってきてます。闘いが(笑)。

でも、情念っていうのは、つまり僕は、怒りだと思うんですよ。怒り！

──怒り！

石川　僕はね、今まで大人たちとそういったテーマで話し合ったり、闘ったりしてきたじゃないですか。それでようやくこういった状態になって、うちの親たちも、ようやく「そういった生き方してるあんたたちに、若い人たちが影響を受けて、まっとうに生きる糧になってる」なんて言ってね。で、ある時、学校の先生が子供たちにサインを書いてくれと。で、何か一言書いてくれ、と言われたんで、「情念」って書いたんです。

──子供たちに情念なんて書いちゃいけない（笑）。

石川　それで、その時、僕は「情念」の意味というか答えを言わなかったんだけど、先生は「夢は思い続ければ叶う」「ずっと思い続けることが情念だ」って子供たちに言ったらしいんですよ。俺はそれを母親から聞いて、「そんなんじゃない」と母親に言ったんです。「情念とは呪いであり、怒りだ」と。本当の呪いと怒りなんだって。それが情念とかそういうことだと。

──ジェラシーを含めてって事ですね。

石川　そう。そしたら母親は、「あなたたそんな汚い言葉」って（笑）。「絶対、夢は叶う」って言い続けて、ようやく十数年かけてあの人たちは辿りついたと。情念ってそういうことなんだ、ということをその先生は言いたかったと思うんだけど、ところがどっこい俺にとってはそんな綺麗事じゃなくて、情念とは怒りと呪いなんです。愛が深ければ深いほど、思いが深ければ深いほど、それを理解しない人間たちに対する情念っていうのは、怒りと呪いなんです。

～地球征服作戦～
プロジェクトB
［Interview編］

──なるほど。それはまさにアントニオ猪木の世界ですね。

石川　そうですね。だからそういった意味で、僕は自分の中で真実を知ったと。（他人が）ようやく気付いた時には、俺はもっと高いレベルにいるんですよ。ポーンと突き放して。それの繰り返しだと思うんですね。

──突き放すのはいいことですね。

石川　そんなもんじゃないよっていう。

──あの、石川社長、情念についてしゃべってるからって、ボソボソしゃべるのやめてください。テープに入らないから。

石川　（笑）。もうそういったレベルのことを、僕はズッとやってきて、やっとみんなわかるわけですね、夢は叶うんだって。でも俺にとっては、そんな常識は「どーってことないよ」と。

──出た！「どーってことねえよ理論」（笑）。

石川　僕はもっと先のことを思ってる。そうやってどんどん広げて行きたいなぁと。突き進んで行きたいなぁと。

──あの、これ当たってるかどうかわからないけど、社長は局面局面では、けっこう飽きっぽい人なんじゃないかと。

石川　確かにそうかもしんない。集中力がない。赤ん坊と同んなじ（笑）。

──でもプロレスには飽きないでいるわけじゃないですか。

石川　僕、だいたい趣味が無いんですよ。

──あー、わかります。

石川　生きてること自体趣味だから（笑）。ふつう仕事って、言ってみれば趣味じゃないことをやってるから、仕事よりもっと面白いものが趣味でしょう。でも仕事自体が面白いから趣味が無いんですよ。なんにも。

──あー、それはまったく僕と一緒ですよ。でも、ふつうはビジネスにはビジネスの論理というかフィールドがあって、遊びには遊びのフィールドがあるじゃないですか。それぞれが違う土俵にあるというのが世間一般での成り立ち方ですよね。その間の溝っていうのを埋めたてようと思っても埋まらない時がね。

石川　ええ、ありますね。

──例えば、バトラーツでも60人しか客が入らないとかあるでしょう。真剣に遊ぼうとすればするほど金がなくなっていくという（笑）。

石川　それがまた……そこの溝を埋めるものってのが、自然に存在する情念でしょうね。入らない。だったら見返してやろうじゃないかとか。あるいは来なかった人間を後悔させてやるとかね。それでいつか物凄いものを用意してね、世の中全部の人間が見たいと思っても、今まで来てくれた何十人の人だけにしか見せないと（笑）。そういったことをしてやりたいですね。

──ヒネくれてますねえ。

石川　凄くヒネくれてます（笑）。そのた

めだったら南極でもプロレスやりますよ！ 今まで1回でも見たことのある人だけの名簿作っといて、その中の人だけ招待しましょう。

――誰も招待されたって行きませんよ、南極くんだりまで！

石川　でも、そんなことしてやってもいい。そういうエネルギーがあるんですよ、人間は。グフフフ。

――その仕事と遊びとの間にある溝をね、今、石川さんは埋め立てる作業をしてる最中でしょう。それが人工の埋め立てであろうとも、自然に埋まるものであっても、やっぱりその作業っていうのは世間一般の人が絶対にやらない作業なんですよ。仕事は仕事、遊びは遊びという風に分けて考えた方が絶対に楽だから。

石川　そうなんですよね。

――仕事を遊びにする。あるいは遊びを仕事にするっていうのは、世の中の人が思ってるよりも全然難しい作業だと思うんですよね。だから、それをやってる石川さんというのは偉いなーと思ってね。

石川　ホメちゃいけない（笑）。

――例えばグレート・サスケの場合も、レスラーとしてとか、プロレスのスタイルがどうのよりも、その作業を真剣にやってる痛快さがいいんですよ。でも、サスケ社長の場合はビジネスのフィールドにポンとケブラーダしちゃう危険性があるけど。ま、そうなったら遊んでやんないよー、って言いますけどね（笑）。

石川　僕の場合、結果的にそうなっちゃっただけなんですけどね。

――でも、石川さんは何に対して、呪いと怒りを感じてたんですか。具体的には。

石川　っていうか、ある意味で、僕はアントニオ猪木の言うことがすべてだと思ったんですよ。それに対して世の中の人間はわかんないじゃないですか。その時点では。

――猪木さんは理解されにくいですよ。

石川　500年くらいたって、ようやく理解されるんじゃないですか。だけどそんな理解しない人間たちが偉そうなこと言ってるんですよ。

――長嶋茂雄語録っていうのは、世間一般に広まってますよね。でも猪木語録って、「どーってことねぇよ！」という超破壊力のある名言を含めて色々あるんだけど、絶対そこに情念とか怒りとか、そういう世間一般から見たらドロドロしたものがあるから。

石川　受け入れられない！

――そう（笑）。長嶋に負けてないのに。

石川　バカだもん、世の中の人間！ そんだけの知己に富んでないんだもん!!

――ガハハハハ。

石川　バカにはわかんないですよ。要するに猪木さんと同じ時代に、一番ナイーブな時期に、あの人の生き様に画面を通してだけども触れた人間じゃなきゃわかんないというか。

――というか（笑）。だから猪木さんもそうだし、前田日明もそうなんだけど、やっぱり僕らが感動したり、わあー凄ぇやと思ったり、ドキドキしたレスラーってどっかしらウエットなんですよ。

石川　そう。ウエットですね、凄く。

――石川さんもそういうタイプだと思うんですよ。ただ石川さんは世代的に、猪木さんから前田日明へと受け継がれてきたプロレスと、その下の世代の物凄くドライなプロレス。その両方に行けるポジ

Yuki Ishikawa

猫や犬さえもビックリさせるプロレスですよ

ションにいると思うんですよ。石川さんは性格的にどっちに行ってもいいって時もあるだろうし（笑）。ただ資質としてはウエットな部分を見せられるんじゃないかなと思うんですけど。

石川　そうですね。非常にあります、ウエットな部分っていうのは。僕の一番それがテーマですね、人生の。

――で、やっぱりバトラーツは、人間と人間がギリギリのプロレスしてる感じがするんですよね。もちろんその試合によってレベルは違うんだけど。

「俺たちはいつか死ぬから生きるんですよ！」と呟きながら、生きるために、貪欲に食い物にありつく石川社長

石川　そうですか。

――ぼくはあんまりプロレスと格闘技ってあんまり差をつけて見ないタイプなんですけど、この間のフォアマンの試合見てて、ウワー凄いプロレスだと思ったし、極真の大会を見てても、面白いプロレスだなあと思う時もあるし（笑）。それはマスコミとかファンの間で言われてるようなプロレスと格闘技の差じゃなくて、ホントに格闘技の中にもプロレスを見い出せるし、いろんなジャンルにもプロレスを見い出せるんですよ。

石川　人生そのものがプロレスだと。ホントそうだと思いますね。闘う両者の間にある感情、情感、情念。そういったものが見える闘いをやっていきたいです。

――アルティメットとかは確かに極限的な闘いなんだろうけど、僕はそんなに好きじゃないんです。

石川　なんかね、ちょっと違いますね。わかんないけど、やったことないから。

――人がそこの金属のごみ箱を殴るようにしないと勝てない競技でしょう。

石川　死体を殴ってるような。

――そうそう、ああ、そのものズバリですよ。そこにはやっぱり感動は生まれにくいですよね。で、人が人を殴るってことでいうと、中崎タツヤの漫画に印象深いやつがあったんですよ。

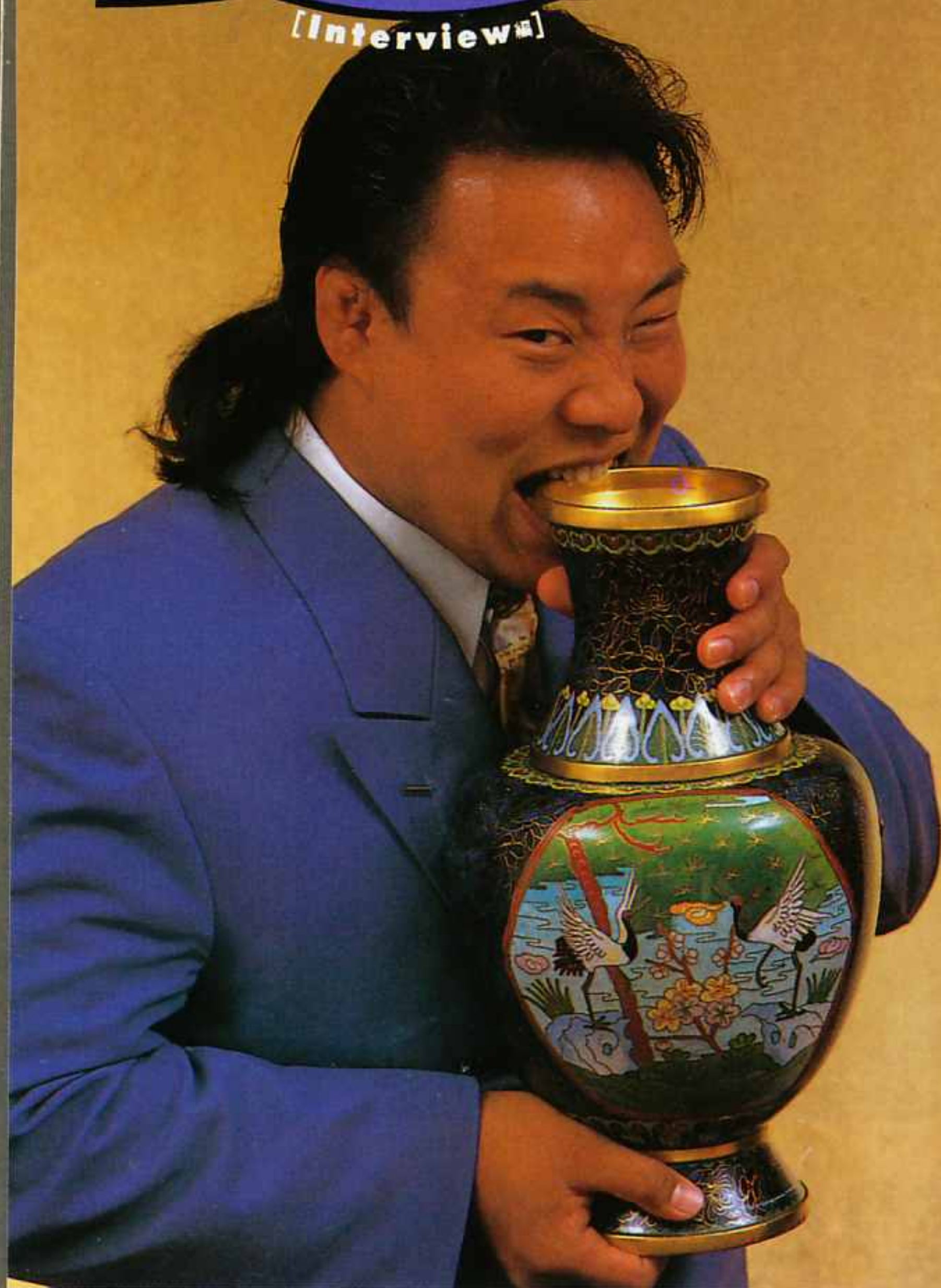
石川　へえ〜。

――二十代後半か三十代前半くらいの、酸いも甘いも噛み分けつつある女の人が、公園の真ん中にたたずんでいました。仮にこの女性をユウコとしましょう。別に名前はジェニファーでも何でもいいんですけど（笑）。

石川　うんうん。面白そうだ。

――そのユーコを5〜6歳の小僧がジーッとジーッと穴が開くくらいに見つめています。もうそろそろ見てないだろうと思って、女の人がパッと小僧がいた場所を見ると、まだジーッとジーッと見つめています。だんだんだんユーコも「なに見てんだ、このガキ！」というような感情が立ち昇ってくるわけです。

石川　うんうん。

――で、その後、ユウコはいきなりその

石川雄規はザ・グレート・サスケのことを「真剣に遊ぶ達人」と呼ぶ。石川が地球征服を狙うのなら、サスケは火星征服を狙っているのだ! いずれにしてもあまりこの二人には近寄らない方が良さそうである。世界が平和でありますように。

小僧をバシーッと平手打ちで殴りつけました!

石川　フハフハ(鼻息)。そのユーコはズーッとガキに理由もなく見られてムカついたんスかね。

――その理由は書いてないんです。で、ユウコがバシーッといった後は、当然その小僧のお父さんが「うちの子供にナニするんだー」と血相を変えて駆け寄ってくるわけです。なぜ殴ったのか説明しろ!と。そうするとユウコはお父さんに言うわけですよ。「この子に手を挙げたのは、私の生き方とか人格がこの子に手を出したわけで、私の中では納得してるわけです」と。

石川　フハフハ(鼻息)。

――そうするとお父さんが「じゃあ、俺の中で納得すれば、俺がお前を殴ってもいいんだな?」って聞くわけです。そうするとユウコは「じゃあ、どうぞ殴って下さい」って言って頬を差し出すわけ。

石川　フハフハ(鼻息)。

――お父さんはグッと拳を握り締めて、拳を振り上げるわけですよ。5秒…10秒…結局、お父さんは「ホントだ…」と一言だけつぶやいて力なく拳を降ろすわけですよ。非常に理屈っぽいんだけど、結局、そのお父さんの生き方や人格ではユウコを殴れなかったわけです。だから人が人を殴るってホントにその人の人格であるとか、生き方であるとか、背負ってきたものであるとか、そういうのが一瞬にして出る行為だと思うんですよね。

石川　深いですね。

――プロレスラーはプロだから反射的に人を殴れる訓練を受けてるんだろうし、殴る殴られるに人格もクソもないという意見もあるだろうけど、バトラーツのバチバチにはそのレスラーの人格とか生き方が見えるから面白いですよ。あ、見えるというより、今のところは、見えたかな?って感じかな(笑)。

石川　ホメすぎると調子にのりますからね、ウチは(笑)。

――なんか俺ばっかりしゃべってますね。社長、無口だから(笑)。

石川　六本木ではしゃべりますけどね。でも今日は楽しいですよ、こういう話できて。結局ね、殴るのも殴り返すのもハート、心の強さですよ。だから、よく言うんですよ。僕たちは普通の人が出来ないことをやってる。ピストル打つことは誰にでもできる。でも、パンチ、キック、関節技は誰にでもできるわけじゃない。鍛えないとできないでしょ。でも、考えたら、あってもなくてもいいようなものに命懸けてるんですよ。極論しちゃえば。今の時代だったらね。

――そうですね。そういった意味で言うと、ピストルでズドーンで終わっちゃう世界っていうのは非常に悪い意味で切ないですよね。

石川　そうですね、ホントに。昔は要するに素手で闘ってたのが、ナイフができてくる。その後ピストルが出てくる。そして大砲も出てくる。核ミサイル出てくる。もう何も要らないじゃないですか。闘う必要ないじゃないですか、人間は。強くなる必要はないんですよ。ボタンを押す指さえあれば。

――じゃあ、そんな時代に、石川さんはなぜ強くなろうとするんですか?

石川　天の声を聞いたんですね。

――また始まったか。

Yuki Ishikawa

俺が怒りを感じたり闘う相手は「常識」かも

石川　強くなれと送られてきたんですよ、天から。それが終わるまでは帰ってきちゃいけないよと。天に指令を受けて集まってきたのがバトラーツなんですよ！　フハフハ（鼻息）

──ま、それはともかく(笑)、やっぱり一流の人は「存在感」と「技術」が、どちらの間口から入っても、いつかは一体化すると思うんですよ。石川さんはどちらかというと存在感の方が先行してるタイプだと思うんですよね。でも今、凄く充実してそうだから、そういった時期って逆に技術の部分がおろそかになる危険もあると思うんですけど。

石川　（技術がおろそかに）なったらなったでいいじゃないですか！

──ありゃ。

石川　なるかもしれないし、ならないかもしれないし。まあ、宿命です。でも、強くなるんですよ！　そういう宿命だから。もしなれないんであれば、ならない宿命なんです。闘いの場は自然に生まれてくるんですよ。かつてリングス出た、新日本も出た、出たくないのにトーワ杯も出た(笑)。結局はそういうのは自然に生まれてくるんですよ。だからまだ時期じゃないのかもしれない。

──緻密な出たとこ勝負ってわけですか(笑)。そういえばタッグマッチもタッチなしでリングに入れるんですよね？

石川　うん、めんどくせーし(笑)。そうだ、あれもそうだ。エスケープルールも、めんどくせーから無しにしようって。それやったら、意外に反応が凄いよかったんでね。でも、考えたら凄いですね。〝めんどくさい〟から生まれたルール（笑）。まあ、実際やってみてタッチはちゃんとした方がいいとか、今は整理していって動いてますけどね。だから逆転してるんですよ、普通と。

──あべこべですね（笑）。

石川　でも本来の姿だと思うんですよ、逆に言うと。話ちょっと変わるけど、例えば日本っていう国は、結婚してから一緒に暮らして、子供ができる。それが常識でしょ。でも動物って違うでしょ？　一緒にいて好きあって子供ができてから結婚すると。人間の中では常識以外は不謹慎と言われるでしょ。そんなのは人間が作ったもんでしょ。要は、だから逆転してるにのそれを常識と思ってるバカが多すぎるんですよ。

──つまり、常識が嫌いなわけですね。

石川　大っっっ嫌いです！！！！

──ガッハハハ。そんな人が社長やっていいのか！

石川　ホントに、バカかって言いたくなりますよね。もしかしたら、俺が怒りを感じたり、闘ってるのは、世の中の〝常識〟かもしれない。常識以外の真実っていうのを、おかしい、不条理だと言ってる、そんな常識ってもんに俺は怒りを感じて、挑戦してたのかもしれないですね。

──その挑戦は時間かかりますね。

石川　そしてそれに到達したころには、俺たちの存在はなくなってるかもしれない。でもそれはそれでいいじゃないかと。存在はなくなる運命だから、また愛しいんですよね。だから人は輝いて生きるんですよ。永遠に死ななかったら人は輝きませんよ、きっと。俺たちはいつか死ぬから、生きるんですよ！

──うーん、マンダム(笑)。そういった部分で言うと、石川さんのやろうとして

るっていうことは、僕なりにはすんなりくるんですよね。

石川　ただ、バカな奴にはわかんないでしょうね。

——じゃあ、僕はバカじゃないというお墨付きをバカ社長にもらったわけですね！　嬉しいんだか嬉しくないんだかよくわからないけど（笑）。

石川　世間一般でいうと、イカレてんですね。わかる人っていうのは。グフフフ。

——じゃあ、バトラーツはみんなイカれてるんですか。

石川　素敵なイカレた集団ですね。愛すべき。これはまたちょっと話が違う方向になるかもしれないけど、思うに今は、自分の感じた感動を、一生懸命人に伝える作業をまったくしようとしないでしょう。思いません？　フッと思い返して。ちょっと前までは何か凄く感動して、それを何とかして人に伝えたいという気持ちがあったのに。無くなっていってる。

——だから、きっと感動することがないんでしょう。

石川　そうなんですよ！　それなんですよ！　だから僕は、語れるプロレスをしたいんですよ。俺達の試合を見たら、なんとか見なかった人に伝えたい。でも何回しゃべっても伝わらない。でも、いずれは聞いた方も行きたいと思ってくれるようなプロレスをすればいいし、してるだけだと。

——最近、石川社長は他の団体のプロレスとか見るんですか。

石川　見てない。あんまり見てない。

——僕らも雑誌を作ってると見ないんですよ。週プロさえも見ない。

石川　ああ、そうですか。

——週プロも各記者とか個人はそれなりに力があるんだけど、やっぱりターザンが抜けてから面白くないですよね。

石川　毒がなくなちゃった。

——情念ですよ（笑）。ターザンも怒りとジェラシーが渦巻いてる人だから。だから世間からバッシングを食らうんですよ。僕が思うのは、石川さんは情念とか怒りを胸に秘めているんだけど、例えばターザンのような形で今まで世間からバッシングされたことはなかったでしょ？

石川　ないです。外面がいいんです。いえ、そんなことはない（笑）。手玉に取ってんですよ、世間を。フハフハ（鼻息）。

——なるほど。それも計算づくで。

石川　すべて計算済みです。信念がないようだけど、信念なんかいらないというか、それ以外のことは、どーでもいいじゃないですか。

——でも思いきり世間からバッシングを受けてみたいというのはないんですか。

石川　いつか凄いメジャーになって、有名になって世の中に「ブァ～カ！」って言ってやりたい。わかんないように。テレビかなんか使って。それでもわかんなかったら、世間はホントに壊れてますよ。

——でも、石川さんはあんまりヒールの匂いがしないんですよね。そこが不思議なとこなんですよ。

石川　だから世界征服できるんですよ！　ヒールだったら結局潰されるじゃないですか。ハッハッハッハ！

——なんて悪い人だ！（笑）。

石川　時々、今のような顔を見せるんですよ。でもまあ、これから僕たち中心に動いて行くでしょうね、プロレス界は。

——パチパチ。

～地球征服作戦～
プロジェクトB
【Interview編】

石川　そして人類すべてを感動させる！

島田　サイキョーッ！　でもホント、そうですよ。僕もそう思ってますよ～。

——おお、あなたは『SUMURAI！』ニュースキャスターの島田さん！　ってそんなことやってる場合じゃないんだよ。アッチ行けよ！

島田　フッフッフ。『紙プロRADICAL』読者の皆様こんばんわ。ニュースキャスターの島田裕二です。

——アッチ行けって

島田　ほら、テリー伊藤さんが日本へ来たばっかりのイラン人が見てビックリするような番組を作りたいというのと一緒で、来たばっかりのパキスタン人も面白いと思うのがバトラーツの良さですよ！　猪木さんがロシア人ビックリさせたじゃないですか。北朝鮮でも。

石川　ウチは動物……猫や犬さえもビックリするようなね、そこら辺を歩いてる猫ちゃんもフッと足を止めたりするプロレスをやると。そして、僕の生きてるうちに地球征服ですよ！　フハフハフハ（鼻息）。

島田　『紙プロRADICAL』バンザイッ！　サイキョッ！

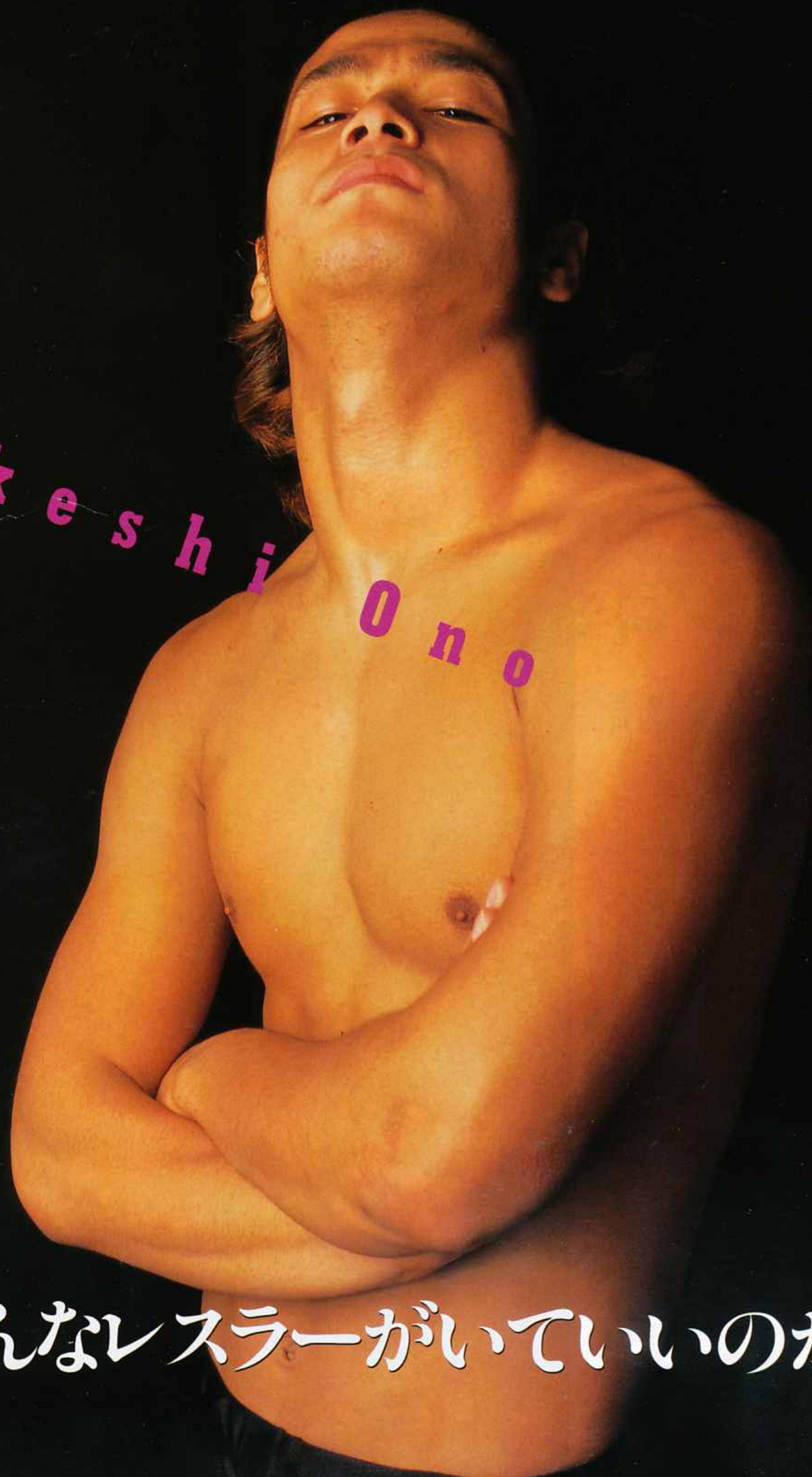
〈96年11月11日、埼玉県越谷・バトラーツお笑いマンガ道場にて収録〉

小野武志

聞き手／山口昇
interview by Noboru Yamaguchi
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saitou

First interview

Takeshi Ono

こんなレスラーがいていいのか!?

—それにしても太んないですね。体質ですか？ それとも自分の美学がそうさせないとか。
小野 体質です。でも太りたくはないですね、ブクブクとは。
—太らないことで、レスラーとしてのストレスとか溜まったりしないんですか？
小野 最初はありましたね。全然大きくならないんで。でも、まあ、いいやってなりましたね。
—まあ、いいや！(笑)。あっさり派ですね。
小野 頭で勝負！
—はあ。頭といえば、なんでそんな髪型してるんですか？
小野 これ普通なんスよ。なんにもしないとこうなんスよ。オレはだって、あんま流行に流されないから。自分がしたいからする。
—エ、それは流行なんじゃないの？
小野 ちがうんス。自分の中で流行ってればいいんスよ。コレだっつったらコレ！ 長髪にしてみたかったから。
—はあ。僕はファッションとか、流行とかわかんないんですけど、前はドエ……ドレ……あれ？
小野 ドレッドですか？
—それ！ それしてたじゃない。
小野 あれ、ただ編んでるだけスよ、三つ編みに。
—あれ手間かかるでしょう？……俺は一体何を聞いてるんだ(笑)。
小野 手間かかりますよ。痛いからやめたんですよ。
—やっぱ、でも、その髪型に小野選手の美学が潜んでますね。
小野 今日のテーマは美学ですか。
—いや何も考えてないです(笑)。若い人を前にするとあがっちゃって……。でも、バトラーツの試合見ていて、一番突っ張ってますよね。リング上では。
小野 別人になります？ リング上で。
—いや、普段から気は強そうですよ。体は細くてもリング上ではアゴを上げて「来いよ、オラ！」って感じですよね。それが小野選手の持ち味っていうか。
(ここでTVから突然G・サスケが歌う『セパラドス』が流れ、しばし中断)
—さ、というわけでグレート・サスケの『セパラドス』を聞き終わったところで再び始めましょう。

小野 う～ん、いい歌だ(笑)。
—素敵すぎて心がポンポン躍りますね(笑)。でも、いまでも「ホントにプロレスラー？」って目で見られることって何度もあるでしょう。そういう部分でのコンプレックスはない？
小野 そうスね。別に(プロレスラーに)見えても見えなくても関係ないっスね。
—関係ない！ なるほど、そこかあ。現代が見えた！(笑)。
小野 そんなん、なんとも思わない。
—ふーん、面白いな、小野ちゃん。今、

O Takeshi Ono レスラーに見えなくても関係ないっス

いくつでしたっけ？
小野 22ッス。
—昔のプロレスラーってのはハッタリも仕事のうちだったでしょ。
小野 昔のプロレスラー好きじゃないですもん！ 一応タイガーマスクとかいいなぁって思いましたけど。あとUWFとか見て、藤原さんとか、船木さんとかいいなとは思いましたけど。あんま、憧れたとかないスからね、実は。というか、プロレスやるなら藤原さんのあの関節技を習おうというのはありましたけど。だから、強くなるためのプロレスなんスよ。そのためにプロレスをやる。
—そこでプロレスを選んだのは何で？ だって他にも選択肢はあるでしょ。
小野 でも強くなれて、しかもお金が貰えるっていったらプロレスしかないでしょう。柔道とかやってても、最終的には先生になって終わりじゃないですか。オリンピックとか出たいと思わなかったスから。こんないいことないスね。好きなことやって食える。
—プロレスラーになるって周りに言った時に反対はされなかった？
小野 されました、されました。友達にオレ、ズーッと言い続けたんですよ、「オレはなるんだ」って。最初は「頑張れよ」だったのが、最後の方は「しつこいよ」って。「なれるわけねえだろ」って。
—でも、そういうのはバネになったわけでしょ？
小野 そうスね。先生にもひとりだけ話したけど「アホか」って言われましたから。だから、高三の時に誰にも言えないじゃないスか。だから勉強しましたよ、オレ。一日5時間くらい。大学も受けました。それでいて柔道もやっていたと。スクワットしながら勉強しました。学年で18位でしたもん、勉強。世界史のテストでトップとりましたよ、クラスで。
—「いい国作ろう鎌倉幕府」とか覚えてたんだ。あっ、これは日本史か。
小野 ウヒャヒャ、それは日本史だ。でもスゲェ勉強してるヤツに勝ちましたモン。ザマアミロって。
—結局はなんでも負けたくないってのがあるんですね。もしかしたら努力家？
小野 そうスね。でも、そういうのは見せたくないスね。
—けっこう陰ではガンバっちゃう方？
小野 そうなんですかね？
—僕に聞かれてもわかりません(笑)。
ニュースキャスター島田 どうも～！ 小野君は努力家だと思います、はい。
—また来たよ。ちょっと島田さん、小野武志評を聞かせてくださいよ。

Takeshi Ono 一日中レスラーやってるのがイヤなんスよ！

レッドシューズ島田　そうですね、小野君はですね、最初会った時は細くて漬け物持ってきたんですよ。は～い。

――「細くて漬け物持ってきた」って、どういう日本語なんだよ、それ。

ブンキンタカ島田　藤原さんと石川さんと2人で細すぎるからって何度も追い返したんですよね。でも3回か、4回来たよね。だから努力家というか粘り強いというか。本人は言いたくないと思うけど、努力家。夜もコソコソ練習したり。でも、やっぱりヨネとか小野とかが未来のバトラーツを引っ張ってくわけですよ。

――この団体に未来なんかないですよ！

奥さんの綺麗な島田さん　うちはまだみんな若いですからね。石川社長にしたってまだキャリア4年ですから。大ちゃんだってまだ2年選手なんですよ。

小野　オレもまだ2年ちょっとですよ。しかもメイ・ンですよ。

――ホントにナメてるな、この団体(笑)。

島田ちゃん　でも、オレらが時代を変えるんですよ。は～い。

小野　でもやることやってればね。負けてないしね、キャリアには。そんなこといったら怒られるんでしょうけど。でも、怒られてもいいと思ってるんですよ。藤原さんにもいつも怒られるもん、オレ。

――なんて？

小野　「髪切れ！」って(笑)。

――でも、そういう非難とか見方をハネ返す力が自分にはあるんだよという突っ張りでしょ。それがその髪型にも表れているんでしょ？

小野　そうなんスかね？

――いえ、わかりません(笑)。

アマリン2位島田　うちの連中は応援してくれる人のズラまで取るんですよ。ボク、ホントにバトラーツになってから飲めないんですよ。この連中、何しだすかわからないから。

――ヤな団体だな、ホントに。

サイキョー島田　面白い団体でしょ。会場行っても女に声かけますから、8人が8人とも。力道山先生とか今生きてたら怒られるでしょうね。「なんだ、お前らは」って(笑)。

小野　アハハハ。

島田氏　じゃ、お邪魔しました。サイキョッ！

――ああ、この団体は疲れる。ライバルは誰なんですか？　例えばこいつには負けたくないとか。

小野　こいつは大したことないって思ってますから。負けたくないっていうより、負けてないですから。一番強くなるためにやってますから。

――例えば交流のあるみちのくプロレスのああいうプロレスを見て、あいつらには負けないよと思うんですか？　それとも全然関係ない世界？

小野　全然関係ないんじゃないスか？

――だから、じゃないスか?ってオレに聞かれてもわかんないスよ(笑)。じゃあ今、意識してる団体は？

小野　やっぱりブラジルですね。ブラジリアン柔術。

――ブラジリアン柔術！　そう言えばバーリ・トゥードに出たいって言ってましたね？

小野　出ます、そのうち。まだ、あと十年あるんで。

――あ、十年後なの？　出るのは。

小野　十年後に一番強くなってる予定で

～地球征服作戦～ プロジェクトB [Interview編]

す。ワタクシの人生設計(笑)。ヒクソン・グレイシー選手は今30いくつですよね。だから、あと10年あるわけですよね。で、彼らは今ピークで一番強いじゃないですか。だから、自分もそれまでには強くなるわけですよ。

――他のいわゆるU系の団体ってのは気にならない？

小野　気にならないですね。まあ、金があるところは羨ましいなって。あんだけ貰ってて。それに……やっぱやめとこ。

――一応、気は遣うんですね。

小野　絶対、書きますよね、こういうこと。まあ、でも金原の顔が気になります。

――じゃ、小野さんの価値観の中ではプロレスよりもブラジリアン柔術の方が強いってことになってるわけですね。

小野　そうですね。

――すごい！　そこまで言い切った人は初めてですね。でも、自分がプロレスをやってるってことに対しては別にコンプレックスとかなんにもないわけですか？

小野　そうスね。一応、強くなる手段ですね。でも、やっぱりキックやってたらタックルして寝技に持ち込みたくなりますもん。柔道だったら今度、殴りたくなりますもん。

――じゃ、それらを総合的に使えるのがプロレス？

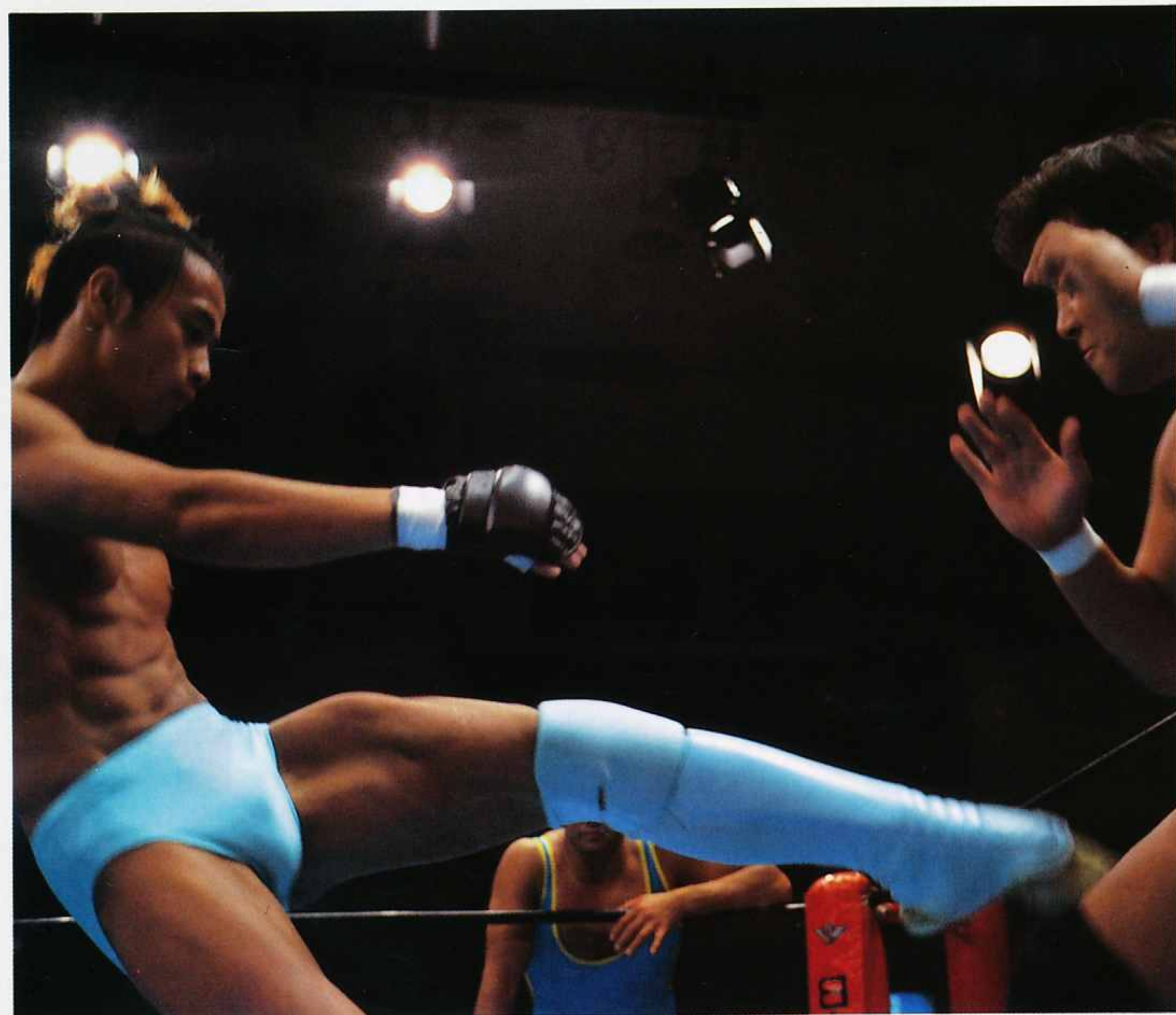
小野　バーリ・トゥードですよ。うちはほとんどバーリトゥードのルールじゃないスか。だから別に。

――ブラジリアン柔術の次は？

小野　ない。ヒクソンやウゴさえ倒したら「ヤッター！」でもう終わりでいいんじゃないスか。

――うーん、新しい(笑)。プロレスと格闘技の区別ってあるんですか？

小野　全然ないス。

――練習はどれくらいやってるの？

1974年9月30日東京都生まれ。94年10月に藤原組でデビュー。このインタビューの後に、突如ボーズ頭に！

小野　オレは週休3日です。

――ふーん。週休3日で10年後に一番強くなる計画は大丈夫なの？

小野　いやムチャクチャ疲れるんですよ、練習。そんだけで十分。3日連チャンはダメっスよ。1日やって1日休んで。

――キチンとしてるんだか、ハメはずしてるんだかよくわらない人ですね。

小野　だから日曜とか仕事入るときついスよ。夜、遊んで寝ないで朝そのまま行って、「今日寝てねえんだよ」って。

――どんなレスラーなんだ(笑)。

小野　レスラーだって遊びたいじゃないスか。だから、要はオレの場合は試合を見てくれって感じ。ハハハハ。まとまっちゃいましたね。

――勝手にまとめない！

小野　だから、オレはズーッとレスラーやってるのがイヤなんですよ。一日中レスラーってのが。練習とか、試合の時とかでいいんじゃないですか、レスラーは。

――じゃ将来、24時間レスラーやってなきゃ勝てないようなヤツが出てきた時、どうする？

小野　そんなヤツはいないと思いますけど、そうなったらそうしますよ。やっぱ、それが一番ですよ。強くなることが。

――バーリ・トゥードも含めて自分の力は今どれくらいだと思ってるんですか？

小野　ランキングですか？　わかんないスね。まあ、下っ端です。

――じゃ、その自信はどっから？

小野　ま、世界はオレ中心ってことですか(笑)。

――その鼻っ柱がガツンと折られる時が来たら面白いですね。その後の小野ちゃんがどうなるか見てみたい(笑)。

小野　大丈夫ですよ。己の強さがどんくらいかわかってますから。あ、そうだ、今度『紙プロ』でオレらをランパブとかに接待してよ。

――なんでだよ！　絶対にイヤです！

小野　じゃ、もうインタビューや～めよ。

〈96年11月11日、埼玉県越谷・バトラーツ道場にて収録〉

マジメで異端児

田中稔

Minoru Tanaka

聞き手／山口昇
interview by Noboru Yamaguchi

撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saitou

~地球征服作戦~ プロジェクトB [Interview編]

――『ゴング』でのインタビューは何ページくらい載ったんですか？

田中　モノクロ1ページだけです。

――たった1ページ！　ケチですねえ。今日はカラー5ページですから。

田中　えーっ、ホントっスか？　マジっスか？

――本当ですよ。気合い入れてください。

田中　おい日高、ジェル持ってきて、ジェル、ジェル、ジェル。

――そういうことじゃなくて（笑）。

田中　ヨネ、クリーニングからワイシャツ取ってきた？　どうしようかな、ウインドブレーカーくらい着ないとな。

――靴でも頭に被りますか？（笑）。

田中　何度も言うようですけど、硬派なんスから。でも、いきなりなんで何しゃべっていいかわかんないっスよ。ほんとヘタなんですよ、しゃべるの。テーマが決まればポンポン出て来るんですけど。

――テーマは何がいいですか？（笑）。

レフェリーの島田さん　ジュゴンと私！

――かぁぁ、また出てきた。で、田中稔さんはバトラーツのみなさんと楽しいひと時を過ごしてますか？

田中　そうですね、幸せなひと時を……そんなんでいいんですか？（笑）。

レフェリーの島田さん　夢とかセックスの話はどうですか。は～い。

――頼むからあっち行ってってください。で、田中さんはTAKA選手との闘いが話題になってますけど、みちのくみたいなスタイルはどう思ってるんですか？

田中　あのー、僕はみちのく行こうがFMW行こうが、自分のスタイルはひとつしかないんだけど、どこの団体でも通用するっていうのが理想ですね。だから嫌とかそういう気持ちはないですね。殺したいレスラーとかはいますけどね！　奴とやらしてくれるんだったら、どこでも行きますよ。

――その殺したい奴はサスケ社長？

名前が同じだけに、かなり鈴木みのるテイストが入ってる田中稔。船木誠勝との因縁（？）もあるところなどますますミノラーだ

田中　違いますよ！　イニシャルは○○なんス。結構有名な話ですけど、俺が○○を殺したがってることは。何かきっかけがあったら、きっと行きますよ！

――おお！　結構キレやすいタイプ？

田中　最近は丸くなった方ですよ。

――田中選手はいつ入門でしたっけ？

田中　93年。僕が二十歳の頃です。まず、高校卒業してすぐ、船木（誠勝）さんと鈴木（みのる）さんがいた頃の藤原組に入ったんですけど、鈴木さんにシゴかれて1回やめちゃって。で、また入ろうと思った所で組長と船木さんたちが別れちゃったんです。俺、鈴木さんに憧れてたんで、あの頃『ゴング』に載った、鈴木さんたちが練習してる川原ってのを地図で探し当ててたんで、いつでも行ける準備はできてたんですよ。

Minoru Tanaka 相撲でもやろうかなって思ったんですけど

――ブッ飛ばしてやろうと思って？

田中　違いますって！　ただ鈴木さんの所へ行ったらただの憧れじゃないですか。でも前田さんや高田さんやらが教わってる藤原さんの教えを受けた方がいいのかなと。で、そのまま路線変更で。

――1回やめたっていうのは逃げ出しちゃったわけですか？

田中　そうです。逃げ出したっていうか……ま、逃げ出したんですね。合宿所で、高橋（義生）さんが「こいつ、鈴木さんのファンらしいですよ」って言ったら、鈴木さんがえらい気に入ってくれ……たかどうかはわかんないですけど。次の日から鈴木さんと一緒に練習することになって、そしたら、うわー、あんなこと言わなきゃ良かったって（笑）。受け身を延々とやらされたんですよ。頭バンバン打つじゃないですか。もう足が痺れちゃって、動けなくなって、船木さんが「もう帰れ！」ってキレちゃって。

――エ！　船木さんがキレた？

田中　珍しいってみんな言ってました。一番最初にまず卒業して、すごい細くて体重72～73キロくらいでテスト受けて落ちたんですよ。その時「体重15キロ増やして、また来い」って言われたんですよ。俺、3ヶ月で本当に15キロ一気に増やして85キロにして行ったんですよ。

――やりますね！

田中　早く入門したいから一気に無理矢理増やして行ったんですよ。もうブクブクですよね。で、船木さんも、「お前本当に来たんだなぁ」って驚いてたんですけど。で、筋力だけはあって、ロープ登りとか腕立てとか全部メニューはこなして、船木さんが「こいつ太ったから使えないと思ったけど、結構やるなぁ」って目で見てくれたんですよ。でも無理矢理太ってるから、パワーはあるけどスタミナが異常に落ちちゃってて。それで受け身とかスパーリングをやらされた後に、さらに受け身を延々やらされたんですよ。それはもたなくて……。

――スタミナがなさすぎるってことで船木さんがキレちゃった？

田中　じゃないですかね。情けないっていうか。

――珍しいね、船木さんがキレるっていうのは。

田中　そうですね。結構怒ってましたからね。たまたま俺がやめた日に、『週プロ』が船木さんをインタビューしたんですよ。俺『週プロ』買ってるじゃないですか。そしたら「今日も一人やめちゃいました。〝カッコ笑い〟って書いてあったんですよ。それがまた悔しかったんで。それでもう1回やろうと思ったんですよ。その雑誌見るまでの1週間は、もうムリだと思ってたんですよ。で、相撲でもやろうかなって思ってたんですけど。

――なぜだ！

田中　ちょうどその頃、貴乃花が11連勝してて。

――そういう問題じゃなくて（笑）。

田中　でも、それ（『週プロ』）見たから妙に悔しくなって、で、一番近くにあった

シュートボクシングの道場で、次がラストチャンスだと思って1年半くらいみっちりやって。だから、船木さんのコメントがきっかけですよね。

――いつか見返してやるゾっていうのがあったんですね?

田中　そうですね。それが一番でした!

――プロレスを見るきっかけは鈴木みのる選手?

田中　いや。プロレス見るきっかけになったのは佐山さんなんですよ。小学校4年の時に佐山さん見て、単純にカッコイイなって思って。それでサマーソルトキックをやりたいがためだけに、中学の時器械体操入りました。

――は?　何ですか?

田中　中学卒業したらプロレスラーになるつもりでいたんですよ。で、サマーソルトキックとムーンサルトプレスをやるために器械体操やったんですよ。そうしてるうちにUWFが新日に帰ってきましたよね。それ見てUのファンになって。でも、それから新日も見るようになって。後半鈴木さんが出てきてからは鈴木さんのファンになって。Uが抜けてから異常に新日がつまんなく思えて、それで新日見なくなって。で、自然にUしか見なくなって。他はどこも見てなかったです。他の格闘技で興味があったのは、極真の松井(章圭)さんだけですよ。後はもうUだけですね。基本的にUWFが最強だと思ってたから。

――今は最強じゃないと思ってるの?(笑)。

田中　う～ん。ノーコメントです(笑)。あの頃はUWFが本物の格闘技で一番強いと思ってたから、他のプロレスなんて何とも思わないで、Uに入ろうって感じだったんですよ。でも、最初憧れるきっかけはカッコよさですよね。だから鈴木さんにはカッコよさがあったんですよ。今でもそうなんですけど、強さはもちろん必要だけど、カッコよさもなければ絶対ダメだと思うんです。藤原さんによく「おまえはカッコつけすぎだ」って言われたんですけど(笑)、でもカッコよくなければ誰も憧れないと思うんですよ。僕の持論なんですけど。

――そこまでいうならテーマを絞りましょう。田中さんの「カッコいい」という価値観を掘り下げてみましょうか(笑)。

Minoru Tanaka 誰が見てもカッコいいっていうのが理想です

じゃあ例えば車だと何がカッコいいと思いますか?　いろいろあるでしょ、フェラーリとかダイハツミゼットとか(笑)。

田中　外車のスポーツカーですね。

――音楽でいうと何ですか?

田中　音楽でいうとB'Zですね。B'Zがめちゃくちゃ好きなんですよ。

――B'Zっていうのがいるの?

田中　めちゃくちゃハマってます。入場テーマもB'Zにしてますから。

――じゃあ単純に見た目がカッコいいって部分から入るんですか?

田中　そうですね。格好から入るなんて、人は否定するかもしれないけど、カッコよくなければ誰も憧れないだろうし。だから俺が鈴木さんに憧れてレスラー目指したように、俺のカッコよさ、強さに憧れてレスラー目指してくれる人がいたらすごい嬉しいっていうのはありますね。

――じゃ、例えばあのカッコ悪さがカッコいいんだよなーっていうよりは……。

田中　俺は見た目の価値観です!　誰が見てもカッコいいっていう。試合のスタイルでも見る人が見ればわかる、俺はカッコいいと思うけど他はカッコいいと思わないっていうんじゃなくて、誰が見てもカッコいい、パッと見たらそのカッコよさがわかるっていうのが理想です!

――バトラーツの個性的な連中とはたぶん、カッコいいっていう価値観が違うんでしょうね。

田中　だと思います。僕、みんなとは違うと思いますから。僕がやりたいのはケンカ格闘プロレスじゃないんで。みんなはどう思ってるか知らないですけど。仲間同士でやってると緊張感持てないんですよ。だから外の人ともっと緊張感ある闘いをやりたいんです。実験リーグとか復活するんだったら、どんどん出て行きたいし。だから目立たなくても、僕がカッコいいと思えばそれでいいんですよ。

――今のバトラーツには緊張感がない?

田中　いや、そうじゃなくて(笑)。僕の中でですよ。みんなは緊張感持ってやれてるかもしれないですけど、僕はみんなとは違うから。藤原組の頃って、結構他流試合を、僕は特にいっぱいやらせてもらえたんですよ。僕はああいう闘いを続けていきたいんですよ。今、手を出しても難しいかもしれないですけど、今ちょっと体重落として作りあげてる段階なんですけど、自分の体が完璧になったら、リングスの坂田選手ともう1回やりたいんですよ。それだけじゃなく、もっとそういう闘いをやりたいんです。

――例えば今、TAKAみちのくと空中戦やったりとかありますよね。でもそれは、外に出ていくイコール緊張感のある闘い、というのとは別なもの?

「ヨネにはヨネ、アレクにはアレクのスタイルがあって、ケンカ格闘プロレスだけがバトラーツじゃないと思うんですよ」

田中　そうですね。これ言うとまた変な話になりなりますけど、今やってる闘いは本意ではないですね。だからTAKA選手とああいう試合をやって、いい試合だったって言われれば、それはそれで嬉しいし。だから、そういう試合も大事にしながら、もっと緊張感ある闘いをやりたいと。藤原組の時も仲間同士の試合がベースで、その中に他流試合が入ってたって感じだから。

──欲張りですね(笑)。

田中　若いうちにしかできないと思うんで。だから今、若いうちにできることをどんどんやっていきたいんですよ。

──なんかプロレス雑誌のインタビューみたいになっちゃったな(笑)。

田中　あ、ふざけないとマズいんスか?

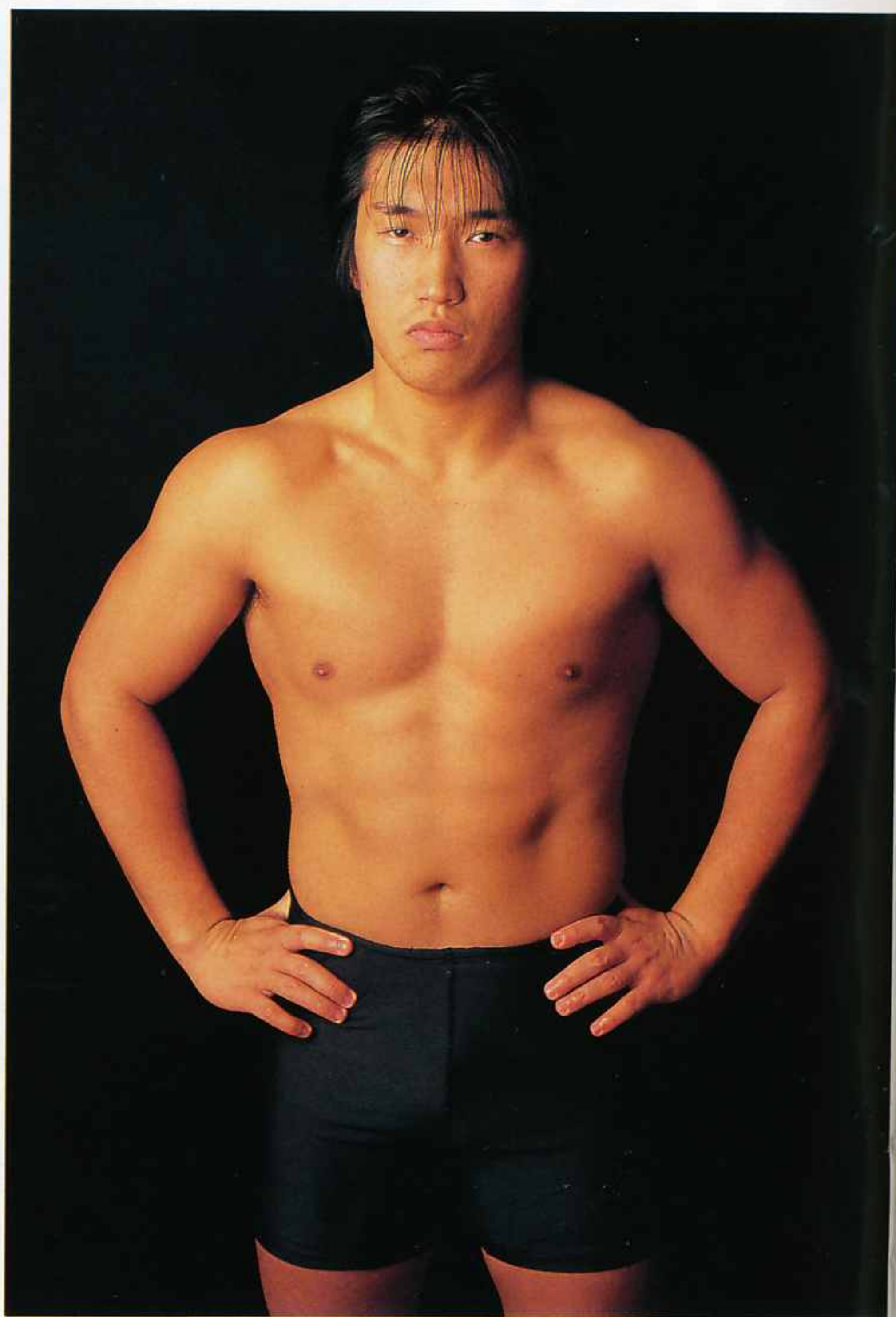
──い～え、ウチはマジメ大歓迎ですよ。いや、でも田中選手はモテそうですね。

レフェリーの島田さん　あ、うちの奥さんの友達とかも「稔クン、カッコいいー!!」って言ってますよ。

──まだいたよ(笑)。しかし、バトラーツは妙な連中ばっかりだから、一般的にカッコいい田中選手は異色ですよね、かえって。さっきね、「誰もがカッコいいと思うことがカッコいい」って言ってたけど、田中選手の場合は、世間一般の価値観にピタッとはまってるのかもしれませんね。バトラーツの連中って趣味嗜好なんかにしても結構マニアックだと思うんですよ。石川社長、島田レフェリーをはじめとして(笑)。だから田中さんは普通の人って感じで逆に異端ですよ。

田中　目立たないっていえば目立たないんですけど、みんなと同じことはやりたくないんで。例えば、僕と同じスタイルの人間が何人もいたとしたら、僕はそのスタイルがやりたかったとしても変えると思うんですよ。みんなと同じことはやりたくないんで。

──でも、田中さんが言う緊張感のある闘いをしていく時に、断然必要なのは〝強さ〟じゃないですか。今、それに向けての特別な練習はしてるんですか?

田中　ボクシングがすごく大事だと思ってるんですよ。この間、1週間しか習う時間なかったんですけど、ボクシングの基本を習おうと思って、教わったこと全部ノートに書いてたんですよ。わずか1週間で40頁以上なってましたよね。それを夜寝る前に見て。

──そうやってノートに取るあたり、藤原組出身って感じがしますよね。何でボクシングが必要だと思ったんですか?

田中　やっぱり仮想バーリ・トゥードなんで、寝技に行く前に倒せたらカッコいいなって。

──あ、やっぱりカッコよさなんだ(笑)。

田中　俺から見てですよ。打撃でスパーンと派手にブッ倒してKOとか、膝十字でギブアップさせる。膝十字で派手に決めればカッコいいじゃないですか。そういう感じですよ。プロだから知らないうちに勝ってたっていうのはどうもね。

──バーリ・トゥードでカッコよく勝つというのは、究極の強さが必要になってきますよね。技術的にも精神的にも。

田中　むちゃくちゃ難しいとは思うんですけど、実際やったら変に考えないで自分のスタイルで行くと思うんですけど。勝つか負けるかはわかんないですけどね。

──例えそれが自分の価値観の中の「カッコよさ」でも、カッコよく勝つにはメチャクチャ強くなきゃならないでしょ。田中さんがこの先、ズッとそれを持ち続けていけるかっていうのは楽しみですね。

田中　目標高く持ってないと進歩しないんで、しかも自分で到達できるような目標にしとかないと。「誰もが憧れるカッコいい勝ち方」。これを途中であきらめないで、自分の中で思ってればだんだん近づけると思うんですよ。「カッコいい勝ち方なんてムリだから地味な勝ち方でもいいや」って思っちゃうと、そこで止まると思うんですよ。カッコいい勝ち方に到達するまでは地味な勝ち方しかできないにしても、目標にしてがんばってれば、いつか到達できるもんだと思いますから。

──その地味な闘い&勝ち方をずっと続けていく我慢は平気なんですか?

田中　自分の目標を到達するまでは、自分のやってることやめないでいようと思ってるんですけど。そういう気持ちがなくなったらこの世界にいてもしょうがないって思ってるんで。そういう気持ちがなくなったら終わりだなって思います!

──ズバリ言って練習しないプロレスラーっていうのは結構いるわけじゃないですか。そういう中でバトラーツの生命線を辿ると、やっぱり道場に行き着くと思うんですよね。

田中　じゃなきゃいけないですよね、本来。レスラーって体見ればわかるじゃないですか。練習してるかしてないか。だ

から、例え大人気になったとしても、練習してなければ実力も落ちていくし人気も落ちていくもんですよ。みっともないだけなんて、誰も憧れないと思うんですよ。カッコよくもないしね。ダブダブの体で試合もしょっぱくてじゃあね。

――せっかくだから、島田さんから見た、田中稔評を聞かせて下さいよ。

レフェリーの島田さん　感情にモロいんですよ～。は～い。

田中　藤原組の時のアホな社長が、組長の上にいたアホな社長なんスけど、石川さんに「おまえ、金を横領してんのか!」って言い出して。石川さんその時、経理だったんですよ。「おまえ首だ!」なんて言い出して。それが悔しくて泣けてきたりとか、他にも結構ありますよ。

――へぇ～。石川社長の横領疑惑っての は笑えるけど(笑)、田中選手も結構ウェットな部分があるんですねぇ。でもそれはリング上からはあんまり漂ってこないですね。熱い部分も見えるんだけど、どっちかっていうとクールな部分の方が目立つでしょ。

田中　あぁ、言われますね。自分ではそういうつもりはないんですけど、人には言われること多いですね。感情が表に出にくいタイプなのかもしれないです。怒るときはすごい怒るし、感動すれば泣くし、笑うときは笑うしっていう喜怒哀楽はちゃんとあるんですけど、リング上でそれが出せないのは、ちょっと欠点かもしれないですね。見てる人が感情移入しにくいっていうんですかね。

――それはやっぱり自分の目を気にしすぎなんじゃないですか? 客観的に自分を見てるから、田中さんの中のカッコいいという価値観とか、みっともないことはしたくないっていうのが、無意識にブレーキをかけちゃってるんじゃないですか?

田中　あ、それはありますね。だから俺のみっともないとこは見せたくないなって。俺のファンは俺がえらい涙腺弱いなんて思わないじゃないですか(笑)。そういう部分は見せたくないっていうのはあるかもしれないですね。

――プロレスに限らず、プロってある程度そういう部分をさらけ出さないと、なかなか人を感動させることできないと思うんですよ。だから、田中さんが自分のカッコいいっていう価値観を振り切った時に、人を感動させることができることもあるんじゃないかと思いますね。

田中　でもまだ時間かかるような気がしますね。思ってるものを完成させないと次に行きたくない気持ちがあるんで。「みっともないと思われてもいいから感情を出そう」って、それは簡単なんですよ。でもそれはしたくないから無意識にブレーキかけてるところがあるんですよね。

――でも「みっともないと思われてもいいから感情を出そう」っていうのは、そんなに簡単なことじゃないと思いますよ。僕はリングに上がったことないからわかんないけど(笑)。

田中　僕もわかんないです(笑)。

――あるストリッパーの子に聞いた話なんですけど、ものすごく踊りの旨いキチッと仕事をするベテランの踊り子さんがいて、その人がある日舞台に出るときに生理になっちゃって、踊ってるうちに血がボタボタ落ちてきちゃったんですって。20年近く踊ってて、そんなこと初めてなワケですよ。彼女は、恥ずかしくて恥ずかしくてしょうがないんだけど、プロだから踊り続けたんですよ。でもその時の踊りが一番良かったってみんなに言われたらしいんですよ。

田中　あ～、わかるような気がしますよね。自分ではみっともないと思ってるんだけど、人から見たらものすごいカッコよかったっていう。

――何かそういう部分でもプロレスって難しいですよね。いかにカッコ悪い自分をさらけ出せるかっていう部分でも。

田中　道は違えど、ちょっとは通じる部分があるんでしょうね。お客さんに見せるって意味では。ところでそのストリッパーとはヤっちゃったんですか?(笑)

――というわけで、どうもありがとうございました(笑)。

田中　やなオチですね(笑)。大丈夫ですかね、こんなんで?

〈96年11月11日、埼玉県越谷・バトバト道場にて収録〉

イラストレーション＝松本晴夫

『紙

バトバトってなあに？！

〜地球征服作戦〜プロジェクトB ATTLARTS SYMPOSIUM編

本日の出席者

紙のプロレス編集長・山口昇

紙プロの天敵・FIGHTING TV「SAMURAI!」編成部長・柳沢忠之

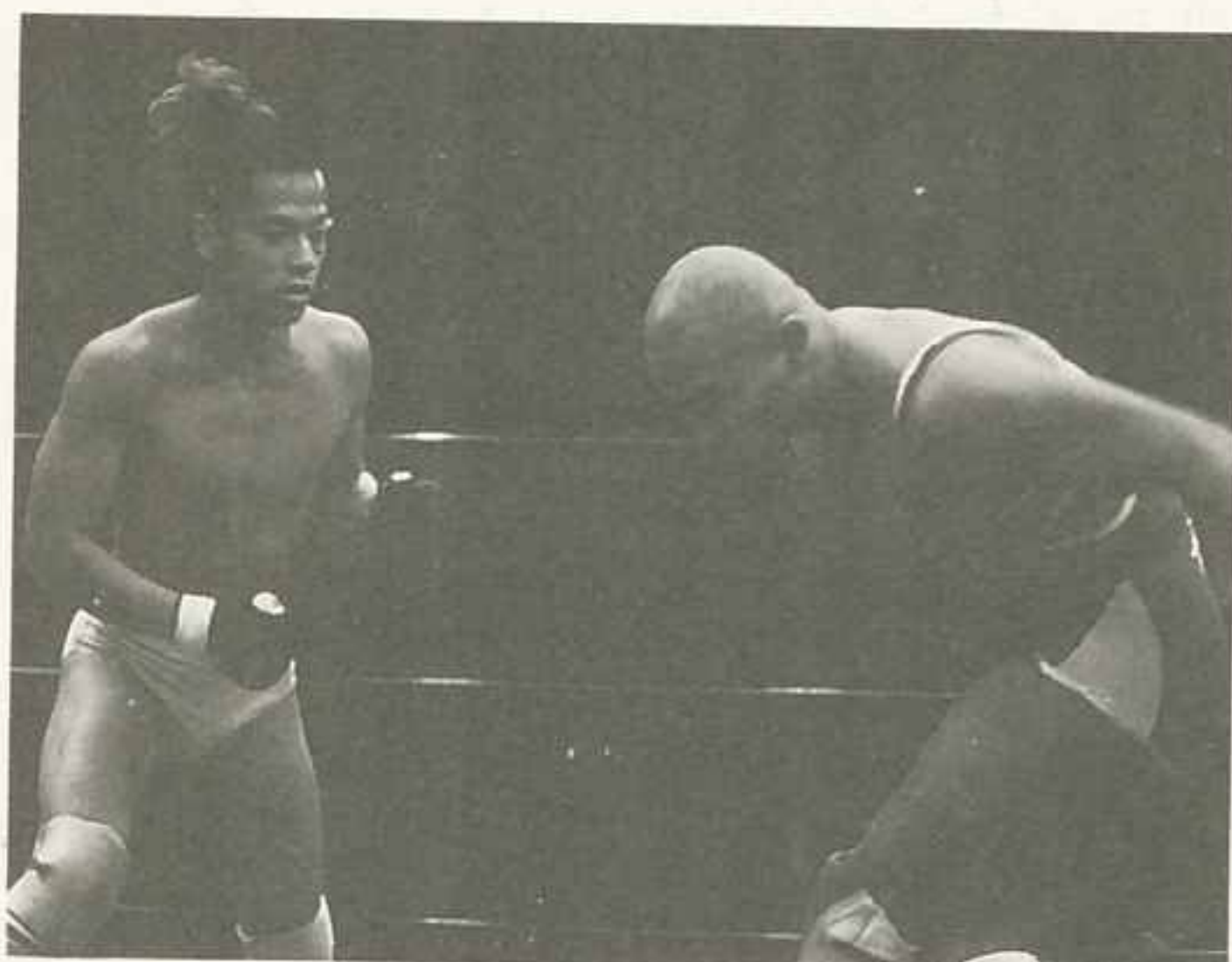
バカ広報＆アホレフェリー・島田裕二

紙のプロレス最終兵器・のものも（♀）

紙のプロレス練習生・ジュゴン（〒）

特別ゲスト FIGHTING TV「SAMURAI!」編成部長・サダハルンバ谷川

「藤原組の若いのはおもしろいな」って思って（のものも）

山口　今日は平成の海賊男・柳沢忠之氏をお迎えして、バトラーツとは何か!?ということを話したいと思っているんですがね。
柳沢（または社長）　のものも、バトラーツって何がおもしろいの？（笑）。
島田　いきなり直球できましたね。
のも　バトラーツ見たことないのぉ？
柳沢　ない！
島田　『SAMURAI!』の開局パーティの時に見たじゃないですか。
柳沢　見ないよ。見ない見ない。
のも　下北沢だっていたじゃない、ねー。
柳沢　いたけど見てない（笑）。見る気しなくて（笑）。
山口　今日は『SAMURAI!』キャスターの島田裕二さんもお迎えしています。
島田　サイキョッ!!
柳沢　それから言っとくけど、島田さん、『SAMURAI!』もつまんないよ（笑）。
山口　全国で3人くらいしか見てないんだから、キャスターなんて一生懸命やっちゃダメだよ（笑）。で、のものも、バトラーツのおもしろいところを言って。
のも　あのね、他のプロレス団体よりも選手の気持ちが伝わってくるのぉ。
山口　えへへへへ（笑）。どうですか社長！　もう1回俺繰り返そうか。他の選手よりも……
のも　他のプロレス団体よりも！
山口　他のプロレスよりも他の選手が伝わってくる？　だっけ（笑）
柳沢　全然わかんない（笑）。何言ってんだよ。
島田　他のプロレス団体よりも、選手の気迫が観客に伝わってくると。
山口　つけ加えてないか、今（笑）。
島田　観客を引きつける何かがあるってことですよね、は〜い。
山口　のものも、そうなんですか？

オヤジ狩りしてそうな（？）小野とオヤジ食いしてそうな（？）アレク

のも　ほえぇぇぇ。
山口　そこで首かしげてどうすんだよ（笑）。あ、読者の皆様、『紙プロ』の秘密兵器・のものもです。バトラーツ、みちのくプロレスの大ファンです。で、お前は何してんだよ、そこで！
ジュゴン　俺、バトラーツ知らないッスからね〜。
山口　誰もお前になんか聞いてないよ！
柳沢　ジュゴン、おもしろいな。
山口　けっこういいビジュアルしてるでしょ。『紙プロ』練習生・ジュゴン。ま、ジュゴンはいいとして、専門誌などで「バトラーツがおもしろい」などという声を聞きますが……。
柳沢　本当におもしろいって言ってんの？　大バカヤロ〜だね（笑）。
山口　はじまったぞ。じゃ社長、バトラーツの何がダメか言ってもらいましょ。
柳沢　あんまり知らないもん。
島田　そりゃしょうがないですよ、まだできたばっかりなんだから、は…い。
柳沢　いつできたの？
島田　今年の4月です、は…い。
柳沢　半年やってて知られてないんじ

GO GO!! バトラーツ
ーバトラーツの歩みー

〈解説〉**島田裕二**
バトラーツのインチキ広報&レフェリー&『SAMURAI!』キャスター。沈黙恐怖症が悩みの種。合い言葉は「サイキョッ!!」

G　AORAのスタジオマッチを経て、いよいよ石川社長の地元・小田原にて、ついにバトラーツがこの世に生まれました、はい。うちの大家さんに「やってみな」って言われて越谷のGAZAホールという結婚式場でも試合をさせて頂きました。そこそこお客さんも入り、順調な旗揚げ戦でした、は〜い。

『BATTLARTS Debut "Never〜Quit"』
4月13日〜18日（全3戦）

イラストレーション＝松本晴夫

ATTLARTS SYMPOSIUM編

「SAMURAI!」はバトラーツにかけてますんで（サダハルンバ）

や、お話になんないな（笑）。

島田　そんなことないですよ。バトラーツは最近『トゥナイト』にも出てますしね。『SAMURAI!』にも……べらべらべらべら（一人で喋り続けること2時間！）

柳沢　べらべらうるせーな、男のくせに！（笑）

山口　この沈黙恐怖症！（笑）。男はだまって勝負って、おたくの団体はできないのかねぇ。

島田　ベシャリがうちのウリですから。

山口　どんなウリなんだよ！（笑）。じゃあ、のものもはぁ、どうしてバトラーツを見に行こうって思ったの？

のもも　最初は旗揚げ戦。

山口　どこにじゃなくて（笑）、どうして！　どうして見に行ったの？

のもも　1月にみちのくと藤原組が合同で後楽園ホールで試合したじゃないですか。あれで「藤原組の若いのはおもしろいな～」って思って～。

柳沢　藤原組の若いの！（笑）。

山口　のものも、プロレス見続けて50年だから（笑）。

島田　のものもに「若いの」って言われるとは(笑)。うちの選手まだ若いんだな。

山口　今日はアマチュアリングス第2位の島田裕二さんもお迎えしております（笑）。

谷川　あれあれぇ、何やってんの？

山口　またあんどくさいのが来たよ(笑)。元・『格闘技通信』編集長、現在は『SAMURAI!』の……、何ですか、肩書きは？

谷川　んふ？　ここだけの話、編成局長なんだ、ボク。

山口　編成局長のサダハルンバ谷川氏も特別ゲストとしておいで頂きました。

谷川　みなさん何やってるんですかぁ？

山口　バトラーツの魅力についてお話しているんですよ。

谷川　はぁはぁ。

柳沢　あと、のものもについて。

谷川　あ～、この方がのものもさん。いつもお噂は聞いているんですよ。

山口　『紙プロ』の隠し玉です。谷川さん、バトラーツは見たことありますか？

谷川　はぁはぁ、ありますよ、もちろん。いろんなところで試合やってますよね？

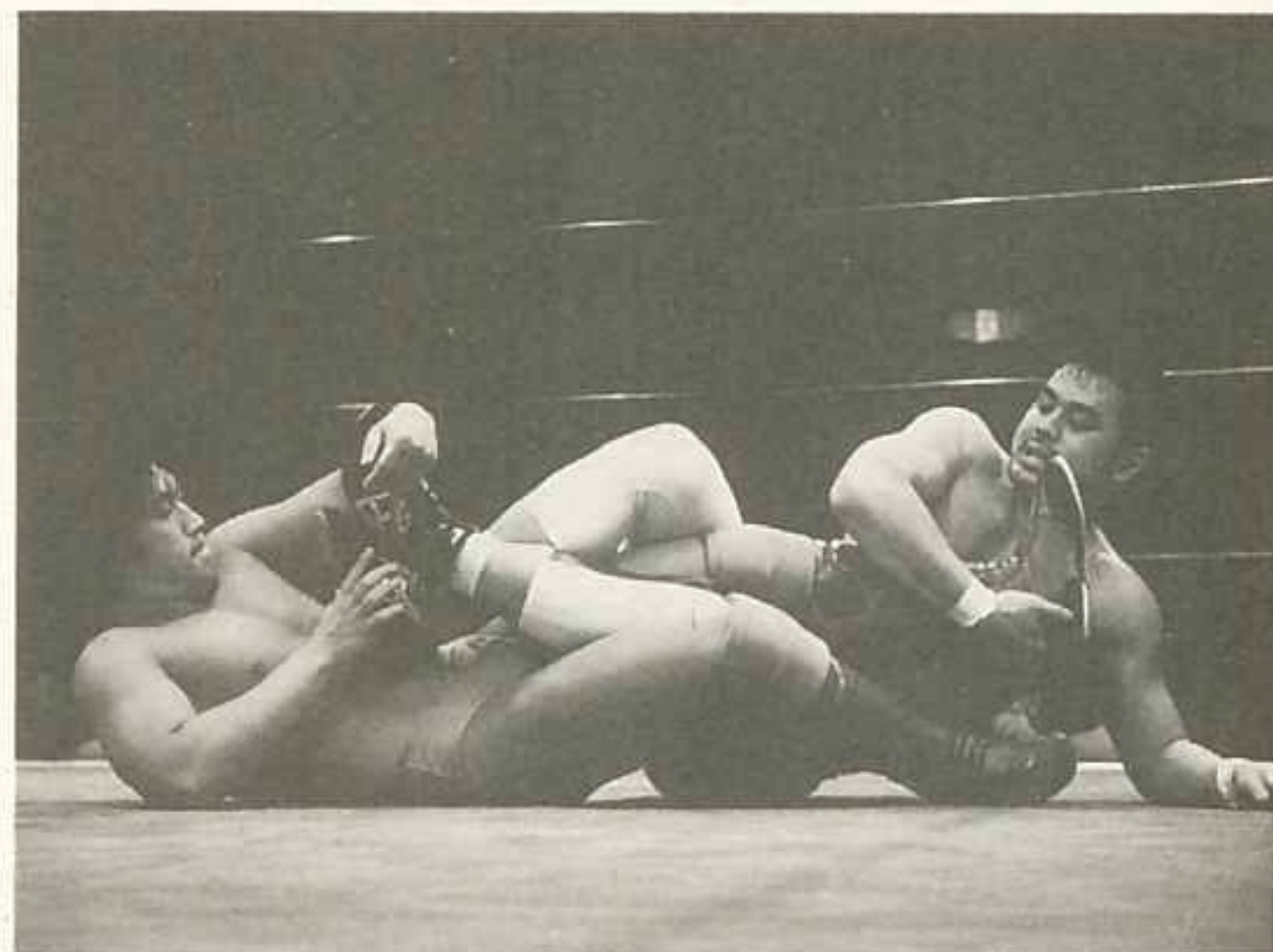
島田　はい（笑）。

谷川　みちのくでも見ましたし、1月も見たし、開局パーティでも見たし。

山口　みちのくプロレスが一番おもしろいって言ってたよ。バトラーツなんて記憶に残ってないって（笑）。

谷川　うふ。あれぇ？　こちらの方はどなたですか？

山口　うちの新人です。

谷川　えっ～、レスラーじゃないんです

みちのくとバトラーツは（偽善）地域密着型!!

このシリーズで伝説の〝チーム・タコ〟が誕生したわけです、はい。チーム・タコと石川＆アレクのタッグマッチはベストバウトと絶賛されましたね、はい。会場に見に来てたリッキー・フジさんにも「おもしろいね、フーッ」とか言ってもらいまして（笑）。金沢大会もなかなか良い出来でしたね、はい。

『Never See Before』
5月31日～6月5日（全5戦）

臼田は以前からバーリトゥード志向があったんですが、その本場ブラジルから声がかかり、しかも相手はグレイシーの四天王・ヴァリッジ・イズマイウと聞けば、これはもう行くしかないと。本場ブラジルで試合ができるなんて、野球で言えば野茂みたいなモンですよ（笑）。ま、負けちゃいましたがね。

いつもはふざけているバトラーツだけど、臼田選手がマジメにバーリトゥードに挑戦!!　6月22日

かぁ？
ジュゴン　（ニコッ）
山口　本名知らないんですけど、通り名はジュゴンっていうんです。
谷川　あ～、この人がジュゴンなんだぁ。へぇ～。濃いねぇ～。
山口　夏にクーラーがないからユニットバスに水はって寝てるんですよ。
谷川　へぇ～。のものもさんは何でのものもって言うんですか？
のもも　ほえ～？　のものも？
谷川　野茂のファンなんですか？
島田　最強!!　私が通訳します。のものもは野本という名前なんですよ。
谷川　はぁ～、そうなんだ。
山口　でもね、自分の名前間違えるんですよ。電話でね「ダブルクロスの"のもた"ですけどぉ」って(笑)。自分の名前間違える人、僕は生まれて初めて見ましたよ。
谷川　うふふ、すごいねぇ。
柳沢　やっぱり最終兵器だな。
山口　でね、最終兵器ののものもがバトラーツとみちのくプロレスの大ファンなんですよ。
谷川　ほぉ～ん。バトラーツはいい団体ですよね。
山口　また始まったよ。
谷川　バトラーツは好かれる団体ですよ。島田さんのそのつぶらな瞳を見てそう思った。
山口　つぶらなお腹？（笑）。

何だかんだ言って要は前座だろ（柳沢）

左から、『紙のプロレス』が大変な時に呑気にアメリカなんかに行きやがり、後でえらい目に合う本誌編集長・山口昇。インチキ人間・島田裕二。『紙のプロレス』のニューフェイス、甘味王&泥レス王・のものも。『紙のプロレス』とケンカ別れした『SAMURAI』のけっこうえらい人・柳沢忠之。『SAMURAI』の一番えらい人・サダハルンバ谷川。

島田　バトラーツは客観的に見ていい団体だと思いますけどね、は～い。
山口　何でアナタが客観的に見れるんですか！（笑）
島田　いや、キャスターの目で見てね。いい素材が揃ってますよ、は～い。
山口　社長、眠たそうな顔してるよ(笑)。
柳沢　もっとおもしろいこと言えよ！
谷川　島田さんは緊張しすぎだ。
山口　島田さんのキャスターぶり、今日見せてもらったんだけど、もう最悪。お話にならない。だいたいテレビに出るからってポマードぬっちゃダメだよ。
谷川　へぇ～、ポマードぬってんだ。
島田　ムースですよ(笑)。今時ポマードなんてぬらないっちゅーの（笑）。
柳沢　これからポマードぬってることにしよう（笑）。ポマード島田！
山口　で、のものもはバトラーツの試合は何回くらい見てるの？
のもも　けっこういっぱい？
柳沢　ガハハ、何を聞いてもいいですね、この人は。何回やってんの？
島田　もう30回以上やってますよ、地方回ってるし、いろんな団体出てますから。
谷川　頑張ってるねぇ。バトラーツは好かれる団体ですよ。
山口　だから何でなの？（笑）
谷川　「なぜバトラーツは好かれるか」っていうテーマでいきましょう。
島田　なぜバトラーツは好かれるか……、やっぱり社長じゃないでしょうかね。
山口　石川雄規の人柄ってこと？
谷川　えっ、石川さんって、社長なの？
山口　……全国の皆さん、こんな専門チャンネルの編成局長がいていいんでしょうか？（笑）

小野武志の親戚が呼んでくれて福島大会が決定し、どうせだったらシリーズやろうということで、組まれたんですよね、は～い。で、地元のまさまささんという方が協力してくれて、『まさまさ杯』というイベントを行ったわけです、は～い。そして、バーリトゥード帰りの臼田が見事、優勝したんですね。

『Born to be BATTLARTS』
7月17日～21日（全5戦）

毎年ダークダックスを呼んでいるお祭りに、今年はプロレスでもやってみようということからうちが呼ばれたわけです、は～い。焼き肉大和というのは越谷イチうまい焼き肉屋と評判の店なんですよ。そこが主催しているお祭りで、ダークダックスよりバトラーツの方が客入ったらしいですよ、は～い。

『焼き肉大和祭り』
7月24日（無料イベント）

『紙

イラストレーション＝松本晴夫

～地球征服作戦～ プロジェクトB ATTLARTS SYMPOSIUM編

柳沢　バトラーツのコンセプトは何？

島田　そうですね、最強!! プロレスって知らない人多いじゃないですか。おもしろいことをもっとみんなにわかってほしいなって思って。みちのくさんなんか、子供からお年寄りまでみんな楽しんで見てるじゃないですか。バトラーツもそうしたいですね、は～い。

山口　偽善的なのが好まれるわけだ（笑）。

島田　「ちょっとバト行こうよ」って渋谷の若者達が言うようになったら作戦成功かなと。世界戦略の第一歩。

谷川　ふぅ～ん。

山口　のものも、起きてる？（笑）

柳沢　バトラーツってインディーなの？

島田　インディーって枠にも入らない小宇宙ですね。

柳沢　インディーにも入ってないって、そんなの虫けら同然じゃない。

島田　独立してるはしてるけど……。そういったら新日本だって、全日本だって独立団体じゃないですか。

山口　言葉遊びしてるヒマはないんだよ！

谷川　いや～、今日はバトラーツのいい話が聞けましたぁ。『SAMURAI!』はバトラーツにかけてますから、頑張って下さ～い。

山口　疾風のように去って行きました。

のも　柳沢さんはぁ、下北とか会場行ってるのに、何で見なかったの？ すご～く良かったのに。忘れちゃったぁ？

柳沢　ガハハハハ、うん、忘れちゃったぁ（笑）。

のも　バトラーツの魅力は、気持ちが伝わってくるんですよ～。最初にも言ったけど。

山口　あー、そういえばそんなこと言ってたね（笑）。

柳沢　忘れちゃったぁ（笑）。

のも　痛さが伝わってくる。

山口　痛いんだったらバラ線に突っ込んでいくのも痛いでしょ。

のも　うん。でもあれは強くはない。痛いだけ。

石川雄規は完成されたバカだね（山口）

線は細いが気と力は強い小野ちん（今は坊主）

山口　痛いだけ（笑）。でもね、ここだけの話、社長は密かにバトラーツ褒めてたりするんですよ。今日はのものも前だからちょっとあがってるけどね（笑）。

柳沢　のものも前では口がきけない（笑）。でも、ようは前座だろ？（笑）。

島田　キツイなぁ。まだこれからの団体ですからね。

山口　俺、びっくりしたんだけどね、石川雄規ってキャリアまだ4年なんだって。小野なんて1年ちょっとなんだよ。

柳沢　小野ってオヤジ狩りとかしてない？

島田　ガハハハ、それはしてないでしょ。

柳沢　ま、いいけど、ようはいい前座だよね。

島田　これからこれから。

柳沢　これからもっといい前座になんのかよ。

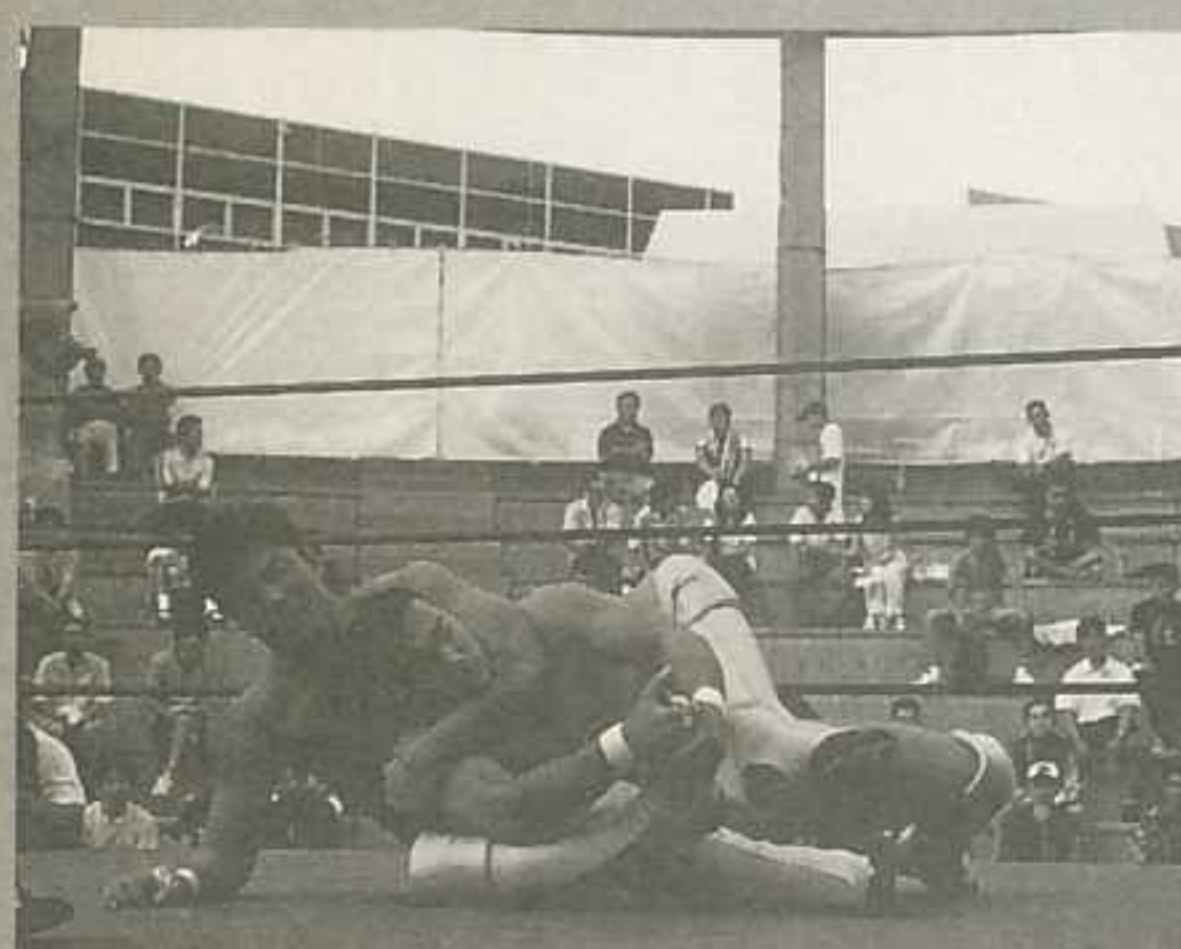
山口　一生前座から抜け出せない（笑）。

島田　人口500人の町なのに、500人を見に来させる。これがバトラーツの本心ですから。

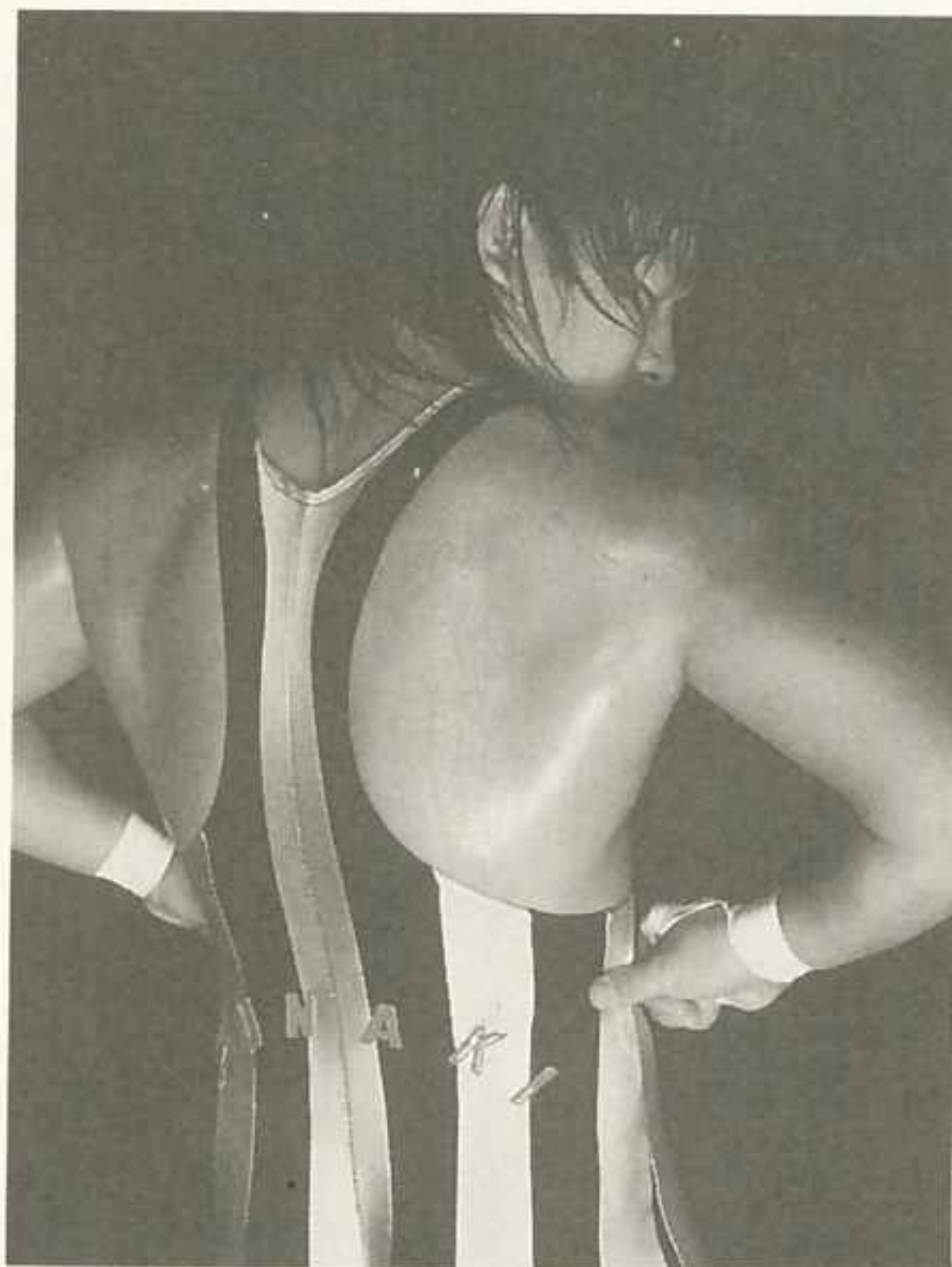
山口　本心って使い方違う

石川の地元・小田原の商工会議所から呼ばれて出たのがこの小田原祭りですね。4万人の客が「い～しかわ、い～しかわ」と大コールを送ったと。ま、実際は4千人くらい来てましたけど（笑）。祭りには10万人くらい来てましたがね、はい（笑）。でも盛り上がりましたよ～、は～い。

『小田原祭り』
7月28日（無料イベント）

バトラーツで誰が一番強いのか？ということで、リーグ戦を行ったんですね、はい。北は北海道、南は徳島まで大々的にシリーズを組んで全国各地回りました。徳島ではUインターの垣原さんが特別参戦してくれました。写真は徳島のカッキーVSヨネ戦ですね。ヨネ負けちゃいましたがね、は～い。

『ヤング・ジェネレーションバトル'96』
8月1日～9月1日（全11戦）

地域密着型で世界制覇を狙います!(島田)

よ（笑）。
柳沢　志がせこいねぇ。
島田　過疎の町に行って、じーさんばーさんとかが「良かったよ、力道山思い出したよ」とかって言ってくれたらうれしいですよね、は〜い。
山口　何で力道山思い出すんだよ！
柳沢　そうだよ、小野武志見て、何で力道山思い出すんだよ！
山口　でもとりあえずは今日、練習だけはしてたね？　毎日練習してるの？
島田　もちろん。道場ある団体は今、少ないじゃないですか。
のも　しかも練習してる団体も少ないよねぇ〜。
山口　いいぞ〜、のものも。
柳沢　のものもなら何を言っても許されるね（笑）。
山口　普通、道場あったら練習しないもんね（笑）。
山口　バトラーツってのはFMWとかみちのくとかにもあがってるじゃない。一体何をやりたいの？
島田　世界征服。
山口　全国の読者の皆さん、今日は柳沢タダタダが来てますんで、柳沢さんにバトラーツの定義なんぞをしてもらいましょう。
柳沢　いいんじゃないの。バカでいい（笑）。
山口　一番バカなのは誰？
のも　やっぱり石川社長でしょ〜（笑）。
島田　社長はイケてますよ。
柳沢　石川社長はきてるね。できあがってる。
山口　ガハハハ、完成されたバカ（笑）。
柳沢　でも、こないだの後楽園、チラッと『SAMURAI』で見たけど、やっぱいい前座だよね〜（笑）。
島田　いや、そこがいいんでしょうね。
柳沢　何か安心するね。今のプロレスには前座がないんだね。
島田　ちょっと見に行ってみようって気にさせるところがいいんじゃないでしょうかね、は〜い。
柳沢　何の目玉もないもんね、バトラーツは。でも猪木さんも言ってたよ。「今のプロレスには前座がない」って。
山口　深い言葉だ。
柳沢　昔の新日本は前座がしっかりしてたからね。日明兄さんのニールキックで平田の唇が取れちゃうんだよ。
山口　ジョージのクツも脱げちゃうんだよ。大変だよ、もう。
のも　でも石川社長の方針はいいですよね。無理してお客さん呼ぼうって考えてないっていう。
山口　東京ドームでやれるような力がついても、200人くらいのライブハウスでやって、6万人の行列を作るのが夢だって。イカレてるよ、あの男は（笑）。それができたらバカから大バカに昇格するよ。
柳沢　それはいいスケールだよ。
島田　社長はバトラーツになって、はじけましたからね。
柳沢　じゃあ、のものも、みちのくとバトラーツの共通点って何？
のも　ほぇ〜。地域密着型ってとこかなぁ。
柳沢　地域密着型なの？　世界戦略じゃないのかよ！
山口　地方行く前に世界だろ。

ほとんどみちのくにいっている船木さん

昼夜連続興行で、北沢タウンホール最高動員数を記録した伝説の試合です。ヤンジェネの決勝戦ですね、はい。優勝は池田大輔でした。このシリーズは函館がお客さん、4人くらいだったのを除いて（笑）、他はそこそこ入ってたというか、まぁ悪くはないなって感じでしたね、は〜い。

『ヤング・ジェネレーションバトル'96』
9月1日（優勝決定戦）

南熱海、安中が60人ほどの客入りという『トゥナイト』でも放送された伝説のシリーズですね、はい。台風で宣伝ポスターが剝がれちゃったのが客足が遠のいた原因だと思いますね。終わった後に「何だ来たんじゃ〜ん、バトラーツ見たかったなぁ」っていう電話が1万件くらいありましたよ（笑）、はい。営業部長の"羽賀元太"さえ退社しなければね。九州で牧場やるって言っていなくなったんですけどね。は〜い。

『BAD BOYS BATTLARTS』
9月30日〜10月4日（全3試合）

『紙

イラストレーション＝松本晴夫

〜地球征服作戦〜プロジェクトB ATTLARTS SYMPOSIUM編

オレ、見たことないっスから〜（ジュゴン）

柳沢　地方相手にしてたら世界なんていけないよ。のものもは何で地域密着型がいいと思うの?

のも　その地道さがいいんですよ〜。

山口　ダメなヤツほど応援したくなるんだよな（笑）。

島田　母性本能（笑）。

柳沢　ガハハハ、ダメなんじゃねーかよ（笑）。

島田　最近女の子のファン多いですよ、うち。やっぱり母性本能くすぐってるんですかね（笑）。

のも　くすぐられちゃった〜。

山口　『SAMURAI』みたいに高飛車じゃ大衆はついてこないんだよ（笑）。やっぱり母性本能くすぐらなきゃ。

のも　石川社長の笑顔もいい（笑）。

山口　気持ち悪いよな、あの笑顔（笑）。サスケ社長と石川社長は共通点ある?

のも　2人とも頭おかしいですよ!

島田　がははは。サスケ社長も素敵ですよね。

山口　じゃあ戻ってきたところで、サダハルンバ、最後の締め!

谷川　バトラーツねぇ、でも柳沢くんは本当の所「バトラーツはイチ押しだぁ」って言ってるんだよ。

柳沢　『SAMURAI』で使い放題だから（笑）。

島田　ええーっ、そんなぁ。でも仕事選びませんから、うちは。ホモ雑誌にも出ましたしね、は〜い。

山口　じゃあバトラーツはホモ団体を目指して頑張って頂くということで……、って締まんないよ、これじゃ（笑）。じゃ、のものも、最後のしめ!

のも　バトラーツを見て……。

島田　もっといっぱい見ましょうってことですよね。

のも　いっぱいじゃなくて1回……。

柳沢　がははは。あんなもん1回くらいでいいよね（笑）。

のも　そうじゃなくて、1回くらいは見た方がいいよって。

山口　1回くらい見ても損はないと。

のも　損ない〜。得ですよ。チケット代も安いし。

柳沢　チケット買わないもんなぁ。

島田　この業界にいると買わないですよね。僕もコンサートくらいしかチケット買わないもんなぁ。

柳沢　何のコンサート?

島田　マッキー。

柳沢　何?　真樹日佐夫?

島田　ガハハハ、真樹先生が何のコンサートやるの（笑）。

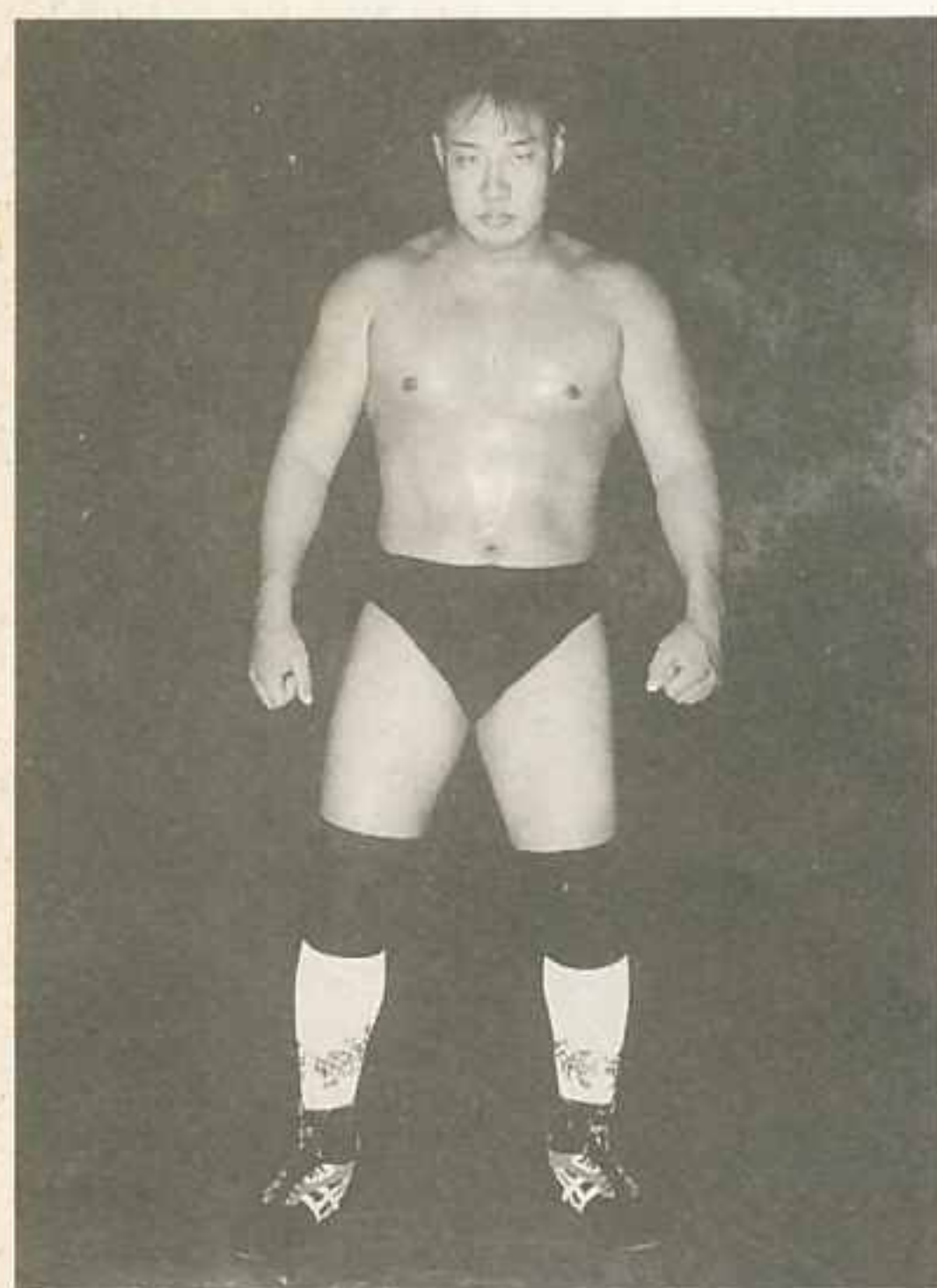
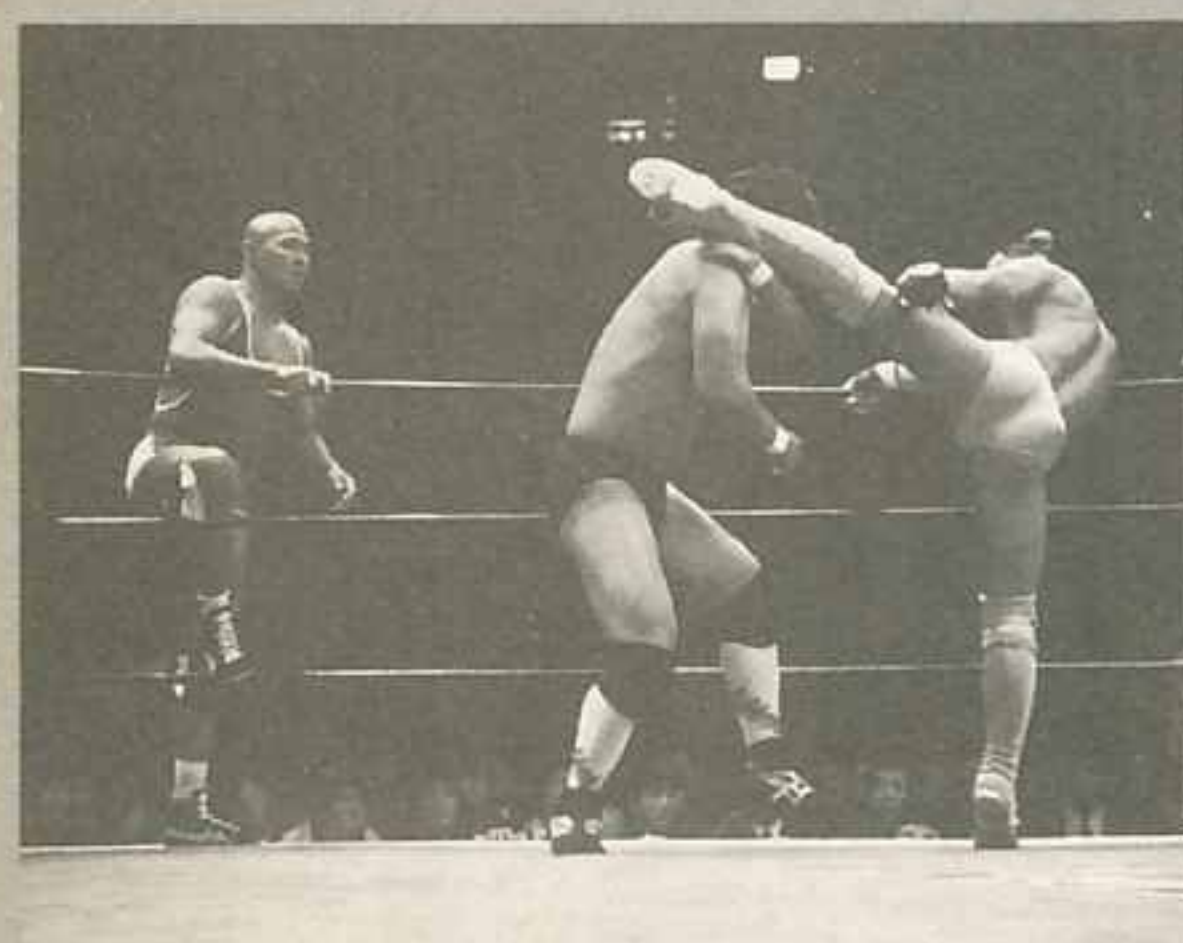
柳沢　何だよ、マッキーっていったら日佐夫だろ。

山口　んもー、この対談、どこ使えばいいんだよ（笑）。ボツ!

本物のバカ・闘魂伝承!　石川社長

サスケ社長があんなことになってしまって（頭蓋骨骨折）、微弱な力ながらも「世界が平和であるように」うちの力もお貸ししようということで、無償で提供させてもらったんですよね。あの後、サスケ社長の高野拳磁with.tを見て、ギャラもらえばよかったと後悔したんですけどね、は〜い（笑）。

『みちのくプロレス〜竹脇〜』
10月10日（両国国技館）

10月27日の『越谷まつり』を経て、とうとうバトラーツが後楽園へ初進出したわけですね、はい。噂が噂を呼び、後楽園ホールが満員になってしまったという。大盛況でしたね、ホントに。これでやっと前シリーズの穴埋めができたなと。ガハハハ……、笑いごっちゃないんですけどね、は〜い。

『Let's enjoy BATTLARTS』
10月30日（後楽園ホール）

から、例
習してなけ
も落ちて
だけなんて
よ。カッ
体で試合
――せっか
田中稔評
レフェリー
ですよ～。
田中　藤原
の上にいた
さんに「お
って言い出
だったんで
言い出して
りとか、他
――へえ
は笑えるは
ットな部分
はリング
ですね。熱
っちかって
立つでしょ
田中　あ

ザマアミロ!!

鉄は熱いうちに打つ!!
のものももひざまずく超新鮮なカードが目白押し!!
バトラーツ後楽園進出第2弾新春大会!!

プロジェクトB
～地球征服作戦～

※プロジェクトBの「B」は馬場さんのBでもブッチャーのBでもなく、『バトラーツ』の「B」の意。

97年1月21日（火）
後楽園ホール
18:00開場　19:00試合開始

みちプロ参戦!
初代タイガーマスクvs田中稔戦
決定!!

料金:特別席5000円　指定席4000円　立ち見3000円（当日のみ）

主催:格闘探偵団バトラーツ　協力:みちのくプロレス

緊急特報

紙のプロレスRADICALがプラチナチケットを闇ルートで極秘入手したあるよ!
とてもいい席あるよ。早くしないと売り切れるあるよ。

チケットRADICAL03・5992・3240

［その他のチケット発売所］チケットぴあ／03・5237・9999　チケットセゾン／03・5990・9999　後楽園ホール／03・5800・9999
大山アメリカン／03・3962・6443　チャンピオン／03・3221・6237　レッスル渋谷／03・3464・0078　レッスル池袋／03・3989・0056
アイドール／03・3371・5211　書泉ブックマート／03・3294・0011　プロレスマニア館／03・5276・0304
CNプレイガイド／03・5802・9999　バトラーツ／03・3546・8525（サイン入りグッズ付き）

新 ザッツ・レスラー ①

我れ、思う。故に我れなし！

山本隆司

イラストレーション＝松本晴夫

ああ、何もかも、そう、何もかも変わってしまった。赤が青に、白が黒に、丸いものが三角に、真っ直ぐなものが曲がったものに、まるで世界は激変した。

本当に、こんなことって、ありうるのだろうか？ そんな、バカな！ そんな、アホな！ 私が『週刊プロレス』の編集長を辞めただけで、マット界が一変するなんて、誰が予想しただろうか？

すべてが、のっぺらぼうになった。のっぺらして、ぼうっとしているのだ。

オイ、オイ、大変だぞ。『広辞苑』を引いたら、のっぺらぼうとは滑(なめ)らかで凹凸がなく、つかみどころがないこと、変化のないこと、また、そういうものと書いてあった。なるほど凹凸がないよなあ。

変化もないよな。次に丈が高く、顔に目・鼻・口のないばけものとあった。そうか、世の中にばけものが増えたということか？ そりゃ納得だ。最後に思慮がなく、まのぬけていること。また、そういう人。ぬっぺらぼんともいう。ほう、ぬっぺらぼんか？

まあ、それでも世界は、いつも存在し続けるということである。カチ、カチ、カチ。

地球は太陽のまわりを、規則正しくまわり続ける。カチ、カチ、カチ、カチ。

どんなにもがいても、私のために世界があるわけではない。我れ思う、故(ゆえ)に我れなしである。そう、我れ、なしである。デカルトは間違っていたのだ。

週プロに休みなし。

週プロに結婚なし。

週プロに人生なし。

なし、なし、なしの〝三無し〟である。

ああ、それなのに世界は変わった。佐藤正行記者が突然、私の所にやってきて、こう言った。「山本さん、今度、ボク、結婚することになったので、仲人をお願いします」

ナニ、仲人？ 三無しの一角がついに崩された。ターザン主義も、もはや、一巻の終わりである。年貢の納め時がやってきたということか？ いさぎよく往生しろ！ 所詮、人生とはこんなものよ？

「俺は、仲人かあ！」

ワ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ！

笑いごとではない。私はついに仲人になってしまったのだ。佐藤のヤツ、よくぞ言ってくれた。ターザンを最初に殺したのは佐藤、お前だ！ ほめてつかわす。

それにしてもである。

カチ、カチ、カチ、カチ。

やっぱり、地球は私のためにまわってはいなかった。そんなこと、当たり前である。

カチ、カチ、カチ、カチ。

新日本を追われた猪木さん？

あなたの気持ちが、よく、わかります。

シューティングを追われた佐山さん？

あなたの気持ちが、痛いほどわかります。

同じ追われたもの同士。

「俺は猪木だ！」

「俺は佐山だ！」

そう、叫んでも誰も文句はいえまい。

そうだ、また、今年もクリスマスの唄が聴ける季節となった。ジングルベル、ジングルベルとクリスマスがやってくる。

聖(き)よし、この夜、星は光り……カチ、カチ、カチ、カチ、カチ。

クリスマス。我れ思う。故に我れなし。

サンタクロースに吹雪のたとえもあるさ！ さよならだけが人生だ。カチ、カチ。

『紙のプロレス』本誌23号は、いつ出るかわかりません！

問い合わせ不可

紙のプロレス

RADICAL

次号は2月中旬発売予定

発刊記念MEMO

紙のプロレス RADICAL

次号は2月中旬発売予定

来年こそ世界に羽ばたきます!

発売:ワニマガジン社　発行:ダブルクロス

（株）ダブルクロスからの求人情報

将来ブラジル・チャンピオンになりたい人を募集します。

『紙プロ』をつくってる会社、（株）ダブルクロスでは、こんなクールな時代に、①編集のできる編集者②編集ができなくてもいい面白い人を地球規模で募集します。さあ、あなたもボクたちとトロピカ～ナな仕事をしませんか?

資格:①編集経験者（未経験でも面白ければヨシ!）　②鈴木京香似のおしとやか美人（男でも面白ければヨシ!）
職種:①『紙のプロレス』他、小社出版物の編集　②簡単な雑用&難しい雑用（アルバイトでも可）
勤務地:①②東京都池袋　　**初任給:**たぶん出ます!（でも仕事の面白さと辛さは保証付き）
勤務時間:①仕事があれば随時　②お昼頃から夜8時くらいまで。応相談
年齢:①②30歳くらいまで（例:68歳でも面白ければいいです!）
特典:入社してスグ、あなたのキャラクターに合ったホーリー・ネームを贈呈します（例:タコヤキ君・カタブツ君・ジュゴン）
採用方法:書類選考の上、小社オールスター・キャストで面接を行います

履歴書（写真添付）と論文（「紙プロと私」400字×2枚）と自己PRグッズ等を同封の上送付してください。こちらから面接日を連絡します。

〒171　東京都豊島区南池袋2−33−6　大同ビル3F　（株）ダブルクロス「世界戦略係」
＊詳しい問い合わせは　TEL.03（5992）3240

Fighting Event Report

山口昇のロープ間際で脳天くだ記

今号の

BEST 5 MENU

96.10.8　高田VSブッチャー戦？

96.10.10　高野拳磁 with T衝撃の登場

96.10.30　バトラーツ初の後楽園？

96.11.3　フォアマンは素敵でした。

96.12.1　締切に間に合うのか？

96.10.8

東京プロレス
200%ナイト
東京プロレスvs安生洋二
大阪府立体育会館

ナニィ! 高田ーブッチャー戦? これは巨大なシャレなのか?

仕事でトラブルがあったときなど、人々は「シャレにならないよ～」という言葉を吐く。

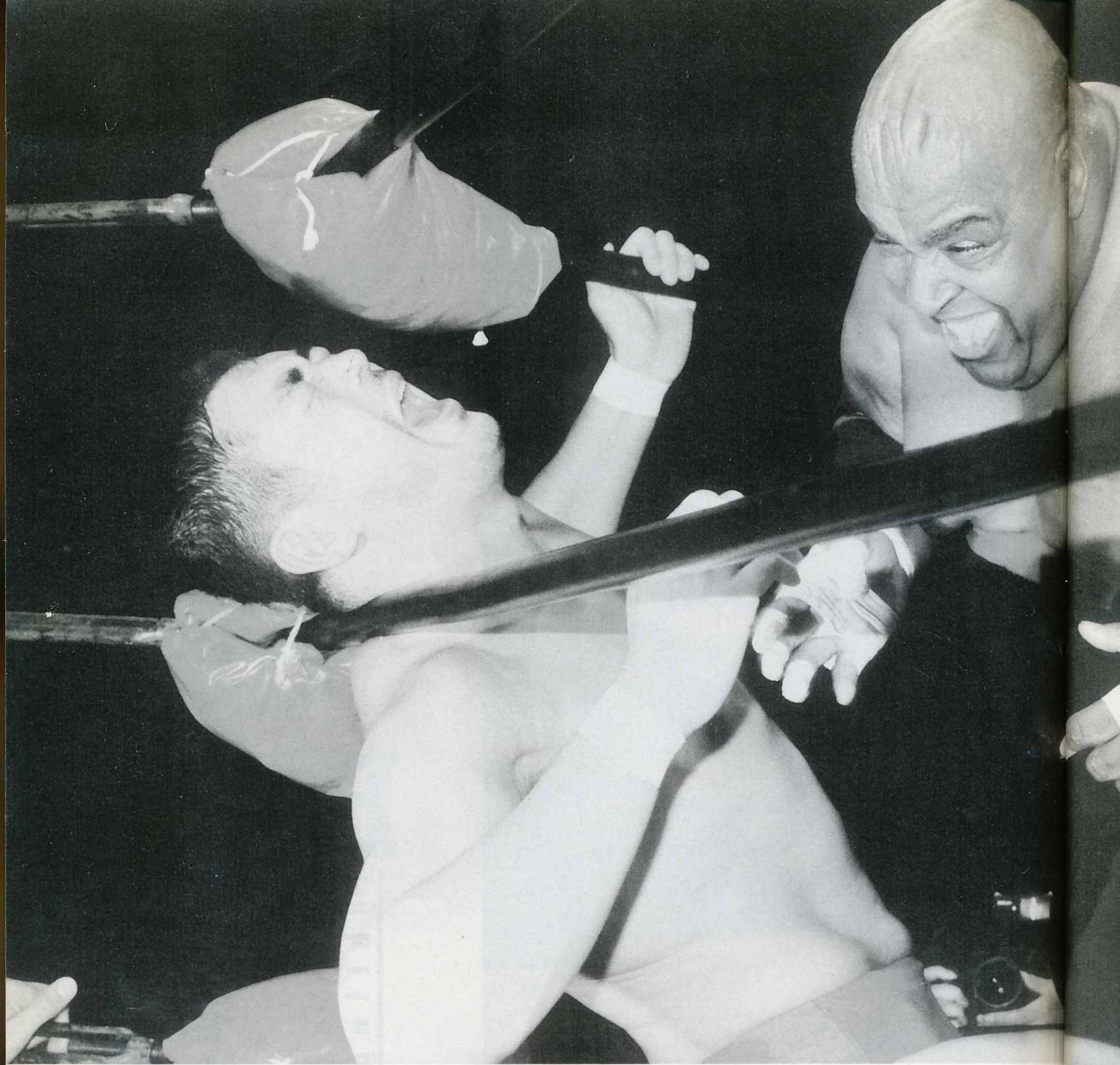
12・1の代々木に海賊ルックで登場したアントニオ猪木は、かつて世間の気分を、いってみればシャレで逆撫でするようなことばかりを仕掛けていった。

一時期は、そのシャレが通用せずに暴動騒ぎにまでなったこともある。

「シャレにならないことを過激なシャレにしてしまう」。

そういった側面をも抱えているのがプロレスというジャンルの許容量の深さであり、その点のセンスが群を抜いていたのがアントニオ猪木である。

今の爬虫類のようなファンはこう言うかもしれない。

それは猪木の専売特許じゃない。巷で行われているデスマッチやインディー系のプロレスなども、シャレにならないこ

とをシャレにしているんだから同じレベルじゃないか！ と。

しかし、アントニオ猪木と彼らには厳然とした違いがある。

彼らは、彼らがやったらシャレにしかならないことを、「これはシャレじゃないよ、俺達は一生懸命やってるんだよ」と言っているのだ。

これではお話にならない。

条理あるいは道理を不条理にしてしまう世界と、不条理にも道理にもなってないことを道理だと言い張る世界では迫力が違う。

そして、アントニオ猪木には「闘いの原点」があったからこそ、シャレにならないことを過激なシャレにしてしまう渦を起こせたのである。

さて、アントニオ猪木にもっとも近いと言われた高田延彦こともあるとブッチャーが東京プロレスのリングで闘った。

両者がそれぞれのテーマに乗ってリング上で対峙する。ゾクゾクした。しかしこの巨大なシャレともいえる試合はスイングしなかった。

その原因はハッキリしている。

プロレスはお互い背負ってきた人生のぶつけ合いである。

高田は一戦交えるなら、まずブッチャーを尊敬するべきだったのだ。その上で自分の辿ってきた人生を思いきりブッチャーに叩きつければ良かったのである。

そして、もし闘っているうちに尊敬できない相手と肌で感じたなら、即刻ケリをつけるべきだった。

「シャレ」の概念を受け入れるのか吹き飛ばすのか。いずれにしても、高田の「思い切り」が見たい。

96.10.10

みちのくプロレス

竹脇

~these days~

両国国技館

謎のキーボード奏者登場！こいつはいったい何者なんだ！

Fighting Event Report

みちのくプロレスが再び北北東に進路を取り、両国国技館に進出した。

進出！

進出！

進出！

頭蓋骨など砕けてしまえ！

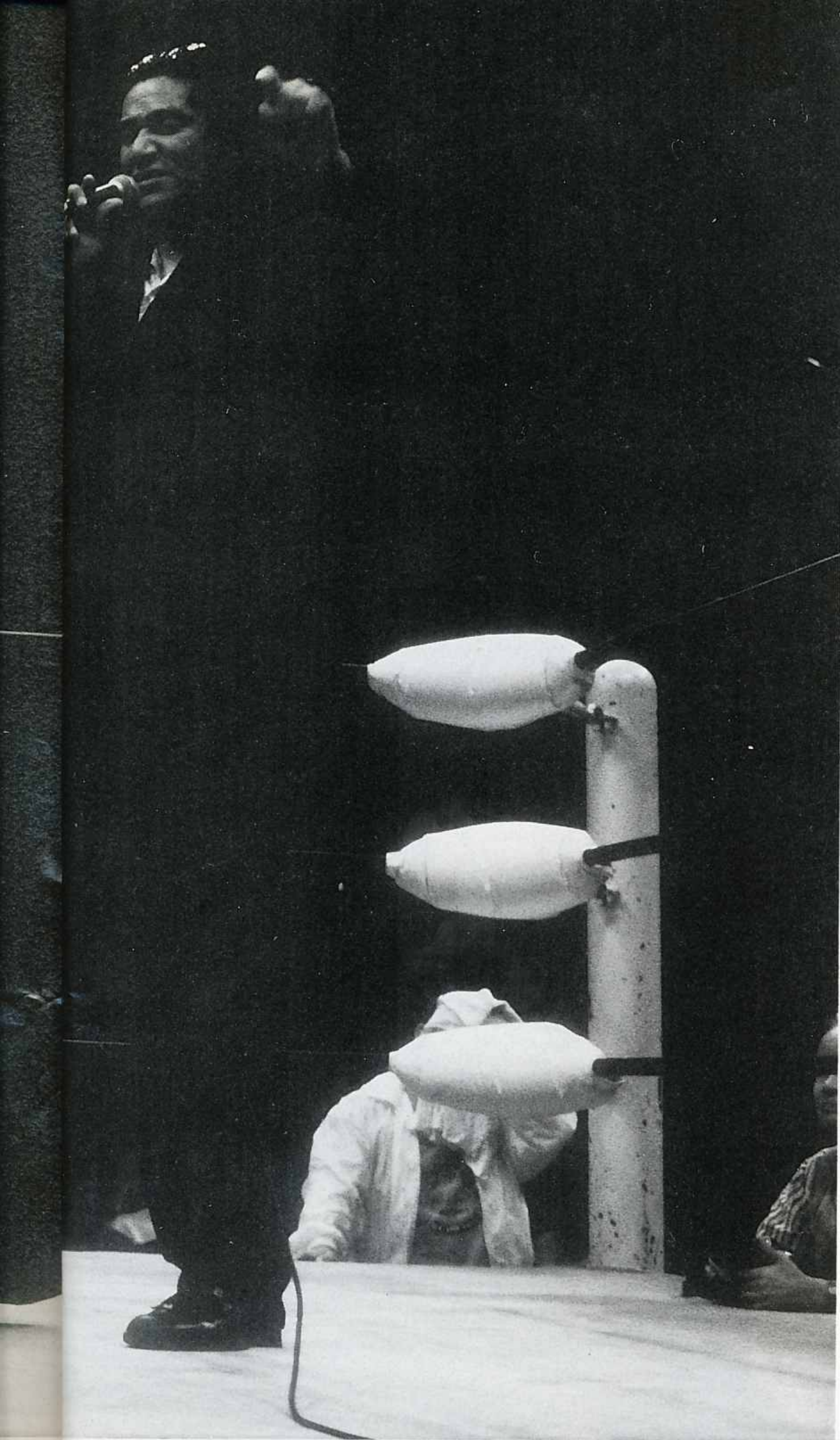
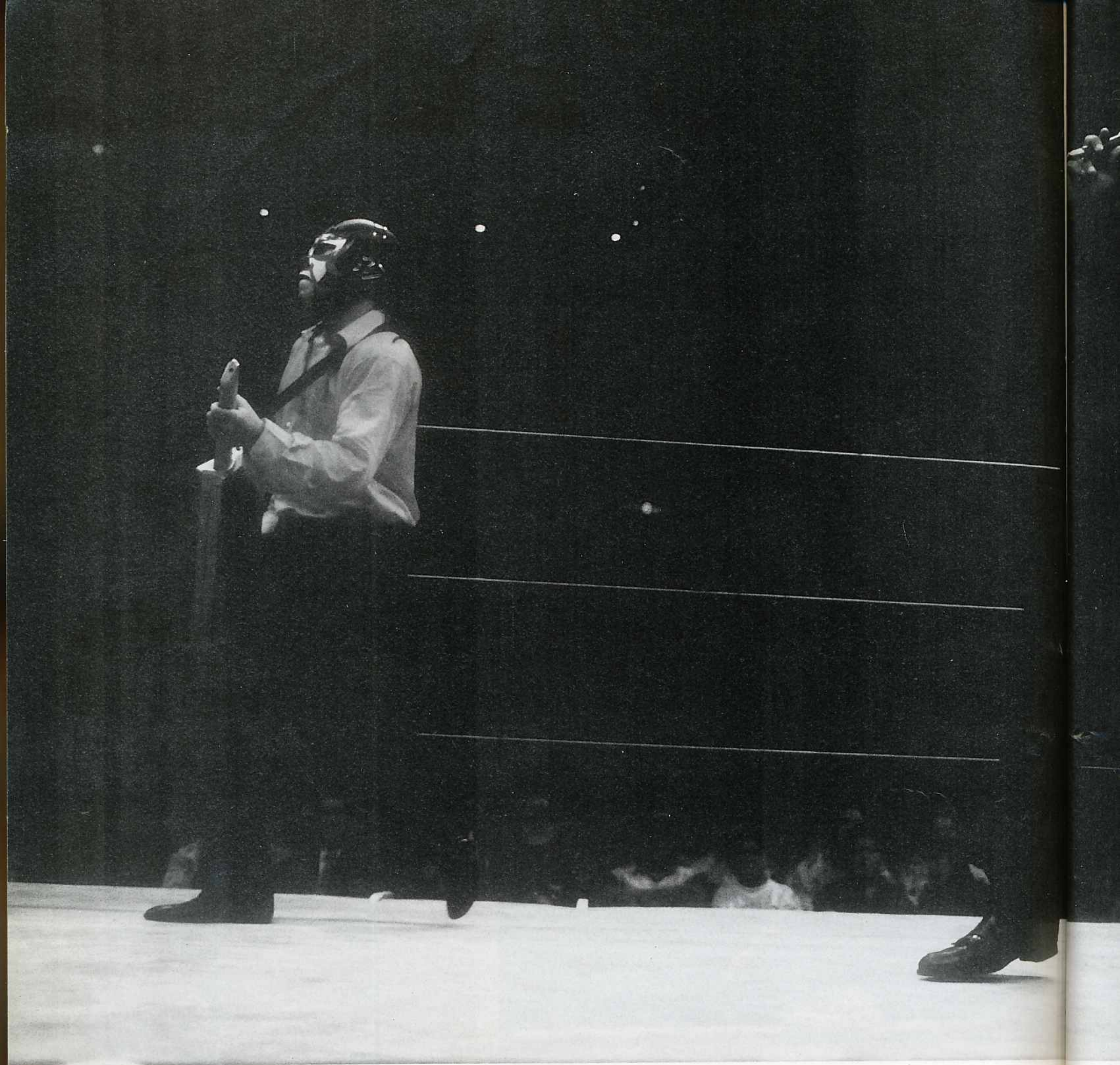
このようにターザン山本風に書けば字数は稼げるのだが、このリポートはもちろん字数稼ぎが目的ではない。

ところで、結果的にこのイベントは成功だった。

マスカラスもドスカラスも、ダイナマイト・キッドも初代タイガーも小林邦昭もいた。

豪華な6人タッグに負けまいと、セミファイナルの10人タッグはみちプロの真髄を見せつけた。

しかし、一つだけ不満がある。

メインに新崎ーハヤブサ戦を持ってきたことである。

新崎やハヤブサが悪いのではなく、内容がどうのでもない。

大会場進出第1戦だからこそ、いつものみちプロをみせてほしかったのだ。

プロレス界では交流戦が大流行である。小さな団体は選手を貸し借りしなければやっていけないというのもわかるし、マニアには新崎－ハヤブサ戦が売り物になるというのもわかる。

カード的に他団体の大物選手を投入するのはプロレス界のビッグマッチの常套手段だが、今回に限ってはその手法を取るべきではなかったのだ。

ここを純血興行で乗り切れば、より最高だった。いつもは東北地方だけを回っているローカル団体が、ありのままの姿で大会場を満員にし、大成功に導く。それができれば、まさにみちプロにしかできない『スキャンダル』となったはずである。

ザ・グレート・サスケの使命は、プロレスファンにマニア的な刺激を与えることではない。世間に対し、いかにインパクトを与えていくかである。

この日、サスケは頭蓋骨骨折という生命に関わる重傷からの生還を果たし、その復帰第1戦で頭部を重点的に攻められた。

しかしサスケは、絶叫し心配するファンを尻目に、その試合後に高野拳磁の横でキーボードを弾きまくっていたのだ。ファンは絶句していたが、これこそサスケの真骨頂である。

飛べサスケ！　飛び続けろサスケ！

プロレスファンなど捨ててしまえ！

業界の常識なんて吹っ飛ばせ！

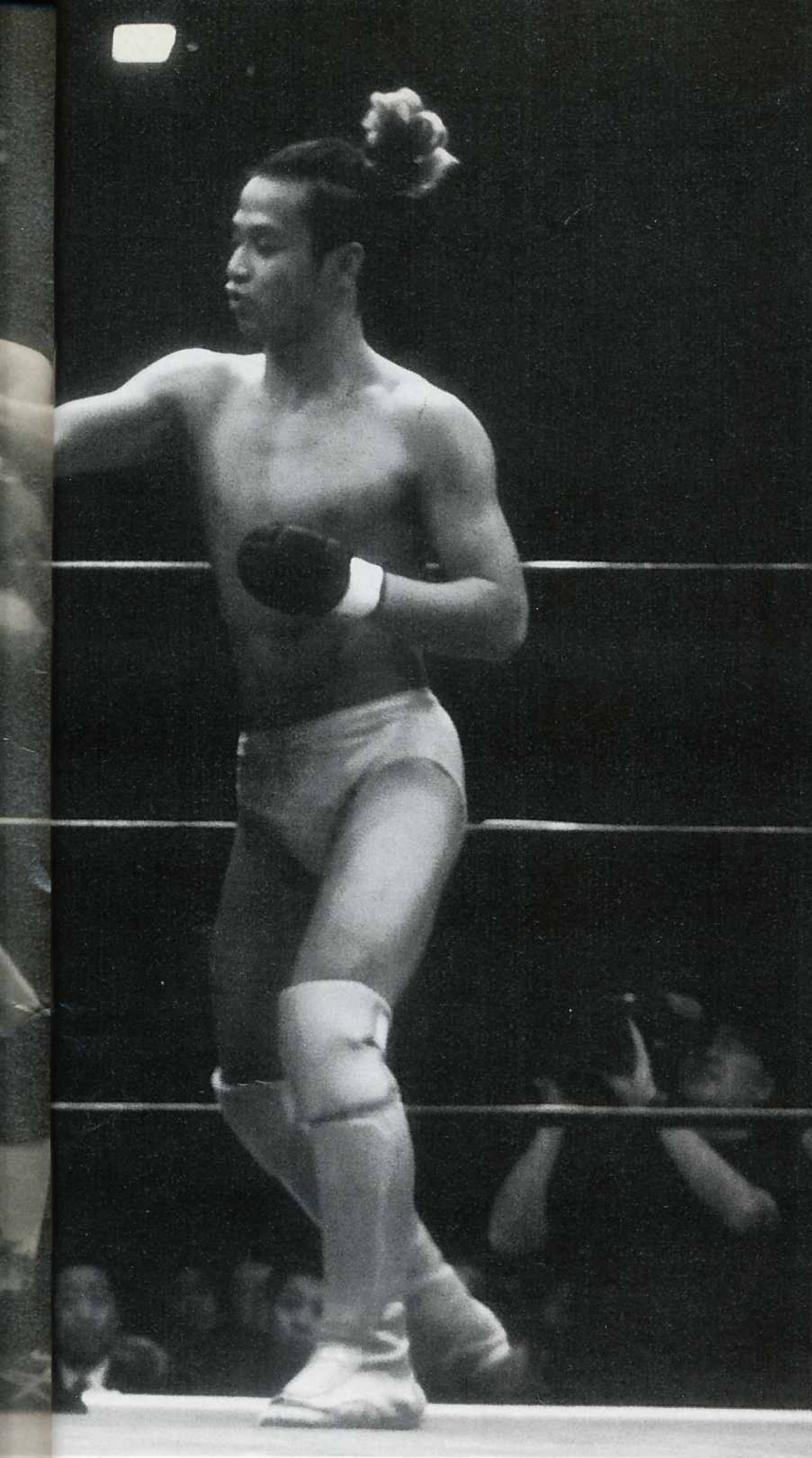
96.10.30

格闘探偵団バトラーツ

Let`s enjoy

BATTLARTS

『1・2の三四郎』世界が、後楽園ホールにあらわれたゾ！

Fighting Event Report

かつて、梶原一騎の劇画の世界を具現化した男がいる。

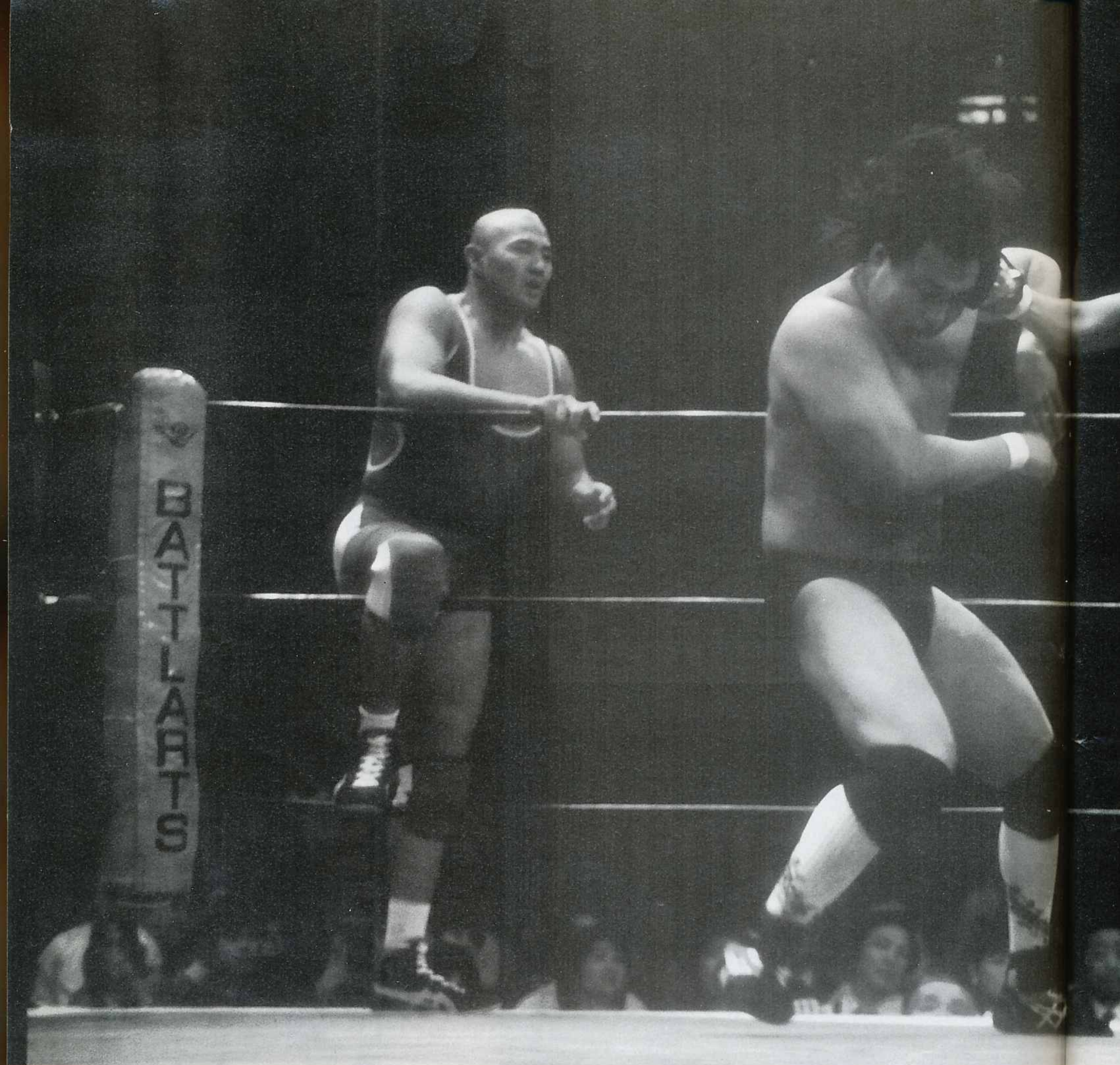
世界の英雄・アリ戦、熊殺し・ウイリー戦、マーシャルアーツからの黒い刺客・モンスターマン戦、地下プロレスの雄といった趣のローランド・ボック戦、はたまた劇画から飛び出した謎の覆面空手家・ミスターX戦……。

まさに劇画でしかありえない世界だった、夢とロマンとリアリティ溢れる闘いを「格闘技世界一決定戦」という現実として見せてくれた男——。

アントニオ猪木。

猪木は様々なジャンルの人々に影響を与えた。

多大なる影響を受けた人々の中には漫画家の小林まことも含まれる。

梶原一騎の劇画をバイブルにした人々がたくさんいるように、小林まことの漫画をバイブルにした世代もある。

その小林まことの代表作はいわずとしれた『1・2の三四郎』だ。

ドジでマヌケでお茶目な男たちが、プロレスラーになるのを志し、実際にプロレス入りしてからも世界一強いプロレスラーを目指す物語である。

バトラーツは、まさに『1・2の三四郎』の世界なのだ。

リングの上では、どこよりも激しいプロレスを展開する奴らも、リングを降りれば、文字どおり漫画に出てきそうな、気さくでドジでマヌケでとんでもないアンチャンたちばかりである。

ただし、小林まことの世界は劇画ではなく漫画である。

バトラーツ社長である石川雄規は、まさに、漫画でしかありえない世界を現出させた張本人ということになる。

梶原一騎、アントニオ猪木、小林まこと、石川雄規――。

この何の共通点もないような4人が「夢」と「ロマン」をキーワードに結びついたのだ。

猪木世代と石川世代。

梶原世代と小林世代。

シリアスとコミカル。

劇画と漫画。

違いはあれど、奇妙にも求めてるものは一緒かもしれない。

漫画だからといってコミカルである必要はなく。劇画だからといってシリアスである必要もない。劇画も漫画も表現方法は違えど、表現したいものが一緒であれば問題はない。

石川以下、バトラーツ勢は、この先も漫画のように「世界一強い男」を目指してほしい。そして世界が平和でありますように……。

96.11.3

プロボクシングWBU
世界ヘビー級タイトルマッチ
ジョージ・フォアマン
vs
ジェームス・グリムスリー
東京ベイNKホール

フォアマンが見せた『濃密』なドラマ! これこそプロレスだ

Fighting Event Report

この日のリングサイド席は9万5千円だった。

メチャクチャ高い。

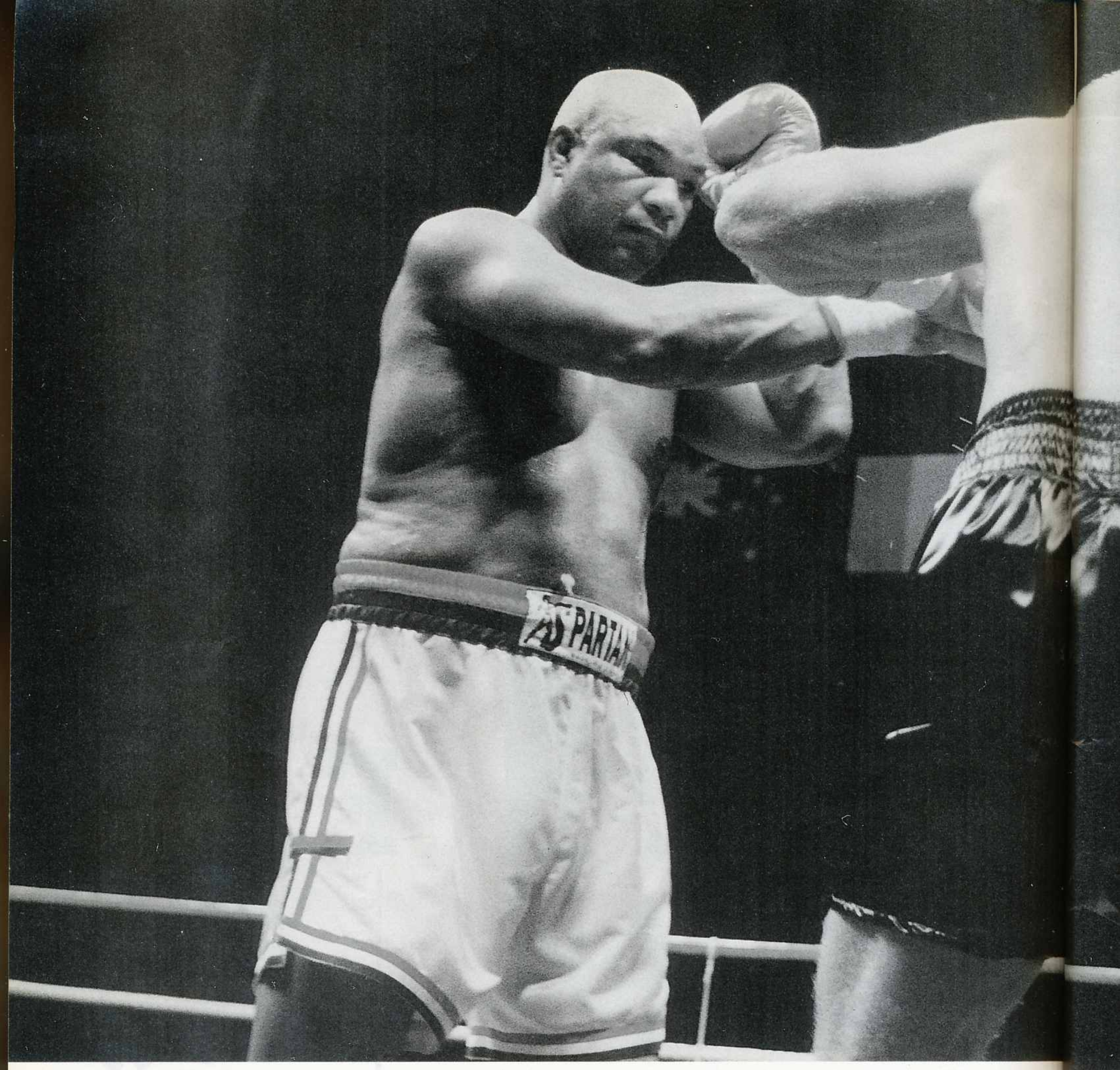
その思いは変わらないが、その値段を知り、行くのを辞めてしまった自分を今は恥じている。

この試合は試合当日の深夜に中継されたテレビで観戦した。

たった9万5千円をケチったばかりに、僕は最上のプロレスに触れる機会を失ってしまったのである。

何でフォアマンの世界戦がプロレスなんだ、ボクシングだろう、それはプロレスに対しても、ボクシングに対しても失礼です。

といったツッコミに応対している字数はないので先に進める。

まさにこの試合はフォアマンの人生絵巻といった様相で、いかにも戦闘好きといった風情の若いグレムスリーが蹄

踏して踏み込めずに終始フォアマンが圧倒していた。

パンチの捌きや、40代後半という年齢に見合った、スタミナを極力ロスしないフットワークなどの技術もさすがだったが、それよりも見事だったのは、フォアマンの背負ってきた人生が若いグレムスリー相手に見事にリング上から漂ってきたことである。

まさにドラマチックなフォアマンの人生が、フォアマンの天性の「見せる技術」によってテレビを通じてでも伝わってきたのである。

やはり一流の格闘家は「見せる技術」にも長けている。

生きると言うことは、他者と関わるということである。他者と関わるということは、自分を表現しないことには関わりようがない。どんなジャンルでも、一流の人はその表現方法に迫力がある。だから伝わりやすい。大山倍達の例を持ち出すまでもなく、例え格闘家といえどもプロ　激Xラーでなくては、プロとして一流とはいえないのである。

かくしてフォアマンは、「ファイト上の技術」と「見せる技術」の両輪を転がして、わずか9万5千円をケチった私を後悔させた。そして私の人生のチンケさを思い知らされた。

この日、解説席に座っていたアントニオ猪木もそうだが、闘いを通じて見えるフォアマンの人生は、信念とか思想、道徳観といった、いかにも世間が好みそうな価値観におもねず、まさに自分自身の細胞を信じて闘っているように見える

やはり最上のプロレスはこうでなくてはいけない。

96.12.1

INOKI FESTIVAL in 代々木

国立代々木競技場第2体育館

このページは読者への謎かけのページです。リポートは各自で

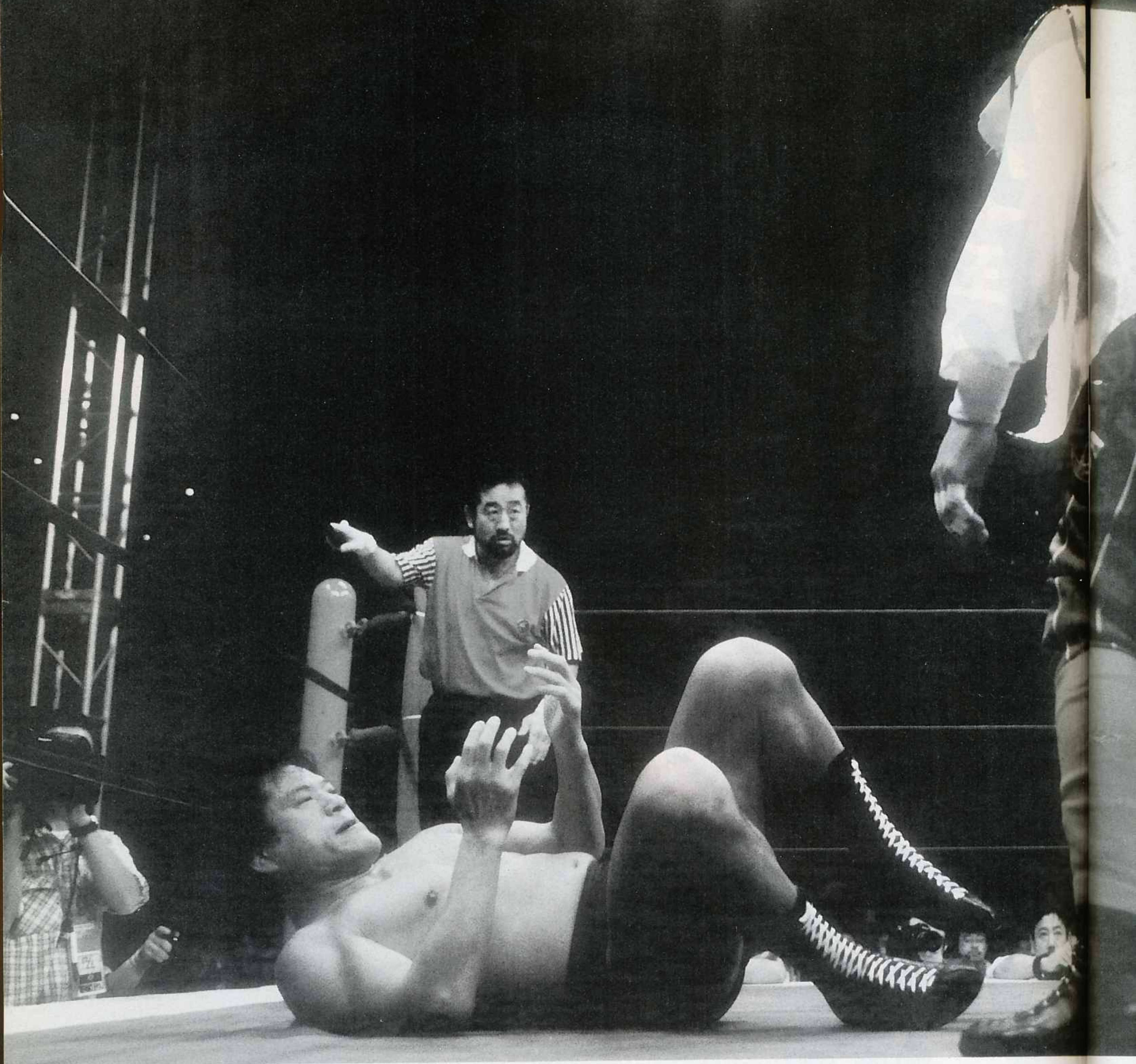
Fighting Event Report

一つ提案してみます。決して書くのがメンドーなわけではありません。ワタシなりに12・1代々木は感じるところがたくさんあったのですが、ファンの皆さまの反応を見ていると、決してアントニオ猪木が投げかけたテーマが見えている反応ではありませんでした。

ですから、ここは私があーだこーだ言うよりも、各自でレポートを書いて、このイベントの意味を再確認してみてはいかがでしょうか。

おもしろい見方だな、と思ったら次号で載せます。

あ、それからもう一つ。私のリポートは次号で書きます。たぶん。

平成ファンの皆さまへ　かしこ

[注意]

プロレスは読み解くものです。カラオケじゃありません。

破壊王爆発!!

「俺たちはどんなことをやっても美しい!!」

聞き手／山口昇
interview by Noboru Yamaguchi
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saitou

橋本真也 *Interview*

プロレスラーとは何か？
What's Pro-wrestler?

橋本真也

昔のアメリカの奴らはホントに強かったんだ

――この間うちのスタッフの"のものも"のオッパイ触わったそうですね。

橋本 ナメたよ！ ガハハハ、ウソだよ。でもな、あいつが上司にセクハラ受けたっていうのも、ウソだ！

――上司って僕のことですか？(笑)。

橋本 あんなもの触わらねーだろ。俺が触わった時は、あれしかいなかったから。

――触わってるじゃないですか(笑)。ヒドイ！ 全国読者のみなさん、橋本真也はうちのスタッフにセクハラしました。

橋本 だからセクハラやないやん、アレは。みんな"のものも"が凄いいい女だと思ってるからさ。

――誰がだ？(笑)。

橋本 それを検証というかな。

――ま、検証し終わったところで、インタビューに入りたいと思います。

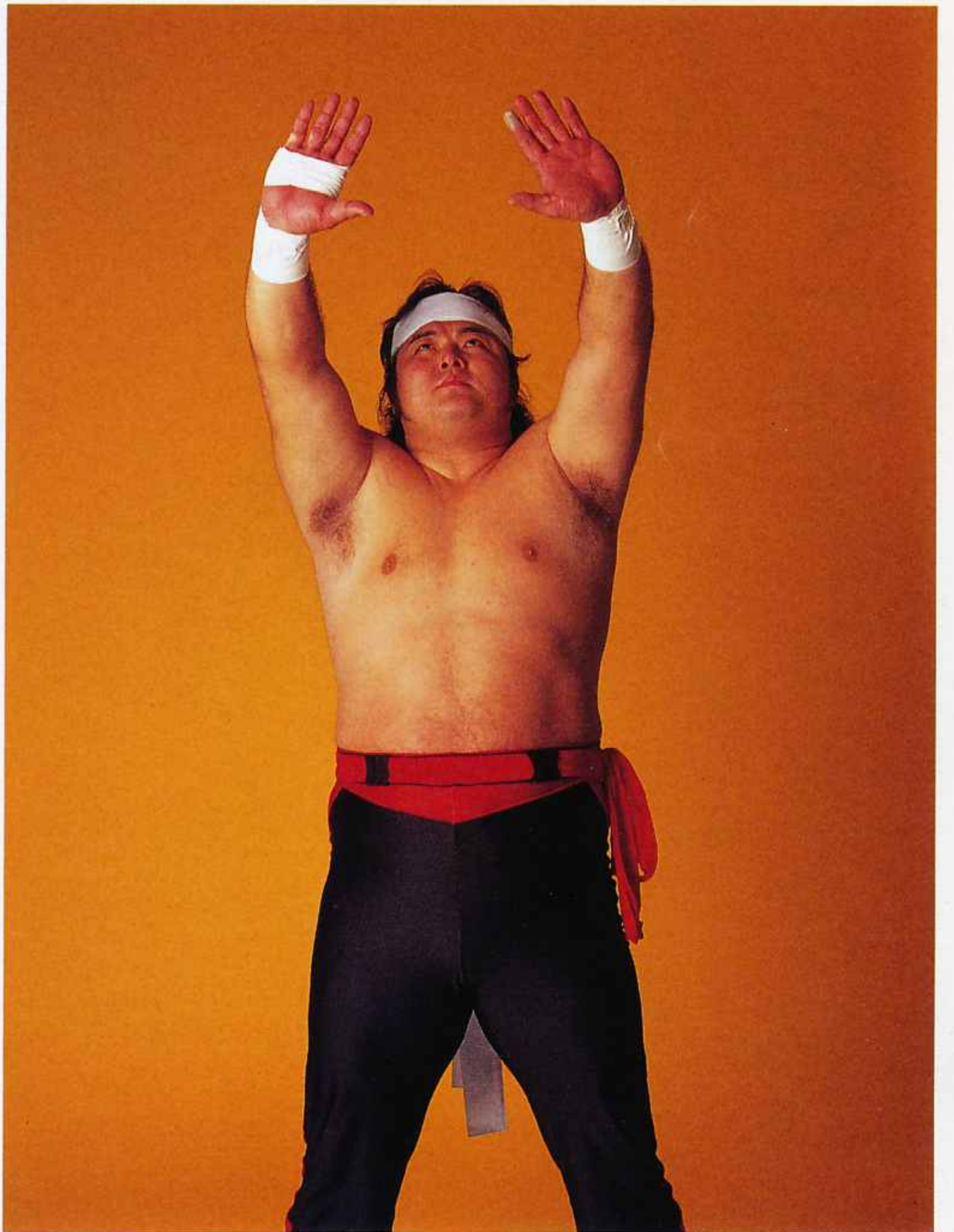
橋本 ヨシ！ これは『紙プロ』だろう。今日はマジメにいくぞ！

――誰も不マジメにやってくれなんて言ってません。

橋本 オーケィ！

――ところで橋本さん、アメリカって好きですか？

橋本 アメリカの何が？ アメリカ自体は好きだよ。でも嫌いなところも同じくらいあるよ。

――例えば好きなところってどんなとこですか？

橋本 やっぱり解放感じゃないの。特に俺、田舎好きだから。

――ああ、アメリカの田舎。ブーツとかよく履いてますもんね。

橋本 あれはちょっと時代遅れの格好なんだけど、田舎行ったらあんな格好している奴が多いゾ。

――カントリー&ウエスタンみたいなのが好きなんですか？

プロレスラーとは何か？
What's Pro-wrestler?

橋本 うん、好きというか、別の意味でビシッとブーツ履くことに意味があるんだ。だけど、最近は全然履かない。

――なぜですか？

橋本 足が痛くなんだよ、ありゃ。ブーツってあんまり歩けない。歩くことには適してないね、ブーツは。あれは馬に乗ってりゃいいかもしれないけどな。

――日本じゃ馬に乗れませんもんね。橋本さんって基本は派手好きなんですか。

橋本 派手にやれるんなら派手にやりたいよな。着るものでもなんでも。ただ似合うか、似合わないか別としてね。まあ、昔から派手好きだよ。

――プロレスの場合はどうなんですか。

橋本 派手というか、試合自体は別に今のままで構わないけど、やっぱり試合の前は着飾って出るのもいいな。だから最近ガウンを着始めたんだよ。これからもっとエスカレートしてくると思う！

――もっとエスカレート！ 早く見たい！ もうゾクゾクしますね。

橋本 ただ派手って言ってもさ、品のない派手はダメだ。みんながキラキラなら、こっちはジュリーみたいに電球をつけてやろうと思って。

――またジュリーか(笑)。ジュリー好きですね。でもランディ・サベージとかリック・フレアーみたいな派手さじゃないわけでしょ。

橋本 リック・フレアーなんか脱いだら別に普通じゃない。だから俺はランディ・サベージよりかリック・フレアーの方が好きだよ。

――試合コスチュームを派手にするんじゃなくて、ガウンを派手にすると。

橋本 だから自分を演出するのに、試合コスチュームはワンポイントだな。

――この間アメリカ行ってきたんですけ

ど、役割分担が徹底してるんですよ、アメリカって。ユニバーサルスタジオっていうところに行きましてね。ユニバーサル映画のいろんなブースがあるんですよ。

橋本　どんな？

――ジュラシックパークとかバック・トゥ・ザ・フューチャーとかいろんなアトラクションをやるブースがあって、そこをバスとか歩きで回るんですけど、とにかくドデカイわけです。その中で役割分担がしっかり決まっててみんなが映画産業を盛り上げてるわけですよ。

橋本　だからあっちはバイトでも完全なプロ意識、自分で仕事に誇りをもって相手に接してやるんだよ。まあ中にはいい加減な奴もいるけどな。日本の場合は最近のバイトの奴らは適当にやってる奴、見るからに態度が悪い奴が多い!!　全部とは言わないけどな。そのへんが俺は情けない！　以上！

――終わらないでください（笑）。

橋本　多分ガイジンが買い物しても「なんだ、この国は？」って思ってると思うよ。もっとプロフェショナルな意識を持ってほしいね。

――アメリカではトップから末端までが合理的に仕事をしてるわけですよ。その中でシッカリと役割を担いながらプロ意識を持つという方向ですよね。その意味でいえば、アメリカのプロレス界もそうですよね。

橋本　うん。

――で、今の新日本プロレスというのが非常にアメリカ的だなと感じてしまうのは間違いなんでしょうか？

橋本　でもな、アメリカが一つ忘れてしまっているのは、プロレスは完全なる「闘い」であること！　忘れているどころか、履き違えてる！　だからボディービルダーのような奴らを揃えてるんだろ。そんな奴らを日本に呼んでみたら中身のない人間だったりするわけだ。

――中身のない人間！

橋本　昔のことを考えたら、プロとして私生活からキチンとした奴がたくさんいたよ。昔のアメリカの奴らはホントに強かったんだよ。今はカッコばっかに憧れて入ってきて、やることっていったらラリアットしかありゃしないでしょ？　みんなフィニッシュに使ってる。

――はいはい。

橋本　日本でも使ってるけど、繋ぎ技だろ。フィニッシュに使ってるのは長州、ハンセンぐらいだろ。そういった意味で肝心なこと忘れてるよ。アントニオ猪木が言ってるのはそこの部分だと思うゾ。

――アメリカンプロレスの場合はキャラクターを決められてやってるわけじゃないですか。以前、橋本さんは「お前はこうだ」と路線を決められるのに反発を感じるって言ってましたよね。

橋本　うん。

――今の新日本は……これは批判じゃないですよ、全然。

橋本　うん。

――アメリカ的なイベント感覚重視の方向に行ってしまうと、キャラクターっていう意味でも役割をしっかり決められないと成り立ちませんよね。

Shinya Hashimoto

橋本　それは勘違いだな。会社が決めたんじゃなくて、ある程度決められたハードルを超えて自分っていうものを作っちゃってるから。オリジナリティを。だから、ある程度そいつに合った道を作ってやるのがプロの世界なんだけど、それを超えて自分のオリジナリティを見つけられるかは、個人の問題だから。

――例えば、天山選手も小島選手も個人の問題だと。

橋本　まだ小島は超えてないよな。天山っていうのはもう完全に超えて、自分のオリジナルを見つけてるから。

――あれはオリジナルだったんですか。何でこういう話をしたかっていうと、こないだ岡山の大学で橋本さんとトークショーをやった時に、ファンから「新日本のアメリカンプロレスについてどう思いますか」っていう質問がきたんですよ。

橋本　アメリカのレスラーのこと？

――いや、「新日本のアメリカンプロレスについてどう思いますか」って書いてあったんですよね。

橋本　いまよくわかんないけど、肝心な格闘技という意味と、見せる部分が両方あるからね、俺らは。その辺をマスコミによって勘違いしてんじゃないのかと。アメリカンプロレスはアメリカンプロレスで芸術的で素晴らしい部分もあるし。プロレスは芸術的なものだし、文化であるし。馳もそう言ってるしな。なんでかって言ったら俺らはどんなことやったって美しいんだと！

――橋本さんは美しいです！

橋本　それは知らないけど。

――何で自分で言っといて否定するんですか（笑）。

若手なんかケチョンケチョンでいい
橋本真也

プロレスラーとは何か？
What's Pro-wrestler?

橋本　プロレスでしか表現できないことがあるでしょ。

——ええ。

橋本　俺はそれを強く思ってるから何とも思わないし。でもな、気にしてないっていってもK－1だのアルティメットだのが出てきて、マスコミが多く取り上げて。客が入ってないのに話題だけは呼んでるんだからさ。あれを見て騒ぐってのはわかるけどな、プロレスでは反則になることだってガンガンやってるわけだから。凄いことはわかるけど、でも、俺らの終着点はプロレスなんですよ！

——はい！　それはよく橋本さんが言ってる「俺らは人のいないところじゃ闘わない」ってところに繋がってきますよね。

橋本　人に感動与えるのが俺らの仕事だからね。自分たちの人生を見せながら。

——おそらくトークショーでのファンの質問は、今の新日本プロレスは、合理的なアメリカンプロレスの方向に片寄りすぎてるんじゃないかという疑問だと思うんですよ。

橋本　それは勘違いだな！　アメリカのレスラーを呼ぶことによって、どうしても俺らが合わせなきゃいけない部分が出てきちゃうということだよな。ちゃんとやってないというんじゃなくて、試合の流れっていうのがあってね。あいつらは止まってることが苦手なんだよ。

——止まってることが苦手？

橋本　要するに寝技なんかありゃしないから、自分は動いてなきゃいけないと思ってる。ブツカリ合いでしか表現できないというのがあるから。だから自分の体を誇示するために同じことをやってしまうわけ。そこんとこの違いだと思う。

——おそらくこの質問してきたファンは昔から新日本を見てきたファンで、その中でアメリカンプロレスの良さもわかってるし、今橋本選手の言ったようなことも理解できるんだろうけど、でも単純に言って、アメリカンプロレスなんかがブッ壊してしまうようなプロレスを見たいんじゃないかと思うんですけどね。

橋本　でも、そいつは昔から見ているんだったら、昔のプロレスと今のプロレスは完全に違ってきてるってことは認識すべきだよ。

——認識できないファンが悪いと。

橋本　だってそうじゃない。なんでも技術向上はしてるもんで、野球でもなんでも昔のビデオ見てみな。全然違うから。それだけ技術も体力も向上してるんだから。大事な部分、基礎っていう部分はあるけど、昔と比べるとテンポも違うしね。

——じゃあ今、橋本さんはプロレスラーとしてジレンマは何もないんですか？

橋本　痔はないけどねえ。……笑ってよ。

——（無視して）スポットライトをアントニオ猪木一人が浴びる時代があったわけじゃないですか。

橋本　まだ浴びようとしてるから。海賊ガスパーが出てくるって？　ガスパーの正体言ってやろうか。ジュゴンだよ(笑)。

——ジュゴン！　海賊男の正体はジュゴン！　お前、光栄だなあ（笑）。

ジュゴン（『紙プロ』の練習生。100キロ）　はあ。

橋本　だいたいね、昔のものになんでそんなに頼る。昔それで客が入ったから、首脳陣はそれから抜け出ることができないんだよ。新しいものをなんで作らないの？　なんでタイガーマスクなの？　もっと一杯キャラクター出とるやないか。だからライガー成功したんじゃない！　今はもっと新しいキャラクター出とるじゃない。なんで今さら二十年前、三十年前のキャラクターに頼ってやんなきゃいけないのよ。アホじゃないか！

——あ～あ、知～らない。

橋本　俺らが頑張って成功させてるからあれはあれで成り立つんだよ。

——でも、シビアな言い方すると、今のプロレスよりも昔のアントニオ猪木全盛の頃の方が闘いの原点という意味では、伝わりやすかったんじゃないかと。

橋本　伝わりやすかったんだろうな。テ

レビにしても、今は全部の試合を見せようとして部分、部分ちぎってしまうから何にも伝わらないんだよ。昔はテレビに出られたのは、海外修行から帰ってきてやっと出れたぐらいですよ。俺らもヤングライオン出るようになってやっと決勝とか映してもらえたぐらいで。

——そうでしたね。

橋本　だから若手の試合なんか映す必要ない！　だいたい若手の試合とトップの試合を比べること自体おかしいし、ごちゃ混ぜのカードになるのもおかしいし、そのへんのことを気をつけてやんないから伝わりにくくなっちゃってんですよ。

——橋本さん、今ごちゃ混ぜって言い方しましたけど、結局プロレスの興行がイベント化してバラエティ化してるじゃないですか。そうなると第一試合とメインの差もなくなってしまいますよね。

橋本　柔道だってなんだってそうだよ。やることは同じなんだよ、若手でもトップでも。中学生が一本背負いで投げても、全日本チャンピオンが一本背負いで投げても一本背負いに変わりはない。あるのは力の違いだよ。

——レベルの差ですよね。

橋本　うん。その部分をハッキリ打ち出さないことにはプロレスは面白くない。ある意味で格があるからプロレスであると。みんな這い上がろうとしてやってるのに、平等に扱ったらなんにも面白くない。若手なんかケチョンケチョンにされればいいし。ケチョンケチョンにされて立ち上がって、だけどそれでも駄目でまた立ち上がってくる。そういうことをやらない限りは駄目だと思うし、それがテーマにもなるし。

——なるほど。その意見には大賛成です。

橋本　最近Uとの闘いなんかテーマがあったから凄い試合になったんだよ。テーマがない試合でも凄い試合はできるよ。でもそれに何の意味があるのかっていうのが一番大事じゃないですか。

——今年4月の橋本—高田戦っていうのをビデオでもう一回見直したんですよ。そうしたらテレビスタッフ、僕ら紙媒体も含めての話なんだけど、プロレスの伝え方が全然、もう駄目だなと思ったんですよ。

Shinya Hashimoto

橋本　だから、俺らは特別なことやってはしない。ほんとに原点に近い闘いというか。それだけでなぜお客さんが入ってるかというと、いつもの試合よりもっとハイレベルな試合を望んでるわけですよ。しかも、あそこに意味が存在したからあんなにお客さんが入って、あんなに燃えたわけでしょ。

——あの橋本—高田戦をゴールデンタイムで流してたら大爆発するだけのものはあると思うんですよ。

橋本　T局ダメだから。バカ！

——あ～あ、知～らない。

橋本　俺ら興行的に凄いのに、それでもわかんないの。首脳陣がバカだから。T局はバカ。以上！

——バカ！　以上！　またストレートな（笑）。まあ、バカはバカとして置いといて、実況も含めたプロレスの伝え方っていうことで言えば、例えば橋本—高田戦のセミファイナルにやった藤波—天龍戦。あの試合で藤波さんが鼻骨骨折をして鼻血をダラダラ流してる。そこに天龍さんが鼻っ柱にガンガン、パンチを打っていくわけですよ。

橋本　うん、それで？

——アルティメット系のパンチではないにしろ、人間が人間を殴るには覚悟がいりますよね。これ以上殴りたくないのに、殴らないとリング上での勝ち負けだけじゃなくて、藤波という存在に勝てないから殴る、っていう瞬間が見えるわけですよ。簡単に言っちゃうと、人間ドラマが天龍さんのパンチに集約されてたんだけど、それをアナウンサーは、なんと、淡々と「天龍がサミングだあ」と間の抜けたことを言ってるわけですよ。

橋本　Tさん？　古舘さんの一番終わりの頃のギャグが交じったのをちょっと真似してるよね。全日本の中継はギャグは入るけど、この場面は凄いと思ったら凄いということだけを伝えてるんだよ。アナウンサーはスターじゃないんだから、実況すればいいんですよ。実況して「あぁっ、こんな凄いことをしてるんだ」って伝えればいい。俺がいつも頭にくんのは、凄いことやってるときにマサさんと話してんだよ。

——ガハハハハ。末期症状ですね。

橋本　そん時はもう、こっちの試合は展開してんだよ。古舘さんの時はパーッと対応してくれたんだよ。

——機を見るに敏でしたよね。

橋本　マサさんはマサさんでレスラーとしてのライバル心とかプライドがあるから「これは大変ですね、マサさん」ってふられても「いやたいしたことないよ」なんて言ってるしな。違うんだって！　これは凄いことだって言わなきゃ見ている人には伝わらないんだって！　俺もいろいろ言ってるけど、変わらないってことは解説陣から全部変えなきゃいけないし、それが変わらないってことはこの体制から抜け出ることができないってこと。以上！

——いや実に気持ちいいです。でも関係者とか、あるいはマスコミも含めて、今プロレスに対してすごく醒めてて、こんなもんでいいんじゃない、という空気をヒシヒシと感じることが多いですよね。

橋本　まあ、飽きはあるだろうな。なんでかっていったら、闘魂三銃士なんて昇りつめちゃって、後はほんとの一番を取

るか取らないかだけだから。やっぱり波風立てないといけない。波風を立てるのは、永田や小島やらだけど、まだそこまでいってない。プロレスを良くしたいんだったらいろいろ変えないと。

――そうですね。

橋本 まだ興行成績は良かったから、悪いところには目をつぶっていたのが、第一段階が終わって、今少し気になり始めてきたと。今度は第二段階に突入しないといけないから。俺が長州をブッ潰してから第二段階に入るかどうかなんだけど。もし仮に勝ったとしても今度は俺らが支えないといけない。そうすると対戦相手は？ 解説は？ テレビの在り方は？ってことになるよ。そん時は、長州とか藤波さんがやめちゃって寂しくなってるだろうから、下手すると選手の入場曲にも気を使わないといけないと。

――橋本さんは前から気を使ってますよね。入場テーマ曲に。

橋本 入場テーマ曲だけじゃなくていろいろ！ 会社のいいなりになりたくないから自分で気を使うんだよ。

――僕はそういう橋本さんが好きです。

橋本 清原を応援してるから、俺は。

――ダハハハ。アントニオ猪木は常に波風を立ててましたよね。

Shinya Hashimoto

橋本 立ててるなんてもんじゃなかったよ。大変だよ！

――大変！（笑）。

橋本 悪いけどこれだけは言いたい！ 昔、猪木さんが頑張ったから今の俺らがあると思ってるよ。でも今は、俺らがいるから猪木さんがいるんだよ。マジで。思わないか？ 言い過ぎじゃないと思うゾ。ウイリー・ウイリアムス呼ぶって、今は六本木歩いてる兄ちゃんと変わりゃしないだろう。

――あ～～～あ。知～らない（笑）。

橋本 まあ、六本木まではいかないけど。俺はウイリー好きだったからね。今は俺が憧れたウイリー・ウイリアムスじゃないからね。

――昔、猪木さんが全盛の時にシリーズ単位ってこともあったけど、連続ドラマのように波風が起こってたわけじゃないですか？ 今、波風を起こすとしたら橋本さんしかいないじゃないですか。

橋本 あの頃はアメリカが知られてなくて、一人でも新しいのが来たらそれで保ったわけ。今アメリカのレスラーをみんな知ってるでしょ。門馬さんかなんかが解説して、17年くらい前にアメリカンプロレス中継をやったでしょ。あれ凄い迷惑だったの。アメリカの実態を映さないでほしかったの。アメリカは謎でいいの。

――これだけ情報網が発達しちゃうとやりにくいでしょうね。

橋本 そう。そのお陰で選手はキツクなるし。この前、衛星放送が来たんだよ。SAMURAI！が。うちの練習全部撮ったんだよ。俺は会社に怒ったの。「うちの練習全部撮らしてどうすんだ！ 企業秘密じゃねえか！」って。俺らが昔見てたのはスクワットや腕立てだけで、それでも「凄エな、後は何をするんだろうか」って思って想像力を膨らませていたのに、何でも見せたらファンの想像力がなくなっちゃうんだよ。

――でも、今のプロレスは道場の概念が見えなさ過ぎると思うんですよ。

橋本 今までテレビに映してたのはスクワットや腕立てしかないんだから。後はブリッジ。それぐらいでいいんだよ。

――わかった！ それは全部撮るSAMURAI！が悪い（笑）。撮らせろって言った方が悪いです（笑）。

橋本 もったいぶんなきゃダメ。「はい、どうぞ」で簡単にできたら面白くないよ。

――でも橋本さんはどちらかというと「はい、どうぞ」ってタイプでしょ。

橋本 プロレスだったらもったいぶるよ。ウルトラマンがスペシュウム光線を最初から出しゃいいのに後から出すのと一緒なんだから。

――でもさっきアメリカンプロレスの話しましたけど、日本人にしかできないプロレスってなんでしょうね。

橋本 小細工だ！ ガハハハハハ。

――小細工！（笑）。

橋本 テクニックだな。外人はデカイ体してるだろ。細かいことやると滑稽に見えるんだよ。国民性が出るからしゃーないって。柔道でも何でも。

――橋本さんは小細工きらいでしょ？

橋本 （人差し指と中指を立ててクニニッとしながら）指の小細工は得意ですけどね。

――どうして自分から真面目なインタビューにしようって言っといて、そんなことばっかり言うんですか（笑）。

橋本真也

俺らがいるから猪木さんがいるんだよ

橋本　そういうところはまかせるから抜いてくれ。

―抜けません、面白すぎて。

橋本　違うよ。俺、今は関節技のこと言ったんだから。勘違いしないでよ。『紙のプロレス』が悪いんだよ。

―なんでもそうやって人のせいにするんだから。でも橋本さんは猪木さんや長州選手に反抗心を燃やしてやってたけど、これから本当の意味でトップに立ったら、自分で対戦相手を見つけないといけないじゃないですか。

橋本　だからその権限が欲しいわけ！　古い人の考えでやるんじゃなくて。

―最近U-JAPANという大会で、プロレスラーがバーリ・トゥードに出ていって全敗しましたよね。ビガロとか安生とかインディーの松永とか。それによってプロレスの幻想っていうのが崩れている部分があると思うんですけど。

橋本　大体出てる奴が悪いんだ。カスばっかりじゃねーか。

―うわー。

橋本　違うか？　トップが出てないじゃないかよ。ビガロは昔はトップだったけど、今アメリカじゃ仕事してねーんだから。食いっぱぐれて日本に来たんだから。

―そういうカスが出ちゃいけないと。

橋本　それで恥掻くんならやめときなさいということですよ。ただ金が欲しくて出てるって言われても仕方ないだろう。松永だって有刺鉄線バット持ってって何で使わないの？　だったら最初から持ってくるなよ。

―何で使わない！（笑）。

橋本　あれで威嚇しといて、ダッコされて簡単にタップするんじゃないって。使えって。でも一番頑張ったのは安生やろ。安生はホントに頑張った。安生クラスでもあれくらいの試合ができるんですよ。プロレスのトップはもっと上だから勘違いしないでほしい。プロレスが負けたなんてマスコミは書いてるけども。

―イメージとしてファンもそう思うんじゃないですか。

橋本　ここが今、俺らの堪えどころなんですよ。ここでヤケになって出るバカがいるかもしれないけど、敢えて出ない方が俺はいいと思うよ。

―敢えて？

橋本　出る必要はないと思うし、だったら向こうの人間を呼んでプロレスのルールでやらせればいい。だいたい目指してるところが違うんだから。終着地点が。

―でもファンから「橋本選手出てくれ」って声がガンガン上がった時には、「出なきゃいいんだ」ってことでは通用しないんじゃないですか。

橋本　「なんで俺が出なきゃいけないんだ！」って言うよ。向こうが来いや！　話題は呼んでるけどプロレスと比較するほどじゃないよ。そこまでいってないよ。アルティメットっていうのはボクシング、空手、柔道とかごちゃ混ぜだから、道がないんだよ。道がないものはスポーツとして見れないっていうか。ハッキリ言っておくけど、ビビッて出ないわけじゃない！　確かに出ることになったら怖いですよ。いつもと違うルールでやんなきゃいけないから。

―慣れてないですからね。

橋本　向こうの奴は捨て身でしょ、だから怖いですよ。でもあいつら一人一人をプロレス界に引っ張って勝負すれば、あいつらの世界とプロレス界が共存できることになる。でも俺らが向こうに行ったら、ポンと打ち上げ花火で終わってしまう。あいつらがプロレスのリングに上がってルールギリギリでやったら今後に繋がることになる。そのことをはき違えないように考えてほしいなと思う。

―この前の武藤ーオタービオ戦は橋本選手にとってはどうだったんですか？

橋本　オターピヨピヨ？　あいつは後の処置が悪いんだよ。もっとスターになれるんだよ。新日本のリングに挑戦してト

プロレスラーとは何か？
What's Pro-wrestler?

Shinya Hashimoto

レーニング風景とかいろいろ見せてやっていけばいいんですよ。でも、どう見てもプロレスができるような頭をもってなさそうだけどな。

――ガハハハ。プロレスは頭がいい人間にしかできない。

橋本　あいつがもっと輝きたかったら新日本のリングに上がればいいんですよ。あのままいなくなったから期待はずれというかさ。

――やっぱり橋本さんは面白い。でも、オタービヨビヨはともかく、さっき言った日本人にしかできないプロレスってことでいうと、普段溜めに溜めたものをリング上でバーッと吐き出すプロレスだと思うんですよ。リングに感情や情念を叩きつけるという。

橋本　それやったらアントニオ猪木だからね。

――それと同じことはやりたくないと。

橋本　自分の感情を伝えるのは一番いいけど、でも小島とかは完全なアメリカンスタイルの表現の仕方でしょ。アントニオ猪木の怒りとは違うでしょ。

――違いますね。感情の立ち昇り方がまったく。橋本さんはどっちかというと猪木タイプだと思うんですよ。

橋本　自分の気持ちをストレートにもっと表現できれば一番いいわけですよ。

――ええ。だから小島選手なんかは、怒ることもキャラクター的ですよね。

橋本　俺はこの先いつまでもアントニオ猪木っていう影を引きずりたくない。いつもマスコミの人は昔からの格闘技ファンだから猪木さんがどうのなんて必ず出る。その話は早くなくしたいね。

――もういい加減にしてくれと（笑）。

橋本　まだ引退してないからね。カウントアップしてるから。

――カウントアップ（笑）。前田選手がUWF集結を提唱してみたりインディーは再編成しているし、そういったプロレス界の動きの中で橋本選手は何か壮大なプランはないんですか？

橋本　壮大なプラン？

――北極でプロレスをするとか。

橋本　客はオットセイか？

――アシカでもいいですよ（笑）。

橋本　そうだな。前はアジアに行って、そこで試合をやっただけじゃない。だけど今、発展してる国、台湾だとかそういうところでレスラーを作りたいの。どこかの、まだ金の代わりに石転がしてるような国でもいいよ。

――またそんなことを言う（笑）。

橋本　台湾なんか今凄いだろ。だからあっちのレスラーを作るんだよ。台湾の力道山を作りたいんだよ！　そうしたら俺らが向こうに行って試合をして。でも全部うちが管理してるんだ。ンムフフ。なんでかって言うと、台湾とかあっちの方に俺らのビデオが流出してんだよ。

――みたいですね。

橋本　それで街を歩いてるだけで指さされるって話だよ。

――後ろ指ですか？

橋本　お前、バカにしてんのか！　それぐらい人気が凄いんだよ。向こうでプロレスが盛んになってるってことは台湾の力道山が作れるんだよ。そしたら向こうでバーンとなるんだよ。貨幣価値も変わらなくなってきているし、興行的にもうまくいきそうだし。

――土壌があるってことですね。

橋本　昔の、二十年前、三十年前の日本みたいなもんなんでしょ。アメリカに目を向けるよりそっちの方が可能性あるんじゃない。

――アジアのマーケットはおもしろそうですね。橋本さんが台湾の力道山になっちゃえばいいんですよ。

橋本　俺は日本人として行くよ。台湾の奴をケチョンケチョンにして。そしたら強い奴が出てくるだろうから、それを育てて。そうしたらバーンと一大権利がでる。もうアメリカ相手に商売するのはやめたほうがいいな。アメリカはどうしようもない、末期や！

――これからはアジアだと？

橋本　アジア！　バフィー……バフィーも言ってるじゃないの。パフィーか。

――パフィー？（笑）。ああ、アジアの純真ですか。

橋本　アジアを制すものが世界を制す。

――橋本真也アジア征服宣言!!　最後にプロレスラーの定義をしてください？

橋本　定義？　またわけのわからんことを。定義の意味を説明しろよ。

――「プロレスラーとはこういうものだ」っていう橋本選手なりの意見を聞かしてもらいたいんです。

橋本　プロレスラーってのは恐れられるもの！　一言！　要するに近寄り難いものでなきゃおかしい。

――橋本さんは近寄り難いんですか？

橋本　そんなことない。

――あらら（笑）。

橋本　女子高生が握手してくださ～いって来るからな。俺も握手しちゃうからな。でもほんとは怖いって言われた方がいい。

――じゃ、なんで握手するんですか？

橋本　かわいいから。

――どうもありがとうございました（笑）。

〈96年11月23日・六本木アートセンターにて収録〉

プロレスラーとは何か?
What's Pro-wrestler?

狂虎再咆哮!!

タイガー・ジェット・シン

Die with Guts!! Returns

聞き手/山口昇
interview by Noboru Yamaguchi
撮影/斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saitoh

Tiger Jeet Singh Interview

イノキは世界中で有名になった！俺様もだ！

T.J.シン

—今日はシンさんに2年ぶり、2回目のインタビューとなります。よろしくお願いします。

シン　オーケィ！

—最近日本のプロレスファンの間では、万人が恐れおののくシンさんが、バラエティー番組に出たことが話題になってますけど、なぜバラエティー番組に出たんですか？

シン　日本のファンが「いつもと違う俺を見たい」という要望をしてきているとフジテレビから言ってきたんだ。俺様もズッとプロレスで対戦相手を病院送りにしてきたんだが、あるときウエダサン（上田馬之助）が交通事故で病院にかつぎ込まれて、見舞いに行ったんだ。

—ああ、上田さんのお見舞いに行ったんですか。

シン　そのときウエダサンに「俺は病院で苦しんでるけど、俺やお前が病院送りにした選手たちも苦しんでたんだよ。その気持ちがいまになってようやくわかった」と言われてな。そのとき柄にもなく心が痛んで「ああ、自分の違う面もアピールしたい」という思いが募ったんだ。まあ、ウエダサンから言われたからだろうけどな。他の奴からそんなことを言われたら、その場でぶん殴ってやるというかな！　ンムフフフ。

—じゃあ、ズバリ言って、その時に裏の顔を見せたのは、タイガー・ジェット・シン選手の二面性を日本中に見せつけることが目的だったわけですか？

シン　ズバリ言ってそうだ！　俺様は家庭もあるし子供もいる。その面じゃ普通の人間だ。しかし一度リングに立てば相手をブチのめすことはやぶさかじゃない。しかし、それは仕事としての面でだ。もう一つ、よきファミリーの長である面もあるんだ。そういう面も見せたかったんだよ。ヘイ、ユー！　変か？

—いいえ。いまシン選手は「正しい時に、正しい場所」にいますか？

シン　昔、子供は俺を見ると泣き叫んだもんだが、いまは俺を見ると握手を求めたりするんだぞ。だからいまは、よい時によい場所にいる、あるべき時にあるべき場所にいるんだろうゼ。

—シンさんがこのままベビーフェイスになってしまうのは惜しいという声があるんですけど。

シン　ハッ、ふざけんな！　誰がいつベビーフェイスになったというんだ。へそ笑うよ！　リングに上がれば前と同じだ。ただ、リング外で人をブチのめしたりしないようにしようと思ってるだけだ。実際、できるかどうかはわからんがな（ニヤリ）。

—昔はリング外でも人をブチのめしてたんですか？

シン　ヘイ！　ユー！　俺様を一体誰だと思ってるんだ！　あたり前だろう！　知らんとは言わせんゾ！　イノキ、ハセがどうなったか知らんのか？

—とんでもない。よーく知っています。

シン　それからレスラー以外では、特にヤクザとファイトした。ホッカイドー、ナゴヤ、オオサカ、その他いろんな場所でな。訴えられたこともあるゼ。あんまり揉めるんで、俺様がヤクザに殺されたっていう噂が流れたぐらいだ。あ・く・ま・で噂だがな。ガッハッハッハッ！

—日本のファンにとっては、シンさんはまだまだ怖い存在で、ショッキングであり、インパクトのある存在であってほしいと願ってたんですが、心配はなさそうですね。

シン　フンッ、リング上では変わらん。俺様はプロレスをシリアスに受け止めているからな。それ以外でも、もし友達であっても、気に入らんかったらいつでもブチのめしてやるよ。本当はしたくはないけどな。ホ・ン・ト・はなッ。

—なるほど。いまプロレスの話が出たんでプロレスの話をしますけど。ファン

は先刻承知だと思うんですが、いままでやったデスマッチを教えてください。

シン　シークともやったし、イノキともやった。様々な死闘を繰り広げた。その中でのベストマッチはもちろんイノキとの試合だ。

――イノキとの闘いがベストですか？

シン　イエス！

――その猪木選手はシンさんとの闘いの中で「自分の潜在的な怒りを叩きつけるような面を、シンが掘り起こしてしまった」と言っているんですけど。なぜあなたとの闘いの中で、猪木はそうなったんでしょう？

シン　初めてイノキを見たときにその目に邪悪なもの、狂気を見たんだ。ただし、まだ完全な狂気ではなかった。俺はプロレスというジャングルの中で、王者として君臨したかったのに、イノキが立ちはだかって邪魔をしやがった！　だからブチのめしてやろうとしたんだが、逆にイノキの狂気を掘り起こしてしまったんだ！　いまのイノキがいるのは俺様のおかげなんだ。

――あなたとアントニオ猪木の共通点は、ズバリ言ってどんなマイナスをもプラスに転化させることだと思うんですが。

シン　俺が初めて日本に来たときは、リキドーザンが君臨してて、イノキはたいしたプロレスラーじゃなかった。名前も売れてなかったし、乗ってた車も小さかった。

――は？　あなたは力道山時代に来日したことがあるのか？

シン　シャーラップ！　少し間違えたことをガタガタ抜かすと、お前さんの鼻をへシ折るぞ！

――スイマセン。

シン　その頃は、まあ俺様の名前も売れてなかったがな。ところがリキドーザン亡き後、イノキはリキドーザンを超えたんだ。リキドーザンは日本、韓国じゃ有名だったが、イノキはいまや世界中で有名になった。もちろん俺様もだ！　共通点としては、それがまず一つ。

――確かに共通してますね。

シン　俺達はプロレスの世界で生きてるだけじゃない。イノキは議員になってイランで人質救出したよな。俺様はそのときバグダットでインド人を救出したんだ。2人ともプロレス以外で社会に貢献してる。それが二つめだ。そして俺達は成功して、今や大金持ちだ。2人とも何もないところから、自分の力で億万長者になったんだ。おまけにそのことでやっかまれて、周りからスキャンダルまみれにされちまった。

――すいません、ミスター・シン。サングラスを取っていただくわけにはいきませんか？

シン　俺様の目に一体何を見たいんだ！　狂気か？　まあいい今日は特別にはずしてやろう。

――ありがとうございます。

シン　だが、お前さんが何か気に入らないことを言ったりして、俺様の怒りに触れたとしても、もうこの目を見てしまった限りは、絶対に逃げることはできないゾ！　そのことを、よーく覚えておけ！

――……。はい。すいません、話の腰を折っちゃって。

シン　俺様は金のことで東スポに載った。だけどな、一日5千ドルぐらいは、こずかいで使えるぐらいの金はあるんだ。それなのになんでそんなことしなきゃいけないんだ!!　イノキもくだらんことで問題になったんだろう。

――シンさんが、7万3千円強盗したって東スポに載ったんですよね（笑）。

シン　俺様には24歳の息子がいるんだ。グッドシェイプ、グッドボディだ。世界一強いジュニアだ。ジュニアは、猪木、アリ、そして俺がコーチをしてるんだから、世界最強のジュニアなんだ。決まってんだろう。なぜジュニアのことを話したかというと、自分がチャンピオンだったら、将来伸びそうな奴がくると、普通は芽を抜こうとするだろ。だが、猪木、アリ、そして俺は育てて将来プロモートしようとする。スポーツマンとして。これが三つめだ。

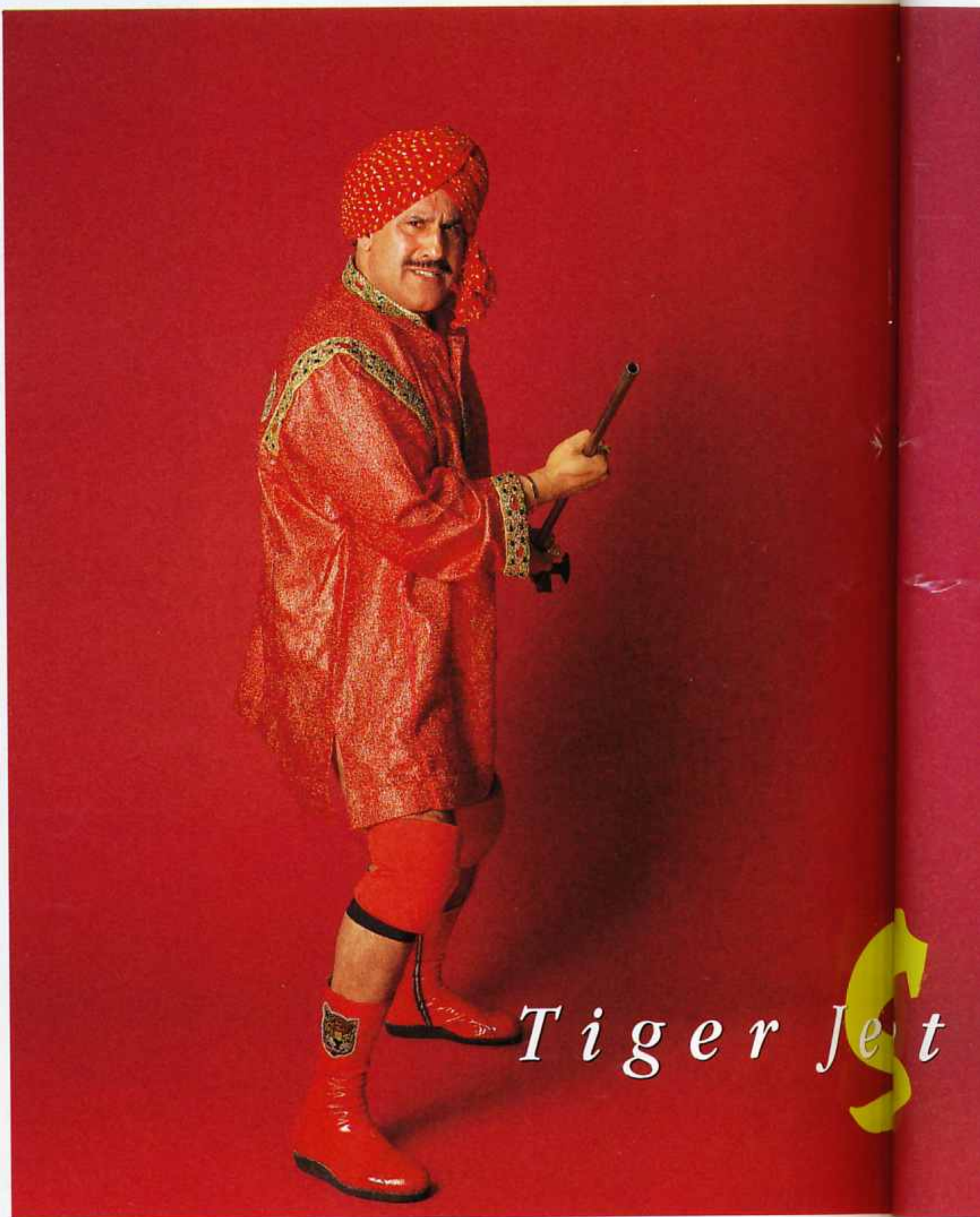
――いまシンさんが億万長者で、猪木さんも億万長者と言いましたが猪木さんが、借金だらけなのを知ってます。シンさんも事業で失敗して借金を抱えたという噂も耳に入ってきてます。

シン　フンッ。事業の失敗？　事業の一つや二つくらい失敗したからといってこのタイガーはビクともしない。それにお前さんたちが想像できないくらいのビッグ・ビジネスだって成功させてるんだ。

――うらやましい限りです。

シン　人生そのものがギャンブルなんだ。お前さんがそこに座っているのも運命。その運命に女神が微笑むかどうかだ。

――猪木さんは借金を抱えたりスキャンダルにまみれても「どーってことねえよ」という言葉ですましてしまう。シンさんの場合は「俺様はなんでも笑ってし

プロレスラーとは何か？
What's Pro-wrestler?

まう」と、以前のインタビューでも言ってたんですけど、そこら辺の器の大きさも奇妙に共通点がありますね。

シン　例えば何百万ドルを失っても自分にとってはどーってことねえ。金っていうのはしょせん作られたものにすぎないからな。自分にはそれ以上の〝心〟というものがある。だからイノキも俺もスキャンダルにまみれたり、金を失ったとしてもオタオタなんてしねえんですよ。どんなことがあろうと、それ以上の大きな〝心〟があるからだ。これも共通点だな。

——なるほど。

シン　けど人によっては、300万ドルを失ったら心臓マヒで死ぬかもしれん。だけど自分達にとっては金なんていうのは、どーってことねえ。

——どーってことねえ(笑)。

シン　金で言えば、俺様はカナダで一番デカいマンションを持ってるし。100エイカーの広さで、500万ドルの価値があるんだぜ。ベンツもリムジンもあるし。そんな生活してるのに、300万ドルなんていうのははした金というか。

——はした金というか(笑)。

シン　飛行機も買おうかと思ってるんだ。俺様は早い乗り物が大好きなんだよ。だけど、免許がないからまだ買わねえんだ。買うなら40人乗りの飛行機が欲しいんだけどな。

——40人乗りっ！

シン　早い乗り物が好きだから、車でも200キロで飛ばすぜ。俺様はスピード狂なんだ。

——気をつけて下さいよ(笑)。

シン　知るかよ、どんなこと言われたって、俺様はスピード狂なんだ。気をつけても人間死ぬときは死ぬんだよ。でも死ぬときはガッツを持って死ぬんだ。

——Die with Guts!!　ですね。

シン　Yes, Die with Guts（ダイ・ウィズ・ガッツ）だ!!　飛ばすときはガンガン飛ばすし、闘うときは徹底的に闘う。要はガッツだ。ガッツを失いたくないんだ！　ガッツを失うときは死ぬときだ。いやっ、自分で命を断つ！

——タイガー・ジェット・シンは素敵です。

シン　ガッツがないやつは死んでいるのも同然だ！

——そういえば、車で思い出しましたが、以前、馳先生の車をブッ壊したことがありましたね。それもまるまる一台破壊してしまった。

シン　ハセ？　ああ、あいつはいま議員先生らしいが、俺様が闘いを通じてファイティング・スピリッツを注入してやった。そのお陰で議員先生になれたってもんだぜ。車をブッ壊したのもファイティング・スピリッツを注入してやったんだ。ガッハッハハハ。

——しかし、そういった数々の極悪非道の行いを繰り返して心が痛んだりはしないんですか？

シン　私は神に祈りを捧げるわけです。この世界にいるといつもなにかしらの問題を抱えてるわけです。お金、子供がいじめられた、そのせいでグレた、仕事の行き詰まり、なにかしらあるものです。しかし、私は何の問題もありません。満ち足りています。神に祈りを捧げているからです。そう、神に。私は神以外に頭は下げません。

——……。

シン　ジュニアにも常に教育してきました。そしてお年寄りに対して、尊敬の念を忘れてはいけないとも教育してます。私は学校や病院を訪問するんですが、そのとき子供達がいれば「学校にキチンと行きなさい」、「ドラッグは絶対にいけない」と、説いております。南アフリカのマンデラ大統領にお会いしたとき、夕食を共にしたのですが、彼も私と同じことを申しておりました。イノキサンも、そう言ってたと思います。

Tiger Jeet singh

——ほー。

シン　私は日本の病んでる子供達に対しても、何かしてあげたいと思っています。ウエダサンやゴウサンにお金をどこかに寄付したいと伝えています。そのお金で病院を建てたりなどの役に立つことに使ってほしいと伝えています。日本のファンの方々にお返しをしたいのです。

——プロレスを通じて終生大衆に尽くす、ということですね。

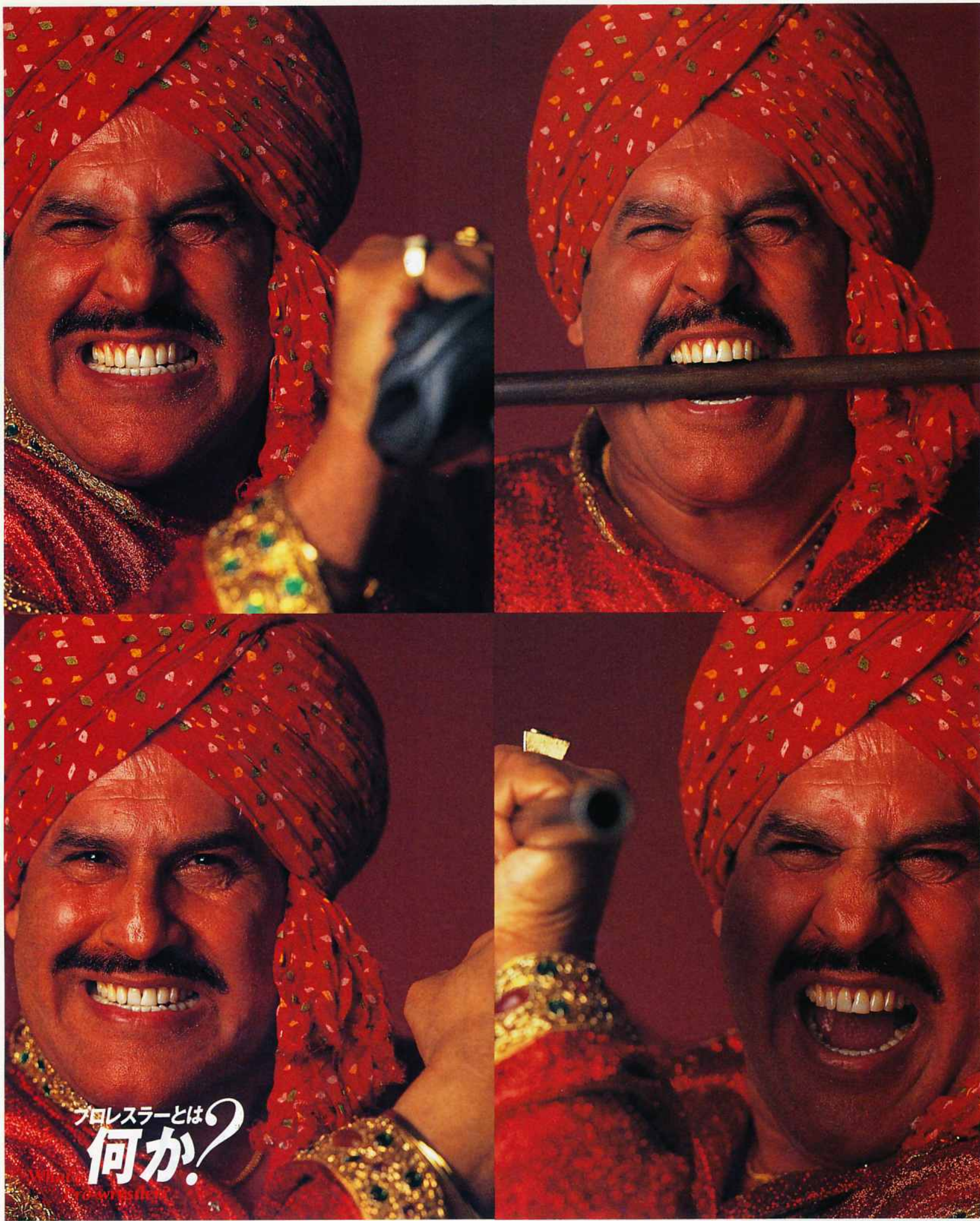
シン　そういうことです。

——それはまったく猪木さんと同じです。

シン　そうです。私とイノキサンとは共通点がたくさんあるのです。

——そのアントニオ猪木が53歳になったいまでも、プロレス界、プロレス界以外でも影響力を持ち続けていますが、若い力もだんだんと伸びてきています。シンさんは50歳を越えたいまでも年齢的なトーンダウンは感じませんか？

シン　ヘイ！　ユー！　ブチ殺されたいか！　あ〜ん？　俺は年は感じない。人間はストレスや心配ごとがあると年を取るんだ。しかし俺にはストレスはない！　満足してるというか。だから年は取らん。50歳というのは単なる意味のない数字にすぎない。俺はいまでも一日2時間のトレーニングは欠かしていないし、いまが一番脂が乗った時期なんだ。

俺様とイノキでアメリカに食らわせてやる！

——普通は現状に満足してると、闘争心は失せますが、あなたの闘争心はどこから湧き出て、どこに向けられているんですか?

シン　俺は金のために闘っているんじゃない。若くて病んでる人たちに、さっき言ったメッセージを伝えるために闘ってるんだ。だからいつまでも満足はしない。

——あなたはさっき満足していると言ったが?

シン　シャーラップ！　そうやって人の揚げ足を取っていると本当に痛い目に遭うぞ！　こんなふうにな（といって側にあったゴミ箱を投げ捨てる）。

〈ドンガラガッシャーンという凄絶な音と共にゴミ箱が床に転がる〉

——……スイマセン。あなたにとって生きることは闘争なんですか?

シン　はい。私にとっては、生きることイコール人のために尽くすことなんです。自分のためではなく。神はそのために、私をこの世に使わしたのですから。

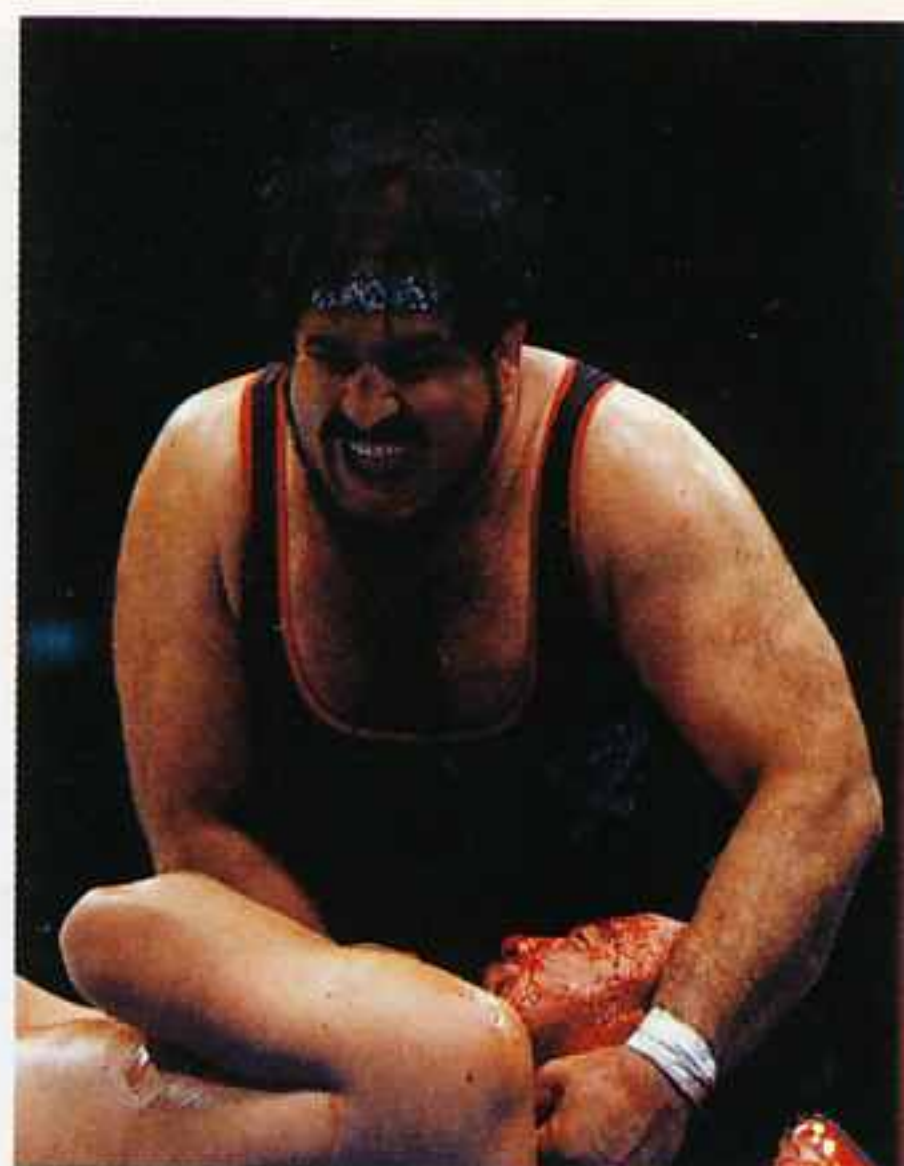
——いまでも「ワヘード・グルー」という言葉が好きですか?

シン　もちろん、そうです。インドの言葉で全知全能を意味します。

——この間のインタビューでは「神様、私に平和をください」という意味だと教えてくれましたが。

シン　広い意味では同じことです。

——はあ。

シン　ブッダのことを考えてください。

俺様がガッツを失う時は死ぬ時だ！

彼はインドのかなり大きな国の王子だったのです。それなのにそれを捨てて病める人達に尽くしたんです。なぜなら人は死ぬからです。人が死んだら何が残りますか？ その人が生前行った行動が、他の人の心に残るんです。私はブッダと同じことをしています。

――ブッダと同じことをしてるんですか！ 信心深いんですね。

シン そうです。毎日、毎日神に祈っています。神が私を生かしてくれてる限り私はいつ、いかなるときにも祈っております。旅行に行っても、教えが載っている本を肌身離さず持って、読んでおります。そして小さいですが、寺院が自分の家の中にありますから、家族を始めそこでお祈りをしています。外にもありますが、商業的に成功した人とそうでない人とでは態度が違うので行きたくないのです。人は神の前では平等であるべきなんです。

――家の寺院でお祈りをするときは、交通安全は祈るんですか？

シン そんなお祈りはしません。なぜなら神はすべて心の中までわかっているのですから。

――そこにいるうちの会社のスタッフは200ドルなくしたぐらいで悲嘆にくれているんですが、どうすればいいでしょう？

シン ナニィ？ そんなことで悲嘆にくれんじゃねえっ！ 落とした金はお前のじゃねえんだ。お前がいま着ている服、メガネにしたって、いまお前が死んだとしたら、その服やメガネは他の誰かが使うかもしれない。その人間もいつかは死ぬだろう。だから逆に考えろ。お前が服やメガネを持ってるんじゃない。服やメガネが、お前を持っているだけなんだ。金だって同じだ。わかったか!! お前、名前は何て言う。

カタブツ君 カタブツです。

シン ふんっ、カタブチか。

カタブツ ……要は地球に住んでいるというような考え方じゃなくて、地球に住まわしてもらってるというようなことでよろしいんでしょうかね。

シン まあ、そうだな。俺達はただそこを通り過ぎるだけなんだ。例えば、列車に乗るとするだろ。駅にくる度に人は降りて行くよな。最初の駅で降りる奴もいれば終点で降りる奴もいる。その差はあるが、結局は全員どこかの駅で降りるんだ。それが人生ってもんだ。なあ、カタブチ。わかるか。

カタブツ君 ……はい（涙）。

シン 人によって20歳で死ぬ奴もいるし、80歳で死ぬ奴もいる。その差はあるがゴールは同じなんだ。だから金をなくしたことなんかでクヨクヨすんなよ、カタブチ！

――シンさん、200ドルじゃありませんでした。彼が落としたのは20ドルでした（笑）。

シン ズバリ言って金なんて単なる紙ですよ。まあ、これが神だったら非常に大変と言うかね。ンムフフフ。

――どーってことねえよと。

シン もちろん汗水流して、お金を得ることは大ごとだ。しかし金にとらわれて、逆に金に使われたらいけないぞ。

――ところで、日本のプロレスマスコミでシンさんがシュートスタイルで世界ツアーをするという噂が流れているんですが。

シン それは非常に真実だ。しかも、イノキに一緒にやろうって、持ちかけてるんだぜ。世界中のファンが俺とイノキがタッグを組んで、アメリカ勢とドリームマッチをやってくれと望んでいるんだ。大ざっぱに言えば、アジア対アメリカだな。アメ公どもは「俺たちが最強だ。NO1だっ！」って、いつもほざいてっから、「ふざけんな！ちったー、現実を知りやがれ！」って、俺と猪木で組んでほんとのところをみせてやりたいんだよ。

――アジア発世界ってのは素敵なプランですね。

Tiger Jeet singh

シン　アジアで最強の奴ら、まあ俺とイノキだな。2人でアメリカにガツ～ンと食らわせたいんだよ。トレーニングもまともにしないアメ公レスラーが「最強っ！」なんてほざいてんのをみてると震えがくるんだよ。怒りで。あいつらしょせん注射で作った体だろ。俺の体をよーく見てみろ、違うだろう。なんせ毎日、鍛えてるからな。

――一日2時間ですか。わかりますよ。それで、シンさんの言うシュートスタイルっていうのは？

シン　アメリカのレスリングは〝コミック〟でしかない。レスラーもだ。しかし日本は違う。強いレスラーは尊敬までされてる。アメリカじゃこうはいかない。だからジュニアが「世界一強いレスラーになりたい」って言ったとき、カナダでイノキやキタオ、その他ほんとに強い奴をよんで大会をしようと思いついたんだ。計画としては、できれば2月やりたいと思ってる。

――スタイルとしては日本で言うUWFスタイルなんですか？

シン　そうだ、マエダがやってたスタイルだ。

――3時間前に、ここに前田さんがいてインタビューしてたんですよ。

シン　俺はマエダをずっと見てきたが、若いときは、ほんとに強いプロレスラーだったぞ。いまはコミックレスラーにでも成り下がってるのか？

――いやいや、とんでもない！　何てことを言い出すんだこの人は。ミスター・シン、彼についてはそんな心配はご無用です。

シン　そうか。あいつは俺が来日したとき、俺様のカバン持ちをしてたときぐらいから知ってるんだぜ。だから頑張ってるって聞いて非常に嬉しい。俺はあいつに目をかけてたからな。

――そうですか。シンさんはスタイルを変える必要はないと思うんですよ。いつものスタイルで十分強さを見いだすことができるから、シュートスタイルをやらなくてもいいんじゃないですか。

シン　ニューチャレンジだ！　やっぱり人間いくつになっても挑戦をしなきゃ腐っていくばかりだ。

――そうですか。では最後にシンさんが考える、プロレスラーの定義を教えて下さい。

シン　キャラクター、内に秘めたガッツ、押忍の心(ディスプリン)、後はスポーツを愛する心だ。そしていつも心にダイ・ウィズ・ガッツ！　だ。

〈96年11月26日・六本木リュウスタジオにて収録〉

無比人

Muhito

時代に飲みこまれるな！
格闘プロレス小説
堂々の連載開始!!

真樹日佐夫

無比人

（1）

眩いばかりのライトがオクタゴンをくっきりと浮かび上がらせていた。金網を張りめぐらした、八角形のリングだ。

リング内では、入れ墨をした巨漢二人が凄絶なグラウンドを展開している。マウントを取っているのがキモ、下がビガロ。キモの拳が唸り、ビガロの顔が苦痛に歪む。

平成八年十一月十七日、東京・有明コロシアムで火蓋が切られた噛みつき、目潰し以外はなんでもありのバーリ・トゥード大会『ザ・U―ジャパン』。今回のキャッチコピーは〝アルティメット・ファイター対プロレスラーの全面戦争〟だったが、ブラジリアン柔術を主武器とするアルティメッターたちにプロレス勢が一方的に押し捲られ、メーンイベントのこの第六試合もまた、のっけからキモがタックルでビガロを転がして好ポジションを奪った。

千堂はリングサイド最前列の招待席に氏家真澄といて、頬の筋肉が引き攣れ吐息ばかり口をつくのを抑えようがなかった。

千堂明彦、三十五歳。プロレス専門の週刊誌『四角いジャングル』の発行人にしてオーナーでもある。氏家真澄は千堂より一つ年上で、六本木を中心にバーやクラブを都内に何店も経営している。二人の間に男と女の関係が生じて四年が経つ。

顔面パンチを何発か浴びるうち、ビガロの右目のあたりが切れて血が噴き出した。途端に客席のそちこちに悲鳴が上がった。プロレスファンのもの、と千堂は見て取った。

氏家真澄が組んでいた脚を解いた。そして、じきに組み変えた。上になった方の脚のハイヒールが千堂へ向いた。パールピンクでストッキングも同色だ。上背が百七十センチからあり、ハイヒールを履いて並ぶと百八十の千堂とほぼ同じになる。薄いシルク地に覆われた脚は膝関節から下が殊に長い上に、ほどよく肉感的でもあり、ちょっとけちのつけようがない感じだった。

組み変えられたその脚を氏家真澄は、さらに両側から絞って密着させるようにした。なにげなく千堂が見やると、真澄の膝にも力が込められていて、股を擦り合わすかのような小刻みな律動が下肢全体から伝わってくる。

千堂は新発見でもしたような気分のうちに、次いで視線を真澄の横顔へめぐらした。目はリング上の二人に釘付けにされている。外人モデル並みのプロポーションとはそぐわぬ純日本調の、いつもは取り澄ました顔が湯上がりのように紅潮し、京人形を思わせるおちょぼ口は半開きにされて、切なげだ。

（――なんという女だろう。血を見て感じてしまった、というにしても、こんなところで臆面もなく……）

周りをそれとなく窺ったが、流血シーンに気を取られていて、注意を向ける者もないようである。

動くにつれてスーツの裾が腿を滑っていき、ガーターの一部が覗けるまでになった。真澄はパンティーストッキングを嫌い、ガーターを愛用していた。それを目にしたことで千堂の思いは、おのずと股間の奥のありようへと向かう。濃いヘアは

常に手入れが行き届き、超ビキニの下着もつけられるように矩形にカットされている。その陰で小ぶりな花弁は早くも玉の露を宿しているのでは……。

聞こえよがしに一つ咳払いをすると、千堂は八角のリングへ視線を戻した。都合二十発はパンチが降りそそいだか、顔をでこぼこにされたビガロが堪えかねた様子で体を返したところだった。

俯せになることで顔面パンチから逃れんとしたのだろうが、この瞬間こそをキモは待ち儲けていたに違いない、と千堂には冷徹に読み通すことができた。果たして背中を向けたビガロの巨軀の上に、すかさず覆いかぶさったかとみるや、チョーク・スリーパーが入った。

ビガロは忽ち舌を出し、それでも目をきつく閉じたまま必死に耐えた。クラッシャー・バンバン・ビガロとしてプロレスのマットに勇名を馳せる男が、いまにも泣きだしそうな顔で神に祈るかにも見えたが、限界がきた。

一度、二度、三度とマットがタップされて、レフェリーによりギブアップが認められた。試合開始から二分十五秒。

チョーク式裸締め、まさに、バーリ・トゥードの定石通りのこのフィニッシュの瞬間、なんとも形容しがたい音響がコロシアムを押し包んだ。地鳴りのようでも、あるいは巨大な獣の断末魔の咆哮のようでもあったが、それと時機を合わせるかのごとくに真澄が艶めいた声をはじけさせたのを千堂は聞き逃さなかった。

「行こうか」

と顎をしゃくって席を起つと真澄も我に返った様子で立ち上がった。切れ長の目が心なしか潤んでいるように見えた。

通路へ出たところで、後ろから声をかけられた。『四角いジャングル』編集人の徳永で、カメラマンらと報道関係者席の方で取材していたのである。

「弱りましたですな、社長。プロレスラー総崩れで、最後の砦ともいうべき頼みのビガロまでが、あっという間に畳まれてしまうなんてねえ」

徳永は四十代半ばで、千堂のところへくる前は女性誌の編集部にいた。

「ま、ある程度予測はついたさ」

「え？　プロレスが真剣勝負となるとあんなにも脆い、ということがですか」

千堂は、それには応えず、

「二分十五秒か――それを短いと視るか長いと視るかは、意見の分かれるところではないのかな」

「ですが余りにも一方的というか、あんなぶざまなビガロを見たのは初めてで――」

「インタビューがあるんだろう。では明日」

徳永は頷くと、真澄に目礼してリングの方へと離れて行った。

（2）

『四角いジャングル』社は新橋にある。

煉瓦通り沿いの雑居ビルのワンフロアを占めており、編集部、写真部、それに営業と経理。千堂を含めて総勢十七名で、うち五名がアルバイトであった。

真澄の運転するポルシェで銀座へ出、一緒に食事をして煉瓦通りまでくると、時刻は十時に近かった。ビルの前で停めてもらい、千堂が車を降りると、

「お仕事、何時頃までかかるのかしら」

声が追ってきた。

「観戦記を書くだけだが、日付が変わるまでに上がるかどうか」

見返ると、真澄は運転席のドアガラスを下ろして顔を出してい、

「それじゃ帰って待っていても、なにやかやで二時にはなっちゃうわねえ。抱いてもらいたいけど、明日は早くに会計士に会わなくちゃならないし、この歳になると美容上睡眠時間だけはなんとしても減らすわけには――」

「無理することはないさ。睡眠はしっかり取るといい。尤もそんなに気にしなくとも、肌の艶といい、張りといい、十は若く見えるがね」

コロシアムで絶頂を迎えていくらも経っていないのに、欲張るなと心では扱き下ろしながらも、努めてやさしく千堂は言いかぶせた。

十若いというのはお世辞ではなかった。

「まあ嬉しい。では今夜は、その言葉だけで満足して独りで寝むことにするわ。けれども明日は、夕方から時間を空けといてくれなくちゃ厭よ。会計士との用事がすみ次第、携電に連絡を入れますから」

「わかった、わかった。それじゃ、お寝み」

千堂は真澄へ寄ると、腰を折って額に軽く口付けをした。とにかく早く観戦記に取りかかりたかった。

走り去るポルシェを見送ってから、ビルの玄関をくぐり、エレベーターで五階へ上がった。七階までであって、ほかには歯医者、法律事務所、エステティック・サロンなどが入っていた。

『四角いジャングル』社が看板を掲げる五階はおよそ百平方メートルあり、三つに仕切られていて、一番広いところが編集部及び応接スペース、それに写真部兼営業課兼経理課と、社長室。普通はこの時間であればまだ誰かしら居残っているが、日曜のこととて無人である。徳永ら出勤組も有明からまっすぐに帰宅したものと見られた。

千堂は社長室のデスクに向かうと、半ぺらの原稿用紙と筆入れを出し、備え付けの自動鉛筆削り器で2Bの鉛筆の芯を尖らせた。

アントニオ猪木をはじめ、あらゆる格闘技の中でもプロレスリングこそ最強なりと主張するレスラーは数多いて、果たしてそれは真実か嘘かとは格闘技ファンにとって永遠の疑問かとも思われていたが、これについての解答の出される日が唐突に訪れた、と書き起こし、そこで一服すいつけた。

千堂は、いうところの社内原稿を総て署名入りで書いており、そうしたことからプロレス各団体の主催する興行などの際にも、敬意を払う意味でか記者枠とは別に決まって招待状が送られてくるのであった。

千堂の生家は南紀白浜で旅館業を営んでいたが、彼が東京の大学へ進んだ年の冬に火事を出し、近隣数軒を延焼せしめた。幸い一人の死傷者もなくてすんだもののの補償が大変で、その冬を境に仕送りは断たれた。

学費に下宿代と一切を自力で賄わなくてはならず、千堂は青春を謳歌するどころかバイトに次ぐバイトを余儀なくされたが、そんな灰色一色の明け暮れの中で唯一の息抜きというか生き甲斐というか、それがほかならぬプロレスリングだったのだ。

プロレスには突然嵌まったわけでなく、小学生の頃から大ファンで、なにがあろうとテレビ観戦だけは欠かさずにきていた。それが大学受験を控えてしばらく頭の中から追い払わなくてはならぬ時期があり、縁遠くなっていたのがふと思いついて試合場へ足を運んだのが上京後のことで、そこで改めて取り憑かれたのである。

そのときは猪木とデビューして間がない初代タイガーマスクが出場したが、この二人には殊のほか感情移入がしやすく、自分も戦ったつもりになるとともに、生きている充実感を満喫できた。これに優る世界はない、ということが砂に水を沁み込むのにも似てスムーズに得心され、また、憧れのレスラーたちと戦いを共有し得たことがなににも増して千堂には心強かった。

この少し後に実家が火事を出すのだが、俺にプロレスがなかったとして働きづめの大学生活を全うできたろうか。社会人となってから時折当時を顧みて思うことがあるが、バイトで疲れ果てた身を試合場へ運ぶと、帰りには嘘のように気力充実していた、それは動かせない。

有力スポーツ紙に就職を決めたのは、卒業後も千堂のプロレスへの熱が一向冷めずにきた証しでもあろうが、その頃ともなるとただ肩入れするだけでなしに、生きる希望と夢を与えてくれたプロレス界に恩返しがしたい、さらなる発展に尽力できたらとの使命感めいたものに衝き動かされていた。

運動部に配され、晴れて記者としてスタートを切った。だが思い通りに運んだのはそこまでで、忽ちにして千堂は欲求不満に陥った。というのは、

有力紙としての体裁を気にするせいでもなかろうが、野球、サッカー、ゴルフなどに重きが置かれ、プロレスのスペースはあっても、その取材だけをしておればいいというわけにもいかないのだった。

野球やサッカー担当の応援に駆り出される時間の方がトータルすると多く、プロレス担当になるにはなったものの、遊軍なる意識が常に付いて回る。とんだ見込み違いというべきで、いらいらの連続に千堂は、入社して二年目には早くも独立することを頭に置いていた。

独立してプロレス専門誌を出そうと考えたわけだが、おいそれと願いが叶うはずもなく、結局八年いて三十歳になったのを機に退社し、『四角いジャングル』社を設立。而立の二文字を千堂が心に刻んでいたことはいうまでもない。

『四角いジャングル』は月刊誌としてスタートし、力を蓄えたところで隔週刊、そしてゆくゆくは週刊誌にとの腹積もりでいたが、隔週刊どころか半年もしないうちに先行きが危うくなってきた。

千堂自身、筋金入りのファンとしてのキャリアを踏まえ、プロレスなるものを独自のアングルで捉えて掘り下げる、ということにかけては密かに自負していた。ところが冒険ができ新味を盛れるのは特集記事などに於てのみで、資金面での不安をカバーできればとの含みもあり、活版の頁数を多くしたのが、結果的には裏目に出たようなのだ。

既存の競合誌がグラビア頁を増やしてのビジュアルな誌面づくりで鎬を削っている市場にあって『四角いジャングル』は、いかに記事が充実していようと見た目の貧弱さを拭えず、購買意欲を煽りかねたということでもあろうか。

貯金と退職金、それと火災による補償問題がようやく片付いたばかりの両親に無理を言って用立てさせた分もそっくり注ぎ込んでいて、この上さらにというのは到底無理な状況にあった。いまのうちに隔月刊にして、出せるぎりぎりまで踏ん張る手か。意地で号を重ねて丸一年、千堂としてもいよいよ戦線の縮小を決断しないわけにゆかぬところまで追い込まれていた。

そんな折、氏家真澄に出合ったのだった。

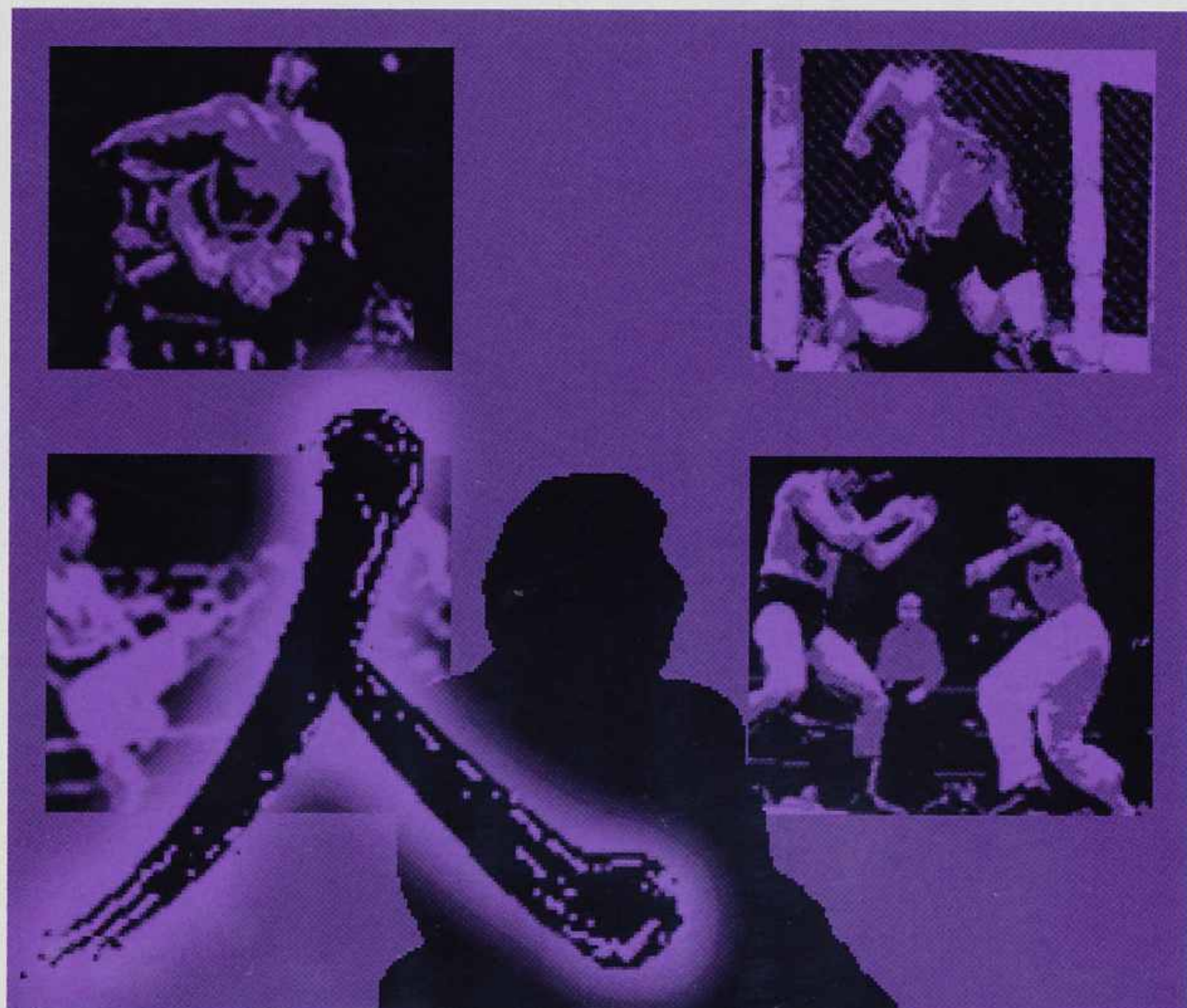
(3)

「これだけ女が溢れていやがるんだ、チョベリグで一発やらせるのが必ずいるって。ゲットしようぜ、なあ！」

胴間声が耳朶を打った。

千堂は、隅のカウンターの出入口に背中を向けて席を占め、モジートのグラスを前に置いていたが、

(はて、いまの声――)

眉を寄せつつ頚を後方へ向けた。聞き憶えがあったのだ。ドアの近くに取り巻きらしい若者二人を従えた三十年配の巨きな男がいて、通路をダンス・スペースへと近づいて行く。インディーズとしては古い方の団体のエースである植野と、連れもどちらも体格がよく、彼のところの若手と視てよさそうだった。

新宿歌舞伎町コマスタジアム裏のビル一階にあるディスコ。時刻は午前二時を回ったところ――。

プロレス界が一大事と受け止めて巻き返しに出るか、あるいは黙って退いてしまうか、アルティメットの戦士たちとのリベンジ・マッチに突入す

るにしても現状のままではしかし甚だ心許ない、と二百字詰二十四枚の原稿を締め括ると零時半に近く、千堂は帰り仕度をして社をあとにしタクシーを拾った。未だ独身の彼が雄のシャム猫一匹と住むマンションは高輪にあり、一旦は帰途についたが急に気が変わった。

　どこかで寝酒を引っかけて行くかと心が動き、寝酒だけなら帰ってしまってもよかったが、それではなにか事足りぬように思えたのは、プロレスが全敗した危機感が裡に尾を曳いていたせいでもあったろうか。日曜でも新宿まで出れば大丈夫と高を括って車を回させたものの、一時過ぎとあっては灯を落としていないのはディスコくらいしか見当たらず、酒さえ飲めればと諦めて入った初めての店で植野の声を耳にするに至ったのである。

　千堂はすでに一時間ほどいて、ぼちぼち腰を上げようかと考えていたところだったが、ラム・ベースのそのロング・ドリンクをもう一杯お替わりすることにした。植野が酒癖が悪く酔った上での喧嘩沙汰が絶えぬことはプロレス関係者の間で知らない者はなく、野放図な声を聞いてここでもまたやらかすのでは、そう感じられたせいにほかならない。

　営業している店が少ない影響か、ダンス・スペースは大変な込みようで、女客の方が断然多い。そこへ植野ら三人が割り込んで行ってほどなく、女の悲鳴が相次いだ。千堂はカウンターに身を乗り出し、目を凝らした。

　人群れの浅いところで植野が茶髪の女の胴を抱く、というより腕の上から閂に極めて強引に唇を重ねたところであり、ほかの二人も似たようにしてこれまた茶髪をそれぞれに抱きすくめんとしているではないか。

（限界だな）

　千堂は、そう自分に言い聞かせるとスツールから腰を滑らした。植野の様子を見ることにしたのは、なにかあれば仲裁に入ろうと考えたからで、彼とは、面識があるというだけでなくインタビューで長時間話すなどもしており、説得できる自信はあった。その時機がきたのを悟り、カウンターの傍を離れようとしたが、横合いからすっと植野たちへ近づいた一人の男に先んじられた。

　二十代の前半とおぼしいその男は、さして大柄というわけでもないものの、打ちかためたような躰全体なにか異様な印象で、一見したところでは千堂は豹か、もしくは狼といった四つ肢で歩行する動物を連想した。

　制服と思われる黒のスーツからすると従業員だろうか、三人を前にして立つと男は植野に対してまず深々と低頭し、次いで二人にも丁重に腰を折って見せた。

「黒服なんぞの出る幕かよ」

　退いてろ、と植野が声を荒げて言い、女を放そうとしないまま近い方の足を飛ばした。蹴りが脇腹へ入った。

　男は尻餅をついたが、じきに立ち上がると再度植野に頭を下げた。蹴りを浴びた時点で連れの二人は女から手を放しており、それもあって的を絞ったようだ。

　似たような蹴りで横倒しにされた。また起った。低頭する。ひと声も発しない。

「しつこい野郎だぜ。よーし、表へ出るか」

　植野も辟易した表情となり、女を放免して言うと二人へも顎をしゃくって踵を回した。

　四人して店を出て行くのを、千堂はカウンターの際で手をつかねたまま見送る格好になったが、少し遅れて後を追った。男が従業員であるなら仕事のうちかとも考えたが、植野の狂暴さを思い、やはり仲裁すべきだとの結論に達したのであった。

　前の路上で植野は、男の両肩を鷲掴みにしていた。男より頭半分ほど高い。その態勢のまま上体を弓なりに反り返らせ、

（いかん！）

　千堂が肝を冷やして駆け寄ろうとしたときには、強烈な頭突きが炸裂。手を放すと男は仰向け大の字に沈んでいき、動きを止めた。植野以下三人は千堂も目に入らぬものか、勢みがついたような足取りで店内へ消えた。

「いいか、少しの辛抱だ。すぐに救急車を」

　傍にしゃがんで言いかけたが、忽ち声を途切れさせた。男が目を見開き、何事もなかったような顔で起ってきたのだ。

「きみ——なんともないのか、本当に」

　男は、おでこをひと撫ぜして頷き、

「客のいかなる暴力をも甘受し事態を円く治めるべく務める、これ用心棒心得の一」

「用心棒な……。ときに、名前は？」

　まんむひと、の五音が発せられた。

「まんは、よろずの万か。むひとは——」

「並びない人、無比人」

　男は言うと、にっと笑った。掴みどころのない茫洋とした印象が一変し、やけに人懐こく感じられた。

（以下次号）

紙のプロレスRADICAL発刊記念

感覚が激する
巻末スペシャル・インタビュー

前田日明

聞き手／山口昇
interview by Noboru Yamaguchi
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saitou

前田さん、
前田さん、
「プライド」って
何ですか？

前田

RINGS
AKIRA
MAEDA

感動なんてもんじゃ
なく、感覚が激する！
「感激」が大事なんや

プライドとは何か！プライドとは美学である！

前田　石黒、ちょっとアレ出してみぃ。（リングス広報の石黒氏、カバンから白い布を取り出し、日明兄さんに渡す）

前田　（異様に嬉しそうに）これ、坂井三郎さんだとか、あの当時の戦闘機乗りが実際に使ってた生地で作ったマフラーや。

―前田さん。手に持ってないで、してくださいよ。

前田　そうか。（異様に嬉しそうにマフラーを付ける）どう？

―似合います！　バツグンです！

前田　そうかあ（笑）。そんなことないやろ。

―似合ってますって。じゃあ、写真撮影もありますから、そのままインタビューを始めましょう。で、本日は、「プライドとは何か？」を前田さんに聞いてみたいと思ってるんですよ。

前田　プライドとは何か！　プライドとは美学である！

―いや、だから早いですよ（笑）。終わっちゃうじゃないですか。最後まで取っといてください。で、いろんな人に「プライドとは何か？」ということでアンケートを取りました。

前田　うん。

―まず最初に、これは『SAMURAI！』の原一博君、旧姓タコヤキ君という方の見解です。これは大きく出てますよ。「プライドとは命より大切なもの」。

前田　命より大事なもの！？　そういうヤツに限ってポイッとか会社かなんか移っちゃうんだよ。でしょ？

―このような人にプライドも何もないということですね（笑）。

前田　命より大事なもんってそんなんないんだよ！　でも、その状況状況において身を呈して守らなあかんもんってあって、それを守った結果、命を失くしてしまったというね。守らなアカンと必死になってるうちに命を落としてしまった。そういうもんでしょ。

―結果的に命を落としても守るものがあるっていうのは素敵ですね。

前田　昔の軍人なんてそんな人ばっかでしょ。「お国を守るために命を捧げます」と言うんだよ。言うんだけど、我が部隊を守るため、上官を守るためとか言ってるうちに死んじゃうんだよ。

―なるほど。で、ある人に聞くとですね、今井美樹の「プライド」っていう歌が人気らしいんですよ。

前田　なんやそれ？

―「彼こそが私のプライド」っていう感じの歌らしいんですけど。

前田　そんなプライド、チンケやなあ。チンケ！

―ひと言でおしまいですね（笑）。

前田　おしまい！

―それで、これは『リングス・ジャパン』というビデオのプロデューサーでもある東芝EMIの木目さんという方の意見ですが、「どんなに腰が痛い時でも子供と遊ぶのが親のプライド」って答えてますね。

前田　それはいいじゃない。それはいい。

―OKですか？

前田　オーケエ。やっぱね、どっかで自分ってもんがないのがプライドだよ。俺は俺。私は私っていうのは真のプライドじゃないよ。

―じゃ、前田さんがいつも言ってるように、他人の期待を一身に背負って、その期待に応えるために何かをするっていう時に真のプライドが芽生えるってことですか？

前田　そうそうそう。それがホントのプライドだよ。自分というものがあったらプライドじゃないんだよ。何かこう、大きなものを守るってものがあって、その中にホントの自分っていうのがあってさ。現実に生きてる自分にはプライドを乗せる器なんかないんだよ。自分を形づくってる大きなものがあって、その中に自分のプライドを入れるもんがあるんだよ。でしょ。

―プライドを語らせたら、今のところアジアで3本の指に入りますね（笑）。

（ここで、テスト用のポラ写真が上がり、その写真を見ながら）

前田　なんかアホみたいやなあ、俺。顔の角度も悪いし。

―なんでマフラーなんかしてんだろ、この人は（笑）。

前田　ナニィ！　ああ、おれもう傷ついた。もう取る。

―ウソですよ。してくださいよ。

前田　イヤだ！　もう傷ついた。

―ホントに取っちゃったよ。あ～あ、これ一枚しかないですよ、マフラーの写真は。後でしてくださいね。せっかく持

ってきたんですから。

前田　もういい！　もういいよ。

——あッ、そうやってプライドって傷つくもんなんですね（笑）。

前田　あのね、これはプライドじゃないよ。これはプライドじゃなくて、ただ恥ずかしかっただけ（笑）。

——ガハハハハ。じゃ、今のはプライドとは関係ないってことが、よくわかりました。

前田　美学の一部が傷ついてしまったと。

——じゃあ、美学とプライドってのは前田さんの中では微妙なところでイコールじゃないんですね。

前田　美学っていろいろなもんがあるやん。そんなキッチリ線引いて語れるもんて人間ないよ、みんな。それをキッチリ線引こうとするから、みんなおかしなことになるんだよ。微妙なモンってあるやん。朝と昼の間には朝焼けがあってさ。

——来ましたね（笑）。

前田　昼と夜の間には夕焼けがあってね。それと同じ。

——夜と真夜中の間には何があるんですか？

前田　……夜と真夜中の間？　夜しかないやんけ。

——夜しかない（笑）。次のがすごいんですよ。プライドとは何か？　「どんなことがあっても謝らない」（笑）。これは『SAMURAI！』の編成部長・柳沢忠之君のご意見です。

前田　それ、ただのパーやん。

——ガハハハハハ。ただのパー。

前田　その上でね、どっかにキラめくとこがあったら、ドストエフスキーや山下清みたいになるんだけど、なかったらただのパーや。『SAMURAI！』っていえばサダハルンバ（谷川）。あれはプライドって言葉に気ィついてないんや。まだ、そこまでいってない。来年の教科書に載ってる。サダハルンバ家では（笑）。

——前田さん、ここで告白しますけど、僕はですね。高校中退なんですよ。

前田　うん。

——で、前田さんは戦記とか歴史とかに詳しいじゃないですか。今日はここで昔の人のプライドってものを勉強のために教わりたいんですけど。

前田　はい。なんでも聞いてください！

——そういう時は早いなぁ（笑）。じゃ、まず、武士と、前田さんの好きな坂井三郎さんのような戦闘機乗りが一番共通してるところってどういう部分ですか？

前田　武士って言ってもいろんな武士がいるんだけど。正統武士ってのは鎌倉幕府にいた東北の板東武者。主君のためには命もいとわない、武士の純血種。で、ほかに主君から禄をもらってなくても〝いざ、鎌倉〟って時には畑耕してても駆けつけますって言った武士。その後、戦国時代になって一回ワアーとなって、で幕末になって。で、水戸の方で板東武者的な連中が現れて、その連中は日の本の国は皇室のものだから天皇に返そうっていうことでやってて。その思想の大元は水戸黄門さん。で、あの人の人生のヒーローって言ったら楠木正成。

——有名どころが出ましたね。

前田　だから、領内に碑を建てたり墓か建てたりとかいろんなことしたんだよね。それがきっかけで、国学とか大事にして、徳川最後の水戸家から行った将軍さん、徳川慶喜が大政奉還したんだよ。

——まるで、どこかの業界を見てるようですね。

前田　そうそうそう。ま、そんなチンケじゃないんやけどね。

——この間、坂井さんが、日本の歴史の中には板東武者みたいな本物の武士たちが何百年間隔で現れて、国を救ってきたって言ってましたよね。

前田　これは歴史として読んでほしいんだけど、まずは、百済の戦いがあって、その次はね、元寇。あれはもう板東武者大活躍やね。それがしばらくあって、諸説紛々あるんやけどね。百済の……………。

（歴史好きの日明兄さんの知識の深さが披露されたのだが、後略）

——結局、日本人は、アメリカ人になっちゃったんですかね。

プロレス界がプライドを持つ方法？・一回潰す！

前田　アメリカ人になっちゃった。アメリカ人がよく日本人のこと言うやん、バナナって。表は黄色いけれど、中身は白いって。

――でも、アメリカ人にはアメリカ人なりのプライドってあるんですよね。

前田　あるある。あるよ。アメリカ人がやってるのは世界正義でしょ。アメリカのやってるのは地球上から国をなくしたらどうなるかっていうテストケースとしてやってるんでしょ。他民族を滅ぼしたらどうなるかっていう。

（アメリカの歴史と暗部についての知識が披露されたのだが、後略）

――そういう情報ってどっから仕入れるんですか、前田さん。

前田　日々研鑽！　石上三年！

――日々研鑽（笑）。

前田　ああ、私は自分が怖い。

――そりゃ前田さんは怖いですよ（笑）。

前田　だから、アメリカが他民族をまとめる時に何を使ったかというと、どの人間、どの民族、どの言語に対しても共通な部分の合理精神と、世界正義でしょ。だけど、アメリカでやってる合理主義や合理精神がどこの国でもやれるかったら、それは違うんだよ。それは一般生活の中では通用するんだけど、民族と民族が持っている心情的な素質、その部分でやっぱり摩擦があるんだよ。あれはアメリカのもんであって、日本のもんではない。でしょ？

――アメリカンプロレスってあるじゃないですか。あれなんか、アメリカにとってはすごく、はまったスポーツじゃないですか？

前田　スポーツっていうか、エンターテインメント・スポーツやね。だから、集客するって意味でのスポーツというかスポーツビジネスという意味では、アメリカンプロレスってのはアレ以上に完成ないくらい完成しちゃってるんだよね、いろんな意味で。興行方法だとか、選手の作り方とか、売り込み方、育て方、メディアの使い方とかいろんなことでね。

――彼らは彼らなりに、アメリカンプロレスっていうジャンルに、プライドを持ってるんですかね。

前田　いや。今のアメリカンプロレスにはないよ。今のアメリカのプロレスラーはなんかもう、そういうプライドを持ったのはマードックとかあのへんの世代が最後で、今はもう金を稼ぐ場所や。あそこで手っ取り早く金を稼いで、将来、牧場とかやりたいと。レスラー１００人いたら90人くらいはそういうこと言うよ。

――まさにモンキービジネスになっちゃってるんですか？

前田　モンキービジネス。高潔なスポーツマンが体を売る場所。

――ヤな場所だな（笑）。そこで、ふと思ったんですけど、この『紙のプロレス』はプロレスっていう名前が付いてるんでね。今、いろいろプロレスのことをもう一回掘り下げてみようかなって考えてるとこなんですよ。で、前田さんに相談なんですけど、日本のプロレス界がプライドを持つにはどうしたらいいんでしょうか？

前田　一回、今のを全部潰すんやね。

――実に明解なお答えです（笑）。

前田　全部潰しちゃうんだよ。全部潰しちゃってしばらく放ったらかしといて、あれはなんだったんだろうってみんなワアーと騒ぎ出して。で、それが終わった後、モデルケース作ってパッと提示してダーンとやっちゃうわけ。どっかに行ってちょっと１００億くらい貰ってきて。俺やってやるから。完璧にやってやるから完璧に。

――１００億！　今ね、前田さんから俺やってやるからって言葉が出ましたけど、前田さんみたいに格闘技畑から……。

前田　（身を乗り出しながら）だからプロレスが格闘技じゃないっていうからおかしくなったんや！　わけわかんなくなったんや。猪木さんなんか、いきなり村松さん出てきて、それまで、あの人が一人で言ってたわけね。「プロレスは世界最強のスポーツだ」って。エイエイオーってやってて、でも、「なんかショー的な部分もありますよね」って聞かれた時に黙り込むようなところあったけどね。それがなんか、村松さんが出てきて、その辺をうまく言われたら途端に可愛くなっちゃって「ボク、ウソだったの〜」ってな（笑）。だから自分自身が見えなくなっちゃった。そういった瞬間に世界最強のス

全部をプロレスって認める前は再生できたんだよ

巻末 Special Interview

ポーツだって言ってたもんは一体何だったんだろうって説明がつかなくなってしまった、自分が。

――糸井重里さんが言ってましたね。猪木さんはときどき脱肛しちゃうって。ここまでやってたらケツの穴は小っちゃくないだろうって言ってる間に脱肛になっちゃうっていうようなことを言ってましたけど。

前田 脱肛っていうよりナマコみたいやな。敵に襲われると脱肛してな、ヒラヒラってケツの穴から腸を出してな。そうか、猪木さんはナマコ人間だったんだ(笑)。

――ヒドイ。ナマコ人間。

前田 アントニオナマコ(笑)。な~んてな。ダハハハ。

――ガハハハハ。自主規制します。でもね、日本人というか、日本人とプロレスということでですね、「日本のプロレスに僕らはこれからどうやってプライドをもっていったらいいんだろう、前田さん」っていう心境なんですよ、もう。

前田 無理や、無理や。マスコミがトドメを刺した。わけのわからんもんまで全部プロレスって認めちゃったでしょ。あれやる前はまだね、再生する力があったんですよ、プロレス界自体が。あれやったらダメ。見てみなよ、あのわけわからんインディーの連中。

――俺、知らないですもん。

前田 俺も知らないけど、たまに週プロとか見たりとかするけどさ、うちで2週間で逃げた連中とかさ、テストで通らなくて落っこった連中とかさ、エースでやってるよ。そんなんが。

――困った世界ですよね。だから、このままいけば格闘技界がプロレス化してくれるのを待つくらいしかないんですよ、僕らは。もっとこう興行として成り立って、みんな選手たちがプライドを持ってっていう意味で。そういう芯みたいな部分をシッカリとプロレス界に持ってもらわないと、明るく楽しいプロレスまで引きずられてダメになっていっちゃって、結局全滅になりかねないですからね。

前田 もうプロレスってところを捨てなきゃダメだよ。もし捨てないと、ああだ、こうだやってるうちにみんなドボンしちゃうから。全員で心中しちゃうから。みんな捨てて新しいもんを再構築、一からやり直さなきゃあきませんよって言うんでそっからUWFとリングスができたんだよ。でしょ?

――僕らマスコミの間でもそうですよ。僕らマスコミの間でも、もうプロレスってのは何でも有りだからどんなプロレスでもOKじゃないかっていう風潮ですヨネ。どんなことやったって一緒だろうって空気が充満してますからね。

前田 それもさ、マスコミをそういう風潮にしちゃったのもぜ~んぶ山本です。全部あいつや。

――ターザンが悪い(笑)。

前田 悪い!

――すべてはターザンが悪いのか、やっぱり。A級戦犯ですね。

前田 絞首刑にした後、ギロチンで千切りにして。ほんで、アマゾンのピラニアに食わしてそのピラニアを日干しにして、グチャグチャに粉砕して畑にまくぐらいしか、世の中の役に立つことないやん(笑)。

――うわぁ~。そこまで言うと逆に気持ちいいですね。ターザンもこれを読んでそう思うと思います(笑)。

前田 一部のマスコミがやってたことっていったらプロレス界にあったすべてのプライドをグチャグチャにしたことばっかりや。レスラーとはこういう人間だ、リング上はこういうところだ、で、プロ

レス団体の裏側はこういうことだ。そんなことばっかりやんけ、あいつらの書いてることは。選手のことは何一つ説明できずに、リング上のことを何ひとつ説明出来ずに。そういう力がないもんだから、全部それに走って。で、スポーツライターとして真面目なことがあるのか。道場の練習とかさ、あんなの選手にくっついて初めてわかるんもんや。

――プロレス記者かくあるべきってのが前田さんの中にあるみたいですね。

前田　当たり前やないけ。マット業界を愛してないモンは業界を去った方がいいよ。去った方がいい。

――でも、例えばターザンは愛があるって自分で言ってますよ。

前田　ないないない。絶対ない。あれにあるのはナルチシズム。自己愛だけ。自己愛をうまく表に出すために、プロレスっていうのをエサっていうか、材料に使ってるだけやん。

――自己愛があるうちはプライドがないってことですね、さっきの話から言うと。

前田　ない！

――じゃあ、今僕らがいる所というのは、みんな自己愛だらけなんですかね。

前田　いや、みんなとは言わないよ。みんなとは言わないけど、まあ、山本は自己愛です。

――キッパリ（笑）。

前田　それに感染してる人がいっぱいいるってことがいえるだけ。ファンの中にも、業界の中にも。で、レスラー自身も書かれて最初はワイワイ言ってたのはいいんだけど、インディーのわけのわからんもんまでプロレスだっていわれた瞬間になんかやる気なくしちゃって。ああ、俺ってああいうもんと同じもんなのかって思ったらやる気なくしちゃうよ。ほんで、みんなもまだ、自己愛もってくれた方がいいんだけど、自己愛すらも放棄しちゃって、なんかもうデレデレになっちゃって。

――デレデレってのはすごくよくわかりますね。今の状況は。だからもう一回ちょっとダサイと言われようとなんだろうと、真面目にビシッともう一回やってみようかな～なんて思ってるんですけどね。でもダメなんですよね、きっと。

前田　誰かが立ち上がらんともう終わりや。だから言わんこっちゃないんや。

――言わんこっちゃない（笑）。で、前田さんはもともと空手畑から、プロレスの世界に入ったじゃないですか。で、僕なんかは少年時代から最初にプロレスを見たんですよ、原風景として。で、例えばマスクマンだとか……。

今のプロレスは、爬虫類みたいなファンばかり

前田　そんなん関係ないやん！　何やってたかなんて関係ない。自分のいるとこってのを大切にしなきゃあかんやん、大事にしなきゃあかんやん。自分の生まれた家のお父さんが『じゃりん子チエ』の鉄みたいなオヤジでね。お母さんがもう夜の商売で何やってるかわからんような家でも、親は親でしょ。家の中でケンカしても、外からは一言も言わせないやん。愛があるじゃない。で、終わって何年かたってみたら大事にせなあかんなあって思うでしょ。野球の文章でも、サッカーの文章でも、そういうのを一途に書いてる文章っていっぱいあるのね。ボクシングでも。うちらの世界、お前ら何でメシ食うてんねんって言いたくなるヤツばっかりや。もう日本刀で千切りにするぞ、あいつら。ふざけんなって。

――さっきはギロチンだったのに、今度はいきなり日本刀ですか（笑）。

前田　あのね、俺、今、人間の胴、真っ二つに出来るよ。

――もう、そこまで修練したんですか？

前田　修練しました！

――うわあ、宣言。

前田　竹林の近所のおばちゃんに怒られながら（笑）。

――上達早いですね。ムチャクチャ。

前田　早いよ。

――それで前田さん、原風景で……。

前田　だからね、自分の家の悪口言われて怒らんかったら屁みたいなもんや。

――ああ、しゃべらせてくれない（笑）。

前田　だからね、はっきり言ってね、『週刊プロレス』とかで山本の代になって離れていった純粋なプロレスファンが、なんでイヤになったかって言ったら、いやらしさしかないもん、なんか。人間の捉え方とかさ。

――飛ばすなぁ（笑）。

前田　なんか、どんなスポーツでもそうだけど、カリスマが出る過程ってあるじゃない。何かの試合に感動して、うわあ凄いなって感激があった。でしょ？　感動やない、感激があった。感動なんてチンケなもんやないで、感激。感覚が激するんだから。

以前の俺の発言は猪木さんの発言そのまま

巻末 Special Interview

――感覚が激する！（笑）。

前田　沸騰するんだよ。それ以上いけないんだよ。猪木さん見てあったんでしょ。

――はい。ありました。

前田　あったから猪木ファンになったんでしょ。その時、どうなってるって言ったら、それによって激されたっていう部分で、自分の感覚がないんだよ。私の感覚っていうんじゃなくて、猪木さんは私なり。その瞬間。でしょ。だから、猪木さんが調子良かったら、調子良かったでどうしたんだろう。動きが悪かったら悪かったでどうしたんだろう。ねえ、なんかもうヨタヨタしてる、どうしたんだろう。そういう人間が多くなってくるとカリスマになるんだよ。

――わかります。

前田　それはもう感覚の問題じゃなくてさ、感激する素質、情感だよね。情の問題だよね。だからもう、特にファンに何事か伝えるもんの中に情ってもんがないと。ファンにはカメレオン見たいなファンもおるから、今のプロレスなんか爬虫類みたいなファンばっかりや。

――今のファンは、自分たちが手の平返すんですよ簡単に。

前田　どうでもいいんだよ、連中はどうでもいいんだよ。楽しきゃどうでもいいんだよ、あいつらは。

――でも、例えば猪木さんが見た時の感激、感覚が激するショックを受けるわけじゃないですか。その後に前田日明見た時も僕はショックを受けたんですよ。今、目の前にいるからほめてるわけじゃないですよ。

前田　なんか買ってきてやろうか、オッチャンが。今日はお金持ってるから。

――いえ、けっこうです（笑）。で、前田日明ショックを受けて、それ以降僕はマスコミにいるけれども、それからショックを受けていないんですよ。

前田　俺が猪木さんに迫ったのは、はっきり言うとね、村松さんの意見で猪木さんおかしくなったやん。あの当時の俺の発言ってのは、俺が入った頃の猪木さんの発言そのままだよ。新しいとこなんか、これぽっちもないし、自分ってのもこれぽっちもないから。猪木さんに教えられたものをそのまま言っただけだよ。そのギャップが面白い面白いって言われたけど、俺はただ純粋に、俺が入った当時の新日本プロレスで教わったことをまじめな生徒として、まじめな練習生として猪木さんに対してぶつけただけだから。なぜ、こんなに違っちゃったんですかって。猪木さんそんなに可愛くなる必要ないじゃないですかって。ウソだと思ったら読んでみ。

――クゥ〜。熱い！　前田日明はやっぱり熱いですよ。

前田　全然まったく一行一句猪木さんの言ったままを言っただけ。

――では、猪木さんが変わっていった要因っていうのは前田さんなりに考えると何なんですか？

前田　欲やね、欲。

――ただ、人間にとってその欲望っての は悪いことではないですよね。欲望って言葉だけを取っちゃうと印象悪いけど。

前田　欲のなかでも、あまり俺が俺が、自分が自分が、が出てくるとみっともないよ。今言われてるロマンっていうのがね、損得の気持ちがあんねん。ロマンの中にね、センチメンタルな要素。自分ってのを入れる隙間のないようなね。センチメンタルな空間があるんだったらね、それはいいもんですよ。それが理想。それがないロマンって単なる空想。でね、損得の紐付き。どうしようもない、そういうのは。

――前田さん、今計らずもセンチメンタリズムっていいましたけれどね、僕らが見た時のプロレスってあったんですよ、それが。

前田　今、全然ないやん。機械がやってるのと同じ。なんかファミコンやってるのと同じやん。

――非常にドライですよ。

前田　武藤、なんとかオタービオとやりよった。サスケ、頭から刺さって骨折れよった。アホやのうで終わりや。痛そうやのう、車椅子乗ってるやんけ、大丈夫なんか、あれ足引きずってやるんかな、オッ、ちゃんとやりおったやんけ、それで終わりや。昔だったら大騒ぎしてるよ。

——じゃあ、こんなエライ連中を相手にいままで言ってきたのがバカらしくなってきたって瞬間ありますか？

前田　あるよ、実際。

——いまでもそうですか？

前田　あるある。あるよ。

——もういい加減にしてくれよって思ったことも何度もある？

前田　あるよ。もういつまでたっても同じこと言わせるしさ。

——でも、前田さんを煙たがる人達は、前田さんは、いつまでたっても同じことしか言わないっていう風になるんでしょうね。

前田　同じことしか聞かないからや。当たり前や、同じこと聞くから同じことしか言われへん。

——なるほど。それは僕が悪いです(笑)。

前田　自分のアホを棚に上げといて人をアホにするのはよくないやろ。でしょ？

——なにもアホって言うことないじゃないですか（笑）。ひどい、ひどい。

前田　自己否定はダメだけど、反省しなきゃダメだ。反省。

——じゃあ、反省します。

前田　実ほど頭を垂れる稲穂かな、と。

——わかりましたよ、この間、聞きましたよ。

前田　あのな、頭を垂れちゃイカンと思っても自然に……。

——聞きました！

前田　ああ、俺も実ってるんだなと。もう自分が怖いわ。

——じゃあ、前田さんこんど一発プロデュースしてくださいよ。この業界を。

前田　じゃあ、裏でオッちゃんとジェニの話しよか。

——ガハハハハ。でも、前田さん自身格闘技の世界であるとか、プロレスは興味ないでしょうけど。

前田　プロレスに興味ないというよりも今のプロレス、イヤやから一緒にされたくないからもうやってるの。マスコミがグシャグシャにした瞬間で、もうあかんと切り離した。それがリングス。まだ、プロレスとくっついていた時がUWF。けどもうアカンと。進行するガンや。自分らも一緒に心中するほど好きなもんで一個もない。回りのヤツ踏み潰しながら俺や俺や俺やっていう人間ばっかりや、そんなんいらんわ。俺が俺がってのはいりません。で、リングス。でしょ。

——で、リングス以外の団体、格闘技界にね、起爆剤を投入するようなプロデューースって前田日明なら出来そうじゃないですか？

前田　この間、大仁田が復帰したっていうから、新しい企画考えたんだよ。

——それはぜひ聞きたいですね。

前田　バンジージャンプロープ爆破デスマッチ(笑)。お互いナイフ持って100メーターくらい上に昇って刺された方がバンジージャンプすんねん（笑）。

——それはただの自殺ですよ（笑）。

前田　リアル底抜け脱線ゲーム。

——でもね、前田さん、何度も同じこと言わせて前田さんも退屈でしょうけど、面白い格闘技、面白いプロレスが見たいんです。

前田　はっきり言って難しいよ。それでなくても選手が少ないのにどこがギャラ、ボンボンボンボン吊り上げやがって。

——そうですよね、資源が少ないですよね。

前田　全然わかってない奴が触るな！

——例えばね、あそこにいるカタブツ君ってのが、33歳になって『紙のプロレス』に入社してきたんですよ(笑)。妻子ありですよ。しかも給料15万でいいって言うんですよ。

前田　偉い(笑)。キミのような人間がね、戦後に猛烈社員っていわれて今の高度経済成長の礎を……

——朽ち果てさすんですね（笑）。

前田　そうじゃなくて、戦中派の世代が凄かったんだよ。今、団塊の世代だからどうしようもない。すねたヤツとか、白けたヤツばっかりだから。いい証拠として今のお笑いや。イジメとか差別とかの方向にばっか走って。ビートたけし気取ってやってるわけやけど、たけしの場合は繊細な計算があるんや。けど、今の連中はアホばっかりやからできへん。

——センチメンタリズムとウェットさがないんですね。

前田　全然ない。俺が俺がばっかりや。松本人志も自分ばっかりや。俺、ダウンタウン見て面白いと思ったことない。あれは大阪のあんちゃんの普通の会話や。

——欠けてるものがわかりましたよ。ウェットさとセンチメンタリズムですよ。

前田　合理精神なんて女性のもんなんやね。ああいうもんは。センチメンタリズムが男性のもんや。戦記読んでるとすぐにわかるよ。なんでかっていうと、誰々をかばおうとして死んだとか、敵機を撃ち落とした時、操縦席が血だらけになってるのが見えて、ああ、自分も人を殺したんだなって実感したとかさ。そういう話ばっかりや。

——それはもう敵に塩を送るっていう次元じゃないですね。凄絶ですよ。

前田　敵に塩を送れるっていうのはセンチメンタリズムがあるからだよ。センチメンタリズムの中に自分はないんだよ。

——センチメタリズムの中に自分はない？

前田　思いやることなんだよ。思ってやってるなんてチンケなもんやない。なんてかわいそうなんだろう、なんとかしてやりたいと。そこにはなんも自分がない。

——前田さんが好きな坂井三郎さんはプライドってことについてはどういった風に書いているんですか？

前田　坂井さんはそんなことなんにも書いてないんだけど、最近面白いなと思ったのはマイルス・デイビスの自伝。「あっ、坂井さんと似たような人なんだな」って思ったんだよね。なんでかって言ったら、自分が感激したことが書いてある。どう

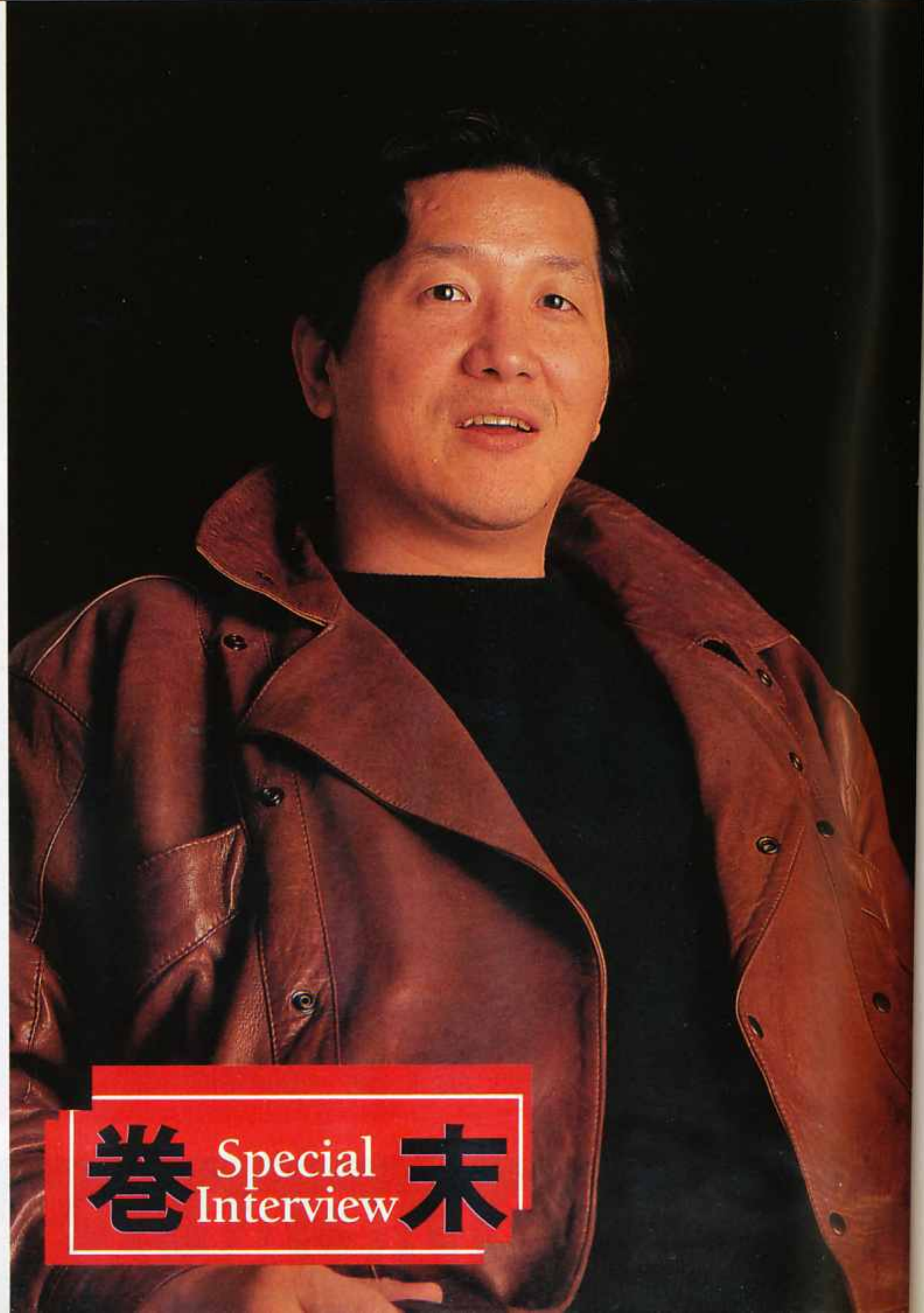
いうのが感激したか。坂井さんだったら若い頃、農作業してる時に大空の彼方に飛行機が飛んでるのを見て、自分も乗りたいなと思ったん。そしたら、海軍の募集があったと。ほかにもさ……（再び日明兄さんの戦記話が続くが後略）

──感覚が激した。いい言葉だなあ。やっぱ今神経が麻痺してますよね、みんな。

前田　不感症。不感症で小生意気な女。

──誰が女の話をしろっていったんですか（笑）。はからずもさっきインディーの話が出ましたが、デスマッチにしてもプロレスラーはこんなに凄いことをやっている。肉体の痛めつけ方は凄いんですよっていう幅の持たせ方ってあるじゃないですか。まあこれを横軸としますよね。で、今のプロレス界は全部この幅だけで語られてるような気がするんですよ。

前田　なんで！　それ言うんだったらね。例えばね、ゴッチ教室行ってゴッチさんに認められたと。そこまでやってる人間が敢えてああいうことやるっていうんなら幅があるって認めるよ。あんなの最初から飛んだり跳ねたりしてるだけやないか、それで何が幅やねん。

センチメンタリズムの中に自分はないんだよ！

──まあ、それをちょっと幅と仮定してくださいよ。

前田　ああ。

──で、今度縦軸の「深さ」の部分を担ってくれてる人が今どこにもいないんですよ。前田さんが計らずも新日本のことを、かろうじてアマチュアレスリングにプライド持ってやってるみたいなことを言ってましたけど。

前田　新日本はゴッチイズムからアマチュアレスリングに鞍替えした瞬間にダメになっちゃったんや。アマチュアレスリングの下になっちゃったんや。

──では、その縦軸を何とか復興する作業をするっていうのは、もはやバカげた行為なんですかね？

前田　バカげた行為じゃないけどね。バカげた行為にするかどうかは、自分が入るか、入んないかの話であってさ。自分が入ったらバカげた行為や。自分が入んないでやったら純粋で美しい行為でしょ。もうプロレスなんか○れ○○や！　もう見たくもないって感じや。

──そうか、じゃあ、プライドっていうのは、まず自分がないっていうことですね。

前田　ない！

──自分を捨てるってことですね。

前田　そう！　人生80年の時代や。ちょっと、自分を捨てるぐらいなんだっていうの。でしょ。

──ということで、カタブツ君。あと50年、自分を捨てて働いてもらいます（笑）。

〈96年11月26日・六本木アートセンターにて収録〉

巻末 Special Interview

紙のプロレスRADICAL

突然発刊記念!!

超プレミアム!

こんなもの、どこに行ったって手に入るはずがない!

非売品限定

オリジナル~~偽造~~テレカを読者だけに大プレゼント

300名に

●タイガーマスク(初代)特製テレカ

●タイガー・ジェット・シン特製テレカ

●ターザン山本特製テレカ

※テレカのデザインは変更する場合があります。

No.1

1997年1月15日発行
定価600円

発売元:株式会社ワニマガジン社
〒160 東京都新宿区内藤町一番地
TEL.03—3357—2911(販売・営業)
発行元:株式会社ダブルクロス
〒171 東京都豊島区南池袋2—33—6大同ビル3F
TEL.03—5992—3240(編集・制作)
編集兼発行人:山口昇
編集スタッフ:野本のものも真貴子/中村カタブツ君/根釜バンバン・ジュゴン/八木賢太郎(引っ越し非番)/吉田豪(風邪で非番)
デザイン:出田さん、ヒサくん、村松さん、マツ(以上ツースリー)
カメラマン:斉藤ユーリ
試合写真:平工幸雄
お勘定:林ヘックション一枝
写植・版下:株式会社そうご
印刷:図書印刷株式会社

編集内容に関するお問い合わせは(株)ダブルクロスまで

応募方法

官製ハガキに、①**面白かった記事一つ**②**つまらなかった記事一つ**③**今後やってほしい企画**④**今号の感想、**を書いて送るべし。
あ、それからもう一つ。希望するテレカも書くこと。当たったらたぶん送るので、住所・氏名・年齢・電話番号を必ず明記すること。
宛先/**〒171 東京都豊島区南池袋2—33—6 大同ビル3F (株)ダブルクロス 紙プロ編集部**『アジア発世界』係
締切は1月20日だ。

紙プロRADICAL次号は2月中旬発売予定!!

紙のプロレス RADICAL WANIMAGAZIN MOOK 42 1997 No.1
次号も買ったらどうだい!!
平成9年1月15日 編集発行人/山口昇
発売元:(株)ワニマガジン社 〒160 東京都新宿区内藤町1番地 電話/03-3357-2911
発行元:(株)ダブルクロス 〒171 東京都豊島区南池袋2-33-6 大同ビル3F 電話/03-5992-3240
ワニマガジン社 定価600円(本体583円)
雑誌 69861-42
印刷:図書印刷株式会社
T1069861420609